婦人資料 No.21

正しい協同活動を育てるために

第6回全国婦人会議記録

労働省婦人少年局

はしがき

労働省では第十回婦人週間の中央行事として、第六回全国婦人会議を四月十三日から三日間東京において、日本放送協会と共催で開催しました。

会議には全国からの応募者一、三九九名（男子一六三名）のうちから、中央選考委員会により書類選考によって選ばれた会議員六〇名（男子七名）が参加しました。

会議は四部会にわかれて「正しい協同活動を育てるために」という課題で三日間の討論を行い両日とも傍聴者との質疑の時間を設けました。また今回は、各部会において抽せんされた議長が、開会閉会の宣言など会議の事務的な運営を行いました。部会終了後、パズ形式による全体会議で「協同活動の問題点」について話しあいを行い、さらに三日目の総会では各会議リーダーによる各部会および全体会議の報告と、リーダー、会議員、一般傍聴者との間の質疑応答を行いました。

ここに会議の速記録をまとめて刊行いたしますが、婦人問題に関心をもたれる方々の御参考になれば幸と存じます。

なお、紙数の都合で、割愛した部分がありますことをお断りいたします。

昭和三十三年十月

労働省婦人少年局

目次

はしがき
全国婦人会議の構成
全国婦人会議次第
部会
第一部会……一
第二部会……四五
第三部会……九四
第四部会……一三四
全体会議……二〇五
総会……三九

全国婦人会議の構成

名称　全国婦人会議
「正しい協同活動を育てるために」

主催　労働省・日本放送協会

期日　昭和三十三年四月十三・十四・十五日

場所　東京産経会館・NHKホール

部会　——協同活動でなにができるか——
第一部会　都市の家庭生活をたかめるために
第二部会　農村の家庭生活をたかめるために
第三部会　都市の社会生活をたかめるために
第四部会　農村の社会生活をたかめるために
——協同活動の問題点——

全体会議

出席者　六〇名（全国の応募者中より中央選考委員会が決定、女子五三名、男子七名）

中央選考委員

お茶の水女子大学学長　蠟山政道（選考委員長）
評論家　伊藤昇
評論家　渡辺智多雄
評論家　坂西志保
東京農工大学教授　大谷省三
評論家　西清子
日本放送協会教育局長　川上行蔵
日本放送協会教育局婦人課長　江上フジ
労働省婦人少年局長　谷野せつ
労働省大臣官房総務課長　有馬元治

会議リーダー

第一部会　伊藤昇
第二部会　渡辺智多雄
第三部会　坂西志保
第四部会　大谷省三
全体会議　西清子

事務局　労働省婦人少年局婦人課職員

全国婦人会議次第

四月十三日（土）

開会式　一〇・三〇～一一・三〇

開会のことば　労働省婦人少年局長　谷野せつ

あいさつ　労働大臣　石田博英

日本放送協会会長　野村秀雄

講演　お茶の水女子大学学長　蠟山政道

部会　一三・〇〇～一七・〇〇

討議

傍聴者との質疑応答

四月十四日（日）

部会　九・三〇～一二・一五

討議

傍聴者との質疑応答

全体会議　一三・三〇～一六・三〇

討議　―バズ形式による―

四月十五日（月）

総会　一〇・三〇～一二・三〇

あいさつ　日本放送協会教育局長　川上行蔵

経過報告　労働省婦人少年局婦人課長　高橋展子

会議報告と話し合い　会議リーダー

会議員

一般傍聴者

アトラクション　――放送劇・独唱――

閉会のことば　労働省婦人少年局長　谷野せつ

部　会

第一部会　都市の家庭生活をたかめるために

出席者

青森　竹内文子（主婦）
宮城　木村正子（主婦）
山形　本間雪（主婦）
群馬　菊地ひで（主婦）
埼玉　成瀬朝子（主婦）
千葉　大塚富子（主婦）
山梨　石田良子（主婦）
愛知　井上彌生（主婦）
滋賀　西田桂子（教師）
広島　亦谷サダ子（主婦）
島根　野村豊子（教師）
徳島　宮本良枝（美容師）
熊本　仁木順子（公務員）
大阪　梶谷保（会社員（商業美術デザイナー））
鹿児島　松永弘之

リーダー　評論家　伊藤昇

伊藤　この第一部会をやってゆく上にちょっと御参考までにお話ししておきたいのは、婦人会議の一昨年のテーマが「明るい家庭をつくるために」ということで、日本の家庭を明るくするにはどうすればよいかについて、その時の全国婦人会議で三日間話し合った結果、人間関係、経済条件、子供の教育、この三つの問題が、日本の家庭を明るくするかどうかということに大きな関係を持つ。それを突き破ってゆくために何が必要であろうかと言えば、まず主婦として、母親の教養というものが必要だろう。さらに、自分一人ではできない、家庭の中に閉じ籠っていて母親一人が悩んでいても何事もできない、やはり近隣の人と力を併せるとか、地域の人と話し合って力を合わせる、そういうことが必要だというふうな話し合いが行われたわけです。したがって昨年の婦人会議では明るい人間関係を作るにはどうするかを話したのですが、その結果はやっぱりみんなで力を合わせて、やってゆこうという方向に話がまとまったもので、そういう意味で、今年の、協同活動というテーマが出てきたのではないかと考えています。

そういうふうに考えますと、われわれは一昨年の家庭の問題で考えた人間関係と経済ということ、教育ということを、この協同活動でどういうふうに明るく、社会的にも進めてゆけるか、そういう問題をここで研究することになると思いますが、皆様の応募文でも、大体問題がそこにしぼられてきているというように聞ませて頂いたのです。ですからそういった問題を話の底に置いて、皆さんがやってこられた協同活動なり話し合いのことを早速出し合って頂きたいと思います。

協同活動の現状と問題点

大塚　私達は読書会をやっております。私達のところでは小学校のPTA活動が盛んで、その中に図書部というのがありましたが、その図書部はどうしても生徒のための本に予算がよけい取られますので、父兄のための図書はなかなか得られない。そこでお母さん方が集まって読書会を持ったらどうかと相談がまとまり婦人会の方とのお話し合いもあって、学校のPTAと全然別個に、自由な読書会を作ることになりました。運営は民主的にみんなでやるという相談ですから、別に規約も会長も決めません。ちょうどその時集まった四十四人を四、五名宛十四班に分け、その中で話し合って決めた責任者が責任をもってお金を集め、毎月一回の集まりを持つ、会費は一ヵ月三十円、月初めの月曜日にその本を保管しておくお宅に集まって、今まで読んだ本について話し合うという風に最初は簡単なことしか決めてなかったのです。それで一年ぐらいは非常に巧くゆき

ました。四十四人の中六〇～七〇％ぐらい集まり、今まで読んだ本でよかった本を出してお互に批判し、又、本を買う場合、班の責任者の方が、うちの班で今月はどういう本を買ってもらいたいと希望を持ってきます。その希望をみんなで出して、相談しいいと決った本を順番に買うようにした。それが一年ぐらい続いて、今年は三年目ですけれども、だんだんに、毎月集まって来る方も少なくなり、一番少ない時には四人しか集まらない。そうしますと、何の本を買っていいか希望も出ません。仕方がないものですから、今度は半ば押しつけですが、班を順番に、本を買うようにしたのですが、その後皆さんが集まって来ないためお金も集まらず、ちょっと行き悩んでいるのです。

私達の最初の目的は話し合いということにあったのですが、話すということがなかなかおっくうで、何か感じていてもそれを言葉に出して言わされるから嫌だという気持もあって出て来なくなってしまったのです。

本の内容も、最初は歌集を高めるための本を選ぶということでしたが、この間調べましたら、物語、小説類が五五％で、随筆が二〇％、飜訳物が一七％、あと修養的なものとかいろいろ細かいものが一冊ずつあって、ほんとうに修養を主眼として読んだらいいというのはたった三冊しかなく、大いに反省させられました。

それから一月三千円の会費でどのくらい読むかと調べましたら、少なくて二冊、金額にしまして四百五十一円。多くて四冊か五冊、千円ぐらいです。時間としては一日の中三十分から一時間ぐらい読んでいる。この間の集まりにも、読書会に入ってよかったかどうかという反省をしましたら、いろいろな本を読んでためになったという方もあり、中には乱読になって系統的に読めないという方があったりします。

井上　私共がグループを作りました動機は、毎日新聞の中京版の「女性の広場」という欄に毎月一週ずつ生活綴方が載る。それを読んで共感したり抵抗を感じていることをみんなで話し合おうという気持から生まれてきたものです。最初に、名古屋の昭和区に住んでいる主婦に呼びかけたら反響があり、その後「広場」を読んでいる他の地区の読者の入達にも呼びかけて話し合ってみたら、いろいろな門が出てきた。これを皆の意見で、波の輪のように広がってゆくという意味で波紋の会と名付けました。

そのグループが発足した頃は、地域の婦人会で何となく不満を感じていた人達も、新鮮味がありますし、自由に裸になって話し合えるし、みんな台所からの解放感もあり、よく集まってきたのですが、回を重ねる度に、出てくる人達の顔ぶれが決ってしまって、話し合うことも常識的なことを、ぐるぐる際限なく話し合っていることに気付いた。これではだんだん魅力を失ってゆくのではないかと焦りを感じて、自分達だけで話し合うだけでなく更に深く追求してゆくために折にふれて、講師を招くということにしました。すると、講師がいらっしゃればうんと出席者があるが、次にみんなで話し合うということになると火が消えるようにつぼまる。それでこれはグループに魅力があるのでなく、講師だけの魅力なのだ、何とかしなければならないとみんなで考えました。リーダーがいないからだめだという意見も出ましたが、私は一人一人の意見が大切にされるという民主的なグループにおいてリーダーをのみ重要視することはおかしいと思う。よいリーダーであるというのはよいメンバーであることに尽きると思った。結局皆がグループ会員だという自覚を持たなければならないのではないか。そこでどうしたら自覚が持てるだろうかと言うことになったが、しとやかな方ばかりでもじもじしていまして、何か他から得ることばかり考え、自分から話そうとしないこと。いまのところグループのメンバーが決ってしまったということが大きな悩みです。みんなあなた任せ、これは女の一番弱みだと思いますが、長いものに巻かれろというのはいけないと言いながら、長いものに巻かれたい人が多いのです。

菊地　私のところは二十八年度に建てられた鼎舎住宅で似たような環境の人間が集まっており、大部分がサラリーマンです。主人、子供を送り出すとあとは大体暇になるという家庭の主婦で、私は住宅族と命名したのですが、たいへん暇があるため、つい三三五五立ち話をしてしまいそれが小さなトラブルの原因になる。これを何とかしようではないかということから「あすなろ会」というグループができてこの四月でまる四年になります毎月一回の例会をもち、会長もなく、きわめて民主的に、会場も役員も月当番でやっております。先ず井戸端会議から発展させつつあり、子供の教育の問題、衣食住の問題など、広い意味の教養を高めるため月一回の例会には講師をお招きしたり、あるいはお互の話し合いで解決したり、それから公民館の応援を得て読書会もやりますし、富岡市としては注目の的になりつつある。今後も大いに発展してゆきたいと願っております。

坂谷　私のところのグループ活動は、生活にゆとりを持ちたいという趣旨で、PTAの一部でやった。三十歳から三十五歳程度の婦人、十八人の集まりで会費は五十円程度例会は月一回です。

そのグループ活動が始まったのですが、結局夫の理解ということに突き当った。そこで夫も引っ張り出して理解してもらおうということになったらしい。先ず主人達も顔見

知りになるため市の教育部で安くやっているキャンプに、土曜日の夕方から親子連れで行きキャンプファイヤーを挟いていろいろな遊びをして親しくなり、御主人方の顔つなぎができたので、その次の会合には半数近くの主人が集まった。そこで主婦から男性側に出された問題点は、主婦としてはもっと家庭で夫と話し合いたい、そして女のやっていることに理解を持ってほしいというようなことだった。

又、男性側の意見としては、現在の社会状態の中で、仕事上での飲み食いとか料理屋の交際とかそういう形で、男性は社会の矛盾を背負わされている。

そして経済的に時間的に心のゆとりをもち、社会の悪い習慣をなくすためには夫婦で話し合わぬことには解決がつかぬということになっていった。

たとえば子供や夫婦が、今日は遊ぼうと約束して家を出たのに、五時半頃になってから得意先の招待があって断り切れず酒を飲んで帰ってくる。子供達は待っていた。妻も用意して待っていたのでふくれている。しかし夫も、会社のためにやってきたのに皆にふくれられては馬鹿らしいというので、不機嫌のままに寝てしまう。そして互いに男の気持なんかわかるもんか。主婦の立場をわかってくれない子供は「お父さんは嘘つきだ」ということになってしまう。そういう問題にしても結局狭い苦しい中での工夫をするのでなしに、なぜ苦しいかということをまず掘り下げて、それを社会の問題としてどういうふうに発展させてゆくかということをグループの中では考えております。

伊藤　板谷さんの問題は、広い意味の教養に関係するがどっちかといえば人間関係の問題を含んでおられる。これは当然皆さんの話し合いで掘り下げられてゆくと思いますが、ほかに如何ですか

木村　私の近所は家が二十軒ばかり固まっています。そこは庶民的な家庭ばかりで、六、七年前に一緒に住宅が建ち、水道とか電燈とか一緒に設備をしたのですが今までいろいろと経済的な利害関係などがありまして、ほとんど近所のおつきあいらしいおつきあいをしないで、数年経ちました。そこでこれではいけないという声が自然に起ってきまして、先ず子供会が出来たわけです。ある年の夏休に、子供会を毎日一定の場所でいたしました。それがきっかけになり「こだま会」というお母さん方の会を作りました。入りたい人だけが入り、子供の教育を中心として主婦の教養を高めることを目的にしたもので、ずっと今まで続けてきたわけです。その中のお母さん方は、子供の教育について宿題などには非常に熱心なのですけれども、PTAの活動は全然しようとせず又、婦人学級などには出たがらないという方だったのです。しかし自分の子供をよくしようというなら、この地域全体をよくしなければいけないというお話し合いを重ねまして、一年間のスケジュールを全部組みました。それには回覧を廻して希望をきき、昨年は、子供の新らしい教育の理解ということを中心にやろうというので、新教育の理解について七回講座を持ちました。その中の半分は講師に来て頂き、半分は話し合いです。

もう一つ、こだま会の事業として幼児学級というのをやっております。幼稚園が相当遠いし、費用も非常にかさみますので、近所の三歳から学令までの子供を集めて、一週間に一回、一時間だけお母さん達が交替で子供の生活指導をやっているわけです。

そういうところからいろいろな問題が出た時にまた勉強会を持つというふうにやっているわけです。

伊藤　いまのは、子供さんを中心としての主婦の集まりが出来てゆくという具体的なお話ですが、ほかにありませんか。

野村　私の方も中心になるのがいつも子供です。子供と親と先生が一緒に集ってゲームをやったり話し合って、その月の子供の生活目標を決めます。たとえば登校の時のあいさつや言葉遣いが悪いとか、家に上る時下駄を投げっぱなしで上ってしょうがないというような、お母さんの意見や子供の考えを聞き、中から一つか二つの目標を立て、又前の月の反省をしながら、子供達と一緒にお茶を飲んでお菓子を食べ、ゲームや幻燈、時にはお話もあります。それが終った後で、母親と先生だけ残り、教育問題についての反省とかその他家庭の問題などを話す会を持っております。

本の回覧などもしますが、それはお母さん達が毎日の買物の中から十円以下のお金を全部同じところに入れ、それで子供の本やお母さんの本を毎月買うというやり方です。主に生活技術といった面を話題にしてやって来て現在七年になります。気のあった者同志の自由な集まりですから、その中でいざこざが起るということはほとんどありませんし、子供達も親も一緒に顔を合わせていますので、近隣社会としても非常に向上したと私は考えております。

なお現在私共のグループ活動は地域の或一部だけのものであって、まだいろいろな問題があるために出来ていない地区もたくさんあり、それが全部に出来る日を待っているわけです。

本間　私の住んでいるところは百戸ぐらいの戸数で、生活程度が低く、お母さん達も働らかなければ食えないのです。ですから自分の子供も自分で教育するのが容易でないのですが、子供会を中心にしてそのお母さん達の会が出来たわけです。お母さん方が一人十円の会費を出してなお足

りないところは労力によって補おうというので、春には一里ほどある山に、親子一緒にリヤカーを十台も曳いて杉の葉拾いに行ったり、地蔵様の境内の銀杏の実を拾って二、三千円の金を挙げたり、労力によって収益を得て子供会を育てています。又、お母さん方も自分達の勉強会やスポーツ、社会奉仕、レクリエーションなどのための貯金をして、夏海水浴に子供も連れて行ったり、いろいろ活動しておりますが、特に無質な売物から子供を守りたいというお母さん方の熱意で児童文庫が二十九年一月に出来ました。現在五年目になっておりますが、これにはお母さん達が児童文庫費というものを出してくれまして、今では六百冊の本があり、子供だけでなしにお母さん方にも読書熱が高まりまして、親と子の文庫に発展しつつあります。又、登録な町ですが「居ながら貯金会」というものをつくりまして、税金を払うときの役に立っています。

又、私の町には集会所がなく、子供や親が集まる時にもどこかの家を借りなければならないのが大きい悩みで、何とか集会所がほしいというお母さん達の何年来の要望が実を結びまして、組織を動かし、三年計画で建設積立貯金が始められ、昨年五十坪あまりの敷地を買い求めまして、来年度に集会所が建つところまで漕ぎつけております。

それに、環境衛生にも乗り出すなど生活面につながる活動が多いのですが、こんなことで子供と結びついたお母さんの活動の結果、子供が非常に明るい純真さを取り戻して、正しいものを正しいと見る目が発達してきて、自主性を培びてきたことを喜んでいる次第です。

成定　私も、初めは親しいお友達同士からはじまり、今二十五、六人の集まりですが、各人の意識、教養を高めるため、各人が持っている問題を取り上げてみんなが自分の問題として考えようというグループで月一回を勉強会としています。

皆の協力の成功した実例としましては、共稼ぎの家庭の方から託児所が欲しいということを持ち出され、たくさんの婦人会の協力もえて署名をしたり、四名の市会議員に陳情して、一年ぐらいの後に託児所が出来ました。それから子供会を、四、五人のお母さん達でやりはじめまして、これを更に広い地域に広めてゆこう、母親グループを大きくしてゆこうという計画もしています。まだ二月に発足したものですから、あまり成果は挙っておりませんけれども。

伊藤　いまの託児所の問題、皆さんもうすでに卒業したという方もおありでしょう。これからという方もおありでしょうが、共稼ぎの場合、一番これに関連すると思いますが――。

竹内　私は自分の子供だけでなくて、すべての子供達を

自分の子供と同じような状態にしてあげたいという気持を持っておりました。ことに共稼ぎの家庭における両親のいろいろな悩みを聞きましていつも考えさせられていましたが、身近にそういう方がいらっしゃらないのでそのまま過しておりました。

ところが偶々私の向いに共稼ぎの御家庭が引っ越してこられ、その方は、御主人は農協に出ていらっしゃり、出張がちで、家をほとんどあけていらっしゃる。奥さんは、青森の魚市場という、非常に物を安く売るところがありますが、そこのお店で朝早くから晩おそくまでお手伝いしていらっしゃる。はじめの二、三日子供を置いて二人とも出かけて行ったが、近所の人は、よくああして子供を置いて行くと噂している。私は、自発的に、子供さんをお預かりしましょうと申し出てお預かりすることにしたのですが、一方魚市場で一日に十円でも二十円でも安くお魚とか野菜を買ってくることをその奥さんが引き受けて下さることになりました。先ず問題はおやつでした。最初の日にその家の子供達がおやつをいっぱい持って来る。うちに子供達が横目でにらむ中はいいが、しまいにはけんかになります。それでみな二十円にしようということで人から頂いたものも加え、その時はお金を使わないで、四人の子供に等分に分けたのです。それで解決しまして、その後は非常によくゆき私の子供も、よくその子供さん達をいたわる心が芽生えてきました。私も、PTAのなかで、児童福祉委員会の方をやっておりますが、そういう面で働くときにも非常に子供を見る目というものが開けて役に立ちました。

なお、共稼ぎの御家庭と一緒にやっております中に、二軒とも同じような収入なのですが、どうもうちの方がわりあいに余裕があり、共稼ぎの御家庭の方はいつも何となく困っていらっしゃる。それは出来合いのお菜を買うとか、手が足りないために既製品をお買いになるとかいうことにあるのではないかと思うので、そういう面もこれから協力してゆきたいと思います。

研谷　安い物を買うというお話が出ましたので申上げます。

私のところは現在百戸あまりの団地住宅で、現在なお建ちつつあります。

郊外地なものですからお店も少ししかなく、必需品が安い値では買えないし、駅のマーケットにはバスに乗らなければゆけない。時間と、経済の面で何とかならないものでしょうか、ということからほんとうはこういうところでなければ消費組合とか共同購入ということはできないのだから、今、お店が余りふえない中にやろうではありませんかという話し合いになりました。そこで或御家族の多い家庭

の現様が皆さんが要らない場合は自分の家で引き受けるからといわれ、私のところは二人ですからどっちでもいいのですが、そのお仕事に興味をもって、やりましょうということから、一緒に六千円ほど、野菜や果物を仕入れてきて皆によびかけましたらパッと一遍にはけてしまいました。その後も極く気楽に場所もありませんし、戸外で、何人か気の合った者がお金を出し合って要る方に売り、初めは車賃も取らずに回を重ねていきましたが、これがだんだん大きくなる傾向にありました。そうしたらあるお店が、自分の店を無料で開放して御婦人の方にお任せしますからお使い下さいという申出があったので喜んでそこをお借りしましたら私達の怖れていた通り、他の同業者から苦情が出ました。そこで考え直しまして、四、五軒のお店を回り、いっそ婦人と一緒にここ全部を四つの消費組合にしませんかと申し入れたが、それぞれお店には個人感情もありますし、利害関係もありますから、そう簡単には手をつなげません。しかし話し合いをしたことによっていくぶんお店との摩擦は緩和されたわけです。又、私達がもし共同購入をやめても、ここの人は全部ここのお店から買わない、それはサラリーマンが多いので、それぞれに職域に購買所を持っているというような話もしました。私達の扱うものも利益を取って分けられない。職場の購買より高ければ結局そっちからお買いになりますから。それで十二月末に収支決算したら二千円赤字になりました。それはまことに商売慣れない者がやるので、みんなを信用して「いくら？」「どうぞ好きなだけお取り下さい」という調子でやっておりましたから、はかりこみやら、はかりの使い方がわからなかったりということなのです……。そうやっております中に、お買いになる人から出資したいという声が挙り一月から、出資金額五百円に決めました。強制しませんでしたが、それが三万円近くなり、四十人ぐらいの会員になって今は三分から五分ぐらいの利を見ております。

そういうわけで、共同購入からはじめましたことが、これからの組織を作ってゆきます上にもずいぶんいい影響を及ぼしてゆくのではないかと思っております。

伊藤　話題が、子供を中心といった問題にも進み、さらに経済的な問題にも進んできたわけですが、この辺で今まで出た活動なり考え方に対して疑問や御意見があったらお互の間でお話し合いされたらどうかと思いますが。

仁木　書記の竹内さんはよその子供を預かることをなさったという話ですが、私は子供を持って悩んだ者です。私は勤めに出ておりまして、子供はただいま三つになります。子供が生まれた頃に夫が地域青年団の事務局を続に持ってやっておりました関係で、職場に出ませんでしたから

子供の面倒を見てくれたわけです。午前と午後三十分ずつ授乳の時間をお昼休みの時間に両方にくっつけてもらって二時間にして家に帰り飲ませ、間の授乳は、ミルクを作って夫が飲ますわけです。八箇月で離乳をやったが、それを過ぎた頃になりまして、売春婦の婦人相談員に夫が任命され、どうでも外に出て働らかなければならないので子供を見てくれる者がいなくなり、困りましたので、児童相談所の知り合いの人に話しましたら、十六ぐらいのいい娘がいるからやってみましょうということで、頼みましたところ間違のない娘で、おやつなんか沢山一杯、子供も子守をする子供も食べられるようにと置いておきましても、私の子供はちっとも食べられないらしい。そこで、相談所にお引き取りを願い、今度は安定所の婦人部に頼んで、世話してもらった。それは二、三人子供を持っているお母さんだけにかわいがって下さったが、悩みは、一日百五十円の日当です。その他交通費を持ち、お昼と夜はうちで食事をしてもらう。そうしますと、夫の給料がその方にみんな入ってしまい何のために夫が出るのかわからないということになった。又、その方は製糸工場で昼働いたことのある四十ぐらいのおばさんですが、非常に考え方が違い、子供のしつけの点についても私達の考えているようにはいきません。

私は七年間、職場で勤労婦人懇談会というのをやってきて今度で九十八回になりますが、現在四つの事業所の四、三五〇人ぐらいの女の人を調べたところ、既婚者が半分いる。その中で乳児を抱えているお母さんが二七五名いる。それでもわかるように、婦人懇談会でいつも出てくるのは託児所の問題です。私もその期間を経てきましたし、仕事としても関係があるので、是非この問題解決のためほんとうに安心して預けられる託児所を作らなければいけないのではないかと考えた。

この問題がなかなか解決できないのは皆が、自分がそういう期間を過ぎてしまい、子供が学校に行くようになるとそっぽを向いて、話し合わないところに問題があると思います。

伊藤　託児所の問題は特に共稼ぎの人に関係がありますが、さきほど御近所の人のために子供を預って、その代り安い物を買ってきてもらうという例が出ていますが、その個人的な関係からもう少し伸ばすような、お考なり活動はないのですか。

竹内　私は先程のような体験を通しまして地域の状態を見たところ、私の地域には共働きの人はいなかったのですが、他の地域に非常に多かったのです。

ことに――極端なことを言うと怒られたのですが――共稼ぎの家庭の子供に非行児童が多いようですのに、解決方

法が少ない。それで私が自分の体験も話し、やっぱり身近な人が手を差しのべなければ解決できないのだという意見をのべました。学校には地域児童会がありますけれども、今まで母親がそれに協力する形になっていなかった。それを昨年の夏休を機会に、親達が地域の子供全体を見廻ろうではないかという話し合いにまで発展しまして、地域毎に世話人を決めました。これは地域の人々が自主的にそういう気持を持ち、又、学校が非常にいい音頭取りをしてくれたものですから、子供の仕合せということにみんなの気持がうまく寄り合ったわけです。そうして私共の地域でもお母さん達が集まり、先生方とも連絡しまして、共稼ぎ家庭の子供達の長欠問題も解決いたしましたし、夏休でしたから地域毎に海水浴に連れて行くとか、いろいろな生活程度の家庭が子供の仕合せという面でお互に協力しました。毎年夏休にはリーダーを固り持ちですることにしましたが、そういうことによってだんだん地域のお母さん達の気持が結び付いてゆき、あるいは困った子供が出来た場合にもお互に助け合うことができるのではないかと私は希望を持っております。

成定　私達の子供会も、そういう子供さん――親がいなくてほったらかされている子供さんを楽しい環境で遊ばせてあげようという意味も含めて子供会をやっている。塙生大学の児童文化部の方にお願いして、現在は月二回ということになっていますが、できればもっと間隔を縮め、学生さんだけにお任せするというのは負担が多いから、その間を親達でつなごうという話し合いを持っております。

野村　私の方は学校の近くのお寺の和尚さんが頼まれたわけでもないのに、子供が悪い遊びをしたりしつけが悪いというようなことから音頭取りになりまして、三つから学校に行くまでの子供を預かる私立託児所があります。子供は五十人位で一月、おやつを含めて五百円、専任の保母さんが三人いて、朝から晩まで非常に行届いた世話をしておられ、喜んでいます。

伊藤　さっき熊本の仁木さんの場合、託児所が出来ていないし、預ける方法について悩みがあったが、それについて意見ありませんか。

板谷　大阪での例ですが、政治的に持っていって、村会で取り上げて作らした。村の予算会議の時に婦人が傍聴して、自分の会計簿を調べるように細かく調べたらそれだけの金が浮いて保育所が出来たという例が発表されていました。実際にどうやったという詳しいことは私、聞いていませんが。

仁木　熊本にもそういうのが相当あるのですが、みんなの要望で場所を決めたのでないため、私共が利用できないところにたくさんある。働らく者は、毎日のことですからやっぱり私達が働らく職場に近いところに、ということを希望するわけです。いまでは専売局とか電話局とか貯金局とか、働く女の人が多いところは出来ている。しかし職場毎にというのは経費の問題などがありますし、私の勤めている県庁を囲んで、近くに十五、六の官公庁が集まっているから、お金を出し合って、悩んでいる者が、少しでも形を作っていったらどうか。ほんとうに今度はこれを行動に移さなければならないということで、私も今度帰ったらもっとこの問題を具体的に掘り下げて、資金の面までゆこうということに話を進めているわけです。

宮本　徳島では市立の保育所でヨチヨチ歩きぐらいの子供からお世話している。

運営方法は、お勤め人でも商売人でも所得に応じて税金のように出します。ですからお金は皆さんそれぞれによって違いますが、不平もおっしゃらないし、時間でも、早く連れて帰る者もあるし、職場の関係で午後七時、八時になる方もありますが、それでも巧くいっております。専任の保母のお給料は市役所から出ております。

石田　私達のグループでは、時間的な託児所が一時間十円で預かることになっています。私のグループでも、共稼ぎでとても困っている方があるが、家政婦をお願いすると経済的な目的でお手伝いに来てくれるが、子供の教育上必ずしもよい人ばかりではない。そこでお話し合いをしまして、余裕のある奥さんが五、六人集まってしたらどうか、しかし会場がない、他にも手芸やお料理をする会場がなくて困っているので、一緒に進めてゆこうということになり月に一回ずつ廃品回収をして一ヵ月二千円ぐらい貯金しましたが、それだけでは託児所、集会所は建ちませんので、県にお願いしそれを資金にして実行に移しつつある。

政治との関係

木村　託児所問題の解決方法が三つあると思う。

一つは、ほんとうに近所のお母さん方が、共稼ぎの家の子供を、竹内さんのように見てあげるという方法。もう一つは、職場での託児所。もう一つは大きく自治体を動かして託児所を作ること。

私共がここのグループでお話し合いできるのは、お隣り同士で助け合ってできる範囲ではないかと思いますが、実は先達、仙台に公立の託児所があるが、そこが政府から予算を減らされて立ってゆけないというので、ある会合で保母さんが泣いて訴えていたが、なぜ託児所の予算を減らしたかということをよく考え、そういう問題から、大きな政治の問題にゆくのではないかと考えられます。やっぱりお隣り

同士で助けあい、広い問題にも目をむけながら、竹内さんのような方法を少しずつ広げてゆくより方法はないと思う。

伊藤　竹内さんのところでやっているように、二軒でも三軒でも自分達の中でやるという形と、職場の問題として解決してゆくという問題と、いまのお話のように、話し合って、町や市に持って行って陳情して解決したところもあるし解決しないところもある。その中間ぐらいで、少しずつ基金を持って行って、これだけ蓄めたから何とかして下さいというやり方。このように婦人の協同活動が政治に結びつく、そこのところを皆さんで話して頂きたいと思います。たとえば、陳情なら私もついて行きますと簡単にぞろぞろ行く、それも効果があるかもしれないが、自分が百円でも二百円でも出して、これだけ集めているのになぜ町や村は出してくれないかというのとは同じ協同活動でも質的に違いがあると思う。そういうことを少し皆さんでお話し合いになったらと思うが。

研谷　私共の共同購入も、単に安いものを買うのが目的ではない。今はまだ未来の夢ですが、これが次第に大きくなったら余裕の金をできるだけ施設とか婦人の教養向上に使おうと話合っておりまして、みんながほんとうに率仕的にやっています。しかしそういう仕事は永続することが大事なので、ある時期に達しましたならばいくらかお金を出して、誰か専任の人を主婦の中から選いて、何人も希望者があれば輪番で受持ち、収入があるような方法まで持ってゆきましょうと考えています。それにしても場所がほしい、それにはちょうど県で集団住宅を建てている問事務所に使っている建物を、今年の秋頃、工事が終り次第他に売るとかいう話がありましたので、それを値段の折合いをつけて私達の手に渡して下さるように確約して参りました。ところがそれを地方新聞の文化部長さんが聞かれ県の方に掛け合ってただでもらって下さるようになりました。

伊藤　都市の場合には問題が出て来にくいが、農村の場合は、選挙前になるとビ＝コビ＝コと猫のように託児所が出来る場合がある。そういう場合に皆さんが自主的な婦人の協同活動をやってゆく上に考えなければならない問題があると思うが――。

木村　私、託児所の問題ばかりでなく、一般に婦人団体の活動をするのに補助金を要求することに非常に疑問を持っているわけです。特に私がこういう小さいグループ活動するのは、どこからも拘束されないグループ活動をしたいというのが目的です。地域の大きな婦人団体になりますと補助金とか何とかいって紐がつく。私達は教育委員からもどこからも制約されない、自分達だけのグループ活動をやろうというのが初めで、数人でやっているが、そういうこ

とを活動の主体にして動けば利用されない。むしろする方のわたし達が、政治を利用することができるではないかと考えます。

菊地　私は、政治力を女が利用した方の実例を申し上げたい。

私のところは先ほど来申し上げましたように、住宅が年々建ってゆくのに私が、引越した当時から街灯が一つもなや、夜分の外出に暗くて困った。何とか街灯をつけてもらいたいといったところ、電柱を建てるためにそれだけは地元で持ってくれというので、一戸当り百二十円ぐらい出しまして、それだけで、あと区長さん、市会議員を説いて二個つけて頂き、夜分の外出も楽になった。これは主婦の力です。

木村　こちらは利用したつもりでも市会議員などに、何か頼むと私がやってやったと後で威張られる例が多い。

たとえば小学校が講堂建築するのにすぐに議員を動かしてやる。そういうことが、いいか悪いかに疑問を持っている。私はむしろ世論を盛り上げる方に動く方がいいのではないかと思うが、皆さん方の御意見を伺わして頂きたい。

成定　しかし市会の方でそういうことを、議題にして頂くというのはいいのではないでしょうか。

板谷　私達の正しい目で社会を見るということがグループ活動の中で必要と思う。何か困ったからその中でお互に工夫してやってゆくというだけでは、だんだんおもてゆき勝ちで誤りやすいと思う。

特に婦人の方の陥り易い弱点は、例えばPTAに出られるのはほとんどお母さん方ですが、それが自分の子供を通じて受持の先生までは行くが、そこから向うへは行かれないという視野の狭さと浅さではないかと思う。基礎的な勉強でもいいですから、学校の予算とか、どうして教員が足らないか、子供の環境をよくするためにはどうしたらよいかなど、もう少し根本的なことにまで目をむけてほしいと思います。

木村　私も同感です、例えばいったい道がよくならないのはなぜだろうとか、託児所が出来ないのはなぜだろうという根本的なところに目を持ってゆくことが先ず大切でここにグループの発展性と個人個人の教養を高める一つの場が出来るのではないかというふうに私は考える。

西田　託児所と政治、それから婦人のグループ活動と政治力、そういうふうに、政治の方へ政治の方へと持ってゆくというのは私達の力では早過ぎると思う。

先ずおくれた下の人達も一緒に私達ぐらいの意識にまで引き上げてやるべく、足ぶみして私達のグループは止ってみたいと思う。そして政治力を持っている代議士のような

方達が私達の動きに目をつけ、これだけの力、世論が盛り上ってきたから、こういうふうに日本の国は動いてくれなければいけない、というふうな目を開いてくれるまで、足ぶみをしてみたいと思いますがいかがでしょう。

松永　問題によっていろいろやり方があるのではないか。たとえば家庭の中で話し合って、解決のできる問題。それから隣り近所の人たちで話し合って解決しなければならない問題。またそれだけでなくて、やはり政治と結びつけて解決しなければならない問題と、いろいろの解決方法があるのではないか。

それで、偶々先ほどから託児所の問題が出るのですが、やはりこのような大きい問題は協同活動から政治活動に進まなければ解決できないのではないかと思う。たとえば子供のしつけは家庭内部で話し合ってゆける場合もあるし、近所との話し合いで解決がつく場合といろいろあります。問題を考える時に、その事を頭において考える必要があると思う。

託児所の問題なんかは、私達の町では一番最初に取り上げられまして、もう出来ている。その他消防分団の詰所、防火水道、学校の給食室、これはすべて婦人の方々の協同活動ではじまり、町全体が動いた、というよりも動かされてしまったというような状態です。お母さん方にたきつけられていつも動かされるのは私で市役所に行かされたり、たまには市会議員と喧嘩したりさせられる。

私がここに発ちます六日前に、防火水槽が三ヵ所完成しましたので全部で七ヵ所になったのだが、そういうことは家庭にいつもいらっしゃる奥さんでなければ気がつかなかったことです。しかしそれを何とかして実現しようとしても、どうしたらいいか御婦人方ではわからない。その時に私は町の社会教育委員をしているのですが、こういう世話役をしていると案外そういうことがわかる。それは消防予算からひねり出させてやろうでは僕が行って交渉しようかということになり、公営住宅は公営住宅法によって、防火施設を完全にさせなければならないという条項があるのをもち出して、さらに二ヵ所市に要求し、臨時予算が相当あるからそれから出したら出せないことはないと強引にやりまして、二ヵ所、これは一銭も出さずに出来た。そういうふうに、やはり何でもかんでも自分達でやろうとか、政治に結びつけようとか、というのでなく、しっかり物事を見きわめて事態に応じてやることが必要だと思う。

リーダーの問題

伊藤　いまのお話を逆に戻してきますと、皆さんのやっておられる協同活動のグループが自主的であるかどうかということに帰着すると思う。そこでグループや団体における自主性とか意識の問題というところをこれからお話し合いになったらいかがかと思います。たとえば、私達のグループは民主的にやっており、会長はおりません、とおっしゃる方が多いのですが会長がいると民主的ではないかという疑問がおこります。小さなグループだったら会長なしでもやってゆけるかもしれません。しかし皆さんのお話によると民主的であるためには、指導する人がいてはいけないという印象をうけましたが果してそうでしょうか。協同活動をするために何らかの形で組織を作り団体を作る。その中での民主的な運営について、意識ということも引っくるめて、ざっくばらんにお話し合いになったらいかがかと思います。先ず、木村さんにお尋ねしたいが、十六人の会員で会則を持っておられて、会長副会長がおられて、三役もずっと揃いてあるわけですか。

木村　会長だけ選挙で、副会長は、会長の指名です。

伊藤　その会の中から、毎年面倒な選挙をするよりも、十六人だから次は誰かに頼もうということにならないのですか。

木村　それをならないようにする。会則の要点だけ読んでみますと「目的は、会員相互の政策を高める。会員は本会の趣旨に賛同するもの。役員は、会長、副会長、会計名、当番が順くり。任期は、会長一年、但し一年だけ再任できる。副会長は一年、会計は一年、当番は二ヵ月交替。会長及び会計は年度末総会において無記名投票により選挙され、副会長は会長指名。当番は総会において話し合いで順番を決めてゆく」。

こういうふうになっています。

伊藤　十六人のグループでそれがきびしく守られてゆくということは珍らしい。

石田　当番制ということは、協同活動をする上において大切だと思う。

私達のグループも、初めは会長制にしていたが、私共のアパート百戸の中には課長さんの奥さんも校長先生の奥さんもいらっしゃる一方、結婚早々の、社会的には御主人が何も役を持ってない奥さんもいらっしゃいます。そういうところで奥さん達の会を運営してゆくには会長制にすると御主人の地位がやはり響いてくる。それで、会長になれないから会を抜けるという心の狭い方も実際に出来てくるので、私達も当番制にしているが、成功しています。又、みんなが当番をすると当番の時の苦労がわかるので時間も正確に集まってくるし、みんなの自覚が生まれてとてもいいと思います。

菊地　民主的と申し上げたのは、会長を作らないことイ

コール民主的という意味ではないのです。どんな会にでもかくれたリーダーがいるということは自覚しております。

木村　私共の「こだま会」は十六人の会員ですが、民主的に運営するためには民主的な規約が必要だというので、規約を作りました。会長も副会長もあり、会長の任期は二年として、二年以後は交替するとなっています。規約がどういう理由で守られなければいけないか、又、民主的なグループとはどういうものかということが勉強になるわけでそれを実行しているわけです。

大塚　私も民主的ということを掲げたが、会長は決めておりません。それでうまくやるには各人が責任を持たなければいけない。会長も責任者もないが、入っている人みんなが、いずれは責任者になること、自分のするべき仕事を弁えていればスムースにゆくのではないか。

本間　そういう小さいグループですと、いまのようなお話し合いで巧くゆくと思いますが、私の町は会員が六十人もあります。こうなるとリーダーなしに、思い思いにやってはたいへん困るので、ここには必ずリーダー格の人が必要になってきます。班別にわけても、それを全体としてまとめるリーダーがなければ巧く運営ができないというわけですが、或リーダーが非常に巧くやっても、その人が引退すると次はガタンとだめになる。次々後継者が出て、大人数のグループを常によく率いてゆくようにしたいと思っています。

井上　いまの御意見には私も賛成です。前の人がリーダーの席にいる間に会員がお互に自分が主体であるという自覚を持つように働らきかけ合う、意欲を持つことが一番大きな狙いと思います。

伊藤　さっき初めの方の話し合いに一、二出てきたのは講師が来れば人は集まるが、講師が来ないと集まらない。そういったことにも関係あるのではないかと思いますが。

研谷　先ほど申しましたように、私のグループは最初に自然発生的な形をとったので、未だに規約がございませんし、リーダーもございませんけれども、何かやっております中に必ず適材適所がある。購買のお仕事ですから、普段冗談半分に言い劇らされて、会計係長とか販売係長、仕入部長、宣伝部長、と呼び合っていますが、自然にそういうように出来てゆく。

この経験によればやはり初めから大きなグループでも役割などを決めないで、自然に決まってゆくという方がいいのじゃないかと思います。そして駄って来たら委員制度のようなものができたら私の環境には最も適しているのではないかと考えます。

木村　優秀なリーダーがいなくなったらその会がペシャンコになるというお話が出ましたが、会員意識を一人一人がはっきり持っていればそういうことはないと思う。私のはこだま会という十六名の会合ですが、大学の先生の奥さん、助教授の奥さん、或いは公務員の奥さんといろいろな人の集まりなんです。でも御主人の職業は抜きにして、奥さん達だけなのです。そうしますと、中には非常にお料理が好きで巧い人がいて、講習会に行ってきた後など先生になって十六人のお母さん達にお料理を教えて下さる。その他二人ばかり、レクリエーションクラブの人がいて、一週間に二遍ずつ踊りに行く、そうすると帰って来て奥さん方にフォークダンスを教える。幼児学校でも幼稚園の先生を長いことしていた方が二ヶ月ばかり幼児学校の指導をして下さり、お母さん方が代り合ってそれを手伝っている間に大体のことを覚えまして、最初は子供にお話なんかできないと云っていたお母さんが、日数が経ちますと次第に自信をもって子供を指導しております。こうして各人が自分もグループの重要な一人だという意識を持っております。

菊地　私のところは戸数が少なく、十一戸ですからその点やりいいのです。私が表に立つのは四十九歳で最年長なものですから、負担に感じるときもありますが、経験によって得たものを皆さんのために使うのは当然と思うからです。当番といっても家庭の主婦は初めから重荷を負わせますと「そんなむずかしいことは……」と逃げるから私達はほんとうに初歩から始めまして、記録も順に当番がやることにしました。又あの家では当番の時にあんなお茶菓子を出したから私も出さなければ、というような神経を使わないように、会費三十円を出すと袋入りのお菓子が一包ずつ配られるようにしていますが、非常に巧くやってゆけると思っております。

伊藤　大塚さんですか、会長など何もなく輪番制にしておいて、それぞれの責任を持たせる。役割も何も持たせずに果して会員が責任を持ち得るかどうかという問題がありますね。

それから私が受けた印象かもしれませんが、研谷さんが簡単な言葉で言われた適材適所ということにたいへんな意味を求めるが、協同活動というのは、共同水準か何かを作り上げると同じことをみんなでやるという中にも、そのグループの中の適材適所ということはほかの言葉で言えば一人一人に仕事を分担させるということではないかと思う。そうするとさっきの大塚さんの問題、私は疑問なのですが会長も何もつけずに会員の中に自然に自覚識が出てくるように待つということになると、少しこんがらかるようになると思う。

初めに出た、会長もない、規約も持たないで民主的だというのと反対に木村さんの場合には規約をはっきり持って、会長も副会長も持っている。その規約なり自分達で作った約束なりを守ってゆくというところが民主的なあり方であるという場合があるわけですが。

大塚　私達のところでは他にいろいろのグループが出来ているのです。お料理とか友の会、PTA、婦人会、公民館など、そのため他の方の要求はそっちで大体満されていて、結局教養面だけが残され、それで集まったのが職業会です。ですから固いことは決めないで楽な集まりにして進んで行きましょうと考えたのですが、だんだんだめになってしまったのです。

石田　私共も初めは全員制にして半年交替でやっていたのですが、私達のアパートは御主人の職業の階級差が激しくあの人が会長になれば会に入らないというような障害がとてもあったものですから、いろいろしてみた結果当番制にしたわけです。当番制にしてみると順に回ってくるので、自分は出ることは好きだが当番するのはたいへんだから脱だという問題が出てくる。それではみんなが協同活動の真の意味を自覚してないということになるのではないかとこの間も話し合って、それでは今度は当番の仕事を楽にするようにと考えました。そして、そのために一年間のスケジュールをあらかじめ決めている。一月は手芸、二月は整理、五月はレクリエーションという工合に前の月に来月のことをみんなで話し合っておく。

板谷　日本の婦人は一般に会長とか司会とかをやったことのある人が少なく、公式の発言がうまく出来ない。それで、いずれは会長制にするのが望ましいと思いますが、現在のところでは輪番という意味を重要視して、当番制でやっています。しかし会でレクリエーションなど実際活動をする時は市の教育委員の人に指導してもらったりします。

伊藤　会をやられる場合にどのくらい集りますか。

板谷　親子会ですと五十名近く。例会ですと二十人近く集ります。

菊地　私のところは一年間のスケジュールは組まない。当番制で大体今月の例会の時に、来月はどういうことを話しましょうかと、皆の意向を聞いて、たとえば秋でしたら漬物の時季ですから漬物について、冬近くなりますと衣類の切り回しの仕方についてというテーマを決める。

研谷　私の場合はさっき申し上げた方法でやっていますが、これはやはり新鮮処置だと思う。新らしく互いに未知の人達が集まった環境ですから、また各々の人の力も人柄もわかりませんけれども、仕事を一緒にやっております中に明らかになり、きちんとした組織ができてはっきりしたポストを与えられました時もおそらく不平が出ないだろうという見通しをつけております。一人の人が同じポストにいつまでも座っていることのないように当番制をきめてやってゆきたいと思います。

参加しない人をどうしたらよいか

宮本　皆さんのグループのことをお聞きしますと、サラリーマンとか、他に時間的に余裕のある恵まれた方々のお集まりのように思いますが、中小企業者の商売には、朝何時から晩何時という時間のきめもない。また普通一般の商売人にはお休みの日はほとんどないと思うが、そういう奥さん方の会の出席について時間的にはどういうふうにしたらよいのでしょうか。

伊藤　都市の特性からくるのかもしれませんが、簡単に言えば、今日出たのはお勤め人とかそういった人達の問題でしたが――やはり都市の婦人活動で問題になるのは商店街の俗に言うおかみさん達が、どうしてもグループ活動ができずにいる。この人達とどういうふうに協力してゆくかということが婦人活動の大きなテーマだと思います。どなたかそういう面で経験しておられる方ありませんでしょうか。

松永　私の町は約百世帯商店街があるが、これは中小企業の中でも毎日商売に追われて定休日もないという方ですが、いま宮本さんが言われたように、たしかにグループ活動に悩んでおられる。大体店を閉めるのが夜の十時頃で、朝からそれまでは子供と話しする暇もないし、隣りの店の人と話しする暇もないのですが、話に聞きますと何とかうまくこれを解決して商店街だけの御婦人のグループ活動をやっております。

これが私達住宅のグループ活動に較べて違うところは、メンバーが非常に小人数で大体一般の地域の六名から二十名に比べて商店街のグループは三人から六人です。そうしないと集まれない。それと、集まる場所と時間ですが、十時に商店街をみんな閉めてから申し合せたように十一時から十二時の間に奥さん方が銭湯へいき、身体をこすりながら子供の問題、店の経営の問題を話し合っているということを伺っています。

研谷　私以前おりましたところの例を申しますと、商店の奥さん達は親母子講というのを作っておりまして、お互にお金を融通し合い又、レクリエーションで年に一回温泉に行くとか花見に行くとかやっていらっしゃるように見受けられました。

宮本　いま小人数で小さいグループをつくったらと、松永さんがおっしゃって下さったので、私ヒントが与えられ

たように思うが、同じ町内で何軒も同じ店があるとお互に生活に影響しますので、覗み合い勝ちで集りも非常に限られ、伸びないように思いますが、いかがでしょうか。これではただのおしゃべりになって、リーダーもなく適材適所というわけにもゆきませんが。

伊藤　東京でも杉並の或地域では商業組合として春、夏秋、とバスでレクリエーションにゆき、教養の方でも近所の学校の先生に頼んで勉強会をしたり、そろばんの稽古をしたりしているようです。協同活動についても、これはあるいは全国的な動きになっているかと思っておりましたが、東京なんかではほとんど各区毎に月一、二回ではありますが、定休日というのを作っており、その日は一斉に全部店が休んでしまうということが実行され始めています。これは消費者から言うと不便なこともありますが、商店の方達にはとってもよいことだと思います。

そういったことをやはり皆さんのグループなり地域婦人会で、声を出してやってみたらいどうでしょう。その時は小商さんも使用人も休むが、主婦が思い切って休んで何かするという掛声、運動、そういった方向のことは少しでもできるのではないでしょうか。

井上　グループ活動を進めてゆく上の出席の問題に関係してさっき木間さんでしたか、靴薬を持っていて出て来れない人があるとおっしゃいましたが、私達もそれぞれ働いている。私自身も二つばかり内職みたいなアルバイトみたいな仕事をしており、夜は夜でミシンをジャンジャン体力に任せてやっていまして、時間を生み出すのに非常な工夫が要るのです。私自身は比較的夫の圧迫はないのですが、中にはやはり御主人の気嫌を取ってこなければならない人もあり、食事の問題が大きいので、グループで保存食とか夫達でできる安くて栄養のある料理というのをみんなで苦労して考え、そういうことで出やすくしております。また時に出にくい方がありますと、今度あの人の家で例会を開こうというので、会場を回り持ちにやっている。会場を回り持ちにすると会員同士の中の話し合いの流通を一層よくするのではないかと思います。

野村　忙がしいばかりでなく、意識の低いために関心をもたず集らないということがあり、むしろこういう人にこそ来てもらいたい場合が多いのですが、会場をその家にしたくとも回借りではどうにもなりません。ちょうど私の方にも親々問題児の家庭があって是非出て頂きたいという時子供に頼んでもらいますと感激して出て来てしまいます。

いつも出ない人人はお父さんお母さんに、子供に手紙を書かせて持たせて帰しますと必ず出てくる。そういうやり方をしています。

本間　私もずいぶんこの問題に悩みました。やはり子供の問題で集りました時、私の町はたいへん生活程度が低くて、お母さん達が無自覚ですから、もう少し関心を持たせるだけでもよいと思いまして、ほんとうにこんなこと申し上げてなんですが、大切な会費の中から三千円犠牲にしてお菓子袋を作って、今日はお菓子もあります、是非出て下さいと二、三度呼び掛けをしましたら、わからないお母さんがお菓子につられて出てきたのです。そこでむずかしい話は一切抜きにして、子供のしつけの問題、生活の問題などほんとうに身近な問題だけをざっくばらんに話し合って別れた。次の時にまたお菓子を作って、お菓子も用意してありますと言ったらやはり集まってきた。こうして二、三回集まっている中に、あの会は面白かったと、お母さん達が思うようになり、だんだん出るようになってきたのです。

伊藤　協同活動をやっている方の大きな悩みの一つはこの問題と思います。学校の先生がPTAを集めても、いつも来ない人は来ないといって先生達は苦しんでいます。結局リーダーが身体を粉にして家庭訪問して、そのおばさんが何の問題を持っているのかを知る努力をして、手をつなぐということが大事なように考えています。

松永　私のところは戦災者、引揚者の町で二千世帯ぐらいあり、いろいろな協同活動が生まれまして、円滑に進んでおるのです。

ここでお話し申し上げたいと思うのは協同活動にソッポを向いておった人達が、何か特殊な問題が起きて私達も他の人達に負けないように作ろうではないかということで出来たグループのことです。

一つは、子供を中心とした協同活動です。この奥さん方は若いインテリですが、PTAにも出ないし、他のお母さん方の協同活動にも、あの連中は物好きだというふうにソッポを向いておった。けれども、ある時子供達が子供会でお互にどうしたら喧嘩をなくすことができるかと話し合った結果、お互に悪口を言うからいけない。言いたいことがあったら直接本人に注意しようということになったので、子供が家へ帰って報告したらお母さんが「それはいいことですよ。必ず実行しなさい」と言われた。しかしそのお母さんが、しょっ中近所の奥さんの悪口を言われていたらしい。そのことを、偶々子供が作文に書き学校で作文が張り出されてしまった。そこでこれはたいへんだ。大体子供の教育をするには自分達がまず立派な家庭を作らなければいけないと反省し、ソッポを向いていたお母さん達も、まず新教育はどんなものか、子供の教育はどうしたらいいかということを話し合う会を作り始めたのです。これは人数の制限もなく会費も取らず、三々五々暇な時に好きなところ

で、という形式で始めました。が最初の動機が切実でしたから今のところ問題なくいっています。

もう一つの面白い問題は、私の住んでいるすぐ裏の部落であったことです。ちょっと上品な方がいらっしゃいまして、あまり隣り近所とおつきあいをしない様子だったのが、偶々その奥さんが首を吊られて死なれた。その時にみんなで、なぜこの奥さんが自殺をしなければならなかったかということを話し合った。よくその家庭を調べると、まじめな、おとなしい家庭でありますが、御主人も奥さんもそれぞれ悩みを持っていたのに打ち明けない。第三者から見ればたいして問題ではないが、それを自分だけで悩んでおりグループ活動がなかったから、こういうことになったのだこれは○○さんの問題でなく、私共の問題だというので、新らしい協同活動の芽生えができました。これが私の町全体に広がり、子供の教育も学校だけの問題でなく、家庭を明るくし又、社会もよくしなければならないというように、大きく伸びました。三年前の市会議員選挙には、御婦人が集まって自分達と直結した候補者を当選させるまでになりました。

そういうふうに、何かの問題にぶつかって、どうしても作らなければいけないのではないかという気構えでできたグループ活動は、後から出来ても非常に前進している。

木村　私共は地域婦人会には全然入らず、グループだけでやっておりましたところが、中に自分が会長になるとかならないとかいうことでソッポをむいてしまい、学校に行って、あのこだま会というものはよくないということを宣伝する人があり、非常に困りましたが、それでは学校にこだま会のことを理解してもらわなければならないというので、まず校長を招いて話をしてもらいそれから音楽の上手な先生にコーラスの指導をして頂くというような方法でだんだんに認められ先生方にもわかるようになりました。しかし悪魔をしたりソッポをむいたりする人も住んでいるのはお隣り同士です。そういう方に対しては今後どういうふうにしていったらいいのでしょうか。これが宗教関係ならそういう背を向ける方にも何とかして仲間に入れる方法を講じなければいけないのでしょうがグループ活動でそういう人をどんな風にしたら一緒にやってゆけるかということがまだ解決がついていない。いいお知恵がありましたら。

西田　滋賀県の会でもその問題が出ましたが、自然的に集まって来る人とわざわざ集める人の意識の違いということで出たが、集まって来ない人はほったらかしておくという結論になりました。

野村　ソッポ向く人や途中から止めようとする人はほっておいて、やる人だけがやってゆきますと、やはり一人で立ってゆくことができなくなって、また帰って来ます。

木村　それは、まず集まって来る人を教育して集まらない人は後回しになるのですね。

成定　私達は地域婦人会には入っておりますけれども、その他に特に目標を持って婦人の意識を高める勉強会と共に子供をよい環境で育てようではないかという会をしているのです。

まずはっきりした目標を持てば意識も自然高まり、みんな積極的に出て来るようになると思います。

伊藤　大体時間が来てしまいましたが、今日のところは持って来られたものを一応出し合って、あの人はああいう問題を持っているということがだんだんおわかりになったと思いますので、それに対していろいろ御批判や御意見もあると思いますから、明日は今日出たことについて、解決とか対策というもの、特に協同活動における組織の問題をもう少し掘り下げた討議を致したいと思います。

質疑応答

グループ活動が、何か具体的に発表するものを持たないと御自身もまわりも活動をしていないと思い勝ちですが、私は木村さんとか西田さんのように地味な積み重ねで、女の人の自覚とか向上が出来てゆくことが重要だと思うのですけれど、いかがでしょうか。

阿部　いろいろなことをするのに、当局や議員にお願いすると後で選挙の時に怖いという話がでましたが、それとこれとは別で、その人達は県や市のために働らく人なのですから、ほんとうにいいことなら協力をお願いして、選挙の時にその人が立ったら、その時の政見と自分達の考が一致しなければ協力しないでも、ちっとも構わないと思います。勇気を持って、当局と手を取り合って、いいことを進めてゆく方がいいと思いますが。

伊藤　あとの御質問は、先ほどちょっと問題になりました、グループ活動と、政治との関係にふれておられますが、先ほどの方の御意見と併せて木村さんから簡単に見解を述べて頂きます。

木村　私は当局に陳情したり、市会議員、代議士を利用するということより以前の問題があると思うのです。一人一人の政治意識が高揚していないのにそういうことをやるとこの櫂をかけてくれたのだから、この次この人に投票しておくか、というように安易に考え易い。だから、先ず政治教育を先にやってゆくべきではないか、基本的な方を重点的にやるべきではないかと思っております。

阿部　つまりまだ選挙民が選挙に対してはっきりした考

を持っていないで、何か利益があればその人が他のことでは寝ていてもついてゆくことになるのでいけないということですね。

木村　ですから私のグループではそういう問題を取り上げますためには、一つの運動としてではなく教育として取り上げているわけです。私はその方が適当ではないかと思います。それから、地味な活動の積み重ねという点ですが、婦人団体とかグループ活動というものが、事業をするものだというふうには考えないわけでして、その点で地域婦人団体に相当批判を持っているわけです。地域婦人会がたとえば物を売るのが主であったり、資金を集めるためにいろいろな事業をしているようですが、事業そのものが目的であるのではなく、手段です。しかしその手段が結一杯で本当の目的達成のための活動ができないとすれば反省しなければいけないと思っております。

土屋　私は、五ヶ月前に発足しました七人のグループの一員ですが、中に未婚の方が一人いらっしゃって、各々関心事が違うのでテーマの取り上げ方がわからないのです。共稼ぎしていらっしゃる方は託児所がほしいとおっしゃいますし、そのことを問題にしますと未婚の方や家庭にいて外で働らかなくていい方がつまらなくなる。皆さんどんなふうにして話題を探されるかお聞きしたい。

井上　私のグループも新聞の投書欄で結ばれたので、年令と職業が違うので興味をもつこともチグハグです。未婚の方は恋愛とか結婚の話を取り上げてほしいが、家庭の奥さん達は、そんな話はテレくさいという者で、どうしても話題がそれてしまう。そこでみんなどんなことを話し合いたいかと聞くのです。そうするとある人は老後の不安について話しあいたいといい、又、別の人は子供の就職について話したいという。それを緩急順序をつけて今月はこのテーマ、来月はこれを話し合いましょうということで、わりあいスムースに行っています。

石田　何か共通の悩みを話し合ったらどうですか。

井上　グループの中で何を話し合わなければならないということを言わずに、自分というものを大衆の中に置いて客観的に眺めてみるということができたことが収穫だったと思います。

（第一日閉会）

伊藤　率直に言って、昨日は皆さんが持っておられるものを出して頂こうというのが私の気持だったので、いろいろたくさん出されましたが、問題の深め方はやや少なかったという気がするのです。そこで今日やらなければならないことは先ず人間関係という意味で、夫の協力をどうするかという家庭内における大事な人間関係の問題があると

思います。それから嫁と姑の問題。やはり婦人が家庭から外を見て協同活動しようというような場合に、家庭における人間関係、特に夫とか嫁姑という問題は一応すぐ当面する問題としてあると思います。この第一部会が何といっても家庭の機能を通して正しい協同活動ということになれば、そこから出てくる問題を忘れるわけにはいかないと思います。

それから次に組織の問題としては、一つには他の団体との関係、それからリーダーの問題、これは会長制がいいか会長はなくていいのかということ。それから会費の問題。そして意識の問題。又、協同活動とは何か形にあらわれる事業をすることが目的であるのか、会員の意識を高めるのが目的であるのかということ等々たくさんありますが、これらを引っくるめて、正しい協同活動をするための組織の問題と意識の問題ということになるのではないかと思います。

もちろん皆さん充分に御承知のように、今度の婦人週間のテーマは、ただ婦人の協同活動ではなくて、正しい協同活動――正しい、という言葉がついている点、この点を今日一つ皆さん頭に置いてお話し合いを願いたいわけです。男女の協力、そして家庭を中心とする人間関係というところから始めて、そしてグループ活動、協同活動をする場合の組織の問題というふうに移ってゆきたいと思います。

家族の協力

板谷　皆さんに質問したいのですが、グループ活動されてお忙しいでしょうが、それと家庭生活の忙しさの調整をどういうふうにして工夫しておられるか。

木村　特別工夫ということではないのですが、家庭生活の中で何が大事か、お洗濯が大事か、話し合いの機会が大事かを考えて、お洗濯や家事の一切合財ができなければ本も読めない勉強もできないというのでなく、頭を切り替えて、お洗濯も大事だが主婦の教養も大事だ、むしろ、そっちの方に主眼を持ってきて生活の合理化をするわけです。

井上　私共のグループの中でも出にくいという声がありました。一日の主婦の時間の使い方をみんなで出し合い注意しあっています。毎月最終の日曜日はかあちゃんの日と決めようではないか。その日はやらなければならないことがあっても何もかも目をつぶって、父ちゃんにぶっつけて……というわけで、いまのところ集まって来る顔ぶれは決っていますが、それこそ夕飯も支度してくれるから、解散してから映画を見て帰ってもいいというので出ています。

本間　私は、出て行く時に、子供や夫に、出て歩いて家のことを何も始末しないといつも言われ、これが一番痛いことです。これを覚悟でしなければならない。理解のある

条件のいい家庭だけを考えるのではなく、もっと下の家庭のことを皆さんによく考えて頂きたいと思います。

菊地　私共のところはいまの本間さんとはまるっきり反対で、きわめて条件がいいのです。

皆服があるので、三月の例会は何日にします、と言うとサーッと集まれる。

木村　主婦が出ることによって目が開かれる、開かれた目で家庭を処理するというように、逆に考えてもらいたい。夫が「家のこともできないのに外に出る」と言うことはしょっ中聞くのですが、それも男の方を切り替えてもらいたいと思う。やっぱり夫が、出られるように協力しなければいけない。

石田　本間さんがおっしゃった、御主人から文句が出るという問題ですが、たしかに読書会とか文化活動も大事ですが、もう少し日常生活に直接響くような文化活動、たとえばお料理を勉強して、夜御主人が帰って来る時においしいお料理をしておくとか、部屋の中をきれいにする、壁掛を作るとか、手芸をするとか、生活に即したそういう文化活動もある程度取り入れたら、御主人からの文句も少なくなるのではないでしょうか。

板谷　読書とか教養活動をやっておられますが、御主人もその程度以上のことをやっておられるかどうか、果して自分が得ただけのことを夫にもすすめ、共に研究しようとしているかどうか、それを二、三例を挙げて頂きたい。

大塚　私の方の読書会に入っているのは、主婦と決っていないが、男性はいまのところ会員に名前は出ていない。しかし一時で三十円会費を納めると回ってきた本は御家族全部が読んでいる。なかなかいい本が来ますので、夫が取ってしまって読む暇がないという声もずいぶん聞かれています。

研谷　私の場合はこの活動そのものが生活に直結した問題でありますから、それだけに家族の理解の必要を痛感しましたけれども、やってゆくうちに理解を深め得たということはたしかに言えると思う。

私自身は家族構成も単純ですから、非常に動き易かったが、家族構成の複雑な御家庭ではずいぶん御難儀なこともあったのです。そうした場合は、その方逸の実際活動面はちょっと止めて頂き助ける者だけがそれを組いましたので中心にあった四、五人は相当苦労したわけです。

それからもう一つ特に感じましたことは、婦人が社会活動をするようになっても、今まで家庭にいてお台所が精いっぱいだったのです。だから自分のやっている仕事は社会的にどういうものであるかという大きな目が養われていないために動揺する傾向がある。そういう時にそれを引きずってゆくものはやはりグループの中心になっている四、五名の者で、専らその力であったと思う。

伊藤　研谷さんの場合には、共同購入という経済的問題をつかまえて具体的に活動しておられるのですが、いま非常に喜支えのある家庭とおっしゃいましたが、具体的に言って頂けませんか。

研谷　やはり、まだ若い夫婦の家庭が多いのです。お子さんも小さいのに、御飯時に御飯もやらないで何をしているのかそんなにまでそんな仕事に打ち込まなければならないのかといわれて家庭争議が起きた、とおっしゃいますからびっくりしまして、この仕事が家庭に悪い影響を及ぼしてはたいへんですからそういう方々の活動はやめて頂くことにしました。ということが大切で、私共のところは特殊な環境にあったから特に愛情を持ったのかもしれませんが、その方達が引っ込まれても四、五日するとまた無理しても出ていらっしゃる。その時は嬉しかったです。

大塚　私の方も、最初の中は、新らしい本が回ってきますと時間にかまわず主婦が読んでいな。しかしそのうちに家族で話し合って、仕事を手早く終えて読む時間をつくってするというようになりましたし、家族への影響という点でも、夫もいい本が来ると読み、家庭内でその本について話し合い、又、子供にもお母さんが読んでいるから候も本を読もう、という風に大変よい影響を与えているときいております。

石田　私のところで一人とてもわからずやのお姑さんと一緒に住んでいる奥さんがあって、自分が人の悪口を言うくらいですから、お嫁さんが会に出ると、自分の悪口を言うのではないかと思って出したがらない。奥さんも自然出て来なくなりました。そこで会員で相談しまして、そのおばあちゃんが子供を連れて遊園地で遊んでいる時などに話しかけ、架空の話でも、「この間こういう話を聞いたのですよ。そのお姑さんは理解があって、お嫁さんをこうしてこうして……」というふうに、みんなで機会を求めて言ったら大変よくなりました。

菊地　うちの主人も、はじめは女共が寄って何をするか井戸端会議だ、と言うのです。その話を公民館長さんにしたら、井戸端会議の委員長でいいではないかと言われまして、意を強くしました。そのうちに、会の名前も出来てだんだん束縛を上げたから、今度はどこの御主人も協力して下さいまして、小さい赤ちゃんのいるところでは旦那様がお守をして下さいます。先達、新聞社からたのまれて、グループの方々に家へ寄ってもらいましたが、私一人でお茶をいれる手代りがない。そうすると前には井戸端会議を冷

かしていた主人が女のためにお茶をいれてくれました。

松永　そこで問題があるが、いまの話のように、最初御主人が、何だ井戸端会議か、と協力しなかったのに、長く皆さん方がグループ活動をやる間に自然に協力的になってお茶をいれるようになったということですが、それは御主人が協力しないのを相手にしないで活動をやって時間的に御主人が負けて協力するようになったのではなくて、何か主人が協同活動の価値を認識するようなことがあったのかと思いますが、その点いかがでしょうか。

井上　私共の地方会議の時に云われたことですが、主人の職場が全部同じという社宅がありまして、御主人達は労働組合という組織を持っているが、奥さん達は持っていない。だから社宅で奥さん達も話し合おうということになった時に、最初の問題が家計簿の問題だった。まずガラス張りの家計をということで、御主人の給料がいくらか知っているかということになったら、知らない人が十人の中七人だった。それを帰って夫に問い正したら、そんなこと話し合うならやめとけと一蹴され、男性の協力が行われなかったので、そのグループが立ち消えになっている。いったいどうしたらいいかということが出たのです。

伊藤　男性がわからず屋のために協力が得られなかったのですね。

菊地　私の場合は井戸端会議とよんだのは冷かし半分ではあっても、なにそんなことを仕でかして……という反対の気持ではなかったのです。ですからだんだんやっている間に、奥様、というと大げさですが、そういうものが認められつつあるということもあると思います。

仁木　これは女の人自身のことになりますが、さっき神谷さんの方から、若いお母さんがグループ活動について非協力とまでいかなくても――そういうことをちょっとおっしゃったのに対して、感じたのですがそれにはやっぱり二通りあると思います。無関心な方も中にはおられるでしょうが、子供が小学校ぐらいの頃になり、お母さん方もいくらかお年を召すと眼が出てくると思うが、若い間はグループ活動はいいと思っていても、勧めを持っていたり子供が小さいととてもむずかしい、母親としてせめて家にいる時だけは子供のためによくしてやりたいと思うようになりますから、そこの面の解決点を見出したいと思っています。そういう悩みは常に若い母親として持っています。

本間　グループ活動をする場合に、とにかく主人が協力しないとできないのですから、私共の会員には、よく会の趣旨を主人に話して頂くようにしています。又どこの家庭でもよくあることと思いますが、男の人が出て行く時に今日は何時から寄会があるから、行きたくないが義理で行かなければならない、と断りを言って出掛ける。女の人も又今日は忙しいが、グループ活動をしなければならないと気がねしながら出て行くところに問題があると思う。私はお互いに「ああ、御苦労さま」と言ったり、言われたりして気持よく出かけられるような立場になりたいということを話し合って、理解を得ているわけです。

西田　女の人は家をあけずらいし、又男の人は男の人で女にも理解してもらいたいということを持っている。しかし、田舎は比較的男の方が権力を持っていて、まだ封建的であると思う。男にとっても女にとっても、必要なのはこの封建制の打破だと思います。

井上　先ほどから御主人の協力とか子供のことがしばしば問題になりましたが、私のグループでは、お子さんを連れて出席して気軽に話し合いに加わるということが前提でありまして、私自身三人の子供を全部連れて参りますと、お茶を出したりするのに子供が協力してくれ、あなたの子供、しつけがいいのね、と言われます。また御主人に理解してもらいたいとおっしゃるだけで御主人を理解しようとする人が少ないから、主人を理解しようではないかということがそのグループで出まして、これは特殊の場合だと思いますが、或主人が保健所に勤めていらっしゃるので、その仕事の内容を女の人達に知らせてもらうということと、奥さん自体が御主人の仕事をあまり理解していないから理解しようということと兼ねまして、保健所を見学させて頂きました。繊維の方を専攻していらっしゃる方には、毛織物の見分け方などのお話を伺うということで御主人をグループに引っ張ってくる。そうすると案外奥さんも、うちの主人はあんな仕事をしてたのだと御主人に対する認識ができて、いまでは定期の会合に出て来る時に、御主人の方も快く出して下さっている。

伊藤　御主人を理解しようと努力されることは、私達としても非常に有難いですが、皆さんの中で御主人のサラリーを全部知っておられる方はどのくらいありましょうか。

（全員手を挙げる）

これは模範生ですね。月給の場合でもみな知っているのですね。こういう模範生が出席したのでは話し合うことはもうないかもしれませんね。

宮本　お勤めの方ははっきりしているので夫のお小遣いも大体わかるでしょうが、商売人となりますと、なかなかそうゆかず商家の方は困っていらっしゃる。御主人がさっと売上を懐んでゆかれる、それをどういうふうに使っているかということがあいまいで、この点特に夫の理解が望まれています。

伊藤　家計のために使うお金にも伝票を作り、雑が出し

ても必ずつけることにして、うまくいっている例がありますが、それも一つの方法ではないですか。

宮本　商売人の家庭――それは子供のしつけも夫の理解も何もない。主婦もただ商売一途で、そのために全部を犠牲にしているのです。私自身の場合は、休みもあり、時間的にも、深夜までということは絶対だけですからまだよいが、一般は子供のしつけも何もあったものではありません。

木村　主人が外で非常に立派な仕事を持っておりましても、たとえば子供の教育のような面の教養はわりあいに心がけようとしない。男の人が職業人として立派であると、同時に家庭の父親として、夫としての教養面を充分高めてほしい。男の方自身の自覚にまちたいと思います。これは夫も直接グループ活動に協力せよというのではないのですが、私共がたとえば子供の問題でいろいろ勉強しても、女の人だけがいくらやっても何にもならない、夫婦揃って積み重ねなければいけないと思います。

板谷　女の人が折角協同活動によって得たものが家庭内でどういう風に消化されているかが問題ですね。

木村　やはり、それには家庭内での話し合いをやるというのがいいと思います。たとえば、今度の道徳教育の問題はお父さんどう思いますか、文部省がこう出ているが私はこう思う、というふうに、家庭内でディスカッションした場合母親はＰＴＡとか婦人学級とかでいい知識を持っているから、逆に夫を教育できることもある。そういう話し合いを家庭内で頻繁に朝御飯や夕御飯の後で持つ。これを外の方にだんだん広げてゆくきっかけにもなりますし、非常にいい結果を生むのではないかと思います。ところが寳域県で出た問題ですが、今は主婦がＰＴＡとか婦人学級とかグループ活動に出て行って、男の人以上にいろいろな問題について知識が出来て利口になっているが、家庭でそれをふりまわされては、夫は堪持ちならないものを感じる。家庭では主婦はやっぱりポッとしてフワッとした雰囲気を出した方がよろしいという意見が出て実際にはなかなかむつかしいものだと思いました。

伊藤　もう一つお伺いしたいのは、主婦が外に出る場合に、家の中が心配だということですが、これを生活技術を工夫して解決する。そういった問題はいかがでしょうか。

率直に言ってやっぱり亭主族は、主婦にあまり家をあけられても工合悪いですし、やっぱり多少は巧い物も食べさせてもらいたいですしね。

菊地　そこで言いたいことは、どこかに出ます場合に、女自身が反省して、出るからには出るようにして出るということ。私は主人に文句を言わせない、たとえばお掃除にしましても衣類の整理にしましても、あの家は母親が出かけてばかりいるからあのざまだ、行ってみたらこんなに汚れていた、と言われたくないために、身を粉にして、家の中を始末して出ています。

木村　私は身を粉にして働らくだけの体力もありませんし、徹底的にようしません。ですからその辺少し頭を切替えているわけです。旦那さんも帯を持つし、子供も手伝って、お母さんもみんな利口になるよう協力してもらってやっているのですが。

西田　私のところは両方とも同じ学校勤めですので、お互に半分に分けまして、仕事も洗濯も各自分担してやっております。料理は各自とまではゆきませんけれども、主人が帰りが遅くなったり友達と飲んできたりということもありますが、私は目をつぶっております。その代り私が家をあけましても目をつぶってもらって、いま伊藤先生が、女の人がいつも家をあけられると困ると言われましたが――私共も偶には男の人に留守番していてもらいたいと思います。

伊藤　どなたか、ほんとうに社会に出て連帯責任のとれる子供を育てるために、家庭の中から仕事を分担して自分の時間も作り、子供の教育を考えているということを実際にやっていらっしゃる例を御存じでしたらお出し願いたいのですが。皆さん御承知でしょうが、農村では家族が多いですから、当然なのですが仕事を分担して、長男が畑をやるならば、学校に行っているその子供は豚を見るとか、それなりに一種の報酬を得るようにしてやっている。だからわりあいに分担の自覚ができるのです。そういうことは都会の生活では少ないですね。

井上　私もささやかな仕事を持って、外に出る機会が多いから、小学校の六年、四年、二年になる子供達に仕事を分担させまして、おふとんもめいめいで上げる。朝は小さな子供達は玄関を掃いて、夕飯の後片付も三人の子供が輪番でやっております。五時までに帰らなかった日はお兄ちゃんがお米を洗って、五時になればスイッチ入れるようにしています。

又、子供にも予算生活をさせて、現金出納簿もつけさせています。私自身が家計簿の調査をやっていますから、自分の家の家計のガラス張りをモットーにして、絶えず残額というものを子供がよく知っていまして、自分達の要求がありますと、お母さん、残高いくらあるのと聞くのです。学用品の細々したもの等は自分達の予算の中でやっておりますし、いまのところではわりあい子供達の協力が巧くいっております。

板谷　夫の理解という話の中に、封建制ということがあ

りましたが、これはもちろん男の中に封建制が残っているのですが、それと同時に社会の悪い習慣――ビジネスと、飲んだり食ったりが分けられないような習慣、課長、部長に縛われた時に行動を共にせざるを得ないところの社会の現状をはっきりみつめているかどうか、また女が外に出て活動する場合に、ごくろうさん、と男性が言える雰囲気を作り出してゆく必要がある。家庭の中で自然に、今日のグループの話はどうだった、と話しあえる雰囲気を作ってゆくことが必要ではないかと思うのです。

本間　私、小さい町から出てきましたので、大きい町のをお聞きして、都市ではこういうものかとつくずく感心致します。私の町なんか、グループ活動と言っても封建的で家庭的な問題が多いのです。人間関係それ自体がうまくいっていないから、まだまだ話し合いの場を持ってゆかなければならない段階です。

伊藤　家庭の中のわからず屋の夫や子供の問題ですが、大体出たと思います。この辺で、先ほど申しました、大きく組織の問題に移ってよろしいでしょうか。

団体間の調整

ここにお集まりの皆さんは、何か一つの目標を持ってグループ活動をしておられる方が多いのですけれども、他の団体との関係ということで、どうでしょうか。地域で、教養なり子供の教育の問題中心に集まっておられる場合に、従来からあった地域婦人会とか、あるいは皆さんの場合にはほとんどないでしょうが、農協婦人会とか他にいろいろあるわけですけれども、そういった団体との関係でお考えを持っている方がありましたらどうぞおっしゃって下さい。

野村　私の方は封建制の強いところで、戸主会、青年団婦人会等いろいろな団体があって、青年団とか婦人会で部落の問題、結婚の問題、生活簡素化の問題などを取り上げています。例えば一人が二十円の菓子包で、共同で結婚式をあげるというようなことをやっているが、戸主会では非常に不満で、もっと家柄にふさわしい結婚式をやってほしいというふうに強硬に出てきまして、せっかくやろうとしているのにできなくなる。

そのほか、ボス的な存在の人が多いから圧力をかけて揺りつぶすなどということが非常にあります。

伊藤　野村さんがやっていられる子供会にも、圧力がありますか？

野村　子供会に対してはありませんが、青年達の結婚の問題などには圧力がかかっています。

宮本　私共は商店ですから、お得意さんからいわれて、あちらの団体にもこちらの団体にも入らなければならないというのが実情でそれが悩みです。

井上　私共では各種婦人団体が別個にいろいろの会を開いていてやはり問題があるようです。

仁木　熊本も封建制の強いところですが、たくさん、いいリーダーがいらっしゃる。例えば、日本レクリエーション熊本大会というのに各種婦人団体が、経費を各々出して集る。又母親大会などがありますと、地域婦人団体やその他の団体もみんなで集って決める。それから市の社会教育課あたりは「役所を利用して下さい」といって、各種婦人団体の代表を集めて勉強の会というのを持って、市の予算を組み大学の講師を招いたりしています。だんだんそういうことが続けられて、横とのつながりも出来ている。この会に私が出ますのも、他の会の人が、頑張ってと、応援して下さり、駅にも文化団体の人がお弁当を持って来て下さったりしました。封建的な熊本においてそういうつながりが出来ているということは、皆さんに威張って言えることなので、ちょっと申し上げました。

伊藤　いま他の団体との連携協力という面で、工合の悪い例と連絡協議会の形で広く話し合いを持っているよい例が出ましたが、一般の現状は、中間のところでもやもやしているのではないかと思います。

又、いまのお話しの会員にならないと工合が悪いということも実際上、たいへん切実な問題だと思うが、そういう婦人団体あるいは婦人会というのに果して意識の高い会員ばかりが入っているかどうかの問題があります。

組織と会員の意識

伊藤　ここで組織の中の会員の自覚、あるいは意識の問題、それと数の問題があると思います。いったい婦人が力を合わして協同活動する場合に、問題によると思いますが、どういうやり方が望ましいのか民主的運営ということまで含めてお話し合い願いたいと思うのですが――。

菊地　団体が大き過ぎる、横の連絡がとれなくて巧くゆかないというお話も昨日から出ていますが、婦人会などの理想的な人数はどのくらいでしょうか。

木村　私の方は十六名前後ですが、そのくらいが協同活動するのにいいと思います。けれどもそれだけではなくこういう小グループが寄って横の連絡を密接にして一つの大きなつながりになるという方法を講じなければいけないと思います。ところが地域婦人会ははっきりした目標もないのに会員の人数ばかり集めている。そういうやり方が果していいかどうか大いに問題であると思います。

そういう状態では会員意識がうすいから、政治に利用される。一度御破算にしてしまって、細かい話し合いの組織か

らやり直さなければいけないのではないかと考えている。

西田　会員の意識高揚について私が逢坂山の婦人会の方から聞いたことですが、地域婦人会とか婦人学級とか婦人協力会とか、いろいろ、婦人婦人という名前がついた会がたくさんありまして、会に出ても、今日は地域ですか、職場のですか、協力会ですかと言う。自分はどういうところに来たかわからない人がある。婦人会の会長さんで、婦人会というのはいったいどういうことをするところだ　もう一週、一からやり直そうと言っていらした方がありましたが、それはいいことだと思った。

石田　私達のグループでは、やはり地域の婦人からの呼びかけもありますが、地域の婦人会に入った人の経験を聞きますとアパートに住んでいる人は「きたり者」という見方をされる。それから地域の婦人会は会合がいつも夜ですが、私達は中流のサラリーマンが多いので、夜の会合は絶対出られない、そういうことで地域の婦人会と提携できない。

伊藤　住宅族ですか……昼間は暇がたくさんあるのですね。これはやっぱり都会の時徴ですね。

井上　いま西田さんがおっしゃったように、いくつかの婦人会に参加していると自分が今日はいったい何の婦人会に出てゆくかわからないということはやっぱり婦人会の目標そのものがはっきりしてないから会員にもわかってない。何を要請されているのかみんなが自覚してないということが大きな問題だと思うが、そういうことを自覚させるにはいったいどうしたらいいものでしょうか。発足当時から入った人は共通意識が出来ているが、あまりガッチリし過ぎるためにあとから入りたい人の気持を阻んでいるのではないかという反省も生まれてきているのです。レベルが低いということも言われるが、私の考では、投書欄に出てくる人達は、ニコヨンの人や、もっと低いレベルの人もある。そういう人達は、地域の中で受け入れられないことが多いが、そういう人達が出てきても失望しない会でありたい、そうするといきおい、レベルが低くなるのです。

伊藤　今出ている問題は、婦人会に限ったことでなく、男の方でも青年団というところでサークル活動やると必ず出てくる問題です。いろいろな問題があるが、これは皆さん経験しておられると思うので、もう少し話し合いを進めたらどうかと思いますが。

井上　私共のグループでは、そういう人達のなまの声をききたいと思いまして、新聞の投書欄に掲載された人ばかりでなく、皆さんのお書き下さったのをほとんど全部記録して文集をつくり、いまのところ第二集まで出しました。

大塚　私の方も教養を高めるという目的でやっているが

今までお話伺いますと、小人数で成功していらっしゃる。私の方は最初小人数の時には成功していましたが、今は会員が六十三人です。目標は皆さんそれぞれわかっていらっしゃるけれども、会員が多くなると人に頼り過ぎたり、無責任になってしまう。

そこで考えたのですが、まず全部が無に戻ってどうしたら協同活動ができるかというところから話し合って、それぞれ責任を確認してやってゆくか、規約みたいな簡単なものやリーダーも決めてやった方がいいか、それとも別個に話し合いだけの機関を一つ作った方がいいか、まだわからない。

伊藤　昨日から、読書会を活発にやっていたと思ったが人が来なくなってしまったということを大塚さんが打ち明けていられますが、どなたかアドバイズを——。

木村　私は、本を回しただけではいけないと思います。回した本を中心に話し合いの会を持たなければならないと思う。

大塚　それは最初やっていたが、会員が多くなったら、自分が出なくても誰かが話すだろうということで、会に出るということがおっくうがられて来た。

木村　しかし五、六冊の本を回すにはずいぶん時間がかかるから、五十何人があっちでも話し合い、こっちでも話し合うという読書会のサークルのようなものをお作りにならないのですか、全体でなくて……。読書サークルというのは多勢では無理だと思います。

大塚　でも、二十人ぐらいは出てほしいと思います。

野村　私のところの親子教師の集いを通じまして一番体験したことですが、人数を十四、五名以上に持ってゆきますと、必ず失敗します。原則として十五名以内ということに私共は方針を立てまして、これ以上の集いでしたら二つに分けてしまいます。そうして中心になるのが子供で、子供を掴んでいますから、立ち消えという形にならない。しかし子供が大きくなるにしたがって問題がいろいろ出てきますから、面倒になる傾向があります。

木村　団体活動の一番中心は、小グループが根底になっていなければよくないのではないかと思います。ところが会員が何百何千という大きい団体になりますと、幹部だけで、あとの人は何もしてない。ただ会費だけ払っているという状態です。私共のこだま会の例では会員意識が高く、自分もこの会にはなくてはならない人間だという意識があります。

井上　私共のグループは、皆さんと違って、新聞を基盤にして出来たものなので、愛知、三重、岐阜と三県下にまたがっているし、農村の方も大分入っている。グループ活

動してゆく場合に一つの共通の意識を持たなければいけないと思いますが、どうしてもテーマを考える場合にも、地域地域の特殊性により、そのグループグループで、みんな勝手な行動をやっている。それはやむをえないとしても、年に一回の総会の時だけは共通の総会を持ちたいと思うのですが、農村と都市部では考が一致しない。そういう面でいまのところグループ活動がスムースに行ってないのですが、そういう場合にどうしたらいいのでしょうか。

伊藤　そう無理に大きな集まりばかりやらなくていいのではないですか。おやりになる時はやっぱり人が集まり易い基盤で、レクリエーションみたいに楽しく話し合って、その後考え合っていることを手紙で通信するとかいうことになるのではないでしょうか。

組織の自主性―補助金について

松永　私の町は変った行き方をしています。私は男ですが、婦人会員の一人に入っているのです。これは婦人会の目的に地域の向上とか融和団結を図るということがある。それには男性の協力と理解がなければいけないというので婦人が集まって一緒、どの男性を入れるかということを考える。この目的に関して熱意を持っている男性を婦人会員として入れるのです。婦人会の他に協同活動のいろいろなグループがある。これは最初は皆さんからお話が出ましたように、組織が違うというのでリーダー同士が脱み合ったりして、グループ活動している方は絶対に入ってゆかず、又、婦人会員の方ではこれを分派活動だと見ていた。これを何とか解決しようというので、互に話し合いを持ち合った。

そして婦人会にいらっしゃらない方を調べると、大ていみんなグループを持っている。又、婦人会に入っていて、こういうグループ活動にも入っている人は、同じ日に会がかち合っていることもある。又、婦人会活動についての意見を調査したら、グループ活動にも入ってない、婦人会活動にも入らないという人でも、「私も入りたいと思っているがゴタゴタしているから入りたくない。しかし立派な婦人活動をするということには賛成」、ということがわかりました。そこで皆し合いで出たのが、婦人会を一週解散というとおかしいが、やりなおして今までは幹部級だけ連絡して、下部組織に流されてないのが悪かったのだから、実際の仕事を行うには皆さんがやっているグループ活動をこわすことなくそのまま生かしてやろうということになった。

ところがちょっと困ったことには、グループ活動になれば会費の問題がある。そこで町内会から申出があって、たとえば年間三万要るなら町内会費から予算として出すが使途については町内会がくちばしを入れないから、有効に使ってくれということで、会費を出さないでもすむようにしたが。今度婦人会の方が、町内会も気の毒だから私達五円ぐらい出しましょうということでまとまった。しかし、市の社会教育委員会の方では、それは非常に危険だと言われる。もし町内会がボス化した場合、婦人団体は政治活動に利用されることがあるから、あまり考しくないと言うのです。私は、下から盛り上った意識の向上によって出来たことであるし、皆さん方も町内会の会員ではないか絶対に町内会をボス化させないようにすればよいと考える。結局これは男の人達の意見も必要だというので、私が婦人会議が済んで鹿児島に帰ったら、町内会で、男も女も集まって、大衆会議にかけてきめようかということになっている。

伊藤　いまの松永さんの例、特異な例ですが、これは皆さん話し合って、多小のおみやげを持って帰ったらと思いますが。

松永　人数は私の町が二百十世帯、婦人会が八十五名の会員で、全部入ると今度二百十名の婦人会になるわけです。

西田　市会議員の奥さんという方も入っているのですね。

松永　ええ、しかし一会員で、全然役員もしてないのです。

木村　私は非常に危険だと思う。折角下から盛り上ってきたのだから、婦人会が出来たらやっぱり自分達の会ですから町内会などに頼らないで、自分達のお金で運営するのが当然と思う。

宮城　でも、町内会の婦人部というふうにやるようになったところもあるが、それは自分で自主性を捨てたことになると思う。やっぱり自主的な団体であるためには、教育委員会とか市とか戸数割は町内から補助金をもらわないで、自分達の会費で賄える範囲でやるべきではないかと考える。

菊地　全く同感です。

木村　私、町内会というのがよくわからないのですが、私の方は町内会がないのです。昔は町内会で、そこに住めば強制的に三十円から五十円取られましたが、今でもそういうところがたくさんあるのでしょうか。

松永　私の方の町内会は違うかもしれませんが、入っても入らなくてもいい。任意団体です。これはお互に町の者同士の融和と団結をはかり、家庭生活、社会生活の向上のためということで、月二十円ずつ会費を取ってやっています。

木村　町内会に入らない奥さんで婦人団体に入りたいという奥さんはどうするのでしょう。

松永　みんなが入っています。

伊藤　婦人団体がどこかにお世話になるというところに問題があると思う。それ自体は必ずしも悪いことではないと思うが……。

菊地　いま町内会からの援助については、木村さんと同意見です。私は概論ですが、婦人会の三役のうちの会計が実際財布を握っているかというと、市の教育委員会から、お金を引き出してきてやっている実情ですが、そんなのは不満なので、徹底的に婦人の力で一から十までやるべきだということを持論にしているが、なかなか実際問題としてできない。

松永　町内会費を現在二十円とっているのを実質的に十三円に切り下げて、婦人会費が七円というわけになっています。別々になるわけですが、ふところから出る時は全部まとめてでる。私のところでは、町内会は二十円とか、PTAの子供の育成費は十円とか、いろいろのことで月に五十円ぐらい出しているのでそれと又別に婦人会の会計がお金を取りに行っていたのですが、町内会費、子供の育成費婦人会費合計五十円というふうにして出すようにしたいということなのです。

伊藤　すると婦人会がお金を使う時に、町内会に取りに行くのですか。

松永　いいえ、各各自医が遠っていますから、月に五十円出すお金が町内会事務所に真直く行く。そこで帳簿が町内会費のと子供の育成会のといろいろそれぞれ予算書、決算書が出来ていて使う入達は違うのです。

井上　婦人会は婦人会で集めてやればいいと思う。

松永　ところが今PTAに払うお金が精一杯で、それ以上婦人会に入れば入ったで二十円取る。そういうのが出せないから婦人会に入らない、グループ活動に入らないという方がたくさんいらっしゃる。

仁木　いろいろな集まりがあったのが婦人会というものにまとまったというところに少しわからないのですが、それは地域婦人会というものに適二無二引っくるめなければならないものでしょうか。婦人会が気に入らないで別にいろいろなグループ活動をやっていた人達がよく又地域婦人団体に仲入りになったものだと思います。適二無二私はひっくるめなくてもいいと思う。婦人会のいやな人は別に作ったらいいし、入っていても又作りたい人は、そういう人達でいろいろなグループを作って自主的にいろいろな研究をやればよい。巷の遠ったグループがいくつも出来て語し合うことによって、もっとすばらしいものが出来てくると思います。

鹿児島の今の例のようなつながり方は、怖いような気がする。

（「そう、そう」とみな同意）

伊藤　これは地域の状態でいろいろな問題がありますからいちがいに理屈だけではいけないですが、皆さんの御意見は鹿児島にもお持ち帰り願えると思います。そこでいま出ました協同活動の目標の問題に入りたいと思います。

協同活動の目標

成定　特別の目標を持った婦人会も、もちろん大切ですが、一地域全部一緒でなくてはできないという問題もあると思うのです。たとえば環境衛生の面などは、地域的にやるということで目的は達せられていると思います。

伊藤　ですからグループや団体等でもいいですし、一つの目的を果してしまったら離れてしまったということもあり得る。たとえばいまの衛生とか、地方に行くと簡易水道、共同炊事の問題などがある。そのような協同活動をやってゆく上の目標の問題をお話し願いたい。

木村　私達の会則には目的と同時に活動もきめてある。「教養を高める目的を達成するために、教養的内容を持った月一回のレクリエーションを持つ。総会の援護を得たレクリエーション、親睦会を持つことができる」ということになっています。

そこで教養中心のプログラムを毎月一回必ず持つということに決めています。今年は何を中心にやろうかということを最初の時に話し合いまして、たとえば昨年は新教育の理解ときめてこのテーマで五回集り、子供の絵の指導、科学問題、政治問題などで計十回致しました。又三十三年度は道徳教育の問題を取り上げよう、もっとしつけの問題など話し合いましょうというふうに前もってきめます。それを指導者をよんだり、自分たちだけで話しあったりして年に十回持ち、それ以外にダンスやお料理の講習をやっております。

その中には教育委員会とかアメリカの文化センターにお願いして、十六ミリや幻灯を使ったり、又この間人工衛星が出た時には、市の天文台にお願いして望遠鏡を持ってきてもらい、親子揃っての天体観測も何度もやったことなどは面白いと思います。

結局主婦の考え方やものの見方が進んでゆけばすべての面についてどういうふうに考えて処理したらいいかということがわかってくるのではないかと思って、なるべく基本的なものをするように努力しております。

板谷　私達の会ではレクリエーションは、まず出席がないということにならないためにやっているのです。本来の目標としては何か問題がある毎に――今でしたら例えば道徳教育の問題等を取り上げて、それを次の例会の問題とし

ます。

石田　私のところも団地のグループですが、昨年の夏頃からレクリエーションばかり続いた。それは今まで会長制だったのが当番制にしたので、世話役が順繰りに回ってきます。教養の面の交渉をするには手間がかかるから、自分の当番の時には簡単にするということからレクリエーションが多いわけです。そうしているうちにだんだん出席者が減ってしまってきました。それは私達部会に住んでいて、時間や機会があるので、家族が自由に揃って出掛けることもできるので、会を通じてまで遊んでいたのではだめだということがわかりましたので、なるべく別の方法でゆこうと話し合った。

宮本　私は、主人が戦死いたしまして、引揚げて帰りましてから美容を習い現在美容師として営業しております。私は自分としては問題はないのですが、母子家庭の経済生活の向上のために、特殊技能を持っていらっしゃらない母子家庭の方に、何か技術を持ってほしいということを常に考えております。徳島の米亡人会の方も内職を職旋する程度で他に何もそういう活動をしていないから、皆さんに教えて頂きたいと思います。

私のきいた話ですが、山村で水道の施設など全然なく、遠いところに水を汲みに行かなければならないのに困って水道を作るために自然に四人達が集って少しずつお金を蓄め、嫁姑の意見の相違もあったようですが、みんなで話し合って、お年寄にも納得させて少しずつ集めたのが年に二万ほどになって、それで簡易水道をお引きになったということです。ですから目標があるということは非常に力強いと思います。

伊藤　この部会は、主婦を中心とした教養の問題がたくさん出て、その中でも子供の仕合せのため自分の子供だけでなく近所の子供のためにも児童遊園地を作ったり、子供会を組織したりする活動、特に熱心に出されたのは託児所問題だったと想います。

そういう目標ということについて皆さんがこれからお考えになる点はありませんか。今まで教養ということが強く出ていましたが、協同活動は教養ばかりではないので、もっと社会的なものもある。正しい協同活動というときに、教養活動が実践活動かということが問題になる。教養の基礎を高めて、対社会的な問題を理解してゆくのが協同活動か、又は何よりも先ず実践……かおそらく両方をかみ合わせるべきなのでしょうが、この二つをかみ合わせて、私達のやってゆかなければならない協同活動をどういう方向だろうかということだけ活発に皆さんから意見を出して頂きたい。

菊地　私達のところは、県営住宅という特殊なものですから、教養を高める、親睦をはかるという簡単な目標を立て、それに沿って例会を持っているが、県営住宅にいるとたくさん共通の問題がある。たとえば共有通路に沿って塀根がある。それがこわれた時にどうしょうかという問題、それから下水の排水が巧くできておらないので、三、四年経つとそれが詰って困る。というような場合、市に呼びかけて、どういうように処理してゆこうかということも集会の折に教養面と一緒に話し合っています。

又寄付が割り当ててくる。それに対して主婦が、こんなに割り当てられたらとても適わない、何とかしましようということも話し合っております。

研谷　私のところはやっぱり特殊なところですが、いま婦人のグループの発生状態を見ますと、まず購買部を筆頭に、趣味的なお花の会、料理の会、それから親母子の会が続続起きつつあります。それらのグループをどういうふうにつないでゆくかということを、皆さんで話し合いましたところから、毎月でなくてもいいが、一年に何度かレクリエーションと教養と、結んでいったらどうかと考えました。

西田　私は先ず自分が実行して正しく強くなってゆき、自己を完成させて、そこから教養的なものも出来てくるのではないか。まず実践ということではないかと思います。

竹内　私のところは共稼ぎのお子さんを預って協力したのですが、その経験を通じて学校を動かし全地域にそういう困っている親達に協力の手を差しのべるような体制を作りました。私達の地域は、非常に封建制の強いところで、お姑さんのいらっしゃる御家庭では、授業参観にも全然行けない場合が多いのです。私には姑がいますが、夫も協力してくれますので、いろいろと学校の仕事などもしておりますがこのようなことがしげきになりまして地域のお母さん達が自分の家の嫁も出そうという動きが出てきたようです。それで地域の子供を守る運動もこれからスムースにゆくのではないかと思います。

板谷　私共は生活にゆとりを持ちたいという目的で進んでおります。心のゆとりはある程度の勉強、教養によってもつことができるが、時間的経済的なゆとりについては、まだ残っている。社会の悪い習慣により左右される面が多い。例えば夫婦同伴ででかけることが少ない。労働省のこういう会でも、もし夫婦で出られたらよいのにと思う。二人で出て行く中に、社会を見る目が自然に出きてくる。奥さんが主人の仕事の内容だけでも知るというところに夫婦の理解ができ、その上に明るい生活が成り立つと思います。

伊藤　昨日からお聞きになっているように、板谷さんの場合は自分達のグループで実践しておられる。いつでも集まりがあれば奥さんのグループに主人も出て行かれるというので、いまのような御発言になるわけです。残念ながら時間が来てしまいましたが、この集まりは、結論を出すという意味を持っていない。ですから皆さんが持って来られたものを出しあい、よその地方の話を聞かれて互いに参考になることがあれば自分のところに持って行ってやるというところで今日の部会を終りたいと思います。

ありがとうございました。

第二部会　農村の家庭生活をたかめるために

出席者

青森　田中すえ（農業）
山形　鹿間俊子（農業）
石川　藏藤乃（農業）
福井　内藤はなえ（農業）
岐阜　河合和子（農業）
静岡　伊藤ほみ（両業・農業）
三重　内藤かづ子（商業・農業）
京都　西松枝（農業）
奈良　松井靖（主婦）
岡山　阪口美智子（農業）
山口　山田和江（農業）
佐賀　古川とし（農業）
長崎　城戸静子（農業）
鹿児島　田中美恵子（主婦）
北海道　林継雄（農業）
愛知　森下武成（公務員）
リーダー　評論家　渡辺智多雄

渡辺　これは皆さんの話し合いの会ですから講師にものを聞く会という形にならないよう皆さんで話し合いのやりとりをして下さい。この二部会は「農村の家庭生活をよくするために協同活動ではどんなことができるか」というテーマになっているのですが、協同活動にはいろいろ問題があると思うのです。今度の婦人通信で特に「正しい協同活動」と「正しい」というところに念を押していることに私たちは注意を向けたいと思うのです。正しいというからには正しくない協同活動もあるはずです。皆さんはいろいろの立派なご経験を積んで来られ、これらのことは皆さんのグループの話し合いですでに論文に書かれているので、この会ではそれはもう省略して、それを土台にして問題を出して頂くということにしましょう。まず問題の考え方なのですが、私たちはできるだけ問題の本質を合理的に考えてみたいと思うのです。たとえば協同活動でどんなことができるかというようなことも考え方の角度でさまざまに問題が出てくると思うのです。そこでこれから皆さんが話し合いをして問題をつかんでいく上で、こんなふうな考え方もあるのだというご参考に、実例を一つあげてみたいと思うのです。

私がこれから申し上げる実例というのは、皆さんのレポートの中にもずいぶんたくさん書かれておった生活改善の実践例なのです。それは大分県大野郡の千歳村倉渡という部落の婦人会の話です。ここでも生活改善の一つとして食改善を取り上げた、そのときの考え方なのですが、食生活の改善、そのことはたしかに立派なことだ、しかし栄養をたくさんとるまではいいとして、そのとった栄養をむだづかいしたらなにもならない。それでは食改善以前と同じことになる。栄養のむだづかいをしないことも食改善の一つの側面であるということを考えたのですね。ではいったい栄養のむだづかいとはなんだろうと、みんなで考えたところ、そこからはいろんな問題が出て来たのです。手足を動かしているそのことに大変なむだがあることがわかった。人間の手足を動かす代りに電力を使ったり機械を使ったりすれば、それだけカロリーのむだづかいにならないのではないか。それから、あれもこれもと一人でなにもかもやるよりは、協同でやればやっぱりカロリーのむだづかいにならないのではないかということで、食生活改善の考え方が動機で、すべての生活改善のために大きな協同活動へ入っていったというのが、ここの倉渡婦人会の例なのです。およそなかなか結びつきそうもない食改善と協同活動がこんなふうに合理的な考え方で結びつくという例もありますから、これからの話し合いもできるだけいろいろな角度から、しかも合理的に問題を追求して頂きたいと思います。

そこで協同活動ではまずどんなことができるかということを考える前に、私たちの家庭生活を苦しめているもの、というと語弊がありますが、とにかくいい生活をしたいと願っているのに、それがなかなかできないのにはたくさんの問題があります、ことに農村で農業生産に従事している農家の方々にとっては、すぐ問題になることは農業労働だろうと思うのです。これは農家の婦人も都会の婦人と同じように家事をしなければならない。御飯を炊く、台所の片づけをする。それから子供の保育という仕事がある。そういう女としての普通の仕事の上にさらに農業労働に従事しなければならない。これは婦人にとっては大変な負担です。この重い負担のために家庭内を明るくしようとずいぶん心がけておられるのですが、なかなかそれができない。こういうものをひとつ足元で、しかも現実的にとらえて、一体どうしたら過重労働をもっと緩和できるのか、そんなことから問題を掘り下げていって頂きたい。そうすればそこにはいろいろな問題が出てくる。子供の問題もあるでしょう。そのほか家族のいろいろな関係も出てくる、そんなところからだんだんと問題を追求していって、正しい協同活動のあり方というところへ、明日までにいきつきたいと思うのです、皆さんが現在努力しておられる生活改善の問題、生活技術を身につける問題それを実践していこうとするときに、また新しい問題が起きてくる。それは皆さんのレポートにもたくさん書かれておったように、嫁、姑の問題であり、また夫との問題であります、つまり、最後にはどうしても家庭内の人間関係に、ぶつかりざるを得ない。そこまで掘り下げて話し合いをしていく間に正しい協同活動のあり方がきっと自ずから浮かび出すにはいない。ぜひ、それが浮かび出てくるように私もリーダーとして話合いのカジをとりたいと思うのです。これが私の考えているこの二日間の進路です。

私たちは協同活動を家庭生活の向上のために役立てようとこの部分で話し合いをするわけですが、もう一歩今度はそこから踏み出して、果して協同活動で家庭生活を少しでもよくして、その家庭を支えている社会という支えにどう反映させていくか、どう社会に拡げていくかというところまで、はいってみたいと考えているわけです。そこでまず皆さんが背負っている農業労働の辛さ、その重さ、それをどういう姿で受けとめておられるか、具体的な体験から口火を切って貰いたいと思うのです。そしてそれはやはり単なる労働の問題だけでなく、それを解決していくためには男子と同じように農業技術の問題、農業経営の問題にも皆さんが参加していかなければどうにもならないというところにまでお話が進むだろうと私は期待しているのです。

農業労働の問題

内藤はなえ　私の部落は五反百姓で、夫婦とも農業に従事することは経済が許しませんので、結局男子はサラリーマンとかいろいろの職に出ており、主婦が全部農業作業をやるわけです。ところが農業経営とか技術の面のお話などはすべて男子が致しまして、女はただいわれるままにわからないながらも在来の習慣そのまま、朝から晩までやって来たわけです。ですから私たちこれではいつまで経っても うだつが上らないということに気がつきまして、三年前にグループを作り普及員をお招きしていろいろ研究したわけです。どういうことを始めたかというと、私たちが農事について一番悩んでいるのは草取りであるということから、まず水田除草のために二、四Dの使い方を実地に指導してもらい、運命とあきらめていた水田除草の労働から解放されました。

もう一つ、私たち女子に過重な労働となっていたのは田起し、畑起しの仕事でした。これも私たちの間を男子側が受入れてくれて、昨年部落に耕耘機が入ってきました。昨年はわずかに部落の面積の一割程度しかおこしませんでしたが、今年は、私が上京するまでに部落の耕地面積の八割まではおこされてしまっておりました。私がここに参りますのに仕事に対して軽い気持で出てこられたのもこのためです。そのほか薬剤撒布にしても、私たち女子がいろいろなことを共同でやっておりますので、昨年うんかの発生で被害がありましたときも、私たちの部落は減収から免かれたという誇りを持っております。

渡辺　今の内藤さんのお話には重大な問題があったと思うのですよ。男の人たちにこれやれ、あれやれとただ言われるままにやっておった。自分で考えることなしにただ盲減法にやっていた。そこにまず女子の農業労働が過重だといわれる原因の問題があるのですね。そこからひとつほぐしていきましょう。

伊藤　やはり女の人たちが学ぼうとしないところに原因があるのではないかと思います。そうして先ほどもおっしゃった農業改良普及員とか指導員とかいう方が手をさし伸べていて下さるのですが、男の方は割合それを利用するのにくらべ、女の方は概して男の方に頼るというのか、よりかかっておりますので、そういう農業指導員がいくら手をさし伸べて下さっても、学ぼうとする意力がうすいのです。もっと積極性をもって、自分たちの無知をまず勉強してなくすことが必要ではないかと思います。

森下　伊藤さんのおっしゃった通りなのです。しかし僕はそのもうすこし前にある問題をがっちり固めていきたいと思うのです。学ぶ意欲が女の人にないということ、それはたしかですが、それ以前に、いま農家のご婦人方が農業労働に従事している姿というものは、男の人に言いつけられての仕事ばかりではないでしょうか。

山田　先程から主婦の無知とか主人の言いなりになって働いていたとかいうことが言われておりますが、私はこれも言いなりになって働いていたということより旧家族制度における家長の権力がそれだけ強かったのだと思います。強制的に主人がこうせいといったら主人は一歩も動かない。妻はただ黙々として働かなければならなかったというところに、今まで婦人が伸びなかった大きな原因があるのではないかと思います。

渡辺　あれをしろ、これをしろと言われて朝から晩まで忙しがっている。自分で自主的にやる仕事ではないのです。つまり奴隷労働みたいな形ではないか。どなたかのレポートにありましたが、夫の牛馬のような働き方をしているというのを、ひとつ話して下さい。

蔵　いままでの農家の婦人は、鍬さえふり上げておればいいお嫁さんである。一日中働いてさえおればいいお嫁さんであるという気持を持っていたことに問題があると思います。過重労働で忙しい忙しいというまえに、勉強して考えてやったら農業労働も軽くなるのではないかと思います。今まで八時間働いていたのを七時間にして、一時間勉強して考えてやったら、七時間働いても十時間以上働いたと同じ効果を現わすと思います。私自身十年間の農業で非常にそれを感じたので、いま婦人会でも勉強に力を入れているのです。勉強というと農家の婦人はとてもむずかしいというような気持がするのですけれども、決してむずかしいことではなくって、話を聞いたり、実際をみたりすることが勉強なのですから、私たちはそういう方向へ考えをむけていき、労働の軽減をはかっていかなければならないと思っています。

渡辺　そういう点では鹿児島の田中さんなどもずいぶん農業技術を身につけることにはご苦労がおありになったようですが、やはり農業労働の過重さを自分らの勉強で克服しようということからそういう勉強が出て来たのですか。

田中美恵子　私のところも婦人の自覚が足りませんので、いつも主人から命令されるままに動き、自分で計画を立てて自分でやろうという力を持っていなかったものですから、これではだめだということをみんな一緒に話し合いどうしても自分たちの力で切り開こう、それには営農改善や増産の問題もありますので、普及員の力を借りてみんなで勉強しようという気運が高まってきまして、そういう方面のグループがふえております。近ごろみんなの研究心が高

まり、技術も進みよろこんでいます。

渡辺　森下さんはそういうときにご婦人一人一人を対象にしてはだめだ、グループになって協同でその問題に取り組むのがいいということをレポートに書いていらっしゃったのですが、ご体験をひとつ。

森下　個人個人を対象にしてはなかなか胸襟を開かないのです。こういった問題に取り組む場合には、内輪のことまでぶちまけなければいけないのですが一人一人ではそれが出来ないのです。私は労働過重の軽減というようなことから、この作物を作るにはここここここが一番大切でそのときの作業はどういうふうにやればよいとか。そういうふうにやることによって作物の生育がどうなるのだということまで話してもなかなか納得しないのです。それにはずいぶん苦労しました。ところが、知合っている者が集まっていたしましたら、一人一人の気持もくだけお互の話し合いで納得してくれました。

一日中働いていなければ眠れであるというような観念が非常に強いのですが、こうした考え方をなくし、重点的な作業をして、過重労働の解決をはかることが大切で、それについては私は技術的にポイントを研究し合うようにやってきました。

城戸　私ども婦人会で作っている婦人学級は、農家の婦人ばかりですから一時間だけ農業の時間に当て、いろいろ農業について勉強しています。今までは主人の命令通り計画性もなく知識もなく、ただ言われるなりに働かされていただけでした。今では少しづつ野菜の作り方や麦の作り方を習って、自分が先に立ってやるという気持が出て参りました。専門的には農業簿記をつけるグループを作りました。また、これは婦人会としてやっているのではありませんが、技術的な研究会として、水稲とか柑橘、蔬菜、肥料養鶏、養豚というようなグループも出来、その方面の専門家を呼んで研究会を開いています。

渡辺　労働の問題をもう少し話し合いたいのですが、皆さんは毎日朝起きてからどんなふうに仕事と取り組むか、段取りは誰がつけるか、その段取りをつけるために皆さんは話し合うかどうか、そんなことを話してみてくれませんか。

森下　私の最終目標は農家の主婦と主人が明るく話し合うという農家になれということです。主人の言うなりになって、自主性がなく、あるいは計画性がないというか、今日の仕事の段取りはどうするかということを話し合わないからだめなのです。前の晩に明日はなにをするかということを話し合って、できれば前の日に肥料の配合をやれるくらいの準備がなければだめだと思うのです。そういうふうにやっていくことが大切だと思うのです。

山田　私は現在青年団の四Hクラブ員として農村の生活改善に努めておりますけれど、私のところでは自分達が朝何時に起きて、何時から何時までは農作業、何時から何時までは洗濯とか、睡眠とか一切を毎日記録して統計をとり全部表にして部落に発表したのです。私は母がおりませんので農作業も家事労働も一切しなければならないのです、やってみますと非常に過重な労働をしているのですね。それを示しますと娘さんがそんなにまでやられるのですかというのです。まず私たちは実態調査からはじめて、私たちのおかれている地位を見つめてからやっていきたいと思います。

古川　私の部落は佐賀のずっと西南部の農業一本やりの部落で、大体一軒の耕作反別が一町七、八反ぐらいです。それで婦人の労働が大変ひどいのでこれを軽減するため、仕事はすべて分担でやっています。主人が田圃のこと、長男が牛の世話、次男が養鶏、主婦が養豚というふうに分担してやっており、誰かが不在の場合はみんながこれを協同作業でやっております。

渡辺　いま分担という問題をお出しになったが、これは私がいつも考えていることなので、大変いい問題が出て来たと思うのです。皆さんのレポートによると、協同活動というと自分の家庭の外へ出て、お隣りや地域の人たちとグループを作って、なにもかも一緒にやることが協同だという意味合いの論文が多かったのです。それでは一体どういう協同の仕方をしているのだろうというと、そのことには案外みんな触れていなかった。協同という問題を考えるときちょっと思うと反対の意味にもとれそうな分担ということは大きな問題があると思うので、考えてみたいと思います。私が非常に感銘させられた例がありますから、参考に申し上げて、あとで皆さんからそのことと関連していまの分担の問題を掘り下げて頂きたい。大分県千歳村の田原園という四十五戸ばかりの部落の生活改善の中にあった話です。よそでは派手な台所を作ったりお便所を作ったりお風呂を作ったりするが、自分らにはお金がない。お金のかからない生活改善をしようというので、ご婦人が集まって自分らの箪笥の整理整頓をやったのです。そうしたら亭主さんのものも娘さんのものも伜のもこんがらがって入っていた。それを使う人ごとに分けて夏物、冬物きちんと整頓して、その使う人ごとに箪笥の引出しに名札を貼った。そうしたら隣に妹の着物をおいてある箪笥の一箱を貰った兄貴は、妹に負けまいとして自分の着物をちゃんと自分で整理するようになった。これはいいことだというので家中のことにこれを応用したのです。鍋にも鍬にも貼ったし山羊小

屋、鶏小屋にも牛小屋にもお台所にもそれを使う人、それを持っている人の名札を貼った。それがふしだらな状態であると結局名札を貼られた人の恥になるので、責任を感じていつもきちんとするようになった。そうやってみんなが持ち物の管理の分担やってみたら、いつのまにかそれが、家の切り盛りといいますか、運営の分担に発展していったのです。最後にどういうことになったかというと、まず鶏小屋を預かった小さい妹、牛小屋を貰った上の兄さん、山羊小屋を預かった小さい兄さんが飼育管理を始めた。自分らでわからんところは夕飯のときにお父さん、お兄さんに話す。自分たちで責任をもってやっているからそういう話になるとお父さんも叱らない。立派に子供の独立人格を認めて、ここはこうやるのだということを教える。卵を今日はこれだけうんだということになると、えらいといってほめてやる。そういうふうに家族の一人一人が独立した存在としておたがいに認め合った人間関係の上に立って、家族全員の話合いで一家の農業経営を進めて行くようになった。分担ということは協同の大事なやり方ではないかという一つの実例なのです。協同というとすぐ、ただ一つのことに多勢がわあっと、寄ってたかってそのものをとっ組むことのように考えられがちなのですけれども、そうではなく、一人一人が役割意識を持つというようなことが非常に大事になって来はしないかということですね。

西　私の部落は三千五戸ありますが全部婦人会に入っており、その会員は二つのグループに分れています。そうして田圃の草取り、部落の山とか村の山、村有林の中刈り婦女のできることを婦人の協同作業で致します。人を頼むと一反三千円くらいかかるのですが、婦人会の協同活動ですると反当り千三百円です。それで得たお金を積立貯金して且用品の地下足袋とか、子供の靴下、石けん、糸等を共同購入致します。品物がよく、安くて喜ばれ、家庭が円満になるわけです。それで夫やお姑さんに婦人の協同作業が非常にいいと理解して頂け、自然に家庭が明るくなって婦人会の活動もよくなりました。

城戸　私の家庭を例にとりますと、家族五人おりますが主人は勤め人、長女は保母、次女は養鶏、末の子が高校生で、私が三反の農作業を担当しそれぞれ仕事も違います。一日中別々に出ておりますので、顔を合せるのは晩のお食事だけですから、食事が済んでもすぐに片づけないで毎晩自分の困っている点とか解しかったことなどを話し合い、ときには三時間くらいすごすこともあります。家事にしても朝起きると私は早速百姓の仕事にかかりますので、保育所に勤める女の子が炊事をし、次の子が洗濯をし、一人が掃除をというように全部分担しております。

渡辺　青森の田中さんはそういうことで子供さんが自分で学資までうみ出してやっていらっしゃるということがレポートにありましたね。

田中すえ　それも家計簿をつけ出してからのことなのです。青森県の農家は一家のお財布持ちは家長であり、長男は四十になっても一家の収入はどのくらいかということには無関心で、ただ働いていればいいというので家計の責任を感じないで済んできました。ですからそれについている妻も同様で、家の経済がどうなっているのかさえ知らない状態です。私には四人の子供がおりますが、どうかすると学校のお金さえ次の日にのばすことがあり、それを母親としてどうしてあげることも出来ず、子供からは次第に母親に対する信頼感がなくなっていくのを痛感し、なんとかして家の経済を知りたいというのがきっかけで私達十一人で家計簿をつけるグループを作りました。一年間の生活費、子供の教育費等を自分でつけてみて、はじめて家の経済のやりくりを知りました。これでは収穫時にはとても辛抱しなければならないという気持になって、子供に、家の経済状態を話したのです。長男はそれでは高等学校に入るのは大変だから、今までお父さんがやっていた豚を自分が飼育する。農業の手伝いをすれば高等学校に入れるといって、仕事を分担してもらい一生けんめいやるようになりました。次男はおじいさんから二十羽の鶏を貰い飼育から卵を売ることまで自分でするようになり学費の足しにしています。

松井　いま青森の方から貧しいということが出ましたが、労働の問題に逆戻りしますが、先ほどから皆さんのお話を聞いておりますと家事を分担したり婦人自身が自覚して農業経営を身につけることによって、労働の負担が全部軽くなるというように聞えたのですけれども、貧しさから解放されなければ決して農業労働の負担ということが軽くならないと思うのです。母などになぜそんなに働くのかときくと、そうしなければやっていけないというのです。それは農業による収入に対して生活費等の方が大きいからなのです。極端に言いますと農産物の値段というものには全然労働賃銀が計算されていないということが統計で出ているのですけれども、そういうことにも原因があるので、貧しさからの解放が、大きな問題ではないかと思うのです。

蔵　いま農村は非常に困っているのです。なぜ困るかと申しますと次類などで生活の費用が二倍、三倍とかさばるわりに、お茶や畑作が二倍、三倍もとれないから、そこに貧しさが現われてくるのです。そこで今の農村の現状を救うためにはなにが一番大事かと申しますと、主人と主婦が一緒になって食糧増産、営農改善を見つけなければならないと思うのです。それが一番の根本問題です、私は農村の

婦人がもっと勉強しなければだめだ、お父さん方も勉強が足りないと思います。また、一方設備をよくすることも大切なことと思います。私どものところの例をとりますと、水道のなかった当時は乳牛二頭をかうにも、それにのませる水をバケツではこぶため相当の労力をついやしたのですが、水道が出来てからは、水道の栓さえひねれば水をのませることが出来るので、労働は軽減し、今では四頭かうことが出来るようになりました。

林　農業経営の改善はよくわかるのですが、それだけで貧しさから解放されると考えるのはいけないと思う。生産性の向上のみが農家の生活を向上さすものでないのです。小豆の値段でも、凶作の場合は一万二千円もするが平年作であれば半分にもならない。豊作貧乏という形になる。そういう主食でない農作物の価格がどのように脆弱なものであるか、こういうことを考えていなければこれは絶対に貧しさからの解放にならない。

内藤かづ子　労働の問題に関係あると思いますが、私の方は小さい農家で、漁業もちょっと兼ねていかなければくらがたたないような処ですが、田植えや刈り入れにはやはり忙がしく朝早くから夜おそくまで働いております。従ってこうした期間には栄養を十分にとって疲労を回復することが大切と思い。農繁期の共同炊事を婦人会で話し合いました。十三戸の賛同を得て実施することになったのですが、忙がしい農家の主婦が交替で出ることをせず、お手伝いの方にお願してお昼と晩の副食を作ることにしました。準備会をもって献立をつくり、材料は野菜等家にあるものはもって来てもらい、鰯、鯵等安いものをかって栄養食を作りました。これがきっかけとなって食改善が出来ました。

それと同時に共同炊事をやったことにより、田の少いところが多いところにお手伝いができ、こうして労働過重の問題が幾分解決されたと考えています。

阪口　私は結婚するまではお百姓がきらいで、嫁にいくのなら町でなければいやだといっていたのですが、父が中風で倒れたので、あととりの私は、やむなく農業に従事するようになりました。最初のうちはかなり辛かったのですが、やり出すうちにおもしろくなって来て、私に全部任されたものですから自分の好きな桃とか苺とか西瓜を作ったり、米、麦などいっしょうけんめいに作りました。絶えず合理的に作業をすすめるよう協力してやってきましたら父がやっていたよりもたくさんとれるようになったのです。全部任して貰って仕事の責任をもっていけば労働過重などと言われますけれども、それが解放されて楽しい農家としてやっていけるのではないかと思います。

渡辺　いろいろ話が出たのですが、その中で大変大事なことは青森の田中さんがおっしゃったお嫁さん、つまり農家の主婦にはお金の自由がないというです。これは皆さん農村のご婦人方にとっては農業労働の辛さと同じくらいに日常辛いことだと思うのですが、この問題をもう少し話し合ってみたいと思うのです。

家庭経済の問題

鹿間　田中さんが言う通り、私も嫁いでから十二年になりますが、初めはお姑さんと主人だけが財布を持っていて嫁の私はなかなか自由がきかなかったのです。子供がいても子供にミルクなど買うことさえ困難な立場におかれていました。一昨年お姑さんがなくなり、主人と二人で働くようになってから家計簿も作りました。自分が財布を持ってみてはじめて一家の経済を自覚し、家計のやりくりを上手にすることを考えるようになりました。

蔵　そのお財布がお嫁さんのところに来ないというのを解決するのも、私たち農村の婦人が協同活動によって、現金収入を得る道を開いたらできると思うのです。農村の方はみな物々交換で現金を持っていなかったのですが、婦人会で、野菜グループ、養豚グループ、水稲グループを作り婦人にも現金収入が得られるようにしました。その結果自然と物々交換がなくなり、お魚一匹でも油揚でも買えるようになり、こうして得たお金を皆んなで出し合って去年水道を作りました。

渡辺　旦那さんは旦那さんで財布持っているのですか（笑）

蔵　財布は全部私がにぎっています。家計簿をつけたおかげです。家計簿には、たとえば主人のポケットから五円出て来ても主人のポケットより五円と書いておきます。それを主人が見ますとははあ細かいなと思うでしょうが、やっぱりきちんと妻はやっているなということを認めて貰えると思います。また、今日はお金幾らいったでしょうかといって聞いたりすれば、どうしても主人が財布を渡すと思うのです。そこはやはり婦人のやり方によるのではないでしょうか。

渡辺　それを男の立場で林さんどうでしょうか。

林　私は男の立場から奥さんに財布を渡さなければならないということに賛成しております。北海道では外側の経営の場面は主人が持っていて、家庭の中の日常的な方面は主婦が持っています。

渡辺　貧しさからの解放のことを、毎日の家計簿の中で毎日の重労働の中で見詰めて、その解決のいとぐちを切り開いていこうというのがこういった会合の趣旨でもあると思うのです。政治の不都合なこと、われわれが不公平な扱

いにあって貧乏であることは、理論的にはたしかにそうであっても実感にならない。それを実感として、政治の不都合や社会の仕組みの悪さを自分の肉体に感じとって、それをほんとうに自分のものとして解決していこうということになると、皆さんが今日持ち出されているような問題の中で取り上げていくよりほかないし、またそういう取り上げ方がほんとうに政治のまずさからも貧乏からも解放されていく手段だと思います。だから今の家計簿の問題、男が財布を握って離さない問題、それらを解決していかなければほんとうの解放はつかめないと思うのです。

森下　財布の問題は現在の農業全般を進める上に一番重大な問題であると思います。ご主人が持っている場合はまたいいと思うのですが、いわゆる年寄りが持っているところに非常に問題があると思うのです。先ほど岡山の阪口さんが、私に任された、私がやっている、それによって親の作っているときより収益がよくなったといわれたが、これが大きな問題だと思うのです。私は外地に行って帰って来て村に入ったのですが、私のところに出入りする四、五人の若い者に私の口ききで嫁をおせわしました。私は親に、仲人をして嫁を世話するが、嫁をもらったら経営は全部若いものに任せることを約束してほしい。その代り今までよりは何割か多い収益を絶対に上げてみせる。ということで実行してもらったのですが、その結果は大変よかったのです。それによって経営も任せ財布も任されてくることになったのです。初めは経営だけ任してくれて、若い者も喜んでやっております。その点が財布を握る一つのあり方だと思うのです。

渡辺　むずかしい言葉で言うと主体性を持つということですね。自分がその仕事の主人公なんだ、そうすると家計という一家の主婦の仕事、その主婦がやはり家計の主人公にならなければ積極的な仕事はできないわけですね。だから先ほども話が出ておった家事分担でも、俺は仕事の主人公だという考え方と、そういう条件を作っていくということはやっぱり非常に大事なことだと思います。だから今の家計簿の問題、男が財布を握って離さない問題、それらを解決していかなければほんとうの解決法はつかめないと思うのです。

河合　私の体験ではありませんけれども、私が出発する前に見学したところは養豚、養鶏のとても盛んなところで或る家では豚が六頭ほどおり、その飼育は奥さんがやっておりました。大きいのは百五十貫もあるといいましたが、年に二回お産しますので奥さんの月給が二万一千円だといっておりました。とてもよく豚も馴れて、外を二匹で歩いているのです。もう一軒では鶏が何百羽もおりまして、鶏が卵をうみに入ると箱の蓋がぱたんとしまって、その鶏に番号がついていて、何日に幾つうんだということがよくわかるのです。そのうち一軒だけでなく近所が全部そういうふうに経営しております。その土地はずっと前は亜炭の副業をしておりましたが、地下の資源も掘り尽されて六十軒しかないそうです。それで副業として養鶏養豚をしているのです。

渡辺　青森の田中さんはグループで家計簿の勉強をしたことから、財布を夫と共有のものとすることができるところまでいったというお話をされ、また福井の内藤さんは過重な農業労働から解放されるために、やはりグループで技術を学んだということをおっしゃった。技術などを学んだりするいわゆる学習というものも、一人でうちの中で本を読んでおったりしても解決点までなかなかいかない。そして皆さんのお話から学習も共同でしなければならないということが出たと思うのです。共同学習という、これも立派な協同活動の一つですが、なぜ共同学習でなければ、ほんとうに問題解決の学習にならないかということを、なにかご体験でお感じになったことを話して頂きたい。

協同活動の意義

森下　協同活動で学習していくよさを、私の体験から申しますと、各自が経営上の問題点――たとえばある人は秋落ちの問題、ある人は玉葱の苗を作ることとか種をとることについての問題――を持ち寄り、お互いに話し合うことによって、共通の問題点を探り出すことができ、自分の気ずかなかった点に気付いていく。お話し合いの中でその解決をみることが出来る。また、実行した結果をもちよりお互に再検討する事非常によかったと思うのです。その点は協同でなければ得られない学習だと思います。

内藤はなえ　その例として、私の体験を申し上げたいと思います。職前は勤めておりまして、終戦後やめて農業に従事したのですが、そのときは親も死んでおりましたので、お隣りの人のなさることを真似し、種を播くと私も播く、というようにやっていたのです。これでは自分が不安で仕方ないので、新聞の農事欄を始終見まして、その通りをやってみました。ベテランの村の方たちは陰で、知らんものはあんなことをやるといって笑い者にしておりました。ところがグループを始めまして指導員の方に来て頂いたら、私のしていたことでいいのだということになりました。初めは半信半疑でなかなか真似しませんでしたが二年目には私の部落がよその部落に卒先垂範というまでになりました。あっちこっちにいってみんなが話をします。私が言ったことは皆信用してくれなかったのですが、協同

活動によって大きな効果をあげることが出来ました。

田中美恵子　私のグループでは共同購入によってお金をうみ出す方法を考え、それを生活改善や、納税金にまわしていますが、こうした活動をとおして主人の理解が自然にえられるようになりました。

山田　私の回りの若いお嫁さんたちを見ておりますと家計簿を全然任されておりません。一匹の魚を買うのもお姑さんや夫から貰ってやるのです。そういうことを見ておりますとせっかく娘のうちに家計とか家政管理ということを勉強していても、嫁いでからそういうことを全然やらして頂けないのではと考えさせられました。グループに入るということさえ来てすぐのお嫁さんたちにはなかなかできないのです。そういう場合にどうしたらいいかというと姑と夫に話して自分でなにか責任を持ってやる。仕事を鶏とか豚とか分担させて貰うのです。それをきっかけにして一家の家計というものに自分が入っていく。それはあくまでもきっかけとしてそのお嫁さんが入っていくのにいい方法ではないかと話し合ったのです。

渡辺　家の経営のどこかに自分の場をおくということ、これは大変いいお話ですね。なかなか家計簿の問題はむずかしいのですが、田中さんの場合などはグループの人の協力の賜ですね。

田中すえ　毎月一回家計簿についてみんなで検討するのですが、それをいつも私の家でしていただきました。そしてこういう勉強だということを父母に見て頂いたのです。なるほどうちの嫁に財布を預けても、これなら間違いないと合格したわけです。

渡辺　やり方としては、これは非常にいいやり方で、なにも摩擦が起きないでいつの間にか信頼を得たということですね。

山田　昔からの頑固な頭のお姑さんのいるうちでは、そのような方法はとれないと思います。また、若い娘さんたちも自分の腰がふらついているので、農家に嫁にいってそこまでやろうと考えている人はあまりないのです。

蔵　私のところは経営まではいきませんが、農業経営の改善を生活改善から持っていくという過程にあるのです。今グループの共同学習で封建的なところを改めて、今年中には経営方面にもずっと進みたいと思っております。

田中美恵子　共同で致しませんと値段を叩かれ、非常に生産物が安く見積られるおそれがあります。そういう面から共同販売、共同購入ということが私たちの生活に大切だと思っております。それは農協を通じてやって頂けるものですから割にうまくいっています。

渡辺　協同活動といっても極めて内面的な共同学習の問題までいろいろと話がでましたが、そういうことをするのに皆さんご不自由を感じていらっしゃることとか、束縛というようなものがおありだろうと思うのです。たとえば子供にしてもそのときはどこかへ預けたり頼んだりしなければ、なかなか簡単に自分がでていけないということが多いと思うのですが、そんなことでひとついろいろ話を出して頂きたいと思うのです。

協同活動をはばんでいる問題

河合　協同活動をする上での束縛はみんな痛切に感じています。グループができかかると地域婦人会とのあつれきなどがひどく、このため、折角出来かかったグループも育っていかないことがあります。

渡辺　いま、団体間士の問題が出ましたが、これは大きな問題でこれも話し合わなければならないのですが、まあいきなり外側の遠くの問題に飛びかかるよりも、自分の周りで身近かなところで足を引っ張ったり手を引っ張ったりしているものから、だんだんと外側の問題に拡げていきましょう。私は子供の問題などをちょっと申し上げたのですが、そんなことでどういう問題がありますか。

城戸　部落で小さい託児所を作りまして、人を頼んで小さな子供を預かっておりますので、若い者が仕事にも会合にも出やすくなりました。

内藤はなえ　私どものグループは子供を背中におんぶできる者はおんぶして参ります。ちょっとじゃまになることはありますけれども、それをとめたら決して学習に出られないと思います。子供を家において参りますとお姑さんからは嫁は子供を私におしつけていってしまったというので逆効果になると考えますのでしかたなく連れてきます。

田中美恵子　農繁期になりますと部落ごとに託児所を作り子供のあるお母さん達が働らけるようにしておりますので、非常に農家の方が助かっております。

林　私どもの方では、婦人の活動が冬期に限られますので、交通の不便が一つの障害となります。また、家事が非常に忙しいこと、お嫁さんとお姑さんの関係もそれに続いて出て来ますし、会合に参加するために女の人は服装が気になる。これが案外大きなじゃまになっております。次は男の無理解ということがはっきり出てくるのです。

山田　昼間働いておりますから夜間に会合を持つ場合に親とか近所とかがうるさい。それが大きな問題として活動を阻む面が多い。

吉川　協同活動をやる場合男の方や両親の方の理解や協力が一番ほしいと思います。

河合　私たちのグループは子供は子供の日の五月に、四

月は農業講座に主人と同伴でゆき、九月はお姑さんと一緒に話し合う機会を持っておりますので、家族の理解を十分持っております。

渡辺　初めから理解してくれたのですか。東京まで出ていらっしゃれる皆さんですから、御主人は非常な理解を持っておられるのでしょう。その理解を得られるまでどうだった、かどういうことから理解が深まって来たか。

男性の協力

河合　私は先ほども申しました通り農家には縁がなかったのです。その地方に行きましてみじめな生活を見て、どうしたら婦人の地位が向上できるかと考えたのです。私のうち自身が非常に封建的でずいぶんひどいお姑さんだなと思って、何度か別れようか、死のうかと思った。裸で来たということが一番の原因で、うちの嫁は肩身が狭いということを人の前で言っておった。ところが私も努力しましたし、父や母も私の心を汲めて下さったのでわが家の封建的なところが改善されて来たので、今度は近所のおたくを少しでも改善しようというのがきっかけで五、六年前婦人会の役員を引き受けて教養部をやり、文集を作ったり、講習会を開いたりしたのですが、なかなか協力は得られなかったのです。ところが、私の子供が一年生になるときに同級生のお母さん四人が集まってグループを作ろうと立ち上りました。そして、私は子供好きですし時間があるので親が田圃に出ている近所の子供の勉強を見てやったり、うちで遊ばしてやったのです。こうしたことが、そのお母さんたちの感謝となり、更にその御主人の感謝となりました。それがきっかけで男子の協力が得られ、現在私達のグループは十四人となり、いろいろと活動出来るようになりました。

渡辺　子供の面倒を見て上げたというそのプラスのところが男の人の目に映ったのですね。自分のうちにプラスになるようなものを持ち帰ってくるとうちの人たちが少しづつでも協力的な態度になっていくという傾向はありませんか。

山田　私たち若い女性が出歩くと、あの人はよく出歩くあれではお嫁にいけないなどと、男の人が言うのです。うちでもお嫁いいかげんにやめておけやと父たちが言うので私たちは出っ放しだけでなく、クラブで学んで来た技術的な面や、料理の講習で得た知識をうちで生かし、家庭の人たちを驚ばして上げました。私たちはこれだけ出てこれだけやっているということは言わないが、私たちの実績で示すわけです。うちの人たちもクラブに出してからあれだけ違ったから、まあ嫁ぐまでは活動を続けなさいといって理解を得たわけです。

内藤はなえ　グループに圧迫があるのは、なにかやり方が悪いのではないでしょうか。

河合　部落で会合をやるときに、グループに入ってない方にも知らせましたけれども出て下さらないのです。それからお姑さんの会をやるときにもグループ員以外の方も招待しましたが、出てくれたのは一人きりでした。全部の方のご馳走を用意しておきましたから、出てくれない方にも配りましたが、私たちの誠意が認められないのです。

内藤はなえ　男の方も初めは認めないのですよ。ところが最初は失敗しても二年目には成功している。徐々に学を出しています。料理の講習会を開いてお姑さんを招待すると、喜んで来ますし、子供たちを招待するとおよばれにいくのだといってとても楽しみにしています。ライスカレーのつくり方を知っている人はライスカレーばかり何回もするのです。そうしたら私のうちはライスカレーをもう何回もしましたといって大変喜ばれました。そういうふうに右から左に富ぶことをしないと、抽象的なグループだけでは家族の人に喜ばれないと思うのです。

渡辺　生活改善的な仕事をすると、うちの中でプラスになるでしょう。そういうことから家庭の人々の理解や協力を得られたという、そういう例はありますか。皆さんここまで出ていらっしゃるからにはそういう立派な結果になっていたのだ、けれども、最初の出発には相当困難があったと思います。それをもう少し話して下さい。

内藤かづ子　男の方の協力ということが、大切だというお話がでましたが、男の方にも協力的な方非協力的な方とありまして、私どもの部落では、ただいま共同炊事を行っていますが、それも四十五戸のうち十九戸しかいたしておりません。どうして全部が入れないかというと、一つにはきちっとした設備がないため大きくやれないという悩みもありますが、一つには村の有力な男子の感情的な圧迫があるので悩んでおります。なんでもその方に話して事を運べばよいのですが、なかなかちょっとやそっとの説明では開いて頂けないものですから、まあ男の方よりも女の方に呼びかけて賛成して貰った方が早道と思うのですが、そうしますとずっかり反対の立場をとって男のくせにいろいろ悪口を言うわけです。そういう方に理解して頂くというためには、どんなふうにしたらいいかと思って、その点ずいぶん悩んでおります。まだ解決していないのです。

渡辺　そういうことの解決はどうすればよいでしょうか。長崎の城戸さんのところではむしろ男の方が積極的になられて簡易水道を引かれたのですね。

城戸　先立ったのは女なのですが、あまり熱心にやり出したので男の人が水道組合を作ろうというので、作業員に

出ましたのは男の人でした。

渡辺　やっぱり生活を豊かにしてくれるものだということがわかったのですね。水道からいろいろな生活改善が次々進められて来たのではないですか。

生活改善の問題

城戸　台所の改善をもともと話していたのですが、あまり直接関心がなかったのですが、台所に水道がひかれますと流しがなければ都合が悪くなり流しを作る。流しができたら窓がないと暗くて困る。下水も作らなければいけない明るくなったら汚ない台所をそのままにしておけなくなって、別に貯蓄して百五十軒のうち四十五軒までは台所を新しくし、窓もガラス張りにし、電気洗濯機を入れたり台所をタイル張りにしたり風呂をタイルにしたりしました。

古川　私のところも飲料水は水道を引くようになりましたし、共同炊事場を作って初めは農繁期の共同炊事だけが目的でしたが、それが公営結婚とか村祭とか各種団体グループの行事も皆これを利用してやるようになり、また、共同豚などを飼って共同炊事用に使っております。

西　私のところの部落は今まで風呂が昔の風呂で薪がたくさんいりましたが、かまどを全部改良いたし、半分の薪ですむようにしたため、薪はこびの重労働から解放されよろこんでおります。これも婦人会の共同作業で得たお金を積み立てて、幾分かの足しにしております。

お風呂も水道にしまして、お風呂場もみんなタイル張りにして、温泉にいったみたいだなといって喜んでいます。どこのうちにいってもみんな明るくなって、町のうちと変らないほど台所改善をしております。

河合　水道ができたことから、そういうような一連の流れになったのはよくわかるのですが、その場合の費用はどうなさったのですか。

西　私のところは耕作反別が部落で二千三千ほどありまして、その半分は杉苗を作っております。それが十何町あり、栽培は全部主婦の手で行われます。婦人会が二つのグループに別れ共同作業でいたします。私もここにくる前まで杉苗を作っておりました。それを植えて三年目になると売るのですが、一本二十五円になります。戦後山がみんな売山になりましたでしょう。それでたくさん売れるのです。幾らあっても足りないくらいで、その収益が大部分を占めているのです。

松井　私たちの地方金融で主婦の研究グループの方がおっしゃったのですが、台所改善を思い立ったのはよかったけれども、費用がないためなかなか出来ない。そこで親母子講を作って、月五百円づつ出し合い、一万二千円たまったらどこか一軒をやる。またそれをためてどこかの一軒をやるというようにして、今では村全体がちゃんと建て終えたとおっしゃっていましたが、そういう方法もあるのではないでしょうか。

古川　私の部落も五百円づつの積立貯金で水道が完成しましたが、五百円の貯金は今なお続けて、台所を改善したり鶏舎を作ったりいろいろと改善をしています。

田中美恵子　その五百円のうみ出し方はどこから持って来ていらっしゃるのですか。

古川　それは女の人がお魚代とかいうものをなるたけ辛抱して、そのお金を改善貯金として積立てるのです。

渡辺　これは内藤さんから異論が出そうですね。お魚代倹約して栄養はどうするのですか。

森下　私のグループでは家事労働の軽減のためには生活改善が必要である。それをするためには、お金が必要であるということから、主婦との話し合いで、燃料の節約と労働がはぶける太陽風呂の設備をとりあげ実行しました。そして、それが契機になって自家水道から台所の改善に入ったといういき方をしたのです。資金は別問題ですが、そういうやり方もあるのです。

城戸　私のところは、おさい銭貯金というのをやっています。貯金をしようというとお金がないからできないと申しますが、毎日一円づつだったらうちの神棚に上げるつもりでできないことはないだろうというので始めました。毎日集めるのは大変ですから、主婦会のときに持ち寄ることにして毎月お金を集めていたらだんだん貯金が積りました。そのくらいの金額ではもの足らなくなりまして、郵代とかいろいろなものを持ち寄りまして、金額を平均しないで五百円でも千円でもいいということにして集めています。私のところは今県道の改修をやっておりますから、女の人もほとんどその土方に出ております。一日二百円で、千円、二千円は自分の自由になるお金ができますから、そのようなものも貯金にくり入れます。そして子供の入学とか修学旅行とか、自分たちの旅行とか台所の改善等に使っております。

渡辺　いま生活改善の話が出て、水道や太陽風呂とか、施設、技術の新しいものを生活の中にとり入れると大分生活改善ができるというお話が出ましたが、先ほど石川の成さんがなによりも施設の改善が大事だということを農業技術、農業改良のところで出されたと思うのです。施設が大事だというのはどういうことなんでしょう。

厳　農村というものはとにかくうちの周りのところ、台所の薪の置場から施設をよくしなければ労働の余裕は出せっこないというのが私の考えです。

内藤はなえ　労働過重の問題から、私たちには農耕の重労働の上に、更に家に入ると台所でもう一つの過重労働が待ち構えている。疲れ切って帰るとガッチャンコ、ガッチャンコの重いポンプ、腰をかがめなければできないお炊事が待っている。お風呂に入るのにはバケツを下げていく。一つ一つが労働過重に輪をかけている。私たち生活改善のお話をいろいろ聞いていて、農業技術の向上も大切だけれども、一方、なんとかして家事労働を軽くするため水道を作りたいという気持を持ったのです。それに男の方が動かされて六十万円投じて大きなタンクを作って水道をひくことが出来ました。そして流しができて腰を曲げずに洗い物が出来る。お風呂の水汲みもらくになって、労働過重から大分解放されました。お料理法も少しは講習で習ったものをやろうという気持になっています。

伊藤　協同活動を阻むものということでお話させて頂きたいと思います。私たちは頴母子講を作りました。大変苦労致しまして、とにかくやっと作り上げ、一口が月五百円で幾口でもいいということにして三十六口、そうして二年間でとれるようにして作りました。当りますと二万円ですが、それで三つかまどを買いまして、大分普及致しました。とにかく一段落して二年間終ったわけです。その二年間もいろいろ言われたりいやな思いをしたけれどもとにかくできあがったわけです。そのあとにそれを続ける方がないのが大変残念でした。私いつも思うのですが、協同活動を阻むものはリーダーがリレーされていかないことなのです。私も二年間会長をさせて頂きましたが、家庭の事情でそんなにできませんので、次の方にお譲りするときにどなたにして頂こうかと非常に悩みました。それで私のしたことが線香花火的になってしまって、それが終るときの悲しさ、それはなさった方でなければわからないのですが。今いろいろな施設の問題とかそういうお話が出ましたが、それをとにかく続けていくにはどうしたらいいかということをご検討頂きたいと思います。

内藤はなえ　私の考えは間違いかもしれませんが、水道施設というのは何万円の費用でしょう。それを女一人でやろうと思うのは無理だと思う。一家中の協力がなければ無理だと思うのです。私の部落では、主人も子供もなにか買いたいものがあっても、今年は水道作ったからということで、来年まで延してもらい、うち中の協力で何万円かを出したのです。

渡辺　皆さんのお仕事は、水道なら水道を作りそこからだんだんと拡がって来ましたね。この事はなにか皆さんに教えているものがあると思うのですが、それはさっき蔵さんのおっしゃった合理性だと思うのです。技術とか施設というのは不合理に作ったらそのものは役に立たない。極めて合理的に作られて初めて役立っているのです。その施設なり技術なりの持つ合理性を自分の身につけていったればこそ、次の合理的なものを追求する気持になったのだと思います。よく生活改善というと物の改善ではない、心の改善だといいますが、心の切り替えというのはなかなかむずかしいので、それよりも私は合理的な施設を自分の周りに備えて、初めてその施設を使う人間、自分自身が施設、技術に合理性を教わって、自分の頭も合理的に切り替えられるのではないかと皆さんの今までのお話からそんなことを感じるのですが、その点でどうですか。

松井　たしかにその施設の合理性ということは大切だと思います。幸いに私たちは市町村合併で郡山市になりましたから苦労せずに市から水道が引けたのです。太陽温水になっておりますので栓をひねれば夏だと熱いくらいに沸いております。今でも少し燃せばいいくらいです。台所はすべて水道ですし、今までの生活を考えると夢のようですがこんなに楽だったらかまども改善しようというので、便利なことがほんとうにわかったら次々と進んでいくのだと思います。

渡辺　ところがよく私聞くのですが、改良かまどを入れて非常に火がよく燃えてご飯炊きも早くできる。ところが炊口へいつもしがみついてくべていられないので、お婆さんは改良かまどになったら鶏に餌をやれ、豚に餌をやれと言われて、合理的なものを使いながら忙しい、かえって不合理な生活をさせられているということを聞くのです。私たちは生活改善をそういうふうにしてはいけないと思うので、いまお話の技術や施設をとり入れた場合に、自分自身人間としてどういうふうに変っていっているかということをふり返って見て思いつかれることがあったらお話し願いたい。

山田　生活改善で浮いて来た時間をまたお姑さんに言われてほかの労働に費されていたら意味ない。それを自分の時間にするというのはおかしいのですが、そういうふうな時間にするとか、それを経営の改善の方に努力していく時間にするとかしていくことが大切だと思います。これだけ改善しました、改善しましたというのではなくって、余った時間をどういうふうにするかということが問題になってくると思うのです。

渡辺　大分問題がむずかしくなりましたね。余った時間をどういうふうに使うかということになったのですが、それをこき使われるところに持っていかれたのでは、せっかく農業労働の過重をそういうところで救おうとしたのが、もう一ぺん逆戻りになるのですね。逆戻りさせないための

大事な考え方は、カマド一つを改善するのも人間を大事にする生活を作るためだということですね。これが根本になくてはだめですね。それでは農業労働の問題を皮切りにしていろいろと皆さんお話合いを進めて下さったのですが、農業労働の過重、これは実は過重を自分自身で作り出していはしないかというようなことから話が進んで、言いつけられて仕事をしていると自分が自主的にあるいは積極的にその仕事に参加していないので、ただ牛、馬のように使われる労働力として労働に従事しているために、忙しさだけが骨身にこたえるということでしたね。なぜそういったこき使われる立場におかれたか、まず封建的なものが残っているので、封建的なものからくる家長の横暴にただ女は尻に敷かれてこき使われているというのが一つの原因としてあげられた。また女の人が自分の家の仕事についてなにも知っていない。技術も経営の内容も知らない。それではただこき使われる立場になるのは当然だというので農業技術のことに入っていった。農業技術ばかりでなく家庭の場合でも家族みんなそれぞれ自分の仕事を持って、自分がその仕事の主人公だという立場をとってやれば、そこに積極性も出てくるしその仕事の責任も持って、仕事をやっていけるという家事の分担、そういうところに一人一人の個人の確立が出てくる、主体性がうまれるという話が出たと思うのです。とにかくそういう奴隷労働みたいなものから抜け出すためには、自分からも農業経営に参加するものとして、その経営の内容あるいは技術に目をつけなければならない。それは一人で勉強しようとしてもなかなかできないのだというところに来た。そこでグループを作って共同学習をする。なぜ共同学習がいいかというと、みんなが問題点を出し合って話し合いができる。そういうことから共通の問題を探り出すこともできるし、そのほか自分の気づかないでいる問題点も話し合いの中でほかの人から指摘されたりして、いろいろと考えや知識を広めることができる、そうして家庭の主婦も主体性を持って積極的に農業生産に参加していく、そういうことのために共同学習も協同活動であるのと同じように、今度は積極的な農業生産への参加に、また別な協同活動が必要になってくるというところにいったはずですね。そうするとなにかそこに手足まといになる身近かな障害はないかということに話が進んで、子供の問題、嫁姑の問題、姑の無理解、夫の非協力という問題が出た。そのためのほんとうの解決にはならないけれども家の暮しの中に、協同活動や共同学習の場で身につけた具体的な生活技術を持ち帰ってくると非常に役に立つという話が出た。そこで話は生活改善の方へ進んで、技術や流散の持っている合理性ということが非常に尊いものだということが話された。

ところで、私が触れずにいたことで、皆さんも実は非常に簡単に通り抜けられて来た問題がある。それは今までのお話しの中でみなさんは非常に簡単にグループのことを話された。グループを作りました。そうして共同学習をしました。これはみんなでやったらこういういい結果が生まれましたというふうにですね。実はグループを作って協同で活動するということがこの会の大きな主題であるわけです。協同活動のためになぜそういうグループを作らなければならなかったか、それを作るのにどんなに苦労をしたか、そうしてまたそのグループを運営していくのにはどういう問題があったか、私たちがこの会議で最後に追求しなければならない正しい協同活動の問題には、今日は少しも触れなかった。そこで協同活動の母体としての組織、グループというもの、それは一体どういうものなのか、皆さんはどういう必要からそれを作ったか、またそれを作り出す要因はどういうところにあったか、そうしてグループの組織、内容はどういうのか、そんなことを明日は話して頂きたい。そうしてグループというものはどうなければならないものなのか、それはグループ自体の問題であると同時に他の団体だの集団との問題になるし、そのグループはまたうちに帰れば家族たちとの間の問題になると思うので、そういうようないろいろなことを、皆さんの協同活動をする母体集団の問題として明日は思い切り掘り下げて話して頂きたい。

質疑応答

質問　家庭内において個人の主体性の確立の可能性について――家庭の中で仕事（農業生産活動を含めて）を分担し、各自が責任をもって行おうとするときに、家族の各々の人が自由に発言をし得るようになり、お互いを一人前の人間として見ることができるようになる可能性がいま十分にあるだろうか、それを阻むものはなにもないかどうか。

城戸　家庭の中でも能力も違いますし、年令も違いますし、人間としても一人一人違いますので、私のところでは自分の好きな性のあった仕事をめいめいが選んで受持っています。雞鶏の好きな子は養鶏を初めから終いまで受け持たせました。私も農業はきらいでしたけれども、仕方なしに始めましたら、だんだんおもしろくなりまして、計画から収入まで全部責任持ってやっております。家庭内の仕事も自分たちの都合のいいようにきょうだい三人で相談してやっていますので別に困ることはないと思います。

渡辺　阻むものはない。十分に可能性がある、というお答えですね。

林　これは障害のある面から出して参りますが、先に考

えなければならないのは労働の分配、労力の分配、作業の分配は当然ですが、農業の場合所得の分配がなされていない。先ほどお母さんが財布を持つか、お父さんが財布を持つかの話し合いがされたが、息子の働き方、娘の働き方はいくらの収入になるか、どれだけ分配されているか、これは、現在大きな問題であります。現在そこまでいっておりません。財布は誰かが持つ、原始共産主義的な形でいまのところやっておる。だから娘、息子は仕事は十分やっているがなんとなく納ないという状態、これは一番先にこれから解決しなければならない問題だと思う。もう一つは作業分配のときに適切な分配がなされるかということなのです。力に応じてやっておりますが、北海道の場合一人当りの負荷力が多いから、有機的な切替えが困難になっている。

蔵　さっき長崎の方がおっしゃったように、労働力が違いますからそれをみんなが話し合ってやったらなにも問題ないと思う。私のところは一町歩の褐鶏園は主人と私、六反歩の飼料畑はおばあさんが主任です。牛四頭の餌はおじいさんが主任です。鶏と犬。豚の御飯などは坊やがやります。誰かがいなければ、そこは家族の誰かが代ってやります。それはみんな承知の上ですから、みんないっしょけんめい働いて、お参りに行きたいときにはちゃんと行けるし、こうして私が出て来るときは遠慮なしに出て来れる。主人は主人で勉強に山形でも、北海道でも行きます。それだけみんなが分担して自分の責任を果していったら、そう誰もひまがないという状態にならない。

渡辺　いま林さんは収入の合配が問題だということをおっしゃったのですが、それに関連して、田中さんは家族の中で、月給制をやっておりますね。それはどういうのですか。

田中すえ　私のうちでは四年生になる男の子、二年生の男の子に月給を出しています。それもただで月給あげるのではなく、農業労働の一員として労力を提供した場合にあげます。だからお座と玄関とお便所の掃除は二年生の子がやってくれます。もし一回でも忘れたら月給が幾し引かれますので、朝と夕方忘れずにやるのです。それで私も家事労働がはぶけて畑に出て働けるのです。それまでは中学校の一年の子供も五、六百円使っていたのですが、自分で鶏を世話をして卵のお金を貰うようになったら、そんなに使わずに独立貯金しているのです。それだけ計画性を持って来ました。みんな農業に加わって自分も働いて楽しみながらお金を得ることができるのだという気持を植えつけたいと思ってやっています。

渡辺　生産に参加するかぎり報酬があるという考えですね。田中さんの例はかならずしも解決の難題になると思わないが、手がかりだと思いますから、皆さんご参考にひとつご記憶おき願いたいと思います。家事分担が持つ問題というのは、分担は協同ということを考える一つの要素であること、そして生活改善では、それは家の切り盛りという一つの合理的な技術として考えるべきであるということ、これを私は言いたかったのです。そしてこういうものを手がかりとして私たちは家の中で家族の一人一人の確立、個人の確立もこういうことから努力をしていって、はっきりと打ち立てられるものであろう。そういうふうに考えたいのであります。

質問　お話を聞いておりますとどの方も家族が協力していると明るい話をして下さいました。でも私らの見聞きする範囲では、若い人たちは農家の出身であっても学校を卒業してからうちの仕事をしようという人はほとんどなく、農業は雇傭人でのみ営まれる傾向にあるといいます。この会議に出席していらっしゃる方の家庭ではこんなことはないでしょうか。

森下　必ずしも農業をきらうばかりではないという傾向が数年前より強くなって来ております。ですから今の御質問に対して娘さんも若い息子も村へ残るという線がかなりあります。

渡辺　雇傭労働でそういう賄いをしているのではないかという御質問ですが、今傭入れの労働をしているのは農繁期ぐらいで、年中通してやっているということはよほど大きな農家ではないでしょうか。

古川　自分でやらないととても経営できませんね。

内藤はなえ　私の娘は地方の高校を出まして現在二十二で文化服装学院で二年習って来て、帰って来てまた和裁を習いに行くことになっています。この娘は農家にお嫁にいこうと言わない。なぜかというと職時中農繁期に百姓の手伝いをするために春一週間、秋一週間、まだ小学校一年生の頃からできるだけの仕事を手伝わせ勉強は夜でもいいからと、中学卒業まで働かせました。今では水はモーターであげているし、お洗濯のひまにお掃除でもしていれば田圃に入らなくても済むようになり、農村の百姓もだんだんよくなるということを言い聞かせておりますが、従来のお百姓がただ働くだけを女のいき方とさせたので、農家を嫌います。生活が改善されてたまには美しい着物を着て遊びにいったりするような生活になれば、娘も考えが変るかもしれないと思います。

山田　私たちのグループの人は皆農家にお嫁にいきたくないというのですが、どうして農村にふみとどまって自分でそれを解決しようとしないのかと思うのです。全部が全部都会に嫁にいけるわけではないので、農村にいく人が大部分ですから、なぜ早く解決しないのかといつも言うので

す。

渡辺　農村の現況を見ると親としてかなりな不安がある実情だというのですが、そういう農村の現実の不安をいま農村をいやがっている若い人たちのために除いている努力を親たちはやっぱりしなければならないと思うのです。子供の代になったら不安な農村ではないのだ、農業経営は安定した基盤の上に成り立つのだということを皆さんでひとつ子供たちに作らせるように、今の農業経営の中でやって頂けたらと私は老婆心ながらお願いしたいと思います。そういうことになると政治の問題が出てくる。子供たちにもいろいろ政治の目を開かせなければならないと思います。

（第一日閉会）

渡辺　昨日はいろいろな問題を解決していくために非常に協同活動が役立って来たという話し合いだったのですが、その協同活動の母体といいますか、それを作り上げる組織、機能はグループという言葉で語られたのですが、そういうものが一体どうして作られたのか、それを作るのにどういう問題があったのか、その作った内容はどういうことなのか、どういう運営をすればその集団で、協同活動をするのに役立つのかという問題については昨日は触れませんでした。今日はまず、グループを作る動機の話を出して頂いて、そこにある問題を手がかりとしてだんだんと拡げていきたいと思うのです。

グループを作つた動機

田中美恵子　時間の節約ということを話し合っていた時、婦人が自転車にでも乗れたら作業をするのにも非常に時間がかからないし、町で会っても挨拶も長くならないだろう。自転車に乗れたならという意欲から自転車グループを作りました。

河合　私たちの部落は到って封建的なところで、年寄の人で養子嫁（家つき嫁）の方が三、四人いらっしゃるのです。その方たちがその部落をわがもの顔に支配し、なんでも自分の言うことが通るといういわゆるボス的な方たちなのです。その方たちのために若い人達の意見はとりあげられず、ほんとうにしいたげられていった、だから私たち若い者がひとつグループを作ってみんなの団結の力で、あの人たちにわかって貰うように勉力しましょうということからグループを作ったのです。

阪口　私の部落は戸数十二戸の小さな部落ですけれども役員の陰がとてもひどく、部落のボスになにもかも服従するよりほかなかったのです。これではいけない、平等にして貰いたいといって団結して立ち上ったのです。これがために数年の間にいろんなことがありましたが、意外な成果

をあげ、たとえ貧しくても皆の力でやればできるという部い体験をしました。こうした体験の結果、私たちの生活を合理的に改善するという目的を持った婦人会の支部活動が私たち主婦の下からの盛り上りによって組織されました。きっかけはある会合のときに、今までしいたげられていた者が喧嘩したのですが、それから村八分みたいになって、一人を除け者にしたのです。そこでみんな貧しい者だけが手をつないで立ち上ったのです。それを見て、全部がああして団結してやったらなんでもできるのだということから、私たち婦人も手をつないでやったらもっと向上できるというわけで団結したのです。まだそうしてから日が浅いので、私たちのところでは団結して明るく協力しましょうということを目標にしています。

古川　県から農村生活改善部落に指定されたのをきっかけに、今までの生活を反省し、生活改善グループを作り活動の第一歩を踏み出したのが始まりです。

渡辺　うちからのものではなく外側から、しかもそれが上からきめて、ひとつかたまってこんなことをやってみたらどうかということを言いつけられたのが動機ですか、上からのものですね。今のような形でお入りになった方ありますか。

伊藤　私のところも、やはり初めはやりなさいというような形で、パンかまどをつくりたい部落があったら助成してあげますがどうですかという呼びかけがあったのです。それで私がいくらか興味を持っていたので、皆さん貰おうではありませんかという呼びかけをし、皆の盛り上りによってやり出しました。このような形は大変天降り式というふうに形式的には見られますけれども、きっかけにするのにはいいではないかと思います。農村は自主的なもり上りということは非常に少ないと思いますので、天降りでも、それを役員さん、地区会長さんでおやり下さいというのでは盛り上りにはなりませんが、やりたい方がほんとうにいっしょうけんめいやることによって、そのものが発展もするしいつまでも長く続いていくのではないかということで私たち五、六名がほんとうにどこまでもやっていきましょうという固い団結をしてやっております。

渡辺　呼び水というわけですね、伊藤さんの場合呼び水はまだ続いているのですか。

伊藤　作る時に助成金を頂いただけで、その後の運営は全部私達がいたしております。みんなでいろいろ材料を持ちよって、そこでグループ的なものがうまれて、話し合いの上で、パンを焼くのですから自然栄養的なお話が多くなり栄養食の検討がなされる、又そうした集まりのなかで私たち母親のなやみ、楽しみが話されるというわけで自然グ

ループ活動がうまれてきたのです。

藏　私どものところでは現在の農村は非常に収入面と支出面のバランスがとれないので、これでは農村としてどうしても立ち上らなければならない。婦人の手によって少しでも立ち上りたい。また娘さんたちが農家へお嫁にいきたくないという原因もそこにありますので、婦人の手で少しでも営農改善をしたいという意味合いから、いろいろお話しし合って、その段階として野菜グループを作り、現金収入によってそれを緩和して、だんだん進んでいこうということになり、グループを作りました。

渡辺　つまりそれは自分らで現金収入を得ようという目的の人が集まったのですね。

鹿間　十二年前に嫁いだときは農家の経済状態はほとんど四、五反の農業経営で、明日の生活に追われる農家がほとんどでした。従って嫁の座は顧られず朝早くから夜になるまで、牛馬の如くに働かなければ世間からもお姑さんからもよく言われませんでした。食生活も漬物とお汁という状態で、子供の発育も悪く育児にさえ口出しできないみじめさで、全く泣くに泣けない思いでした。このような農村のあり方では進歩もなければ文化もないと常日ごろから考えまして、手近かなところと、思い切って明るい合所にすることと、食生活の合理化をお姑さんに相談したところ、今までこの通りで何百年と過して来たのだから、なにも変らせる必要ない。そんなことを考えるひまに働く方が得だ。また世間からもハイカラ嫁だと笑われるとさんざん叱られ、とりつくしまもありませんでした。これではと夫に話して夫の友人の妻たち二、三人と田圃で話し、月に二回ぐらい、夜間二、三時間のひまを貰って話し合ったらどうかということになり、お互いに夫と相談して一年後、年末でしたので、いろいろ話しながら持ち寄りのご馳走で忘年会をしました。みんな子供たちのような喜び方で、この集まりが嬉嬉なるにつれて友情感が深まり、小さいことでも打ちあけて話し合うようになりました。お姑さんたちもこのごろにこにこ働くし気質もはっきりしたと喜び、最近では部落全体の婦妻会が結成されました。

阪口　私たち青年団の場合ですと形式的には、組織が初めからあったのですが、それが団結したグループとして成長したのは、一向に団員がふえないので、なんとか女子の団員をふやそうとしたことからでした。入りたがらない人に理由を聞ねたら青年団自体に魅力がないというので、そういうことから話し合って、外に呼びかけるよりもまず私たち自身が青年団の内容をよくしましょう。という私たちの盛り上りの力が団結になったのです。その結果五人の新入団員を迎えることになりました。

渡辺　グループに目的が出ていれば、その目的を目ざして、自分もそういうことをやりたいという気持を持っている人、同じ目的を持った人ならきっと入って来ますね。

目的意識の問題

松井　青年団は、今までただ単なる娯楽団体だったのです。山間部になるとそれが唯一の集会場所になってそこに入るのですが、近郊都市になると青年団よりもほかに求めることが多いのです。

渡辺　自分の目的を満たすものがほかにあると、青年団の目的は稀薄になるのですね。

地域の婦人会の目的ははっきりしているのですか、どうですか。

内藤かづ子　婦人の幸福のためにということで、範囲が非常に広いのです。

渡辺　目的はあれもこれもたくさんありますが、それでは非常に漠としてなかなか掴まえどころがないと思いますが、そういう漠とした目的でひろく大ぜい集まった方がよいか、それともっと狭い一つの目的でなにかこのことだけやろうといって集まった方がいいか、その辺のところ、皆さんのご経験でどうですか。協同活動のための土台になる組織の問題ですね。

森下　これは私の体験といいますより会の体験ですが、農繁託児所を作り、それが保育園に発展するまでの過程なのですが、そのグループは農繁期に全く子供を放っておくのですから、これをなんとかしたいという願いを月一回出す部落の機関新聞に出した。まあ頼まれて出したわけなのですが、その呼びかけに対して婦人会の幹部の人が非常にいいことだ、われわれもそれを願っているけれども言い出す機会がなかったのだといって相談に来た。それではわれわれでなんとかしょうではないかといった話し合いが四、五人でできた。そうするとその人々がそれぞれの小字に帰って有志の人に話す、ということで盛り上って十数のグループというところまでいき、母親の会になった。もちろんその人たちは全部婦人会員ではありますが、それがきっかけになったのです。

渡辺　つまり切実な要求があったのですね。

内藤はなえ　私の方は五反百姓を女手でやっております上に、四ヵ月間も雪に閉されておりますので働く期間も非常に短いため、朝から晩まで働らいても結局一年の収入は少なく肥料代を引きますと残りがないという字もあるのです。このままではいつ立ち上れるかわからないと思い、これは新しい技術を習ったらもう少し時間も出来るし、収入も上るのではないかという気持が皆に起り始めたのでし

た。ちょうどその時員の共同退治の方法を指導に農業改良普及員の方がみえましたので、いろいろ農業方面のお話を聞きました。そして私たちなんとかお金を儲けたいが儲ける方法を教えて下さいということを話したのです。そのあとになって何月何日にお話に行きたいが皆さん寄って下さるかという知らせを受けたので早速皆さんにお伝えすると、ぜひ来て下さいという勧誘もなしに、ぱっと集まりました。こうしたことが動機で私たちのグループ活動が始まったわけです。

渡辺　そうすると技術を習いたい、もっとお金をほしいという要求が自分らの胸にあって、それがたまたまあるきっかけで話し合いの場が作られ、それをみんながさらけ出して話し合いしたらそこに共通の要求があることがわかったということですね。話し合いでみんながなにを欲しがっているか、なにを望んでいるかということをさらけ出すことは非常に大事なことですね。皆さん組織を作る前にどの程度に話し合いなどをされておりますか。

田中美恵子　私たちは集りを毎月やっておりますが、ただのお話し合いだけでしたらなかなか出席しないので、頼母子講を織り込んで来た者だけが花札をひく、それが楽しみと申しますとおかしいのですが、一口五十円のものにしたり百円のものにしたりして、それに魅力があるので皆さんお見えになって、つどいが全部揃うので毎月それを欠さずやっております。一つの楽しみで皆さんと話し合いを進めているわけです。

田中すえ　私のところは青森のリンゴ地帯ですが、昭和二十二年からリンゴの価格が上って、大変に収入が多くなったのです。それでお金を無駄作に使うようになって、子供たちも無駄づかいが多くて大変困ったのです。ところが二十三年に非常にリンゴがたくさん実ったら急に価格が下ってしまい、そのうえ翌年は全然花芽がつかないのです。ですから全然収入がなかったのです。それでも今までの習慣が抜けきれないで、春のうちに肥料、農薬、リンゴの袋などが借金になって、秋になるとそれに全部吸い上げられてしまう。それが三年ぐらい続きました。納税のことなども主婦はなんとも思わないでただ働いていたのですが、督促の赤紙がくるのでびっくりして、うちでどれくらい税金納めるのですかということで、初めてみんなで私たちはどうしていけばいいのかと話し合って、共同購入から納税貯蓄組合を作りましょう、生活を高めることを考えましょうといって共同購入を始めました。一年間にはお金がどれくらいいるかということをみんなで真剣に考え出したら、主人たちがそれに動かされて、農薬も全部共同購入でやるようになりました。それから家計簿の記録が始まったのです。

渡辺　やはりそれも非常に切実な問題に直面したわけですね。みんなが共同でそのことを考えておられて、その仲間ができたというわけですね。ぼやっと集まるより目的が具体的にはっきりしている方が集まりやすいということになりますか、皆さんのご経験でどうですか。

田中すえ　目的のはっきりしている人だけでやらないと、やっぱり話し合いがまとまらないと思うのです。

渡辺　そうすると皆さんのグループは別に地域の婦人会なら婦人会にお入りになっていて、そのほかに同じ目的を持った人が婦人会員でありながら別なグループを皆さんの周辺でお作りになるわけですか。婦人会というような地域全体の会合、そういう集団とみんなが同じ目的で集まったグループとの仕事の内容などを比べてみると、どっちが自分らのためになる仕事になっているか、どちらが役立っているか。

一同　それはグループ活動ですね。

渡辺　そうすると婦人会の方の仕事は役に立たないのですか。

藏　小さいグループ活動の方が実際に即しているけれども会長は全体の中で、グループが活躍していくらをまとめて、それが婦人会活動として盛り上っていって円満にいくのではないでしょうか。

内藤はなえ　ご自身が会長さんの場合にはそれでいいのですね。幹部の方は両方出るけれどもグループの人は両方に出るのは忙しいのでなかなか出たがりません。それで私たち会合から帰ってからグループの人にお話しして時間の節減を計るわけですけれども、料理講習などグループでもやるし婦人会でもやるし、両方には出たがらないということがあります。農事の方は婦人会ではやりません。

内藤かづ子　料理講習を婦人会でやる場合は公民館から相当援助をしてくれますから、経費もそうかかりません。グループ活動でやる場合は経費などはどうしていらっしゃいますか。

内藤はなえ　私たちは農業改良普及員と生活改良普及員とお二人をお招きしておりますが、料理講習は生活改良普及員の方がやって下さいます、これは無報酬です。材料はみんなが持ち寄ってやりますから、お金は全然かかりません。秋の終りにもち米を出し合い、小豆などもみんなが何合かづつ集め、それを折々差し上げたり、野菜をおみやげに差し上げたりでお金でお礼したことはございません。

田中すえ　グループでやる料理の材料費は微々たるものですよ。日常あるものを使って保存食なんか教えて下さるので、大変忙しいときに役に立ってますから、利用できるのですね。私どものところは婦人会にいくと農家の人も商

家の人もいるので、あんな農家向きの料理なんかという場合もあるし、農家の人はあんなに材料揃えるの大変だという人もあるし、いって習って来ても実行する料理は少いのです。普及員さんが教えて下さるものは実際私たちのところにあるものを利用するので、私たちの利用できる料理の数が多いと思います。

渡辺　いま田中さんの話から重大な問題が出たと思う。初め、グループを作るときには、同じ目的をもつ同志の集まり、しかも切実な共通の要求を持った人の集まりということが考えられたのですが、今の田中さんのお話から階層が違う人が集まるとなかなかうまくいかないということを教わった。これは非常に大事なことだと思う。地域の婦人会は、会として形の上で成り立っておりながら、それが会長さんその他役員だけの婦人会になって、実際的な具体的な地についた活動があまり見られない場合が多いのに、それがグループになると実際的な仕事をしているというところに、いま田中さんのお話に現われた階層の問題がありはしないかと思うのです。田中さんは商家と農家という二つの階層でお話しになったけれども、同じように百姓の中でも大地主と小百姓では大きな違いがある。そんなことで皆さんの間に問題があったらどうぞ。

階層の問題

河合　現在の婦人会自体をもう少し反省してみたいのです。それは二十代から六十代までの年令をひっくるめて活動をやっているためになかなかうまく活動できない。自然にグループが分れるのは当然だと思うのです。もう少し年令ということを考えて頂きたいと思います。

渡辺　それでは年令の階層の問題のほかに大百姓、小百姓の階層の方はどうなっていますか、これで問題になっているところはないですか。

河合　婦人会ではないのですが、二十一戸の部落のうち私は四反で小さい方です。発動機、電動機は小さい百姓、大きい百姓で分れてやっています。機械を大きい方は二台こっちは一台で協同活動を別々に適当にやっています。

蔵　私どものところは年令に制限はしませんが、商人なら商人のグループ、俸給者なら俸給者のグループというように、グループがたくさんあって、それが全部婦人会に属したものとして、婦人会の本部からも奨励しております。そのグループがひとつも婦人会の中から離れていかないように引っ張っているのです。そうでないと村の平和にも関係すると思うのです。

婦人会の中のグループのあり方

伊藤　このごろ皆さんがおっしゃいましたようなことを耳に致しますので、こんなことを考えているのです。私たちのところもやはり農村なので、ご多分に洩れず地区婦人会というのがあり、一軒のうちから一人づつ必ず出ています。ですからとりたてて目的意識をもつよりも、地区民は一軒から誰か一人は婦人会員になるのだという軽い気持で参加していればよい。会長さん、役員の方は市長に代るような婦人会の政治をなさればいいのではないか。その中で年令階層とか、或るひとつの目的や要求によっていろいろなグループができることは、それはそれでよいことではないか。そうして、いろいろなグループの代表の方が一応婦人会の会長さんにこういうような悩みを持っているけれども、婦人会全体の政治の中でこれを生かして貰いたいと持ちこめばいいと思います。一つのグループは私たちが勝手に好きに作って、婦人の向上を考えて引っ張るとかいれられるとかいうことを考えないで、好き勝手で好き勝手なことをしていいのではないかと考えています。

松井　伊藤さんのおっしゃることわかりますけれども、地域婦人会の本質からいくと、グループ、グループで地域の問題と取り組み、それが集まったところにほんとうの意味の地域婦人会の性質があるのではないですか。今のままだったら形式的に村に組織があるだけで、地域婦人会としての本質からはずれているのではないでしょうか。

森下　伊藤さんと同意見です。私は婦人会の農業研究のグループを作りました。そのグループが小字に二つ、三つできたわけです。そうしたら婦人会長からこれは私どもの部落ですから、商家もたくさんあるので、そういうことをやってくれては困るといって来たのです。私は困ることはないはずだ。現実にここの部落で農業の勉強をしたい、お父さんと一緒に話し合える人になりたいといって盛り上っているのです。ときには生活改良普及員がくるから料理講習もやるが私たちの場合はほんとうに限定された範囲で、切実な要求だから非常に魅力がある。婦人会の料理講習は浮いてくる。しかし婦人会の仕事は農業技術とか料理講習とかいう狭い範囲だけでない。あなた方はもっと広いことをやって下さい。そのうちの一部分を私はお手伝いしているのだからほめられていいと思うのですが、といったのです。グループ活動は大きい婦人会全体の一つの分野で、婦人会を盛り立てる運動であると思います。

松井　結局婦人会の幹部の方は小さなグループごとにもう少し目をつけたらいいのですか。

森下　それも仕事の一つですよ。それによって婦人の地

位も上るのだから。

河合　私たちのグループは生活改善グループでしょう。農務課が主になっています。婦人会は社会教育課が主になるので農務課と社会教育課の縄張り争いというのがあるのです。よりよい生活を求めて生活を高めるためにやっているのですから同じことなのですが、指導する人の立場が違うため、それぞれの立場へ引きいれたがる。社会教育課は婦人会を動員して小学校を借りて合唱を拡めようとしていっしょうけんめいやっているのですが、五支部に分れている五百人の会員をひっくるめてやろうというのですから、それはとても容易ではない。ですからまず同志的な集まりの四、五人のグループで、身近かな問題から解決していくことが大切だと思うのです。

渡辺　お役所の縄張り根性というのは根強くて、なかなか渡せないのですよ。この会議は労働省の会なのですが、どの役所も婦人関係のところはみんなくればいいと思うのですがね。これを壊すのは誰か、わたくしたちなんですよ、みんなでしょう。みんなの中でそういうものを壊した話はありませんか。話し合いでもなんでもいいから。

山田　私たち青年団では、はじめは地域に住む青年は、地域向上のために努力するというので、みんな入っていたのですが、こういう青年団は行事中心的な活動をしますから、行事だけに走って一つも私たち自身の勉強にはならない。それで活動がだんだん停滞して、名前はあるけれども実際の活動をしなくなった。そのうちに合唱グループとか四Hグループ、体育グループというグループ活動がうまれて来た。そうしてそのグループが最初のうちはみな殻の中に閉じ籠って縄張り争いみたいなことをしていたのです。これではいけないというので昨年の八月に青少年団連絡協議会というものを作りまして、そこへ各グループの代表が男女各一名ずつ出るようになった。一つの地域青年活動の一環として一つ一つの団体にも同時に横の連絡をとって、地域社会のためにやっていくということを話し合っています。

渡辺　青少年連絡協議会というものにも問題はありますが、それはおいて、役所や役人に対する考え方が問題ですね。指導を役人から受けるという受身の形でなく、役人にサーヴィスをさせるという考え方で行きたいものです。だから生活改善では農林系統の改良普及事務所の人にサーヴィスして貰って自分らの勉強の手助けをして貰う。婦人学級では社会教育課の人にサーヴィスして貰って勉強を助けて貰うというふうに考えていけばいいのです。

婦人会とグループの問題が大分出ましたが、参考のために私が一つ例を申し上げてみましょう。長野県の下伊那の山の中の例ですが、四十五戸くらいの中から大体五軒に一軒くらいの生活改善を目的とした人たちのグループができた。グループの仕事が身近かな具体的なものだからとてもはげみが出てグループ活動ばかりにいっしょうけんめいになって、婦人会の仕事に出なかった。そうすると村の婦人会が白い目で見て、叛旗をひるがえしているというふうに見た。そのことでグループは非常に反省して、やはり自分らも地域婦人会の会員だ。グループは常に自分らの身近かな仕事はしているが、会のためにも尽さなければならないという反省から新しい自覚もうまれて、こんどは積極的にいろいろ婦人会の仕事をしたばかりでなく、婦人会の集まりで自分らのグループの仕事を持ち出して、私たちはこういうことをやっております。その結果こうなりましたと生活課題を婦人会の学習課題に押し出していった。それでグループの仕事が婦人会の学習の課題として村全体の婦人会員の中に流れていった、ところがそのグループは四十五戸の部落の中の十五人です。隣り近所の人たちがグループに入れてくれといい出した。しかしそのグループはそれを断わっている。グループの一人一人は四、五軒の隣保班の中心になっているものだから、自分らのグループには入れないがグループでやっていると同じことを隣保班におろしていった。こういうおもしろいやり方もあります。他団体とのあつれきばかりでなく、同じ団体内でもあつれきがあるとすれば、それを考えるのに参考になりはしないかと思うのです。目的的な組織が非常に大事だということがはっきりしましたね。なにか切実な具体的な要求を持ち合った人たちで作られた組織は、非常に強いグループという形をとる。皆さんがお持ちになっているのがそれだというわけです。それから地域婦人会というのはもっと広い目的を持っているのだから、それはまた多勢の集団として別な活動の余地があるのだという、現在の批判の多い地域婦人会に対しては、なかなか同情的な、理解の深い意見が出たと思うのです。そこで今度は皆さんのお作りになったグループの運営ですが、ここにはまず人の問題があると思うのです。そこにどういう役割を作って組織を運営されているか、組織内の人的関係について話しあってみましょう。

組織内の人間関係

河合　私はグループというものは、一定の人だけが中心になってやっては壊れるもとだと思うのです。みんなが会員でありリーダーであることが第一であると思って、一月交替で役員をきめ、二人ずつでその月のいろいろのことをやることにしました。講習の場所も回り持ちで、それに当った人が司会をし、記録をすることになっております。それで記録もみんながやれるようになりました。司会もでき

るようになったし、みんなが発言してチームワークが割合よくとれています。会計は二人きちんとした人を立てておりますが、みんなが自分の可愛いい会であるという意識を持たなければだめだと思います。

田中美恵子　河合さんのおっしゃいましたように持っていければいいのですが、それに持っていきます前にそのグループをつくるときのリーダーに対して個人的な感情で批判してはいけないと思うのです。ほんとうに私たちのグループ活動の目的を遂するためにはこの人でなければならないという人を、自分たちがお互いに話し合って選んだのですから、リーダーに対する私たちの心構えとしては、困難なことに対して援助するとも反抗することのないような雰囲気を作ることが大事だと思うのです。

渡辺　リーダーというのはどういう存在なのか。どういう形でリーダーがうまれて来ているか。ご経験から話して下さい。

松井　リーダーというのは結局よいメンバーであるということになるのではないですか。

内藤はなえ　それは一般論で日本中に通ずると思うのですけれども。私がいまリーダーをやらして頂いてますが、代ろうとしても誰もなかなかあとを受けて下さらないのです。できませんから、できませんからと私におしつけて、なにをしても決してそれに不平は持ちません。あの人に頼めば、私たちがいやだということはしないし、意見も入れてくれるということで私がやらされているのですが、それでも三年目には譲ろうと思ったのです。私は来年こそは譲ろうと、今から一年あとのことをやりかけております。会員の皆さんが自分の気持を言って下さるので、私も皆さんの意思をよく入れられるような気持でやっているつもりでおります。

蔵　私の会は三百六十二名を持っている婦人会なのです。その中にグループが十ある。その十のグループのすることはみんな自主的にやります。その中に農事グループが七つもありますが、これも全部考え方が違います。みんな自分の思い思いの活躍をしているわけです。収穫した野菜を学校給食に出している組もあるし市場に出している組もある。町の八百屋に出している組もある、いろいろありますが、私は第一線には立たないのです。皆さんにこうして下さい。ああして下さい絶対言わないのです。私は農協、改良事務所、町内会長さん、壮年団、青年団、PTAなどと全部手をとって裏面工作をしているのです。お金は婦人会として市役所からも農協からも貰ってくるから、あなた方はやって下さい。婦人会としては倉を建てるのではないから、お金を残す必要はない、あなたたちが事業さえすれば

あるだけのお金を全部あげるからというので分けます。本部の行事は全部やります。またいつも会員が子供を置いて婦人会に出てくるので、お年寄りの皆さんには協力して下さってありがとうといって敬老会もやります。

渡辺　縁起でもないことですが、もし蔵さんがなくなられたとすると、あとを継ぐ方ですね。それがこういう補助金を貰って来たりすることができないとどうなりますか。

蔵　決して自分ひとりよがりで派手にやろうと思っておりませんから、それまでに養成する工作をしております。

渡辺　養成というのは補助金を貰うことを教えることですか。よく会長さんの大きな仕事はお役所からお金を貰ってくることだ。そこに手腕があるとかないとか批評されるというので、会長さんはそういうことで御苦労なさるようですが、貰えるうちはいいとして、もしそういう予算が役所になくなったらどうなりますか。

阪口　私の小さいグループはうまくいっているのです。婦人会もリーダーを選挙するのに再選は許すが三選は許さないという規定があるのです。地方会議でもそのリーダーが問題になったが、リーダーになる人は夫の地位と財産のある人と顔のある人、紐のある人がリーダーに選ばれやすいので問題だと思っています。

助成金の問題

河合　補助金にも問題があると思います。補助金を貰うと選挙のときにも紐つきになって大きな問題になると思うのです。

渡辺　第一の問題は蔵さんのところですね、今は会長さんが立派だから実績が出ているけれども、そのうちにぼっくり死ぬとかいうときに、そのまま会までつぶれてしまうようだったら考えなければならない。

蔵　しかし農協としては婦人部に対してそれだけの予算を持ちます。

渡辺　そこに問題があるのではないですか。会は自分らの会だということを河合さんの話から出して頂いた。自分らの会だったら自分らで賄わなければならない。

城戸　私のところでは町からも農協からも貰っておりません。

渡辺　やろうといっても断わるくらいでなければその会は伸びていかない。会費はどのくらい納めていらっしゃいますか。

内藤かづ子　地域婦人会で月十円であとは公民館の補助なんです。

田中美恵子　私らのところは年に五十円です。

渡辺　それでは公民館の会といってもいいのですね。自分らの会だと思うためにはその会費をもう少し出したときにはじめて激論されるのではないですか。

田中美恵子　地域婦人会の場合、会費を十円より高くしたら出しにくいという声があるのではないですか。ほんとうに末端では年に百二十円出して、それだけのはね返りが本人にくるかどうか、そのことで不平を言うことはありませんか。

内藤かづ子　地域に住む人だからということで誰でも入れてしまうことに問題があるのではないですか。

蔵　私のところは年百円です。

河合　私のところは年五十円です。五十円出しておれば会員という名前になる。それだけでなにも役に立たない婦人会ですけれども。（笑）

渡辺　だんだん本音が出て来ましたね。どういうものですか、会費と会との関係は？

林　私の村のことを参考までにちょっと申し上げますが、組つきというところまではいきませんが、大体千三百名ぐらいの会員で、いろいろな行事をやって六万ぐらいの収益が上りました。演芸会をやって年寄りや村民を楽しませて収益をあげたことはいいのですが、農協からは二十五万円ほど補助を貰っているようです。婦人会として貰っているのですから機械的な動かされ方をして、掴んだものの実際の生活には生きてこないという状態なのです。会費を出すことには大変悩みがあるが、会合の中に入っていろいろなことを考えて、それを実践する方向にもっていったら非常に楽しかったというように、こういういいことがうまれる会合であれば、たとえ現在の農村婦人であっても喜んで出すのではないか。伊藤さんが先ほどおっしゃっておられた好きなことをやってもいいのではないかという考え方を、もう少し大胆に伸ばしていく方がほんとうの意味の婦人会活動ができるのではないかと私は考えている。しかし男も農村ではそこまでいっておりません。パチンコでは一回に千円もかけることもありますが、会費などには年間千円の金は出しません。

渡辺　グループの会費は幾らですか。

蔵　私の方は婦人会支部としての会費は出しておりますが、グループの会費はいらないのです。部落会の会費は部落々々で違います。

河合　私のところは一月三十円づつです。西さんのように杉苗の共同作業などのある場合にはいいですけれども、そういうことのないところは会費をとった方がいいと思います。私の方は共同購入をやってその利益の五分を会費の方へ出すのです。その他一戸に対し四十円のわり戻し金が

緒に並んでお膳に坐ったことはないから、お正月は一緒に並んで会をしようというので、主人と一緒に、ずいぶんお金はかかるけれども陸まじくなるのでそういう会をやっています。

渡辺　自分らがうみ出したお金を自分らが使うのはいいと思うのですが、補助金、報奨金、助成金というものを少し考えてみようではありませんか。たとえば農協の補助金にしても、本来なら農協の組合員全部に割り戻されるべき金なのですね。それを婦人部だけにやる。これはなにかというと餌ですね。しかもえびくらいの餌で大きな婦人会という大組織を釣っている、皆さんそういうことを御自覚になりませんか。

森下　自分の村の農協婦人部の場合でももちろんなにがしかの助成金が出ていると思います。そのために事実上、農協の御用機関になり、自分たちの婦人部としての使命を果すような働き、勉強というものはなにもしていない状態です。農協は婦人部に号令をかければ、購買品の成績が上る。また盆暮にはそのリベートによって云々するということで、実に情けないと思うのですが、それに対して婦人部はなにも言わないで働いています。

内藤はなえ　補助はいけないとおっしゃったのですが、私のグループは最初の年は誰も認めてくれませんでした。が二年目から社会のためになったというので、当局からも村の男の方からも認められ、全然思いもよらないときに役場から補助金を頂きました。私たちの働きが認められたということで喜んだのですが。

渡辺　自分の会なら、自分で賄わなければいけないはずですね。よそからお金を貰う場合には、お金にはなにかついているということをいつも考えていなければいけないのではないか。皆さんは馴れっこになっているかもしれないが、私たちのように都会に住む者は補助金など一銭も貰ったことがないせいか、補助金のありがたさはわかりませんが、その雰気にも当っていない。皆さんは長い間雰気に当り過ぎているから、惰性なところもあるのではないか。もし会を自分の会として、会自体で主体性を持ってやっていこうとすれば、補助金、補給金、助成金というものの裏になにがあるか、またそれをもらっている自分たちはどうか、を反省してみる必要がある。疑い深いかもしれないが一度疑ってみる必要があると思うのです。

松井　私たち青年団の場合も市から予算を頂いてやっているのですが、青年団という育成団体は当然補助を出して育成すべきだとおっしゃった方があるのですが。

渡辺　誰がどういうふうに育成するのかということを考えて下さい。誰が育成してくれるのか。そして自分は自由

あるので、そのお金をためて、お嫁に来てから夫と妻が一りにでもいいから育成されたいというのか。いまの法律では社会教育関係団体には全然補助をしないということにきまっている。それにも拘らずいろいろな形で出している。そこに問題があるのです。ほんとうに出すのなら紐のつかない金をはっきりと法律できめて出せばいい。いま青年団が町役場、県などから補助金を貰っていることは、はっきり法律に違反している。それをやっているところになにかあるのではないか。ほんとうに国民全体が国民の税金でそういうものを育てて貰おうというのなら、法律で紐のつかないお金を出していいということをはっきりさせなければならない。いま育成に名をかりてやっているということは疑いの目をもって見ていいと思うのです。またお金がなければやれないといってお金をほしがる青年団体にも問題があるのではないでしょうか。

そういうわけでひとつ会費の点を皆さんで考えてみて下さい。月十円くらいでなにがやれるかということを考えてみて下さい。自分の会だったら、ほんとうに仕事をしたい。ほんとうに仕事をするにはどれだけお金がいるか、自分らの会だったらなにか利益となってはね返りがくるような仕事を自分がすべきなのです。そうすれば自分らの会だという意識と結びついて、会費のことが生きてくると思うのです。これは今ここで結論を出さなくっていいから、考えてみて下さい。十円くらいの会費は安いからなんでもないと思うので無関心になる。それを月に百円出してみて御覧なさい。会合にも出なければ損だと思う。会長には信頼できる人を自分らで選ぼうということになる。自分らの気持は大事だというけれども、その気持を作るのはお金とか物とかということになるので、会費のことは十分反省して下さい。

次に会員の仕事は一体どういうことをすればいいのか、会における会員の仕事ということを考えてみようと思います。リーダーは先ほどちょっと触れただけで素通りしましたが、とにかくいい仕事をしている会もその仕事はリーダーの仕事として残されている。そのリーダーが姿を消したときに、その会も倒れてしまうリーダーであれば、いくらいいリーダーであっても仕方がないということが出ましたが、それでは一般の会員はどういう仕事をすればいいか。会員は自分らの自覚に立ってどういう仕事をするか、どういう協同活動をするかということに立って問題を考えてみたいと思う。どういうふうに会員は皆さんの会で動いていますか。

会員の役割意識

河合　それぞれの能力を生かし料理の好きな人は料理講習のときに世話をして下さったり、洋裁の好きな方は洋裁の方を受け持ってゆけばほんとうにおもしろくやっていけるのではないでしょうか。

内藤はなえ　私のグループは、仕事を農事研究、簿記研究、産業、衣生活改善、日常食改善、保健衛生グループに分けて、そのうち自分の入りたい部門に入り、入った人々がそれぞれのグループの運営をしていくことにしております。作業衣グループでしたら、今日は作業衣のことをやります。先生がみえましたからお寄り下さいと会員に伝える等先生をお願いすることから会員に伝え寄っていただくことまですべてお世話をしています。

城戸　私のところは地域婦人会ですが、会員ばかり多くて集まる人は少ないので困っているのです。自分たちの会だということを自覚している人が少いせいもあるのではないでしょうか。勧められて入った人が大部分なので、総会をやりましても全部集まったことがありません。

内藤はなえ　初めのうちは会に出席した人に一個二十円の景品を出したのでそれに釣られてきたのかもしれませんが一昨年からこれをやめましょうといってやめました。出席率はべつに変りません。

田中美恵子　立派な先生方の講演を持って参りますと、その講演に釣られて来ますね。

渡辺　会の中での会員のいろいろの働きぶりというのは、結局最初に出ておった会のそもそものでき上りのところから問題があるわけですね。ほんとうに目的を持って作られて、みんながその目的に共通の意欲を燃やせば、会の中で積極的に仕事をする、その場合には問題がない。だけれども問題がないといいながらも私はいろいろな例でずいぶん問題がありそうなことを見せられた。昨日の話の中で出た、家事分担と同じように、会の中でも協同活動だからといってみんながただ一つことに一緒にとりかかるのでなくって、それぞれの立場、能力、そういうものに応じて手分けをしてやるということを私はグループや婦人会のような集団の中でも要望したいのです。いまの集団には手分けをしてやるというやり方が少し足りないのではないか、なんでもいっしょくたにやろうと思うから号令をかけたり音頭とりをしなければならない。リーダーが引き摺っていく形になる。それよりも一人一人違った事情に応じて、立場々々で手分けをしてそれぞれが異った役割を持ってやるということが大事ではないか、それがいま皆さんの作っておられる団体ではちょっと欠けているのではないか、と思うのですが、どうですか。

古川　年度の初めに計画的に実行に移していくために年間の計画を立てて、その線でやって、いろいろな行事にと

りかかっておりますが、それをするには委員長とか副委員長とか、生産委員、教育委員というふうに委員を作って、それぞれの委員の方が部門部門の活動をして下さるようにしています。会員は教育委員に入りたいお方は教育委員の方に入り、生活改善の方に入りたい方はそういう委員の方に入っています。

渡辺　委員という問題が出たのですが、皆さん役員はどういうふうにおきめになりますか。ほんとうに積極的におやりになっていますか。

古川　選挙です。

内藤かづ子　最初は選挙でやっておりましたが、それでは同じ人ばかりが挙りますから、今度は一度やった人は除けておいて、残った人で選挙することに致しました。小さい部落ではやり手がないから、専門でやっております。

渡辺　小さいグループでしたら話し合いでできますね。どうですか。

河合　小さなグループですとみんなが責任を持ってそれぞれの立場、能力を生かして自分の会として運営していくが、大きな婦人会になるとなにも役を持たない方は役に立たないから、いってもしょうがないからというので意欲がなくなりますので、私のところは五百人の大きな会ですが会の支部で推薦し選挙で役員をきめています。

伊藤　地区婦人会の役員では大変悩んでおります。その選び方は各部落で委員を推薦して持ち寄り、本部で推薦員のようなものを作って選挙の形では致しますけれども。初め二、三年は選挙でうまくいったのですが、やはりそういう綺麗なことができなくなることがあると同時に、リーダーその他にも申し上げられないようなことがあり、……綺麗な選挙ができなくなりました。

渡辺　そこに問題があるのでしょう。綺麗でないところ、きたないところをあなたが出してみて下さい。

森下　それでは私の方できたない話をいたします。甚しい逆行ですが、この三月に私の県の近くであったある婦人会長の選任の問題です。先ほどの補助金の問題にも関連があるのですが、その婦人会では運営に困って、農協の婦人部と表裏一体になって、経費の大部分を公民館から援助して貰おうということになった。そうして三十三年度の役員の選出に当って婦人会長と副会長は公民館長が任命するという形になった。さらに小部落の委員は公民館長がその部落をにらみあわせて三人ずつの候補者を出して、その候補者の中から選挙しろ、そうして委員を出せという甚しい例があります。補助金がいけないとは申し上げませんが、先生がおっしゃって下さったように、これは反省するのに非常にいい例だと思います。婦人会の方も、自分たちの会長

を出すのにこんなばかなことはないといっているのです。怒っているのだけれども、どうしょうもなくってそのままやっております。

渡辺　グループなり団体を作ると、団体のエゴイズムというものが出て来る。おれたちがやっているのだからほかの団体は余計なことをするなというふうに考える。同じ婦人会の中のグループにも、自分の方さえよくなればいい、ほかの方も同じことをやっているのに協力しないでかえってそれを非難する団体エゴイズムというものがともすると言われがちな傾向にあり、それがまた河合さんがお話になった他団体との対立といいますか、あつれきといいますか、そういうものを余計激しくする。あっちも補助金貰ったから私の方も負けないで貰って来ようというような競争意識が嵩して、非常に利己的な団体意識がうまれる。これは他団体との調和をとる上に一番の障害になる問題ではないか。そこには人の間題として大きなボスがおって、自分の号令に従わないグループがうまれてくると、それを圧迫してくるという場合もありましょうが、今度は自分らで作った団体だからどんなものにも負けまいとして不当な競争をする。団体本来の目的から外れたことにまで手を出して不当な競争をして他を圧迫するところまでいく。皆さんの団体にはこの団体エゴイズムがないか反省して頂きたい。そういうことから他団体との問題も解決していく道が開けていくのではないかと思うのです。

他団体との問題

内藤はなえ　他団体とのあつれきをさっきからお聞きしても、私にはただ想像で考えるよりほか考えようがありません。私のところではグループのリーダーと婦人会、農協支部長のリーダーは別個にしております。これは話し合いのもとでやっておりますが、今日はグループの集りをやりたいが婦人部の役員会だということで、それには私たちとかち合うからそれが済んでからやりましょうということでやっておりますから、あつれきは全然感じておりません。

河合　私たちも横の連絡をとって、努めて大きな視野をもってやっております。最近は三つほどのグループが合流して中学校の運動場でバドミントンをやったのですが、お互いにグループが一つづつ協同活動をもって、それらのグループがまた協同の活動をやればいい活動ができると思うのです。

渡辺　先きを急ぎますが、皆さんの会などでは申し合わせとか規約などをお持ちですか。

河合　婦人会としては会則がありますが、グループの規則はありません。会費三十円ずつと農家記録をつけたりす

るくらいの程度です。

城戸　新生活運動について刊行物を作るという申し合わせを作りながら長い間実行されておりませんでしたが、結婚のことにつきましては私から先に実行致しました。六年前に公民館で結婚式を致しましたが、そのあとが続きませんで、一ヵ月ほど前にまた見本が出て来ました。

渡辺　ぼつぼつですね。先ほどから団体の中で会員がどういう形で団体の仕事に参加したらいいかということをお聞きして、それにはやはりなにか役割を持って仕事もそれぞれ手分けをしてやるということを申し上げたのですが、実はこの問題は正しい協同活動という今度のテーマに非常に大事なことではないかと思うのです、家事分担をすることによって家族の一人一人が個人としての確立をした例が出ましたように、家庭の中でも家族お互いがやはり個人としての確立が非常に大事なことなんだという理解に立てば、集団の中においてもまた同じことが言えるのではないか。つまり会員が一人一人個人として確立されているということ、これが私は正しい協同活動の土台になることで、それなしにはほんとうの正しい協同活動は生まれて来ないという考えを持っているのですが、そういう点でどうでしょうか。皆さんは会長さんの号令、あるいは会の申し合わせ、そういうことで会員は全然そこになんの意見や反対などを言う暇もなく、みんなを押しくるめてそっちへ引っ張り込んでいくという会の動きをしていることをご体験になったことはないでしょうか。

河合　ですからみんなが発言できる会にしなければならない。私達は一年の行事を相談するときにみんなで相談し合ってきめます。

渡辺　反対意見はどうしていらっしゃるのですか。多数決できめて、反対意見や少数意見は葬り去るのですか。民主々義の原則とかいうので多数決でやっていらっしゃいますか。

内藤かづ子　多数決です。

田中すえ　多数決ですね。

内藤かづ子　皆さんにお諮りして、こういう意見が出ましたがどうしましょうとお聞きして、その意見に賛成の方が多ければ取り上げる、あまり少ければ次の機会に。

伊藤　少数意見は宿題としてもう一度考えて来て、次の会合に持ってくる方がいいというやり方をしております。ある幹部がそれに対して一つの意見をのべた場合、他の人はよく考えずにインスピレーションで票を入れたのと、帰って考えてきめたのとでは大きな差があると思うのです。会の運営などはたしかにそうだと思うのです。

渡辺　これは山形県の非常に優秀だという部落の話ですが、ここではなんでも全員一致でなければしないというのですね。素晴しい民主々義でしょう。とにかく寄り合いで問題が出てみんなで討議をする。反対意見が出ればその人を朝までかかってもいいから説得する。夜が明けると部落全部が全員一致になっていて、決してここでやる仕事には一人の反対意見もない。全員一致がそこでは民主々義だというのですね。私はびっくりして帰って来たのですが、皆さんのところでそういうことないですか。

林　みんなが平等の立場でこれはこうなんだと討議して、賛成何割、反対何割という答が出る場合、少い方の方に納得していただく場合ですが、会長さんがどうですかというと、みんなは会長さんの意見を聞きたいというのです。そして会長さんが私はこうしたいですよというとそれでは賛成しますとなる。北海道もそんなに遅れていると思わないがそういう状態です。

渡辺　いまおっしゃったのが実情ではないですか。そこで大事なことは会員一人一人が自分というものを持っているということですね。会員一人一人が自分を確立している会でなければ、会長さんの意見にひきずられてしまう。少数意見の処理というのは、これは非常に大事だと思うのです。あなた方の意見は少数だから採用しませんといって完全に無視して捨ててしまったら、これはほんとうの民主々義でなくって、力による圧力だと思いますが、皆さんのところでは少数意見をどうしているか、これを今後の話しあいの材料にして頂きたい。

質疑応答

質問　ある決議に反対する人が少数であっても、大百姓の人が少数意見の方に加わっていると少数意見でもいれられる。それが小百姓だとあくまでも少数意見だということで否定してしまうというような、その人の持っているいろいろな背景で決定が左右されることがありませんか。

伊藤　婦人会ではそういうことが割合少いようですね。

渡辺　会長さんが少数意見に固った場合はどうですか。

藏　いかに会長であろうとそんな権限はありません。絶対にできませんね。

渡辺　私は会長さんが少数意見になるよりいまのところ会長さんはほとんど少数意見になるような場合がないということですね。これも反省になる一つの材料じゃないかと思いますがね。

林　先ほど先生が会員が団体の中で協同活動しながら、しかも実践はあくまで、個人の確立の姿で生かしていくのだ。これを思い切ってぐんと出していくと、そう言えるのではないでしょうか。

内藤はなえ　私は今年、冬のうちに、水田の共同耕作を始めることを計画したのです。田圃も借りまして、みんな喜んで賛成して下さると思っていたら、採決になったら私は仕事が多いからやめさせて頂きますというのが圧倒的に多かったのです。これは大変なことになってしまったと思い、一応やめることにしました。それから大分目が経ってから賛成して下さる方もあったので、いやな方は見ていて下さいというので頑りにかかりました。こんなわけで会長の意見必ずしもいれられるわけではないと思うのです。

質問　田中さんが若妻会を作った結果、その会に加入したお嫁さんの家庭の家族関係に及ぼした影響について、単に嫁自身が明るくなったというだけでなくって、夫、姑、子供たちにどんな影響を与えているか、そのことを具体的な例で一つ話して下さい。

田中すえ　若妻会が誕生してからまだ一年ちょっとですから、一年間は姑の意見がまちまちで、隣り村の姑さんは「若妻会作ったら嫁は親に子供を預けて会合にいくから、私の部落はとても若妻会に嫁を出すことはできない」という声が出たのです。そこで会員が皆集まって、そういう問題が隣り村に出ているが、私たちはどうしたらいいかと話しあったのですが、会合に出るのには親に子供を預かって貰わねばならないのですから、結局家庭内で日頃から姑さんと対立しないように円満にやるようになりました。それからお金の問題も入ってきました。若妻会にはお金を預かっていないお嫁さんばかりが集るのですが、家計簿をつけたらこんなにお金がかかるのだ。毎月どんなにお金がかかっているのかということをみんなで話し合っているので、お金を持っていなくてもお金を預かっている人はどんなに苦労して、一家を支えているかということを嫁たちが考えたのです。それで嫁たちが十年くらい親たちにやって貰った方が楽で（笑）一たん財布を掴んでみるとどんなに苦労があるかということをみんなが知ったわけです。家庭内はそういう点でもプラスになったと思うのですが。

質問　今の御意見ですとお嫁さんの側から折れて家庭が円満になったように伺うのですが、逆に会に出たことによってお姑さんがどういうふうに見てくれたか、目を開いてくれたかということを伺いたいのですが。

田中すえ　親たちは自分たちの嫁時代のことを考えるものですからあまり理解してくれなかったのです。嫁たち自身は親たちは若いときに苦労したから急に理解することはできないのだろう。私たちが今度姑になったらこんなやり方ではだめだということを悟ったわけです。

渡辺　田中さんがいろいろ勉強して、家の経済がどの程度か、うちの経費はどのくらいかかるのか根掘り葉掘りお

姑さんに聞くようになってから、だんだん教えるようになって、まず財布を渡すところまでいったのですね。

田中すえ　うちの経済を嫁に打ち開けるところまで来た、というわけです。

渡辺　御質問はまだあると思いますが、この辺で一ぺん今までの話し合いの締めくくりをしてみたいと思うのです。

田中さんの例があるように、今日は協同活動をする母体となる自分らの仲間の集団ということを話し合ったわけです。最初にどういう動機で仲間を持ったか、組織作りをしたかということを話して頂いた。結局そこには現実的な切実な要求のある人たちが、その要求をお互いにぶち明け合って話し合いをしたときに、その要求を満たすために共通の目的が持たれてくる。その共通の目的を果すために手を繋ごう、仲間になろうといって作られた組織というものが一番具体的な仕事、積極的な仕事ができるようだというお話が出たのです。結局組織は目的がなければならない。広い目的を持った、そうしてまた高い目的を持った婦人会のようなもの、こういうものはそれ自体高い目的、広い目的において存在理由があり、存在価値もあるわけですけれども、それがなかなか現実の生活と直接的に繋がらないために、そういう会がありながらその中へ今度はグループというようなものができていって、もっと身近かなもっと具体的な自分らの要求を満そうとする、これが今起きているいろいろなグループであるということがはっきりしました。そこで婦人会と、その中で別にうまれていったグループの繋がりをどうするかという問題が出ましたが、地域婦人会というのはとにかく広い地域で集まっているから、そこには会員全部が知っていないいろいろな問題がある。だからそういう大きな会を運営していくのには、地域の中にある婦人たちのいろいろなグループを一まとめにして、その地域の婦人の世界のいろいろな問題の切り盛りを、していくという役割が婦人会にはあるというようなお話が出ました。さらにまた自分が農業グループを作ったことで婦人会からとんでもない反対を受けたが農業グループというのは実際は婦人会の中で、大きな役割をする仕事なので、婦人会は喜んでこれを吸収すべきだということで御意見を闘わしたという体験談などがでて、グループと地域の婦人会というもののあり方について、いろいろ示唆を受けたと思うのです。ここで地域婦人会のあり方について一概に結論を出すことはいたしませんが、追求していくたくさんの問題、重大な問題を含んでいると思いますので、お帰りになって地域で皆さんと話し合う一つの材料として頂きたいと思います。とにかく協同活動をする一つの母体となる仲間、同志

は目的をはっきりさせていなければならない。その目的が現実的で切実であればあるほど、その組織は組織としてもつり合うし、仕事も積極的に進められる。その目的ははっきりと打ち出せるかといえば、それはほんとうに腹を打ち割った話し合いからうまれる。結局話し合いによる仲間作り、そこにはっきりした目的を持ち出して作られた組織というもの、これが協同活動の母体になるというところへいったようです。

それではその仲間の中で仕事をしていく上で、リーダーそれからメンバーの一人一人はどうなければならないかというところに話が入っていったときに、とにかくこの会は自分の会だというはっきりした会員意識というか、メンバー意識というようなものが大事だ。自分の会なんだというその考えを持たなければ、まず会の運営はどうにもならない。自分の会だという考えは、それは最初から目的をはっきりさせ、ほんとうの腹を打ち割った仲間によって作られしかも積極的、現実的な目的を持った会であれば、一層その会員意識は強い。そうすればその会の仕事を進めていく費用の問題についても考え方がかわってくる。そこで大分補助金や助成金の問題が出たわけですが、いずれにしても現在皆さんが自分の会に出している会費というものが、仕事の割に非常に安い。そういうところに少し会員意識を薄れさせているものがありはしないかという反省もうまれた。それから補助金、助成金が断たれたときにそのまま会は育っていけるだろうか。たとえば立派な指導者がいて、会はいい進み方をしているが、その指導者が姿を消したときにその会の仕事は指導者と一緒に消えてしまいはしないかという恐れがある。リーダーの場合は人間的な援助なんですが、お金の場合でも同じことが考えられる。

つぎに、会員がほんとうに会員意識を強めた場合、お互いが主体性を持ち、責任を持ってやれば、その仕事自体もうまくいくし、家庭内では家族の一人一人が個人として確立されていくという話が出た。

そういうやり方の集団はいま多くの会で見られるように一部の人たちのとりきめた申し合わせ、規約などに全員がただ盲目的に引き摺られていくという組織の中で、個人が埋没してしまっているという形の集団ではなくて、その会を作っている一人一人がはっきりと確立した集団になるだろう。そういうことで仕事のやり方にも協同ということをもう少し機能的に考えて、分担してやるというようなことを考えてみたら、会の中で会員一人一人の個人の確立ということができるだろう。そういう会員一人一人が確立されておる組織であってこそ、その協同活動というものは立派に成り立つだろうという問題になっていったと思うのです。

次は人間関係の問題ですが、結局は私たちが家庭生活を向上させようとして正しい協同活動をしているということも家庭内のこの人間関係をよくしようというところに重点があるはずです。そのために仲間を作って協同活動をするということは、社会における人間関係をよくすることの出発点になるわけで、終局のところいい生活、いい暮しを阻んでいるのも、家庭、社会の人間関係をよくしていきたいということに尽きるのではないかと思いますので、今までお話し合いに出たいろいろな実例から、私たちは人間関係がどうあるべきか、あるべき人間関係に進むためにはどんな手段を講じていったらいいか、そういうことを十分とまではいかなくとも、一応反省したり再認識したりする手がかり程度は十分掴みとれたと思います。皆さんがお帰りになって、もう一ぺんここでの話し合いを地域の実情に合わせてお考えになるところに、今日の話し合いのほんとうの意味が出てくると思います。

（閉　会）

第三部会　都市の社会生活をたかめるために

出席者

岩手　石井文子（民生委員）
秋田　町田倫子（主婦）
茨城　安藤貞香（主婦）
東京　加藤百合子（主婦）
神奈川　小林澄子（主婦）
富山　篠崎あや子（洋裁業）
福井　沢崎澄子（労組書記）
京都　池田光子（主婦）
大阪　村尾澄子（主婦）
兵庫　川井千鶴子（主婦）
和歌山　神戸俊子（主婦）
山口　大浜安子（主婦）
高知　入江道子（調停委員・民生委員）
大分　渡辺スミ子（会社員）
岡山　塚本明生（会社員）
リーダー　評論家　坂西志保

坂西　初めての会合ですから、どういうふうに部会を進めていくかについて皆さんにお諮りしたいと思います。皆さんがお書きになった生活文から問題を拾ってみますと、第三部会は子供の問題、すなわち「青少年の不良化防止」「保育所を作る」、「子供の図書館を作る」、「肢体の不自由な子供を世話するために母の会を作る」、「遊園地を作る」というふうな児童福祉の問題、それから非常に数は少いのですが、働く婦人がどういうふうに団結したらいいかというような、いわゆる母親の立場に立っての働く婦人の問題が取り上げられております。次に、地域社会の問題としては「街灯をつける」、「道路の修繕をする」、「水道がなくて困っていたのを引く」あるいは「公衆電話をつけてみんなで使えるようにする」、「内職グループを作る」というような問題がありました。政治活動とか平和についての問題は大きな協同活動としては出ておりませんが、これからしたいというようなお考えをもった方がいらっしゃいます。国際的な問題については、中共から引揚げてきた婦人たちが旅費がなくて帰れないというので、お金を集めて、みんなが楽しく日本の滞在を終って故郷に帰るようにしてあげたという例が二つばかり出てきました。売春問題は全くありませんでした。これは地域社会として非常に大きな問題だと思いますが、ここまでは皆さんが問題を考えていらっしゃらなかったようです。消費生活の問題、自主性の涵養ということも少し、出てきました。しかしこれを一つ一つ取り上げていったら、皆さんに一月ぐらい滞在していただかなければなりませんので、それを二日で片付けるのですから、私はこういうふうに考えるのですが、いかがでしょうか。皆さんは今まで協同活動をなさって、失敗をなさった方もあります。ここにいらっしゃる方は、大体、成功していらっしゃいますが、御自分の今までなさったことについていいことをしたと、鼻を高くしていらっしゃる方はあまりないようです。これは終生の課題であって、私たちは絶えず成長し、またいろいろの方面で失敗しながらも幾たびも試み、成功したならばもっと伸びていくというふうに、勇敢に進んでいかなければならない。このように、いろいろの問題がありますが、おやりになった方々はそれで一応御自分の回答を出していらっしゃると思います「こういう問題についてはこういう方法でよかった」「あるいはこうやったけれどもこれは失敗だった」「だからこっちの方向にいった」というふうにお考えになりましたでしょう。反省があったわけですね。ですから問題として取扱うときには、私はどういうことをして、どういうふうな経過になって、どうしたという報告はおやめになったらと思うのですが、いかがでしょうか。（「賛成」という声）経過報告はお

やめになって、むしろ問題を一つの問題、たとえば「託児所を作る」それについては協同の活動としてこういうふうな問題に自分は悩んだ。あるいはこういう問題が出たのだけれども、こういうふうに解決したというふうに、内容とやり方とを一緒にしてお話していただきたい。それからもう一つは、これは将来に関係のある問題ですが、協同活動の技術について考えてみたいと思います。今日はテクニックの時代で、オートメーションから始まって、内職に至るまで技術なのです。その技術を身につけるということが、あなたが成功するかしないかの分れ目なのです。テクニックを知っていれば大体において成功する。テクニックを知らなければ失敗する。このテクニックについてはやはり皆さんがいろいろ悩いています。たとえばボスがいて、自分たちのしょうと思ったことができなかった。そう言いてしまえば非常に簡単ですね。ボスというものはどういうものか。皆さんも大体想像できる。ですけれども、そのボスがどういうことをしたためにあなたの障害になったのが、ここが大切なのではないですか。どういう圧力を加えてきたが。あるいは、私たちが集まって相談すると、初めはみんな「はい、はい」といってついてくるような格好していながら、ほんとうに仕事をするときになるとわずかしか皆できめたようには行動しなかった。これはどこに問題があるのでしょうか。こういうふうな点から協同活動を将来続けていくためにはどういう技術がいるかということを、皆さんが御自分でなさった経験を基礎に話合う。ここにわざわざ集まっていただいた理由は、一つのものをもって上京なさった皆さんが、六十のものをもってお帰りになる。しかもその六十のものを頭の中でまとめて「協同活動するにはこういうことが一番大切なのだ」「これはこういう問題もあるけれども、こういうふうなやり方をすれば克服できる」というふうに、一つの方向づけができればと思います。

協同活動というものは、一つのことができた——たとえば遊園地を作ると、すぐに「これだけではいけない。いい図書館も作らなければ」「子供がどろんこの道を行き帰りしている、それをどういうふうにしょうか」と発展していくものだと思います。ところが「道路ができた、成功しました」といって、そこでポツンと終っている例を見ます。道路ができるようになるまでに集まって活躍した人たち、協力した人たちは、またばらばらになったのが、そういうことも考えなければならないでしょう。又、多角的な活動をする。あれもすればこれもする。突発的な問題になるとパーッと集まってくる。そしてそれが一度終ってしまうとまたパッとくもの子のように散ってしまう。そしてまた問題があると集まってくる。それがいいか悪いか、これも皆さんで検討していただきたい。私としては、もう少し協力ができ、もう少し粘りっ気のあるそして継続してもっと新しいものに発展する意欲があるものでなければ、いけないのではないかと考えます。これが私の考えなのですが、これについて、一応皆さんの御意見を伺いたいと思います。それでは大浜さん、あなたの場合は御自分が婦人会長を辞退したが押しつけられて選ばれたのですね。そこからちょっと話してください。

協同活動の盛について

大浜　婦人会長をひきうけさせられました時は、婦人会が発足してすぐであったことと、町長が私どもに全面的に反対したために大へんでした。それはなぜかというと、私が会長を引き受けましてから、町方面から、会合においても全然出席してもらえないし、また、助成金的なものも全然援助がなかったわけです。それは私が三年前の県議選挙のとき、今の町長の支持する候補者と反対の候補者の運動をしたというのが原因です。その選挙の災いが、こうまでその尾を引くものであるということをしみじみ考えさせられました。

坂西　どうですか、今の大浜さんの問題は、皆さんの経験のうちにも相当強く響いてくると思いますが……。

浜崎　私の方はまだ、私たちの会が結成されてから選挙を一回も迎えておりませんが、今年はきっとこういう問題にあうのではないかと今感じました。私たちが中国の里帰り婦人のための募金運動を始めましたときに、ものすごい圧力がありました。県内のある有力な方から「なぜ中国の婦人だけにこういう運動をやるのか。九州や北海道から帰ってきた里帰りの婦人にはしないのか。国内にだって貧乏な婦人がいる。そういう婦人が里帰りしたらどうするか」というようなことを言いふらされたのです。初め私たちの会だけでやっていたのですが、日赤とか少年団も同調し、福井県に十ある婦人団体も一緒にやり出したら、その方も何も言わなくなったわけです。その募金運動がきっかけになって、十の婦人団体が物価問題、政治問題の研究会を作ったのですが、そういう研究会を作ったのは浜崎というオッチョコチョイがやり始めたということをある雑誌に書きたてられました。ほかの婦人団体の方も、ああいうことをされてはと恐しくて研究会に入れないという問題がいま出ているのです。

村尾　今のお二人のお話を聞いて、私の体験も考え合わすのですが、私の方で三年前に市町村合併があって、河内市になったのですが、そのとき私の町は河内市に合併されますと不利な立場におかれますので、大都市の方に合併さ

れたいという反対運動を起したのです。その先頭に立った私の夫は公務員なのですが、合併に賛成の市会議員が、公務員がそういう運動をやるなら公務員法に引っかかるから首切ってやるというのです。そのときに職員組合の方が、みな結束して、課長さんに了解を得てやったのです。結局合併反対は通りませんでしたが、それで感じましたのは、そういう圧力を加えるのは議員なのですから、その人の得た票以上のものを私達が持ちましたら対抗できると思います。その力を合わせるために皆さんに理解いただくよう話し合いしましたが、そんなときに女の方が力を合わせて卒直にこの問題を考えて協同するというくせをつけていただきたいのです。

入江　高知市の婦人会のものですが、昨年、やはり里帰り婦人のためにカンパ運動をしました。市長は革新的な方ですから、そういうふうな圧力は全然ありませんでしたが、始めた時期がおそかったものですから、他の団体に呼びかける期間もなく、成果が非常に薄かったのです。そのあとで私はある人に、もっと呼びかけて運動をしたらよかったのではないかという話をしたときに、いやかえって、方々に呼びかけると一つの仕事がスムースにいかない場合があるから一つの団体でやった方がよかったのではないかというようなことを言われました。一つのことをする場合に一団体でやるということは、非常に仕事もしやすいし、効果はあるわけです。それよりはもっと広い範囲でしなければならないのではないかと思いますがそういう場合に仕事がスムースに運ばない。だからマイナスの点もあるのではないかと思いますが、それをどういうふうにしていったらいいのか、皆さんの御意見を伺いたいと思います。

坂西　いま入江さんから出た問題は非常に重大なのです。一つのことをするときに同時にわずかばかりの人が集まって話し合って完全に理解して非常に円満に事を運ぶか、それとも問題はもっと大きなところにかかっているのであるから、広く伝えてみんなでわかってもらうようにする。それについては壁にぶつかるかもしれないけれども……。この二つの分れ道ができてきますね。そこに協同活動をする限界がある。その限界というものをどうするか。これが一つの大きな問題になってくるのですが、いかがですか。その前に村尾さんが、反対する人は公選された人であるから、その反対する人に自分の思う正しいことを正しいといって、みんなで認めてもらうためには、賛成する人を次の選挙に出せばいいとおっしゃいましたね。それをやったのが川井さんなのです。あなたのところは、一人出したのですね。どういうふうにしてお出しになりましたか。

川井　反対も何もありませんのですが、市会議員の改選期に当りまして、今まで男の方ばかりだったのです。いろんな地域の問題、たとえば「公衆電話を付けてほしい」というような場合に市当局と折衝しなければならないので、市会議員さんにお願いしまして、お話をすすめていただきました。又、ゴミの問題でも市会議員さんに頼ることが大切だと思いまして、男の市会議員さんに頼っていたのです。しかし、このような問題は女の方のほうがよくわかってもらえるから、今度女の方が出たらどうかというので、ある未亡人で、社会福祉事務所のお仕事をしており、市役所の内部事情もご存じな方が、「自分が立ちましょう」今の市会は腐敗してるから、自分が正しい市会にしたいから自分がどうしても立つと、そのように御自分で決心なさってお立ちになりましたのを、みんなで協力して応援したわけです。資金も一番少い、最低の十万円という運動資金でしたが、私達は手弁当さげて、あすなろ友の会の主婦の方やそれから職業をもっているお母さん、そういう人たちが、てくてく歩いて、自転車にマイクを取り付け、山の上から浜の方まで町中歩きました。そして声をからして、私たちの代表として、今度は、ぜひ婦人議員を出してほしいということをいって歩きました。そうしてやっと当選いたしましたようなわけです。別に圧力を加えられたということはありませんでした。

坂西　第一回の地方自治団体の選挙のときには、かなりたくさんの女の方が出たのですが、だんだん落伍していきましたが、しかしこれは三年前に成功した例です。

村尾　私の方は大阪市ですが衛星都市なので、半分は農村です。そのため非常に縁故関係の票がかたまっています。婦人会で今までたびたび公明選挙の話し合いをやりましたが、そのお話にも耳を傾けようとしないほど、女の方ことにお嫁さんの場合は縛られているのです。そういう人の票をどうしてときほぐしたらいいかというのが私たちの第一番の問題です。開票のときに全部集めて十分に蒸き回さず、一つずつあけて、読み上げるものですから、ここの部落はこれだけの票が出た。これはこの部落の票だということがすぐわかります。だれ何票、だれ何票、そうして「あそこの家は入れてない」とその場でいうのです。それから投票のときにも投票場の前に関係者がいて、出てきた人に「ごくろうさんです」と頭を下げるのですね。そのあいさつの仕方で入れたか入れないかわかるというのです。（笑声）そういう選挙のやり方なので、新しい候補者は今のところ出せないような状態です。婦人会からも一人推そうという決心はしているのですが、はたして、そういう部落の中の婦人会が同調できるかどうか問題だと思っております。

入江　その開票の問題ですが、私は選挙管理委員の方との話し合いがありましたときに、そういうふうに、どこの部落の何人がどうだということがわかるということはたいへん困る。投票は狭い部分でかまわないけれども、開票するのは大きい地域でわからないようにやってほしいということを言ったことがあります。選挙管理委員の方では、そんなことはわかるはずはないし、それはみんな、今おっしゃったようにおどされているのだとおっしゃるのですが、実際これもどこまでがどうなのかはっきりつかめません。

村尾　私の方では選挙管理委員に一人欠員ができましたので、私達の信頼できる人を出しました。その方に私たちがお願いしたのは、立候補者のポスターに選挙管理委員会の大きな判を押しますが、そのときに事務員が無意識か意識してかわかりませんが推せん者の名前の上に判をおすことがある。こういう妨害めいたことはやらないように、それから開票のときは一斉にあけて、みんなの前で掻き回してくれること、それから立会演説場は公平にやってくれること、それらのことの実現に努力してくれる選挙管理委員をまず出したのです。

神戸　私たちのところでは、一部のグループの努力によりまして、子供の家とか遊び場、子供の文庫ができております。それについて、いつも問題になるのが資金です。寄付がなく私達だけでやると充分な資金の調達ができません。しかし寄付をもらうとヒモがつくというのがなやみです。ひとつの例ですが、今の市長は和歌山城を再建するのが悲願です。それを達成するためには市民一戸当り二百円見当の寄付をしなければなりません。強制寄付ではありませんが、その再建に反対の人でも子供文庫を作るために市長さんが好意的に資金を出してくださるので、人情的に反対ができないようになったとおっしゃるのです。自分の意思信念というものをまげてはならないのですが、資金がないばかりにそういうふうに人情がからみます。市長さんばかりではなくて市会議員とか有力者とかいう方からいただくものはヒモつきになってくる。その辺に大きな弱点があるのではないかと思うのです。お金さえあればそういう悩みもなくなるのですが、それにつきまして御経験がありましたら……。

小林　私の方は絶対に寄付をもらわないことにしています。やはりみんなの力で生み出さなければあとがわずらわしいと思います。グループが生れてから十年たちますが、初めは学校を借りて映画をしたり、紙芝居をして、四十万円ぐらい利益を上げました。このごろでは一年に一回開港記念日にバザーをする、それで七万円ぐらい上げてます。

協同活動をする場合の経費について

坂西　もう一つ問題が出てきましたね。神戸さんがおっしゃいましたように、援助を受ける、そうするとヒモつきといいますか、あとで困るようになる。これをどうしようかということですね。先ほども大浜さんがおっしゃいました通り、町会で市の気にいらない人が会長になったために援助してやらない、援助をもらおうと思ったら、その人を引っ込めて向うのお気に入りの人を出さなければならない。そういうことをやっている婦人会もあるのですよ。しかし大浜さんのところではそれをやらなかった、そうして成功した。神奈川の小林さんのグループでは十年間自分達で資金を集めて活動してきた。加藤さんはこういう問題についてどうお考えになりますか。

加藤　私は小林さんのなさったようなやり方がいいと思います。寄付というようなものは受けるのはきらいなたちですし、ほんとうの浄財でしたらそういうヒモつきはないわけですから、いただかない建前で努力していったらいいと思います。そして今の和歌山の方の子供の施設をつくるというようなことはたいへんいいことですから、市長さんだけがのけ者で、ほかのまわりの方が全部賛成して寄付でもなされば、市長さんもそうしてはいられなくなるのではないか。そういう形に技術的にもっていったらいいと思います。またどれだけの寄付をしてくれるのか知りませんが、市長さんの寄付をいただくということで障害が起きるならば、そのために小林さんのような活動をする方法が賢いと思います。

神戸　生活物資のあっせんとかそのほか古新聞を集団で売却したりしますが、会が生まれてからまだまもないですし、人数も少いし、とてもそんなにたくさんの金が集まらないのです。そこに弱点があると思います。

川井　私の方では市長さんでも市会議員さんでも寄付を出してもらうときには、どしどしもらいに参ります。母親大会、原水爆禁止大会の寄付をもらうときでも、堂々ともらいに参ります。婦人の市会議員さんを通じて、正しいものだから出してくださいといって、そのために恩に着るというようなことはございません。寄付してもらったから市長さんに遠慮して、こういうことはいえないというふうなことはありません。

入江　大体私たちの年代は、義理人情にしばられる慣習が残っていると思います。何かもらったから義理を感じなければいけないというふうな考え方は追々と清算していっていい時代ではないかと思います。そういう考え方で解決がつくのではないかと思うのです。

町田　私は婦人会に属しておりませんが、私の意見として申し上げてみたいと思います。何か仕事をします場合に必ず経費がついてまわりますが、そういう場合に、たとえば子供の遊園地を作りたいと考えましたならば、前もって市の社会教育施設などの予算に計上していただいて、われわれの税金でもってまかなうというふうにしたならば、交渉は長引くかもしれませんが、お金のために義理人情にからまれるというようなことはないのではないかと思います。

村尾　私達は学校のピアノを買いますのにＰＴＡと婦人会とコーラス会と一緒になって、ヒモつきのお金をいただかずに成功いたしました。けれどもその後にみんなで反省したことは、そのうち十三万円を市の予算からもらいました。ところがそれは学校の設備費二十万円の中からけずり取ったものだったのです。そのためによそに新しく二学級できた教室に入れる机を、廃校になった中学の古い机を入れてまかなったり、修繕費がなくなったりしたのです。自分達の子供の学校が必要に迫られて新しいピアノを買ったために、よそに不自由をかけたということです。また、こういうふうにお金を集めて成果は上りましたが、何か不自由なことがあるとすぐお金を集めましょう、私たちの力で作りましょうといって、自分たちのお金を出し合って改善することが最終の目的かどうか。そういうふうにしていったならば学校差がひどくなるということに気がついたのです。ＰＴＡが募金をして、自分たちの力で学校を改善するということが、目の前ではいいようであるがかえって悪い影響を与えているのではないかというようなことを感じたのです。

坂西　これについてまだ御意見がありましょうが、今町田さんから一つ非常にいい御意見が出ましたね。税金というものを正当に使えるものに対しては勇敢に要求しなさい。そして義理人情のからむようなおそれのあることは最初からしない。それにつきましてただいま村尾さんから、そうはいうけれども、やはり正当のお金で、学校をよくするためにもらったお金でも、ほかの学校の経費を削られたりするために一つのアンバランスができてくる。それから今おっしゃいました中に非常に大切なことは、地域の学校、あるいは御自分の地域社会のために一生懸命になってつらい思いをしてお金を出す、これは結構ですが、これがかえってあだをなすのではないか社会の不公平を招くのではないか。もう大体御意見が出たと思いますが……。

町田　その場合にわれわれのいわゆる世き一票が必要になって参りますね。われわれの中から信頼できる職員なり政治面にタッチする方を出して、予算を組む場合でも、よ

くバランスのとれるように監視しなければならない。それを大いに強調したいのです。

坂西　おっしゃる通りですが、そのもう一つ前に戻るのですが、先ほどから話しているように、少くとも婦人の票だけでもかたまればいいがかたまらない。義理人情、ことに大阪の村尾さんのおっしゃるように食い込めないほど緊密関係でかたまっている。

問題を一つ一つ解決してゆかないと混乱しますから、今までのところを整理してみましょう。まず、協同活動を能率的に運ぶためには資金が要ることがわかりました。その資金を獲得するためには、いろいろの御意見がありましたが、助成金をもらうということが一つ、それからもう一つは御自分で古い物を売る、あるいは映画会を開く、コーラスをやるというふうにして、努力して集める、一部の方はそれだけにたよっていて、ほかには絶対に頭を下げない方がいいということでした。それから次には、いやそうではない。税金というのは各自が町や村を、地方自治団体をよくするために払っているのだから正しいことならば予算に組んで、それを長期計画で獲得して正しく使う。その予算を組むということがもしむずかしければ、その予算を組む役につく人を自分たちの手で選ぶ大体こういうことでした。――この問題はここで切り上げまして、さきに高知の入江さんから出されました協同活動の限界について話しあってみましょう。大きく拡がっていけば大きな仕事ができる。ところがそうすることによっていろいろの意見が出てきて割れてしまう可能性もありましょう。その割れてしまうのをおそれるのだったら、むしろ小さくかたまって小さく活動して、一つ一つ片付けていく方法とどっちがいいのか。一体どこに限界があるのか。もしあるとすればその壁をどういうふうにして取り除いて、いいことであったならばどうしてみんなの協力を得るように持っていくかということをお話し合ったらどうでしょうか。

協同活動は小グループか大グループか

川井　初めは同じ気心の合った人同志が話し合って、そして、それをだんだんほかの人にも広めていくようにする。初めから大きく間口を広げて、いろんな階層の人を呼んで話し合うと割れてしまうから、小さなところからはじめて、だんだん広げていく方法がいいと思います。私は最近「勤務評定」のことで先生との話し合いのために三回ほど懇談会をもちましたが、なかなかお互い同士おなかを割って話し合えなかった。お母さん達もＰＴＡで学校に参りましたときにはほんとうのことをいえない、子供の成績のことばかりに話がいってしまい大きな教育全般のことにな

りますとどうも話が運ばないのです。勤務評定のことは大事なことですから、どうしてそういうことになってきたのか。なぜ先生があんなに反対しているのか、もっと理解しなければいけないと思って、懇談会をもつようにしました。「勤評」のことはデリケートな問題ですから、なかなか話し合いができなかったのですが、二回三回と回を重ねますうちにお互いによくわかってきて、だんだん範囲も広げていけるようになって参りました。

坂西　ほんとうに気の合う少数の人が集まってよく話し合いをして、それからだんだん広げていく。――池田さんいかがですか。あなたも小さいグループから託児所の話を始めたのでしょう。

池田　託児所とまではいえないのですが、大きい活動という面と小さい活動という面と、両方にいいところがあると思います。京都でも婦人団体協議会ができて売春問題から深夜営業反対など大きい問題と取り組んでおります。その中に私どもも小さな団体として出席しておりますが、小さい団体が大きな団体に合流して力を合わせるということは、なかなかむずかしい状態がよくあります。大きな仕事というものは必要だと思いますが、私どもの取り組みましたのは小さい仕事で、私の所属しております団体の中のほんの二人か三人で話し合って一人の赤ちゃんを預ってみた経験なのです。まだうまくいかないで足踏みをしております。ところが、いま京都に保育所を作る会ができまして、働くお母さんが中心になって働くお父さんも加えて、保育所の園長さん、保母さん、それからお役所の方も来ていただいて話し合っておりますが、それによって問題が解決されつつあります。大きい団体と小さい団体と組み合わせていくことがいいのではないかと思います。

沢崎　私の所属している団体は職業婦人の団体ですが、職業婦人の問題を一般の問題に組み入れてもらうということは無理ですので、みんなのお母さんに共通する保育所の問題、物価の問題をとりあげて、まず物価問題の一つの圧力団体になったのです。福井県のすべての婦人団体（十団体）が一緒になって物価値上げを反対したために、風呂代が一銭も上らずに済みました。そして、私たちの職場婦人グループは働く婦人の自覚を高めるということを目標として、私たちなりにやっています。そういうふうに区別していったらいいと思います。

坂西　自分たちの関心をもっている問題で、あるものは大きく一般に呼びかける、あるものは限定して小さくまとめていくということですね。問題を小さく、ほんとうに心の合う人たちが集まって協力して問題を解決していくか。これが非常に重大な問題ならばよし混乱があっても大きく呼びかけて困難を乗り越えていった方がいいか。どうでしょう。

安藤　私の経験では、やはり最初、小さいグループで気心のわかっている、趣旨の徹底している方ばかりで話し合って、そうして必要に応じてもっていくべきところへもっていくという方法がよいと思います。私達、草の実グループで肢体不自由児の会を作ろうというので、会員が自分たちの周囲でそういうお子さんをもった方達と、まず話し合ってみました。そうしましたら予期に反して「私どもの子供にはそんなのはいない」とか、しろうとで未知の人がなぜ訪ねてきたのだということでうちとけてくれません。こちらの気持が通じないで、かえって肢体不自由児をもっていらっしゃる家庭の不愉快さだけを増したという結果になって、あと味の悪い思いをして帰ったことがあります。これではいけないからといって、市役所の福祉事務所の方に相談して、福祉事務所の方が戸別訪問の形でそういう家庭を五、六軒回ってくださったのです。ところが私どもが子供さんの仕合わせのために母の会を作りたいから賛成していただきたい、御意見を聞かしていただきたいと話しかけたときに立ち上ってくださらなかったお母さんたちが、市役所の人がお話しにいったら待ってましたというふうにしてお話に乗ってきてくださった。ここに私たちの力に限界がある。ひらたくいいますと信用がなかったわけでございます。草の実会というような民間人ではできないけれども市役所の方なら何かしてくださるに違いないという全幅的な信用があったものですから、話が進んで、私たちで三年もかかったこの話が市役所に持ち込んだら、わずか三ヶ月後には結成の式までもつことができたのです。ですからある程度までは自分たちで話し合っても、それから先は、その方面の当事者といいますか当局へお願いしなければならないと思います。

渡辺　私は職業婦人なので、職場の関係から今の協同活動の限界について考えますのに、目的によって小さくまず集まるべきだと思うのです。もちろん気心の合ったものが集まるのが一番よろしいのですが、それとともに自分は何をやろうとするのか、どうしてほしいのかという目的によってみんなが集まる。たとえばお母さんでしたら託児所の問題でもいいと思いますが、同じ目的をもつ人が小さく集まって、話し合いをしたり、改善をしていくことがいいと思います。大きなグループで活動するのはもちろんいいのですが、三角形の底辺になる人たちの意思がどこまでいくかが問題だと思うのです。最初から大きくすると、やっぱり底辺になる人の意思がなかなか行き届かない場合が多い。自分たちが勉強しなくて行き届かないのではなくて、

頂点に立つ人たちが何をやろうとしているのかのみ込めない。これにはリーダーのよしあしにもよりますが、そういうことが問題になると思うので、目的を同じくする人たちの小さな集まりをまずもって、そして大きな組織の力でやった方がいい場合には、小さなグループの中の意見をまとめて、そのグループを代表する人が集まって大きな組織にもっていったらいいと思うのです。

石井　私が地方の婦人会議に出席したとき託児所の問題が出まして、働くお母さんがふえたものですから、たいへん困っていらっしゃるお話を聞きました。そのときに司会者であった県の社会教育課長さんが、これは三年前から出た問題だが一歩も前進してないとおっしゃるのです。私は民生委員をしていますが、市には保育園が十ばかりございます。市の保育園というのは幼稚園と違いまして、措置児童というものが八十パーセントなければならないのだそうです。毎年二月ごろになりますと園長さんたちが民生委員全部に集まってもらい、近所で措置児童をさがしてくれとおっしゃるわけです。私たちもたれが毎年の行事になっていて、共かせぎの家庭を訪問し、こういう設備があるのですからお入れになったらいかがですかと回るわけです。働いているお母さんがこういう方法があることを知らないでいらっしゃる。やっぱり小さいグループの活動も必要ですが撰の連絡といいますか、そういうこともあったら解決できるものもあるのではないかと思います。

浜崎　私たちも今の方がおっしゃったように、今は二千人の会員ですが、初めは小グループだったのです。そのグループではなかなか保育所の問題などは解決できないためにみんなに呼びかけて二千人の団体になったわけです。ところが大きくなると、末端の会員に会員意識をもたせるのがたいへんなので、一月に一回実態調査をすることにしました。一番初めの実態調査は労働条件、待遇、そういう問題でした。そうしたら既婚者が四十パーセントいて、一番困っている問題は子供の問題だった。託児所がほしいということで託児所設置という目標をきめて流しました。それから、いまある保育所を利用しないという点については、保育所が地域的に適当なところにないのです。

繊維産業で労働条件が悪く朝早くから夜遅くまで働くのに、保育所が朝八時に始まって五時に済むのでは困るわけです。だから利用者がない。その上、乳児を預かってくれません。そういう点で預けなかったのですが、今年ようやく市会に働きかけて乳児専門の保育所二ヵ所分の予算がとれ、五月一日から開設されます。これは小グループでできなくて団体でできたという例です。

坂西　今までの御意見をまとめますと、協同活動の限界

点というのは問題によって、また働きかける人によっても違いができてくるということですね。それから望ましいのは、小さいグループから出発してだんだんと拡大していくこと。団体が非常に大きくなったときには、その下からの盛り上りが、実際にあるかどうかを定期的に試してみる必要がある。それからこれははっきりと結論が出来ませんでしたが大きくなったものをまた分割するというような方法をとることが必要ではないか。これで大体皆さんがどこに限界があるが、またどういうふうに問題を処理したらいいかということが少しおわかりになったと思います。次に、問題が相当広く関心をもたれるべきものであったならば、世論の攻勢によって事が早く運ぶのではないかということがそれとなくいわれましたが、その世論というものはどうして作ったらいいか。協同の活動と申しますのは、海外の例を見てみますと、大体において世論の支持によって非常に大きく発達しているのです。たとえば茨城の安藤さんがお始めになった身体の不自由な子供をどういうふうにして教育するか、援助するかという問題でも、日本にとっては非常に大きな問題です。アメリカにおいてもこの世紀の初めごろまではみんなが頭を悩ました問題です。これを小さなグループで取り上げますと、精薄児とか身体の不自由な子供をもっている母親たちというものは、かえって自分の殻の中に閉じ籠りまして、いらんおせっかいしてくれるなという態度をとるのです。これが社会の一つの大きな運動となり、みんなが関心をもってこれに当るということになったら、親御さんたちはそれに喜んでついてきてくれるということになりましょう。ですから皆さん非常にいい目的をもって事を始めても、個人とか小さいグループだけではいい仕事のできない場合がありましょう。そのために世論というものをつくっていかなければならない。これは今後協同活動を始めるときに非常に大きな問題になってくるでしょう。

協同活動と世論の支持

篠崎　小さなグループで初め小さなことをやっていても正しい協同活動だったら世論が自然にわいてくると思います。

川井　私はマス・コミを利用します。というのはいつも市役所に詰めている新聞記者がいますので、何か事があったら知らせにいくことにしています。新聞社の方もどんどん書いて下さるので、皆さんに私達「あすなろ会」の活動をわかってきてもらっています。それが大きな力になっていると思います。

篠崎　あまり小さなことを新聞やラジオでにぎやかに騒

がれると、小さなことを新聞やなんか利用したと思われては困る場合もあるのではないでしょうか。よいことを自信もってやっていれば世論も自然にわいてくると思います。

坂西　たしかにそうです。しかし、それがかなり急を要する問題であって、そしてそれをすることによってたくさんの人が幸福になり、健康になりまた生活の能率を上げるということであったらマス・コミを利用して、世論を作って、それを早く仕上げるということにも賛成ではありませんか。

篠崎　大賛成です。

坂西　この問題が出たついでに、篠崎さんが反対される一つの大きな理由は、マス・コミに乗ってしまって、から回りすると宣伝屋になってしまうということを恐れていらっしゃるのでしょう。先へ先へと大きなことはパッパッとジャーナリズムに流して、実は何もしない。そういうふうになっては困るというわけですね。

篠崎　あんまりマス・コミを利用して大げさになるとあとの行動が束縛され、はたばたしいことをしないと引っ込みがつかなくなったりするのではないでしょうか。

坂西　危険であるということは十分承知していながら、なおかつ大きな仕事をするときにはマス・コミというものが、あなた方の十の力を百倍にも千倍にもしてくれるときがありますね。これは協同活動体の知性というところに落ちつくのではないでしょうか。

入江　正しく報道してくれればいいのですが、事柄によりまして、そうでない場合もあるわけです。報道されたために非常に運動が伸びないとかいうふうなこともあります。

坂西　世論の力というものは協同活動の場合これが非常に皆さんの仕事を促進する助けになることもありますが、またその行き過ぎを警戒しないと大きな障害にもなるということですね。そのほかに御意見ございますか。なければ次に助成金の問題。一部の方は助成金などは突っぱねてしまって、ささやかでもいいから独立してやるべきだというのですが。その前に陳情ということを少し皆さんで考えていただいて、さっきの独立して協同体でやっていくか、あるいは正しいことであったら公けからお金をもらってやってもいいかということをもう一度頭に浮かべながらお考えになっていただけないでしょうか。これは非常に大切なことだと思うのです。たとえば二十回知事のところへ陳情してようやく事が運んだという方もあります。これは成功した例ですが、ところがいくら陳情しても何もできなかったという例もあるのですが……。

協動活動と陳情

川井　私は成功の面も不成功の面も両方もっております。私の近所にゴミがたくさんにまって処理に困った。一人一人の力ではどうしようもないほどたくさんたまって、一人で市役所へ何度も頼みにいきましたが、処理してくれなかったのですが、協同の力で頼みにいったら、すっとうまく処理してくれました。まだほかにも成功した例がありますが、不成功に終ったのは水道料の値上げ反対の陳情でした。水道料金が値上げになっては主婦が困るが、どうして値上げしなければならないのか、反対するにしても理由を確かめなければなりませんから、そのために資料を集めたり、人に聞いたりして勉強しました。時期としては市議会の予算会議が終るまでにやってしまわなければなりませんから、反対理由を副物にして班に流しました。それだけでは足りないので、街頭に出て、通行く人に訴えて署名を集めました。それに請願書をつけて出したのですが、市役所は私たちがやっていることを薄々知っていて陳情委員会で二、三十分の間に素通りさせてしまったのです。私たちが請願書を持っていったときには、もう済んでしまったといわれて困ってしまったのです。そこで、請願は半数以上の紹介議員が集まれば通るそうですから、各議員さんに紹介議員になってほしいということを頼んで歩いたのですが、市当局の出されている予算案に真向から反対する勇気のある議員さんは少数しかございません。結局、八名ほど紹介議員になってくださり、請願書は本会議に提出しましたが再審議ということで陳情委員会に逆戻りされてしまいました。

坂西　これは陳情の失敗した例ですが、成功した例を篠崎さんどうぞ……。

篠崎　私は排水路をつくったときに陳情に成功したのですが、陳情がこんなにも有効なものだとは知りませんでした（笑声）私達の近所の道はだれかさんの鼻の下とその道だけは乾いたことがないというくらい濡れっ放しの日陰の道で月に何回か修理するのですが、雨が降るとだめになっていました。その頃すぐ近くに主婦の運動で駅が一つふえたのです。国鉄の駅でさえも婦人の力でつくれるのだから排水路一本ぐらいつけられないことないでしょう、みんなで選んだ市会議員にみんなの困っていることをとりあげてもらいましょうと、私達十人ぐらいがスコップを持ったまま市会議員のところへお願いに行きました。その前から二人か三人で陳情にいっていたのですが、力が弱かったために取り上げてくださらなかったのです。ところが、人数が十人になったらすぐ立ち上ってくださりうまくできたわけです。

町田　私達は地域のPTAの会員で街灯を付けることに成功しました。うちの方は街灯がほんの少数で非常に暗い

し、そのうえ道路が悪いものですから、どうにかしてふやさなければいけないと話していましたが、みんな自分でお金を出さないとできないというように思って、困っても積極的に働きかけなかったのです。それを七人の方々と話し合い町内で点灯必要の箇所を見て歩き、大体九ヵ所というふうにきめて会長がそれを市の土木部長さんにお話しました。その結果、九ヵ所全部には今予算がないので、できないけれども、五ヵ所ならばいいというようなお話で、五ヵ所付けていただきました。その工事費は市がもって、維持費は当分の間町内で補うという工合にして一応成功したわけです。

福嶋　そのお金の問題ですが、私達のやった排水路工事の資材はただではなかったのです。市からは人夫だけ回してもらって、資材は均等割で各戸負担になりました。

入江　私は街頭署名は大切なものと思いますし、始終利用するのですが、あまりしょっちゅうやるものですから、一般の大衆にあきられてしまい「またか」と見られるわけです。なにかこれにかわるいいものはないかと思って、ときどき話し合ったりするのですが、いい方法はありませんでしょうか、皆さんのお知恵をお借りしたいと思います。

安藤　私達のやりはじめた肢体不自由児の問題は民生部の仕事だったものですから、直接、役所の民生部の課長さんのところへお話にいきました。陳情にいったのです。最初からこういうことはやれない、やってもむだだからとなげやりにしないで勇敢に、勇気を出して陳情をやるべきだと思います。

石井　私のところでも子供の遊び場を作りましたが、そのときも市の係に陳情にいって助成金をもらいました。そのために予算が取ってあるのですから、自分たちの税金を大いに利用すべきだと思います。

加藤　私たちも陳情して助成金をもらいました。東京都では年間に託児所一ヵ所分のお金しかないのです。ところが希望者は多いのに、私たちが一番騒いだので、そのお金が私たちのところにきたのです。私たちは成功したわけですが、そこで考えましたのは陳情というものがはたしていいものかどうかということです。陳情したためにその方の予算を借なり三倍なりにしてくださるという場合もありましょうが、ワイワイいったところだけにいって、あとがそのままになってしまうのでは困る。陳情をしない方面にはお役所のお金が使われないことになりはしないか。ほんとうは陳情はなくてしかるべきものだと思うのです。私たち一個の場合には成功でしたが、大局的に見て成功といっていいかどうか、はなはだ疑問に思っています。

村尾　私もその意見です。陳情しますと自分の地域は成功しますが、ほんとうに必要であるけれども、その方法を知らない人がもらえないことがあるのです。陳情も請願もたびたびやりましたが、やり方によって失敗も成功もおこるということです。初めは地ならしの意味において自分の地区から出ている議員さんに当って、その議員さんの顔が立つようにする。そうして請願の引受け手に先にお願いして請願書を作る。それからいざというときにほんとうに市会議員とか市長に話が出るようなときにおおぜいでぱっと押しかけるとぱたっときまるのですね。それまでには市役所のこの係の人、それからこういう係の人というところへある程度石を打っておく。先にそういう地ならしができていないで最初から陳情々々と押しかけても失敗することが多いと思います。そこに陳情のテクニックもありますし、受ける方は陳情団が請願してきたらどういうふうに逃げてやろうかということを考えているので、こっちも新手を考えておかないと失敗することがあるのです。

石井　助成金をとるということは婦人会なり団体なりの横の連絡ができているとうまくいくのではないかと思います。私たちの場合助成金をもらいましたが、もし要求しないとその金は来年度の予算から減らされるという瀬戸際だったのです。助成金があるのを知らないでいらっしゃる方が多いですから、やっぱり自分の要求は一応話してみるのがいいのではないかと思います。還暦していわないでいれば、せっかく予算があるのが使われないで落んでしまうことがあるらしいのです。助成金というものは最大限に利用した方がいいと思います。

神戸　市の方で遊び場の予算というものはどういう項目で取ってあるのでしょうか。

石井　児童福祉課で取っています。福祉事務所の中の児童課にいろいろ子供のための保育所だとか遊び場だとか、そういうものの予算が全部あるわけです。

神戸　陳情はどういう形でなさいましたか。

石井　やはりお母さん方が何人かでゆきました。土地が一番問題でしたが、町の真中を流れている川にひろい川原があってよっぽど水が出なければ大丈夫なので、いつも遊び場になっているところがあります。そういう河川敷地というものは県が管理しているので県に陳情し、そこを百坪ばかり借りました。そしてなるべく川の向うへ行かないように、町に近いところに遊び場を設けたのです。

坂西　石井さんがお骨きになったのを見ますと、これがきっかけになって小さなグループがだんだん発展していって、かなり自主性のある活動がいまできるようになったわけですね。

神戸　連絡協議会というようなものを作っていますか。

石井　つくっていません。結局遊園地ができましたら今度その維持費がいるわけです。その維持費にも助成金は出ますが、その助成金ばかりをあてにしていられないので資金を作るために、二十人ばかりのお母さんが集まり、日用品の協同購入を始めたり、廃品を回収したりして資金作りをしたのですが、だんだん成績をあげてきましたものですから、遊園地の維持だけでなく、お母さん方相互の勉強のためそれからまた区域の中にある養老院と孤児院の慰問やち、いろんなことをやってきました。

坂西　いままでの報告を伺いますと、陳情する目的といいますか、理由は、少くとも地域社会の人が全面的に要求し支持してくれる問題であったために相手が卒直に受けて協力してくれたということになります。ところがそれと同じような問題をもっていっても陳情あるいは署名運動などが成功するとは限りませんでしょう。たとえばずいぶん骨を折っても世論も盛り上らなければ、また動くべき人が動いてくれないために、当然出るべきところからお金が出ないというような場合もありましょう。そういうときに村尾さんはテクニックを研究して、どうしたらうまくいくか、陳情にもいろいろのやり方があるのでそれを研究しなければいけないといわれている。それから入江さんは署名運動その他をやってみて、もう効果がないのではないか。ほかに方法があってしかるべきだというふうにお考えになった。ここに二つばかり問題がでたのですが、私がみんなに考えていただきたいのは、成功しない場合は何が障害であるか、皆さんの御発言の中に、こういうことが含まれていたのではないかというふうに私は解釈したのです。それは何か個人のためにやっているような気配が見えるときには協力が見られないというふうなことをそれとなくいわれましたでしょう。たとえば将来政治に出るための一つの工策として、みんながしてほしいというような問題をもってきてエサにするようなことがあるときには問題がうまくいかないあるいはまたそれほど政治的に野心がなくても、何か野心のあるやり方のときにはうまくいかない。また、いわゆる協同活動をやろうとして、いいとわかっていながらも壁にぶつかるというのがありましたね。今日ここにお集まりになった方々の活動は大体成功しているのですが、成功しない例もたくさん出てきています。たとえば内職しているお母さんたちが集まって、子供にからみつかれればそれだけ仕事の能率が落ちる。しかし幾ら頼んでも保育所も子供を世話するような人も出てこないということですね。こういうことを、やっぱりいろいろ困難な場合を考えて、どこにそういう問題の難点があるのか、壁があるのか、これを皆さんがここで協同の問題としてお考えになっていくこ

とが将来の協同活動を進めていくのに役に立つのではないでしょうか。たとえば渡辺さんは職業婦人として職場にいらっしゃる。そこで何か問題を解決したいと思って協同でやってもできない。何が障害になっているか。そういうことをお考えになったことはありますか。

渡辺　私の勤めているのはバス会社ですが、つい二年前までは結婚した人もお子さんのある人も勤めていてよかったわけです。それでたいへん職場結婚が多くて、職場でだんなさんと向い合っている人もいましたし、二階と下に分れているというような場合も多かったのです。車掌さんには結婚して出ている人はありませんでしたが、事務の方では既婚婦人が半分ぐらいもおりましたので、一応私たちはうまくいっていると思っていました。ところが突然会社側から希望退職を認めるという通知が何の前ぶれなしに出たわけです。会社側の言い分は、有夫者は成績が上らないというのです。お乳を与える時間はもちろん仕事をしないし、独身の人よりも成績が上らない。だから自然会社の方でも優秀な若い人たちがどしどし仕事をしてくれる方がいいから後進に道を開くという意味も含めてやめてほしいと会社の幹部が個人々々に当ったわけです。その家庭をもった人たちは、一応生活が安定していたものですから、退職金さえ上げればやめてもいいというような回答をしたらしいのですが私たち未婚のものはその話を聞いたときにガクンとしたわけです。人数も少なかったものですから、どういうふうにやっていいものかわからなかったのです。又、労働組合はどういう態度を示したかというと、幹部は会社側の意見にほぼ賛成しました。組合の幹部といいましても、会社側との折衝には女の人は一人も入っていなかったのです。組合も一応賛成だし、既婚者もやめてもいいというのだったらいいだろうということになって、私たちには何もわからないままできまってしまいました。そして私たち未婚者ばかり寄り集ったときには「いやね」「残念ね」とはいいましても、それをどこに向っていっていいものかわからなかったわけです。そうこうしてるうちに二年ほどたってしまいましたが、最近車掌とか事務所の女の人の間で生理休暇の問題が起ったわけです。以前は生理休暇はみんな取っていたのですが、だんだんみんな取らなくなってしまいました。ところが車掌の仕事はひどい激務ですから、取りたいという声が出てきました。そこで青年婦人部が集まり、みんなでとるようにきめました。一ヵ月の結果をアンケートで調査したところ、あんなにみんなが集まって大会のときには希望して、反対する人もいなかったように思えたのに、取った人はほんの一割しかなかった。私たちが保の方に聞きましたら申し出た人には与えたといっております。

それでは申し出の方法に不備な点があったのではなかろうかと考えたのですが、男の係の人に申し出るのは恥ずかしいとかでうまくいかないのではないかと思いまして、教育係といって軍隊と同じ年ぐらいの女の人で、勤務の割当てをする係の人に申し出るのだったらお互いに女だからいいだろうということになったわけです。そんなふうに方法としては悪くないと思ってやったのですが、結果としては一割にもみたなかったわけです。あとでざっくばらんに話し合える会合のときにききますと、取りたいがみんなが取らないからというのです。結局、みんなが集まったところでは非常にいい意見が出ても、個人々々の責任でいろんな画策をしなければならないときに萎縮してしまう。そういうふうな個人の弱さという面をどういうふうにして強く団結の力にもっていくことができるかということを、私はあまりほかに経験がないものですから皆さんに教えていただきたい。そういう気持でこの会議に出てきたわけです。

坂西　これはいわゆるグループの中にある壁ですね。皆さんが意見をもっている。その意見が大体一致して、まとめる段階に来る。それで今度これを行動に移そうとして準備ができる。ところが今度それを実際にやろうとするときに個々の足並みが乱れてしまう。これは皆さんの体験によくあることです。なぜそういうふうにしてみんなできめたことを自分から破るようにしたのかというと、みんながやらないからみんながやるときめていながらやめる。これは悪循環ですね。どこまでいっても解決つかない問題、こういう自分以外の、自分の中にもある壁、外にある壁、こういう経験についてどなたか御意見ございませんか。

川井　これは兵庫県の婦人会議のときに郡部の方から出たお話ですが、田舎で青年団の人達がその地方で一社きりないバス会社が値上げを発表したので婦人会と一緒に反対運動をおこし、みんなの意見が一致したのだそうですが、実行に移そうということになったら婦人会の方がしりごみしてついてきてくれなかったといって嘆いておられました。その原因は、やはり土地のボスといわれる権力者、そういう人ににらまれるのがこわいからそういうことをする勇気をもてないというふうなことをいっておられました。

坂西　正しいことであったらどこまでも押していかれるという確信をもっておられる篠崎さんどうですか。

篠崎　私も、確信をもっていたのですが、私の足並みも乱れがちになったことがあるのです。それはなぜかというと個人の利害に関する問題になると人間赤裸々になるのです。排水路を付ければ楽くのがわかり切っているのですが、いなかの人は土地がとても大事なので、一番りの地面でも取られはしないかと、はらはらしています。土地を大

幅に削らなければ排水路が付かないわけです。私は土地を持たないものですから、土地を出せばいいのにと思いますが、持っている人は切実に、ちょっとでも取られないように思うのが人情なのでしょう。そういう土地の問題とそれからお金の問題ですね。均等割になると、私は娘と二人きりの世帯ですが、千八百円かかってくるのです。社会福祉で母子世帯を保護してるのに千八百円の均等割がかかるのは不平等だと叫んだのですが、私が叫ぶからだめなのですよ。ほかの人が叫んでくれればいいのですが。それから上に付ければ上手の人は川が流れて、自分の下水がサラサラ入るものだからうれしいが、下手の人が怒り出すといった具合でそれぞれが自己を主張し出して乱れるのです。私なんか気の短かい方ですから「よしちまえ」といったことがありましたが、気の長い人が時を待って完成したのです。

坂西　この問題はいま解決するとか、大体の結論を出すというよりも、むしろ明日の会議にもかけて、いろんな角度から考えてみたいと思います。ここで一つ問題を変えまして、いま皆さんの間からグループの中にある壁、こういうふうなものを乗り越えていくために何が必要かという問題にすぐつながってきていると思うのですが。

協同活動の壁を乗り越えるには何が必要か

小林　各自一人々々が勇気をもつことはもちろんですが、話し合いの場を多くして反省していく。進むばかりではいけないと思うのです。常に反省していお互いに教養を高めていって、いい指導者があれば必ずみのると思います。

坂西　小林さんは三つの要点をおあげになった。勇気、反省、指導者。いかがですか。

安藤　男性の協力が必要だと思います。私はいつも会合に出ますたびに、主人に気がねをしますので、とっても抵抗を感じます。例会をいたします時、職業婦人の方は日曜にしてください、主婦の方は主人がいてまずいからウィーク・デーにしてくれとおっしゃる。私は職業を持っている方だの大学に行っている学生さんのために、皆さんでだんなさまを説き伏せて日曜に出ってきてくださいというのですが、説き伏せる私がその二、三日前から抵抗を感じるのです。三年、四年と続けておりますが、ほんとうに家庭内の男性の協力がうまくいかないと、何のためのグループの協同活動かと悩むことがあります。皆さん方は家庭内でどんなふうにしてご主人の協力だの支持だのを得ておられるか、体験を聞かせていただきたいと思います。

坂西　これは第一部会に属する問題なので、全体会議のときに大きく出していただきたいと思います。いまは二分これにさきましょう。というのは安藤さんにとって御主人

はたいへんな重荷らしいですから。（笑声）

村尾　私は満二十二才で結婚して、二十二年の結婚生活をおくりましたので、最初の二十二年は娘で暮したし、あとの二十二年は妻として夫に、母として子供のために捧げてきましたから、これから先の二十二年は私のためにくださいと約束したのです。それから私の夫には趣味というものがないのです。子供が結婚年令になってきて、一人々々離れていき、最後に夫婦が残ったときに、共通の話題がなかったらさびしい夫婦ではないかと考えます。社会的な問題で勉強ができて、共通な話題ができれば年寄り夫婦の話し合いの場もできるし、楽しい老後の生活ができるのではないかと思い、今から勉強しましょう。二人で一緒の話題を作りましょうというので、二人でＰＴＡに出ました。初め笑われましたが、無理に形っ張り出したのです。そうしましたら自分もおもしろくなったらしく、ある程度理解して、おまえにはほかに勉強の場がないから出てもいいということになったのでやっております。

私生活の面では障害はありませんが、今度は私の地域のことを説明しなければなりません。私の住んでおりますのは、非常に低額所得の地域で、日雇労働者がいるし、失業者がいるし、生活保護を受けている方がいるという戦災者住宅です。そうして生活にどうしてもこれだけは必要だという内職をもっていらっしゃる方が殆どです。そういう内職をもっていらっしゃる方で婦人会活動をやったときに話し合いが必要なのですが、みなさんそれぞれしてる内職が違うので忙しい時間が違うし忙しい日も違う。その人たちに集まっていただくのにどういうふうにして集まりの時間をとったらいいか。それもたびたび開けないのです。それで時間励行をやりましょうといって、きちんと時間をきめてこの問題でこれだけの時間でやりますからということを提唱してやったのですが、提唱した肝心の私が、連帯責任ですから、自分だけ仕事を仕上げないで出ていけないのです。私がいなくても副会長さんでやってくださいといってやっているのですが、私が遅れて行ったためにもう一回同じことを繰り返すというようなことがありまして、時間のむだをする。お話し合いしたいと思っても時間がなかなかとれないのですが、そういう方が一番たくさん問題をもっているのです。私たちの階層が一番問題をもっているのですが、そういう人がいえないのですね。それが一番私の大きな難です。

篠崎　グループの強というのは、やはり個人々々というものが弱いということだと思うのです。だからこそ協同すれば自分が弱まったとき人が強く意思を発揮すれば自分が弱くなったなと思って意識を高めます。だから協同活動だったら個人よりか大きな成果があげられるのではないでしょうか。

板西　ただいままでに出されたのは勇気、反省、指導者男性の協力――これについては、おやじ教育に成功なさった方がありますが、この点については、第一部会で取り上げています。勇気と反省ということは、大体個人の問題ですから皆さんがよくおわかりになっていらっしゃるだろうと思います。ここで社会生活をしている中で非常に私たちが考えなければならないこと。また今、ちょっといろいろな点で誤解されている問題は、指導者ということです。指導者が非常に有能であって強力に動いてくだされば グループの活動というものはどんどん伸びていく。それは事実ですね。ところがそれだと今度は下部組織がみんな死んでしまうおそれがありましょう。そうかといって今度は指導者がちょっと締めてかからないとばらばらになってしまって目的を達せられない。これは非常に大きな問題なのです。民主主義には指導者があってはいけないという意見もありますが、皆さんのお考えはいかがですか。それから指導者というものがあっていいものか、それとも理想としては全然なくて、みんなが協力できるというところまで私たちは向上していっているのか、こういうことをお話し合ったらどうでしょうか。大体昔にかえって何か指導者というものが育ってきていますね。それには皆さんが指導者というものはどうあるべきかという一つの姿を頭に描いてお考えになった方がいいのではないかと思うのです。

協同活動とリーダー

小林　理想とすれば指導者がない方がいいかもしれませんが、現状では指導者があった方がいいと思います。ただ長いこと一人の人がずうっと指導者を続けるということがよくないと思うのです。ですから二年とか三年で交替するというような規約でも作ればいいのだと思います。

加藤　東京の婦人会議でそのことを相談したときに、比較的小さいグループでは全然指導者はいらないと異句同音に答えています。ただお茶のお当番というような事務的なことは順ぐりに一月交替というふうにしておりますが、そのグループが大きくなり、隣りのグループと連合体になって何百人かになった場合にはたしてそれでやっていけるかどうかということを考えなければならないでしょうということになったのです。その結論は出なかったのですが、団体の屈出でをするために代表者をきめているというくらいで指導者と呼ばれているとすれば、そういう程度のものしかなかったのです。これは私の考えですが、やはり指導者はない方がいいと思います。当分は事務的なことの当番で

全然会の目的についての指導者というものはなくて、百人の団体ならば各自が百分の一の責任をもち、百分の一の内容をもつというようにしたいと思います。ただそこで私たちの会で壁になるのは、やはり指導者の集まりというような団体のものですから、われもわれもといってうまくつながりがつかないということもありがちなのです。

坂西　違った団体を代表するために対立するという意味ですか。

加藤　対立とまではいかないのですが、しっくりいくまでに時間がかかるという面があるわけです。そのために話し合いの機会が乏しいのです。

安藤　私どもの会では指導者ということについて総会で話し合ったのですが、指導者はあくまで指導者であってはならない。会の水先案内者だということになったのです。

趣旨は加藤さんが今おっしゃったことと同じで、事務的な当番をつくっております。東京と地域的な連絡の代表者をつくっておりますが、それも内容的には水先案内という気持でつくっております。

川井　私どもの意見と大体同じですが、やはり同じ人が長いことリーダーになっているのはいけない、交替制にすべきだ。それからリーダーは、会が大きくなればなるほど外部との折衝とかいろいろなことがありますので、やはり比較的家をあけて出られる人でないと困るということが条件に入ります。それからみんなを平等にまとめていく能力のある人が大切だというふうなことは出ました。

沢崎　私はリーダーが必要だと思っております。私たちの会は二千人もおりますが、一番困っていますのは意識の高い層と低い層とどうして一緒に引っぱっていくか、引っぱっていくというと語弊がありますが、同じ水準にもっていくかむずかしいわけです。だから私たちは、いかにしてリーダーを養成していくかということで苦心しています。

坂西　先ほどの問題がリーダー・シップというか指導者ということに移ったわけです。私が説明申し上げなくても必然的にリーダーというのは会長とかあるいは会の責任をもつ人というよりも、むしろあなた方が目的をもって協同の活動をするときに必要な水先案内という言葉を使ってもいいですよ。私の申していたのは、事務的に事を処理する人というよりも、むしろ問題の核心をつかんで、その原動力になるということでいっていたのです。ですから今お話に出た例は、私の考えていたこととちょっと食い違ってきたのです。私のいうのは一つのことを成し遂げるときに、そこに必ず、はっきりした意識的なものがなければならない。その意識があるから従ってやろうという意志があるでしょう。どんな障害にぶつかってもやり通さなければならないという一種の使命感、それをもった人があるのです。ところがそれが協同活動のいい意味での原動力となればいいのですが、また非常に大きな障害となるときもある。これをいっていたわけです。おわかりでしょうか。

加藤　私はさっき補足したかったのですが、会員全部で方向をきめるという意味でそれをいったわけです。

だからばらばらになりやすいという欠点があるから、話し合いをほかの場合よりはよけいにしなければいけないということで、壁の問題になってきたわけです。

坂西　問題は渡辺さんから出ているのです。バスの車掌さんの生理休暇は、どうしてもいる。これは法律によって定められているのだからと皆で相談して月に一回生理休暇とりましょうときめて、あとは各自の必要な日に取れればいいけれども、その手続は、一人々々しなければならないでしょう。それすると取れない。もしそのときだれかがほんとうに責任をもって「あなた方は一人々々でいくのはいやでしょう。だから私のところへもってきなさい。私が責任をもって処理してあげる。あるいは責任もって処理できなくても、私に話してください私が一緒にいってあげる。」というふうなことをやる人があって、これは当然取るべきもの、あなた方の健康のためにこれだけは必要なのだからということを印象づければ、その運動はうまくいくかもしれないでしょう。そういうことを私はいっているのです。

加藤　私たちの会の場合にはないというわけです。

村尾　婦人会の場合にも必ずあると思います。自然的にそういう人が出てくるのではないでしょうか。この人でしたらみんなの意見をまとめて発表してくれるという人がお話し合いのうちにいわず語らずに現れてくると思うのです。そうして自然に排された人は万難を排して皆さんで、その人がリーダーとして働けないことは何かということを考えてあげて、そこで協力して、その壁を取り除いてあげる、そうしてその人が団体のリーダーとして働けるようにしてあげたら立っていけると思います。

坂西　ところがそういうことが割合に協同活動の中でうまくいっていないのではないですか。

村尾　私たちの会では割合うまくいっています。私は個人的に経済的な理由で十分に働けないのですが、今度でも出てきますのに、支給されるのは旅費だけですから疲れて帰って来ると内職ができないからと寝台券をみんなで出してくれて羅路を取り除いてくれます。留守も子供ばかりで足りないところはだれかがしてあげますと、そういうふうにしてもらえるから安心して出られます。そうしてここで思い切り勉強して帰ったらみんなに発表しようと思っています。そういうふうにある程度いけるのではないかと思い

ます。

坂西　非常にいい例ですね。協同活動のリーダー・シップ、これを軌道に乗せて、それがまっすぐ進むように、道草を食わないでしかもやっているうちにだんだん気力を集めて、もっともっと大きな力になって、最後の決勝点に入る、それがまたそこで落ちてしまうのではなくて、もう一度新しい力になって、もっと大きなものに進んでいく、もっと困難なものにぶつかっていくということになるのですが、皆さんは大体においてリーダー・シップというか指導力というものに対して一種の偏見をもっているのではないですか。と申しますのは民主主義においてはリーダー・シップというものは要らないということを聞かされてきたのですね。ところがリーダー・シップというか、指導者という権利を与えられた人は要りませんが、どんな社会においても精神的なリーダーというものは要ると思うのです。だからその人がわざわざ前に出て声をかけなくても、その人がいるために問題が自然にかたまっていく。みんなの力がその人がいるために十二分に発揮されるというふうな場合があるのではないですか。協同活動していて、やはりそういう人を皆さんの地域社会で育てる必要があると思うのです。日本の今までのやり方はとかくそういう人の足を引っぱって、みんなでやっていればいいのだというのですが、みんなでやるのはたしかにいいのです。それは理想なのですが、その背後にある精神的な大きな力というものは、ときには一人の人、あるいは少数のグループによって促進されていく。私はあまり皆さんの活動を見学したわけではないのですが、地方から講師等によばれた時にそういうことをしょっちゅう聞かされるのです。それで指導者というかリーダー・シップという問題を取り出したわけです。この点もう少しみなさんどういうふうにお考えになるか……。

神戸　いま先生のおっしゃった通りだと思います。その場合リーダーになるものは自分の力の限界というものを自覚することですね。どうしても自意識が過剰になるおそれがあります。常に反省する。他人の意見を意見として受け入れるだけの寛容さをもったリーダーを私たちの力で育成するのが務めではないかと思います。

坂西　わかりました。リーダーのもつ第一の必要な性格というか、それは人の意見を聞くということです。非常に寛大な心の持主でなければなりませんね。

神戸　それは特に女の方には欠けているのではないかと思います。すぐに感情に走って、あの人があんなことを言ったからといって恨みをもつわけです。そういうことのないリーダーを育てていかなければならないと思います。

篠崎　そういう原動力になるような精神的な指導者ならば大いに必要だと思います。グループの中で人の意見をきく人が感情に走る人かということは協同生活をやっているうちにわかりますから自然に指導者は得られるのではないかと思います。

坂西　大体ほんとうの指導者というのは表へ出てくるような人ではないのです。何かその人がいるために、ほんとうに自分たちの企てた仕事に協力しなければいられないような気持になるというふうな人ですね。

篠崎　そういう人も見つかります。きっと、そういう活動をやっているうちに……。（笑声）いくらドングリの背比べといっても五分ばかりということはないですから、必ず六分か七分ある人もいますから、そういう精神的な人なら大いにいいと思うのです。

坂西　私は精神的と強く申しましたが、精神的という意味は、何もいつでもカスミを食って生きているという人ではないのですよ。実行力のある人でもあってほしいと思うのです。この問題は皆さんには私が考えていたほど重大ではないらしいですね。

沢崎　重大です。リーダーとしてどういうリーダーを望むといわれているのかはっきりわからなかったのです。私たちの欲しているリーダーを養成するのにはどうしたらよいかが大きな問題だと私はいいましたが、その問題に触れてくださらなかった。リーダーとしてはこんな人がよろしいというリーダーの性格だけがでましたが、リーダーの問題はグループ活動やすべての活動の大きなガンだと思いますので、これは討議する必要があるかと思います。

坂西　どうぞ討議してください。というのはどこにでもボスはいるからです。しかし、ほんとうに陰の力になり、またほんとうに精神的の支柱となる人、柱となり動かす力となる人というのはなかなか得られない。そしてそういう人を得たときに必ずその事業は篠崎さんが確信をもっておっしゃるように成功する。それではそういう人は自然に生まれてくるかというとそうではない。多くの場合一つの問題が起きて、そしてこれは解決しなければならないというときに、何かそこに自分たちがほうとうにたよりになって、中心になるというような人物が現われてくる。それをもっと大きく浮かび出させて育てていくときにあなたの事業が完成する。そしてそれがまた単に突発的な事件を解決するためでなく、もっと大きな力となって将来に伸びていく。ですから私は一つの問題を解決したときにそこで終りになったような印象を受けるグループがあると申し上げましたが、石井さんが川原を開いて遊園地を作って、それが今度は養老院の問題になり子供の福祉ということの問題に発展

していったけれども、まだたくさんの問題を含んでいて、これからそれを一つ一つ解決していこうというところへ動いていっているでしょう。そういうことのためにはやはり自分たちの間でそういう人をさがし、そして育てる。またいま村尾さんのおっしゃいましたように、その人がいろいろの問題があって十分に活躍できないならばみんなが助けて、そして十二分に指導力といいますか、その力を使っていただくようにする。またその人を助けてあげるということ自体があなた方を結束させる。

大浜　地域婦人会においては、婦人会の会長というものは一応の地位とそれから財産とか教養とかそういうものが備っていなくてはならない。一種の有閑婦人的な人が多いのですが、私の場合は全然そうではないのです。それはなぜかと申しますと、自分の家が商売をしておりますし、それからまた私には小さな子供がおりますし、どうしても会長の仕事はできないのですが、その会長にしてもらったというのはなぜかというと、外部から利用されない団体になるために自分たちが適切な会長を選ばなければならないという皆さんからの気持のもとに私が選ばれたのですが、私がいるために会がこれほど圧迫を受けるのなら私はやめた方がいいのではないかと思ったのですが、正しいことを通すためにはどうしてもあなたでなければいけないし、あなたのやったことは今まで間違いないのだから、そのためには自分たちはどんなにでも努力しょうといって、会の資金を作ることから、私がこの会議に出席することにつきましても、私の留守宅の食事の世話を交替でしているから、安心していって思う存分私たちの気持を東京で主張してくださいというお話だったのです。

坂西　大浜さんの場合は地域社会の事情から例外の人を推した。そこに問題が起きたのですが、それをうまく克服していらしたということです。いかがでしょうか、大体においてはグループ活動の障害となるものを克服するために必要なのは、先ほども出ましたように勇気、反省、男子の協力、しかしもっと大きなものはその協力の原動力となる人ということですね。指導者という名前が悪いのですが、精神的に支柱になる人、そしてまた協力の精神というものが一時的のものでなく、半永久的に育っていくものとなるためにはやはり強いしっかりした、みんなを引きずっていく力をもった人を必要とするのではないか。それが出てきた理由は、個人がいろいろ話し合って、そしてこういう問題を解決したいといって集まる。集まって意見が一致するのですが、今度はそれがもう一度個人に還元されて、個人の力でもってその壁を打ち破らなきゃならないというときにくずれてしまう。それをもう一度盛り返して個人にも力を与える。勇気を与えるという支えとなる人というか、組織の力というか、そういうものが必要になるというところへきたわけでしょう。

いろいろ問題が出来ましたが、今日これまでに出た中でこういうことが欠けているのではないか。こういうことについてもう少し時間をお使いになりたいという問題はないでしょうか。

活動と同性の励しあいについて

池田　同性同士で励まし合うということがしにくいということがあります。女性同士が足を引っぱり合って協力体制がとりにくい。それは大きい団体と団体の間でも、また婦人会のリーダーの方と小さいグループとの間の感情問題がうまくいかない場合もあります。これはどうしてなのでしょうか。

神戸　どうしたらいいかというところまで考えがまだいってないのですが、その経験がありますのでちょっと御披露します。私たちのやりましたことに地域の婦人会は最初から非協力でした。

たまたまこの間の地方会議のときにその話を出しましたところが地域の婦人会の役員が一人おりまして、あなた方がそんなにいいことをするのに資金に困っていらっしゃるのでしたら、その話をなぜ婦人会の方にもってきてくれないかという話なのです。それまではちっとも協力してくれないで、自分たちの地域を荒らされたというふうな目で見ておりましたものが、そういう公けの場所で出されたためにそんな弁解をするわけです。

私の考えでは地域の婦人会というのは都市ではうまくいっていないのではないかと思います。婦人の協同活動で成功するのはやっぱり自分の生活や生産と直接結びついた活動は成功いたしますが、ただお役所の通達事項をみんなに通達するというふうな今の地域の婦人会のやり方では古くてカビが生えているのと思います。ほかの婦人会の経験がありませんので、あるいは偏見かもわかりませんが、そういうことが、全国的にあるのではないかと思っております。

坂西　あなたの御経験によると大きな地域団体というふうなものはもう過去の遺物であってみんなが離れ離れになってしまっている。むしろ生活に結びついた小さなグループというか、大きくても小さくても、そういうものが今後伸びていくということですね。女性の協力体制というものもそういうところをねらわなければ成長しないということですね。

町田　私の方の地域は、全部公務員の宿舎ばかりの地域で国家公務員やら地方公務員の密集地帯です。私たちの場

合は一年交替の順番制ですから、どなたがやっても必ず役目が回ってくるわけです。自分の番も回ってくるものですから、自分の場合も協力していただかなければいけませんので、皆さんが協調して、どなたの場合もよくやっていける。特殊な地域であるからかもしれませんが、順番制にするということもいいことだと思います。

石井　私の場合も遊園地を作るとき、お子さんがある御家庭は必ず協力していただけると思ったのです。初めは資金も何もございません。助成金ばかりではできませんから元になる寄付を集めたわけです。そして子供のある家庭を中心に集めて参りましたが、ある家庭に行きましたところ、あそこに遊園地ができても家の子供は遊びにいきませんからというので協力してくださらない。またそんなものを金かけて作っても仕方ない。結構遊んでますよ、という家庭もありました。それから今度はその維持のために非同盟入を始めたところ地元の商人から反対があり、結局町内に売っているものは売らないという条件のもとに始めたのです。することなすこと反対は出るのですが、これは必ずいつかは、賛成してくれるという強い信念でやっていますと、結局初めに反対した方もだんだんに理解してくださいますから、その同性の足を引っぱるということはあまり気にかけないでもいいのではないかと思います。

村尾　私もそう思います。あれはアカだとかいわれてどうにも動きがとれなかったことがありますが、いわれた当座は小さくなっておりますが、その中でも賛成してくれる人もあって、その範囲がどんどん大きくなる。何べんもたたかれたりしてやっていくうちに理解してくれます。何べんもたたかれて、たたかれたときは小さくなってまたやり直す。その小さい範囲だけで片づけるよりしようがないものだと思います。

入江　高知には非常に排他的な県民性があります。私の所属は高知市の婦人会ですが、二、三年前にその中の一部の人が高知県で生まれて高知県で育って、高知県で生活してる。そういう人たちのグループを作ったのです。これは今高知市婦人会の会長というふうな人は大がい県外で育つとか、あるいは生活してきた人とか、そういう人がほとんど三年交替でやっていたので、そういう人に対する反感があったのか、そのほかいろいろ個人的な感情もあったのでしようが、全然違うものができてしまったわけです。よく高知市の婦人会は二つに割れたというふうなことをいわれますが、割れたのではなく、新しく生まれたわけです。今は婦人会だけでなくて、なんとなく右と左というのですか、すべてのものが二つに分れている。そんなものが社会にできてきているということを感ずるのです。

坂西　あなたのお考えは、これは一時的の現象であってある時期が過ぎればまた円満にいくと考えていらっしゃるのですか……。

入江　そうならなければいけないだろうと思うのですが、実際には逆の傾向が強くなっているように思われるので、そこに問題があると思うわけです。

川井　私の方にも地域婦人会が昔からあります。私達のグループが生まれましたときにはそれこそアカだとかいってたたかれて参りました。例えば原水爆禁止運動を早くから手がけているものですから――芦屋市でも原水爆禁止芦屋大会というものを今もっておりますが、これは昨年になって初めて全市一本にまとまったので、初めは私たちのあすなろ会と社会党と共産党だけで、ほかに呼びかけても地域の婦人団体は乗ってきてくれませんでした。原水爆禁止運動は大切なことだと思いますから、初めから婦人会にも呼びかけていたのですがやってくださらなかったのです。地域婦人会の方はやはり政治運動はいたしませんとはっきりおっしゃっていらっしゃいます。いま政治を抜きにして私たちの日常生活はないと思うのです。政党運動はいけないかもしれませんが、政治運動は大いにやっていいと思うのです。

坂西　いま政治運動ということをおっしゃいましたが、これは少し時間を取ってお話ししたいと思いますから、明日の部会の題目にしたいと思います。

大浜　今の女同士足を引っぱり合っているという問題、これは一つの女の狭量というか、そういうものから来ていると思うのです。幾つも団体がある場合に、片方の団体が何がいいことをしたら、それをいいと認めないで、嫉妬というか嫉妬というか、そういう見方をするのだと思います。私どもの場合、いま大きい団体というのは友の会と婦人会と白菊会（未亡人会）と三つあるのですが、私たちは友の会のほんとうにいい点というものを認めています。そうして、あなたのところのこういう点はいいから、これを婦人会にお力を貸してくださいませんかとお話したら、友の会の人も喜んで協力してくれています。料理講習、洗濯講習についても、実際に自分の体験から得たところの講習をやってくださるものですからみんなが喜んでおります。相手のよさを認めるという寛容さが必要だと思います。

坂西　大浜さんはいろいろの会を観察なさって、その番付表をこしらえていらっしゃる。これから、いい方の番付にほかの会をお職せになるそうですから、皆さんもそういう積極的な努力が必要かもしれませんね。単に足を引っぱるから、こわいから近ずくなというのでなしに、こちらからいいプログラムを作って、こういう仕事を一緒にしませ

んか。あるいはこういうことを考えたのですが、あなたの方ではどうお考えになるか。私の方ではできませんから、あなたの方でやってごらんになりませんかというふうに誘いかけるのも一つの方法でしょう。池田さんのおっしゃるように、女性は協力体制をとらずにすぐ足を引っぱるということは過ちの遺物として、新しい人たちはそんなことはいたしませんというふうな方向転換を一つやってもいいわけですね。

加藤　仲間が足を引っぱる場合や、地域のボスに邪魔される場合どうしたらいいかというので、お互いにそういう障害に負けないで正しいことを勇気をもってやっていくという、教養を高めるということをグループの人でやっていくことも根本ですが、そのほかに具体的な活動をする。例えばハエをたいじしたり水道を引いたりするということで実績をあげるということがたいへん効果があるという話が東京の会では出ました。

坂西　足を引っぱられないようにするには実績をあげて、そんなこといってもこっちはこういうりっぱな仕事をしてるといってタンカ切るわけですか。（笑声）

加藤　その度に、そういうことをしないような人間性、教養を積むということもグループの活動としてしなければならないと思います。

小林　私の方は一つの地域に四団体ありますが、それだぞれの役割を忠実に果しているので争いはありません。皆さんのお話を聞いていて不思議に感じております。ボスとかあっちこっちへ気がねしたりということはないのです。町内会は町内会、赤十字は赤十字、子供会は子供会でいろいろな役割があると思うのです。婦人会は婦人会で、はっきり自分の役割を認めて進んでいったらいいのではないかと思います。

村尾　私の方で学校のピアノを買う運動を起したときに、コーラス会の人達は、はじめ小学校のピアノはPTAで買うべきだといっていました。PTAはこの仕事をすべきである。婦人会はこの仕事をすべきであるというふうにきめてしまうのはよくないと思います。原水爆禁止の問題を持ち出したときにも、コーラス会や婦人会がそんな問題はせんでよろしいということがよくある。こういうことはいけないと思います。これは人間としてやらなければならない仕事かどうかということを見たときに、団体をこえて結び合わねば仕事はできないと思うのです。PTAはこれをやる、あれは何をするというような考えは捨ててほしいとつくづく思います。

小林　そうではないのです。四団体ある場合は四団体のおもな人たちが話し合い、これはあなた方の方でやってほしい。みんなが協力するからというふうな体制でいきます。

坂西　また新しい問題に足を踏み込んだわけですが、小林さんは大体において各自の限界を、その創設の目的によって活動してるから問題が起らない。しごく円満にいっている。ところが村尾さんは、人間の問題としてどうしてもこれが必要であるといったらPTAだろうと婦人会だろうとコーラス会だろうとその限界を飛びこえてみんなして協力したらいいではないか。いま考え方が二つ出ていますね。

協同活動に際しての他のグループとの提携

小林　話し合って、子供に関することでしたら子供会がもとになってやってあとの三団体が協力するというふうな体制やっております。一つのものがやってあとが便乗してるわけではないのです。

坂西　いかがですか。それについてもう少し皆さんの御意見を……。皆さんお書きになった中に、また今日お集まりにならない方がお書きになったものの中にも、PTAの活動に入っていくのもありますし、小さいグループを別に作っていても、これがまた婦人会の活動とつながっているのもあると思います。いろいろのやり方があると思うし、またあってもいいと思うのです。やはり問題が、いま村尾さんがおっしゃいましたようにみんなの幸福になり、またそれを協同の力によって早く進めていくことができるならば、やっぱり限界を越えて協力するというところにもっていった方が望ましいのではないでしょうか。いかがでしょうか。

入江　その実例といたしまして私の方で昨年十二月二十七日に突然床屋の値上げがあったわけです。今まで百円だったのが百六十円に上げてしまいました。みんなアッといって驚きもしましたし腹も立ったのですが、お正月を控えてだれもが床屋にいかなければならない男の人ばかりでしょう。やむを得ず床屋にいってお正月を済ませましたが、あまり突然だったし、なんとか値下げしてもらいたいという声が出ていました。その後二月に高知市でPTAのお母さんたち、地域婦人会の方たち、未亡人会そういう高知市の各団体が集まって婦人大会を開いた席上で床屋の値段が高過ぎるから下げてほしいということを決議して、それを市の床屋の組合の方にもって参りました。床屋の組合の方でも考えてくれまして、最近いくらか値下げをしました。私はみんなの力で成功したいい例だと思っております。

坂西　問題によって違うということですね。ですけれどもできるだけ大きな問題であったならあらゆる組織が関心をもって協力する。今日の午後出た問題で、こういう点が足りなかったのではないか。あるいは今日ここで出なくても、こういう問題をもう少し考えてよいのではないかとい

うふうなこともございませんか。

村尾　和歌山の神戸さんが官製の婦人会が解体しかけているというような感じを受けるとおっしゃいましたが、はたしてどこの地方でもつぶれかけているでしょうか。

沢崎　それは全国的な傾向だと思います。地域の婦人会に集まっていらっしゃる方はほんとうに生産に従事してる農村の人たち、お母さん連中、それから働いている人たちなのですから、もっと活動できそうなものですが、実際はだめで、どこにいっても地域の婦人会のことは問題になっているのです。

坂西　組織が大き過ぎて活躍できないでいる。従ってそれに不満な人は地域の大きな婦人会に属していながらもまた自分たちの小さいグループをもって自分たちの問題を解決しようとしているといった傾向ですね。

沢崎　今いわれたような既成の婦人会の新しい団体に対する悪影響ということも問題になってくるのではないですか。昔からの婦人会は、今でも地方へいきますとほとんどボスのような人が役員をしています。ですから役員と会員と離れてしまっている。そして地域婦人会の指導は社会教育課でやっていますから会には自主性がないものが多い。しかもお金をもらっている。そういう官製の婦人会が新しく自主的な団体として芽生えてくる会に対して偏見をもっているという特徴があるのではないでしょうか。

坂西　その問題をいま取り上げる時間がありませんから、明日もう一度提出してください。

非常にいろいろの問題を取り上げて、皆さんの活発な意見が出ましたが、今日は私が少ししゃべり過ぎたという気がします。今日最後の十分ばかりの間にいろいろお話が取り交され、非常に能率的だったと思うのです。いつも最後になると盛り上ってきますが、明日は最初から盛り上げてください。

質疑応答

質問　福井の沢崎さんが乳児専門の託児所をお作りになったと伺いましたが、それについてもう少し詳しく伺わしていただきたい。経費だとか運営方法だとか。それまでにどんな御苦心をなさいましたか。

沢崎　乳児専門の託児所を要求していますけれども、それがなかなか通らないので、今ある市の保育所で一才までの乳児を預ってもらえるように市会議員にお願いして社会課の方へもっていき、市会の予算がもらえるというときに圧力をかけたわけです。それが通りまして、今年の五月一日から実施になります。

石井　乳児院についてちょっと申し上げたいのですが、

私は岩手県の盛岡ですが、日赤が二ヵ所に乳児院をもっておりまして、日赤の事業として満一年まで預ってくれます。

質問　大分の渡辺さんに三つ伺います、ひとつはあなたの会社の組合には先ほど話し合われた意味の指導者はおられますか、それから二はあなたは指導者と権力への対抗ということをどのように考えておられますか。三は一割余りの生理休暇を取られた方は別にその後圧迫を受けるようなことはありませんでしたが、この三つです。

渡辺　指導者といいましても青年婦人部の部長は男で、副部長として女の人が一人、これはさっきの話から指導者といえば指導者ですが、別に引っぱっていくというのではなくて、まあまとめ役、お当番に近いようなものです。

二の御質問は、答がぴったりしてるかどうかわかりませんが、今まで組合長だった人が今度課長になりました。その組合長が非常に進歩的で、私たちにとってはいい組合長だとみんな思っていたのですが、あとに続く人がいないために組合の力が弱まってきたということはみんなが感じています。それでなんとかしていいリーダーに――いま選んでいる組合長でもいいですが、その人がもっといいリーダーになってくれるように私たちがみんなで働きやすいようにしてあげなければならないと思っております。

三番目の圧迫を受けたというようなことはございませんが。

質問　安藤さんに質問します。肢体不自由児のお母さんの会はどんなお仕事をしておられますか。

安藤　肢体不自由児の施設が県にないので、その施設を茨城県にぜひ一ヵ所作ってもらいたいというのが一番大きな目的です。

質問　浜崎さんに質問します。戦後、官製の婦人団体などないと思いますが、何県にありますか、答えてください。

浜崎　それは昔の官製のような傾向ということでいっているわけで、はっきり組織上の関係などは官製というのではないかもしれません。けれどもそれをほんとうにぎゆうじっているのは社会教育課です。社会教育課の主事によって動いていて、原水爆禁止運動などには入ってこないのです。

質問　社会教育課というのは、社会教育法によって民主団体をぎゆうじるというようなことはできないことになっています。

浜崎　なっているはずですが、やっているわけです。

入江　高知県の場合も浜崎さんのおっしゃるのと同じ傾向があるのです。

坂西　私から補足しますが、それが公けになった問題は

滋賀県です。市川房枝さんたちが出していらっしゃる機関誌にも取り上げていらっしゃいますし「社会教育」という白土社という出版社が出している雑誌にも取り上げておりますから、知っていらっしゃる方もあると思いますが、滋賀県の県の連絡協議会の会長を民主的に選びましたら、社会教育課の方でその人を排斥して、別に会長を選ぶ形式をとって押しつけたわけです。それで、それに反対する人が分れて、一時二つに分れてしまったことがあるのです。今それを一つにまとめようという運動をしておりますが、最近私はこの二ヵ月ばかりどうなったか結果を聞いておりませんが、はっきりと社会教育課が呼び出して、そうしてあなたのような人がいてはだめだからといって自分たちの好む人を会長にすえたという例があります。これには政党などの問題もからまっているので表立ったケースとして大きく問題になりましたが、そうでないのがたくさんあるのです。

浜崎　福井県の社会教育課でも、やはり若い人たちは社会教育課として、これはほんとうの道ではない。これをしてはいけないと反撥しているようです。地方ではみんな問題になってますが、こういうところへきたらいえないということを汽車の中でいっておられました。

質問　私どもの地方におきましては無記名投票で会長を選挙しまして、自主的に理事会を開いて一年間の行事を婦人会で立てるので、市の方から干渉受けないで民主的にやっておりますから、大体そういうふうなものだと思っておりましたので、いまどき官製というと変に感じるものですからお伺いしたのです。

質問　陳情をしなければ事が行われないようでは問題だと思います。たとえば、国会の予算にしてもあのようにアン・バランスな結果になっているし、小さな身のまわりの問題でもお役所自体が陳情ずれがしてきているような嘆があるのではないでしょうか。明るい社会を作っていくにはそのようなところから蟹を除いていきたい。その問題を棚上げていただきたいと思います。たとえば先ほどお話に出ました議員さんを利用するという問題ですが、利用するというのはなんていいますか、私たちが簡単な言葉でいいますと、こじき根生で――利用するときは利用して、投票するときはこちらだという考えはよくないと思うのです。

篠崎　議員さんというのは公僕というくらいだから、あれは利用されるために立ったわけではないでしょうか。

村尾　働かしてみて働きが鈍かったら投票しないのです。

質問　母親大会などに、東京の婦人の代表が少いのはなぜでしようか。また指導者を必要としない会合をもっている方々は進歩的だと思いますが、社会的な会合、婦人会などの会合にはだれかきちんとした核心がなければたよりないと思いますがいかがでしょう。

地方の方たちは婦人団体にしても何にしても熱心なのです。

入江　それは地方にいっても同じことがいえると思います。母親大会が高知県であるでしょう、そのとき高知市から出てくる婦人は少いのです。郡部からの人がたくさんなわけです。なんですか、文化的な都市ほどこういうふうなものに不熱心な顔をしてるのではないかというふうなことが感じられます。

坂西　生活環境というか、生活が何かの意味においてつながれば一致するけれども都会のように足並みが揃わず、生活の状況もかけ離れてくると一致できないという、そういうところにもあるのではないか。都会の婦人活動というのは割合に農村地域あるいは小都市と比べて不活発です。それは認めなければならないと思います。

もう時間ですが、政治の問題につきましては明日少し時間を取って婦人の政治活動、またグループとしての政治活動、これはどういうことを意味するかということをお話したいと思います。

（第一日閉会）

坂西　昨日が既成観念のぶちこわしの時間だとすると、今日はそれを建設するときに移っていかなければならないと思います。

「都市の社会生活を高めるために」というのが、この部会の課題なのですが、そこにおいて一番大切なことは、都市の生活と申しますと、農村や非常に小さい都会の端の方にあるグループと通ってまとまりにくいのです。いわゆる谷間ができていると思うのです。ここにお集まりになった方は、大体大都市というよりも中小都市、それから大都市であっても、その郊外にいらっしゃる方が多いようです。しかし私たちは協同活動の最もしにくいその地域を主体として考えているのですから、この谷間をどうするかということを、今日は少しお考えになっていただきたいと思うのです。それを考える一つの大きな理由は協同生活、協同活動ということ、その目的とするところは、結局は私たちがよりよい生活ができるために、いわゆる最大多数の最大幸福ということを目ざしているのでしょう。その最大多数の最大幸福ということを、もう一歩考えてひっくり返してみるとこれは私たち市民の良心ということになると思うのです。何もいらないおせっかいしなくてもいいのではないか、という人ばかりでは世の中の善意というものが表に出てこない、協同活動というものがとまってしまうのです。

今日は都会の谷間をどうするか、それからそれを動かすものは、高度の市民的な良心ではないかというふうなところからお話し合いを始めたらいかがでしょうか。

協同活動に無関心な二つの層

村尾　自分の生活は自分で、向上させるという、そういう利己主義から協同活動をしない裕福な方のほかに、非常に低収入のため生活に希望を失っていて、自分たちがグループを作って活動したって、どうせ受けいれられはしないし、政治に反映させられはしないとおもっている人があるのです。そういう二つの層の間の似かよった点は、政治に関心をもたないという点です。片一方は無気力でどうにもならないから、だれかがボスでも何でもいいから、やってくれさえしたらいいと、もたれかかってしまう人と、それから勝手にやりなさいというような人、そこに共通な何かがあるような気がします。私たちのグループではその壁にぶつかって一番困っています。

加藤　私たちのグループでも、だんだん有閑マダムの会になる傾向があるということを、大へん心配しているのです。そのために私はテクニックの方よりも、むしろ考え方を――日本人全体を対象にして考えるという考え方を、つくり出していかなければならないと思うのです。誰でも対等の立場で仲間に入れて協同活動をするというものの考え方を、グループの中に育てていきたいと私は努力しております。私たちのグループは実践行動はいたしませんが、そういう考え方を育てていこうというところに、特徴をもっております。

坂西　そういう考え方を押し進めていこうとする努力を、どういうふうに実際に現わしていらっしゃるのですか。

加藤　たとえば見学をするにしても、見学するだけでなくて、むしろそのあとでその施設なり、あるいはそこへ行ったことをみんながどう感じているかということを討議して、そこに重点をおきます。勉強するのも各自の興味でするのではなくて、協同である目的のために法律なり経済なりの勉強をするという勉強の仕方をします。実際の活動というものは、原則としてはしないことにしています。

それは各自が地域なり、あるいは特定のもっと小さいグループをもっておりますから、そこで行う行動の裏づけになるものを持って帰れるようにしようということなのです。女の人が向上していく上で今まで一番足りなかったことというのは、考え方の基礎になる知識の涵養ということではないかと思うのです。

川井　私の方ではそういう勉強と、実践と、両方成功させてやっております。やはり勉強することはとても大切だと思います。一つの物事を運ぶにしましても、理論がわからなければ、何のためにこうするかということがわからないものです。勉強しても、ただ自分のものだけにしておくのは惜しいので、少しでも社会に尽すために、実践活動に移します。たとえば多くの人に知らせるために講演会をするとか、お話し合いをするとか、そういうことを並行的にするのが必要ではないかと思います。

加藤　それはしてみたのですが、東京といっても地域が非常に広いのです。隣村になるくらいおたがいに遠いので一日のうちに集まるというだけでも容易ではありませんから、各自の地域団体にもって帰って実験して見て、その結果を土曜会にまたもち帰って、おのおのの検討の材料にするというふうなことになっております。

篠崎　そういうものの考え方というものは、やっぱり実践してると必要に迫られてだんだん考えるようになるのではないかと思うのです。私は未亡人にならないころは未亡人対策など知らなかったけれども、未亡人になって生活に困ると福祉資金も借りられる、そんなこともラジオで知ってそういう政府のやり方もあったのかと思うし、また病気になると医療保護法ですか、そういうものもあることを知るわけです。たとえば排水のことでも私は、実際にやってみて、排水というものは途中に高低があったら流れないものだということがわかったのですが、――実行するに限るのではないかと思います。教養も大事ですが、実行しているうちにおのずと分ると思いますけれど。

入江　私は婦人会とか、グループとか、そういうものに所属している方たちにももちろん問題があるのですが、それ以上に、未組織の婦人で、毎日の生活に追われて、とても会合に出て行く時間もないというような、そういう層の人たちが日本中にたくさんあると思うのです。そういう未組織の婦人にどういうふうに働きかけるかということ、これは皆さんにも考えていただきたい問題なのですが、私たちはなるべくこちらから出かけて行って、小さいグループを作るように努力しようといってはいるのですが、実行はできておりません。

村尾　私が問題にしたいのは、月十円の婦人会の会費を払いかねたり、三月ためて一緒に出金したら財布にこたえるような方こそ自分の力で立ち上らなかったらうそだと思うのです。ある程度裕福な方が自分たちの理論でそういう方たちの生活を高めようとして入ってきても、実感として低い生活がわからないから受けつけられないのです。私は実際に生活に困って、内職に追われて時間もないという方にさそいかける手段として、まず婦人会の活動として小学校のピアノの募金を取り上げ、一日分の内職の五十円、百

円というものを集めて三十六万円のピアノを買い、現実にピアノというものが、みんなの一日分の内職で、できたらその次はその一日分の内職を自分たちの生活のために寄付して婦人会の会合に出てください。それは何かの形でピアノのように自分たちの生活に戻ってくるでしょうから。——というよびかけをしたいと考えたのですが、せっかく手段に選んだ運動がピアノが買えたら肝心の目的が忘れられかけているという現状なのです。

それ以下の、ほんとうに無気力になっている人のことは私たち生活に追われているものが考えてあげてこそ身近かに考えられるのではないかと思います。婦人は社会建設、社会保障、そういうものにもっともっと目を向けないといけないと思います。

入江　目を向けさせるようにするそのテクニックを教えていただけたら結構なのですが。

村尾　会合で困っている生活の問題を語り合うということが大切だと思います。会合に出てきてもらうために私は内職の一日分を献金してくださいということをお願いしてのです。

入江　出てきてくだされば成功だと思うのですが、いくら呼びかけても出てこない、また出てこられないという人が多いと思うのです。

村尾　それはたいへんな努力が必要だと思います。

坂西　そこは昨日の問題に帰ってくるのですが、いま村尾さんがおっしゃっているのは、リーダー・シップというか、一人の人、あるいはグループの人の非常な熱意、しかもそれが、私は余裕があるからあなた方のために働いてあげるというような意識ではなく、もうやらなければいられない、だからやるというようなほんとうの人間性に基いた一つの感覚、そういうものなのではないでしょうか。入江さんはいくらいっても出てこない人もあるとおっしゃいますが、村尾さんのように現実の問題として訴えていくと、どうしても自分はこのグループに入るか、あるいは話し合いの一メンバーになってやらなければ浮かばれないのではないかという感じをもつようになるのではないでしょうか。

集りにまず参加させるには

小林　出てこないという悩みは、どこにでもあると思うのです。私の方では初め小さい隣組ぐらいの五、六人を一グループとして、一人の班長さんをおいて、集まって話し合ったものをもってきてくださいといったのですが、それができないので最後にノートを回してみました。三月も四月もかかりますが必ず回ってくるようになりました。その中に非常にいい意見が出るのです。働いている人が会合に

出ることはいろいろの事情でむずかしいと思うのです。ですからそういう無理をしないでこっちで努力するというところへもっていかないとむずかしいと思います。

入江　ノートのお話は実行できることで、たいへんいいお話だと思います。何でも自分の思うことを書いてくださいというふうにして回すのですか。

小林　意見をもっていたり、訴えたいことをもっていても、時間の余裕がなくて会合に出られない人になんでも書いてくださいといって回します。

篠崎　何かの目標があってノートを回すのでしょう。これについての意見を……と。

小林　そうではなく、何でもいいから自分の思っていることを書くのです。そうすればいろいろな問題が出てきます。私達は子供会が主体で発達した図書館のグループなので、子供の問題が一番多いのですが、たとえば、そこの健が崩れそうだ、危くてしようがないから何とかしようという問題が出てきます、とそれを取り上げてどういう方へもっていって頼んだらいいのか。それは市へもっていけばいい、そういう場合は署名して陳情すればやってくれるというふうに、非常に小さな問題ですが、身近かな問題が出てくるのですよ。

川合　ノートを回すこともいいことですが、内職している人は話すことなら簡単に話してくださるけれども、書くことをむずかしく考えて、なかなかお書きにならない方もある。ですから、お出にならない方は一々聞いてあげるのです。私たちの方で日雇いの人たちですが、バラックの立ちのき問題がありました。そういう気の毒な方と一緒に懇談会をしましたら、自分の利害関係の伴うことですから、日曜日のお昼からお話し合いをしましようといいましたところ、たくさん喜んで出てくださいました。自分の身近かなことだったら進んで出てくださると思います。

篠崎　先ほど村尾さんは、有閑夫人——ブルジョアも政治にあんまり関心がなく、生活に困っている人も関心がないとおっしゃいましたが、困っている人は関心がないはずはないと思いますが。

村尾　ほんとうに無気力になってしまうのです。今日の子供のお小づかいをどうしようかという方は、そのお小づかいを稼ぎ出すために内職に一生懸命で、話を聞くどころではないのです。これだけ仕上げようと思ったら、ラジオさえかけてあっても聞こえません。それほど真剣に内職をやっているのですよ。

ニコヨンの御主人が働いてきても、その賃金だけでは子供をかかえて生活できないのです。そういう低賃金で働かされている、そこに矛盾があるということは考えないので

す。今日はお父さんは仕事があるかな、お父さんが帰ってくるまでお小づかいを一生懸命稼ぎましようとそれだけしか考えないのです。そのほかに考える力がなくなっているそういう人が出てくるということはほんとうに恐しいことだと思います。

安藤　その人たちは機会があれば考えるようになりやすいのではないでしょうか。

村尾　そういうことをいっても通らないという、そういう考え方を政治のやり方が植え付けているのです。戦後はないものが共通だったので、皆さん同じ問題に取り組むことができたのですが……。

安藤　もっていきようでそういう方は割合に問題をつかみやすいと思うのです。私は今のお話とあべこべの地域に住んでおります。テレビは町並みで電気冷蔵庫ももっている部課長級の社宅街です。そういうところに住んでいて、草の実会に入ってますのは私一人です。私たちの例会でもいわれるのですが、結論は仕合せ過ぎて政治に無関心なのです。

村尾　私達の自治協力会の部落は、百五十のうち百は戦災者住宅、五十は大きな会社の社宅です。そこの奥さんと私たちのような戦災も受けて、ある程度低賃金の、ものたちとは同じ地域にいながら全然気風が違います。私たちの方が政治に関心をもっています。恵まれた人達はある程度お金で解決ができるので、学校は全部無理して市内へ越境入学です。そうして施設も自分たちのPTAでどんどんよくしていくのです。ですから肝心の自分の地元での義務教育がどれほど不自由な施設でやっているかということについては関心をもたないのです。

沢崎　私は職業婦人ですが村尾さんのお話と同じことがいえると思うのです。ほんとうにある程度の俸給をもらっている人たちはまだ幾分集まりやすいのですが、最低の労働条件で働いている人は、いくら呼びかけてみても、いくら基準法がどうだといってみても、そんなことを私たちがやっても経営が成り立たない。そんなことをいってもしようがないではないか。家へ帰ったらたくさん子供が待っているし、会合などに出ておれないといって、集まってこないのです。切実な問題をもっていても、その人たちは問題を知らないのです。だからリーダーがよほどの根気で、その人たちと一緒に生活するくらいの気でやらないとその問題は引きずり出せないと思うのです。

安藤　貧富の差が戦後十年ではっきり現われてきたというような感じを受けるのです。

坂西　今後はもっとひどくなる傾向にありますね。

村尾　それを今のうち手を打ちたい。なんとか共通の問

題を見出だして、政治的に動いていただくように、それこそ婦人の力だと思います。男の方は大きな組織に入って機械化された職場で働いてますから、帰ってきてそういうことにまで頭を向ける余裕がないと思うのです。結局女の人の力が一番大切だと思いますので、それを訴えたいと思って活動しています。

神戸　協同活動の盲点になっている階層の方々を会合に出して、話し合いをするというのは、やっぱりリーダーというものがもっと熱情があれば解決するのではないかと思うのです。解決までいかなくてもいい方に向いてくるのではないかと思います。いいかげんでうるさいからとやめてしまえばそれきりになってしまいます。

それともう一つ盲点になっているのは若い婦人です。職業についている人も、また家で花嫁修業をしている方も女の盲点になっています。そういう方はもっと啓蒙しなければよくなりはしないと思うのです。

それから会合に魅力をもたせることと時間をかけないことです。何時間もかかるところや、清飾っていかなければならないというようなところは絶対に集まりませんからそういうことにも気を配る必要があります。それとリーダーと会合の内容ですね。もちろん勉強も必要ですし、施設も必要ですが、勉強よりも何よりもまず生活と結びついたものを取り上げて会合にもっていくべきだと思います。生活をたてることがその人たちの一番問題なのですから。

沢崎　生活というのは経済的な問題でしょう。だから一番中小企業に働く人は、団結しなければならないはずなのに、そういう人たちが無気力になっているという点は、やはりリーダーだけの問題でなく、そのような会合をもたせないようにしている何かがあるということを考えてほしいと思うのです。

神戸　性急には解決できないから、時間をかけなければならないと思います。また、放りっぱなすこともいけないと思います。そういう人をまとめてこその活動ですから。

それから生活が豊かで亭主と子供さえ引っぱって、家庭が安楽であればいいという考え方の人には、悪い意味の個人主義というものがあります。一種のエゴです。そういう人は、下の階級の人よりなおむずかしいのではないでしょうか。

中小企業に働く目覚めない人たちを引っぱるのはリーダーの熱情ということになるのではないでしょうか。

沢崎　はっきりいいますが、熱情があってもその人たちがそこへ出ることによって職場がクビになることがあるのです。それによって生活を打ち切られるものになぜ出てくるでしょうか。

神戸　でも夜、出る時間ぐらいあるでしょう。

沢崎　出たということがわかると、それだけでクビになりやすいのですよ。労働基準法を知らせるような会とか、女の権利を教える、労働者としての権利を知らせるような会合に出ようとすると、すぐだれかが告げ口するのです。

村尾　それはあります。現に生活保護を受けている方の内職の低賃金を取り上げましようというようなことがあったのです。生活保護を受けている人は、内職をしないと、保護の金だけでは生きていけないので内職をしてるのですが、そういう内職の賃金がわかりますと、生活保護費からそれだけひかれてしまうのです。ですから公表できない。絶対にそういうことはしてくださるなと、一番お金のほしい人がそれはやめてくださいというのです。そういう問題があるので、実際困っている人の問題はいうほどやさしいことではないのです。

町田　無気力な二種類の階層の方々を目覚めさせるために実際の活動をしていらっしゃる方々の具体的な御意見を拝聴したいと思いますが。

加藤　東京には何を悩んだらいいかということを悩んでいるというグループがあるのです。（笑声）　ぜひたくだとお思いでしようが、そういう会が東京には割合あるのです。ですから長い目で見てくださると、だんだんそういう方も開けてくるだろうと思うのです。早急には解決できませんですが、そういうきざしが東京にかなり見えます。ここにお集まりの方とはだいぶ違います。東京の会では当り前だと思っていたところのリーダーがなくてもいいという問題も、ここでは通用しないということを勉強しました。東京では異句同音だったのです。そのために勉強になったと思います。私は帰りましたら東京の方にもお話します。地方の方も東京ではそういう動きをしてるということを地方に伝えていただきたいと思うのです。私は教養が大切だというのは、下の方の無気力な人たちのことを考える場合にも、慈善家的な態度で臨みたくないために、いたずらに訪問したりするのは差し控えているわけです。こちらに信念と覚悟と知識がなければどうしても慈善家的な態度が出る。ですからそういうことの前に教養を身につけて、どういうようなものの考え方をし、日本人が共に苦しみ、共に楽しんでいこうではないかという気持で考えたときに初めて私たちの地域に帰って、地域の中にそういう人があったら実践しようと思っております。先を急がないでもいいと思うのです。

大浜　私どもの地域の婦人会では、上も下もなしで、同じレベルにあることがやりやすい一つの原因だと思います。どういうことをやっていいかわからないということがありますが、私どもは問題をもつことに興味をもっていない人たちに、私どもの生活をよくするためにどういうふうな問題があるか、その問題をもたせることをもっと研究してみたいと思うのです。

坂西　大分の渡辺さん、職場ではやはり協同活動に関心をもつ人と、全く孤立してしまって何もしない人とありましょう。こういう問題をどういうふうに解決していらっしゃいますか。

渡辺　私たちの職場でも年頃の人が多いので、勢いお花とかお茶とかに関心が向いています。そしてみんなで何かしようというような気持をもつということが少いのです。たとえば読書会やコーラスなどやりましても、最初はみんな関心をもって何人が集まります。そして楽しいから続けましようといっているうちに結局結婚前の娘さんですから恋人もいるでしようし、自分の生活が忙しくなります。お母さんたちのようにある程度生活経験をもっていて、共通の問題で何か解決しようというのとちがって、食べる方を親にあずけてますから、そういう切実な問題がないわけです。それで恋人と政治、文学、社会のいろいろな問題を語り合うのもいいでしようが、同じ職場で同じ年ごろの人が集まって何か語った方がいいと思って呼びかけても趣旨に賛成しても、集まらない方が多いのです。

坂西　この問題は一応片づけていいと思いますが、ほかに御意見ございますか。

それでは今までのことをちょっと申しますと、いわゆる協同活動するのにも人を集めるのに非常に苦労するということが最初に出ましたね。そしてそのためにノートを回して、来ない人の意見も聞く。それが中心になってもう少し集まりがよくなるということもあった。それから集まらない理由としては、もう生活にすっかり疲れてしまっていてそれだけの気力のない人、そうかと思うとまた半面には恵まれ過ぎて、人のことなんか——社会の問題には関心をもつことのできない人、その極端と極端は結局は似通った状態にある。こういう人をどういうふうにしてグループ活動の中に入れて、自分も育ちみんなも一緒に育っていくことができるかという問題になったのですが、それには時間をかけないでビシッビシッと端的に、しかも問題が魅力のあるような問題をもっていって、そしてリーダーが引っぱっていく。ところがリーダーだけではだめではないかという意見。それからまたもう少し時間をかけて長期計画でやらなければならないという意見などが出ました。ところが結局今までの理論の根本になるものは、だんだん時がたつうちに経済的の理由でもって社会の層というものができてしまった。片一方には自分の食べること以外には何も関心を

もたない人がある。そうかと思うと今度は非常に余裕のある人はお金でもってあらゆることを解決してしまう。政治にたよらないでも自分の好き勝手にできるというようなアンバランスの社会ができてきてしまった。これをもう少し掘り下げて、一体こういう問題を私たちの正しい協同活動を育てるという点から見て、どういうように考え、どういうように解決の方法を見つけていったらいいか。結局はある人は貧乏であり、ある人は金持であり、ある人は普通の暮しをしているという、この社会の層というものはどこまでもあるのです。いつまでいったって絶えることはないと思うのです。しかしそういうものを取りのけて、手をつないで、そうして少しでもよくなっていくというのが私たちの理想なのでしょう。こういう点から一つ次の一時間をお話し合いしてみたらどうでしょうか。

沢崎　ちょっと問題が大きくて、どれから出していいかわかりませんが、働く人のためには労働基準法というりっぱな法律があるのですから、それが守られるように、基準局や監督署なりがりっぱにやってくれたら中小企業に働く人たちもよくなると思いますが、現状は労働基準監督署でも人が足りないようです。

村尾　定年制の問題ですが、最近、会社によって定年の年令が若くなっています。そうなると低賃金の筋肉労働者の方はそういう若い年でどうしてもやめなければならないし、子供はまだ独立することもできないといった状態になってしまう。そういう人がますます困るわけです。ところが家族計画というものはなかなか面倒なので、そういう低い層の人達には普及しにくいのです。現実の問題として一間か二間の家でおおぜいの家族が住んでいるときにそういうことは許されないのです。家族数がふえると食べてゆけないので中絶する人が多い。そういう問題から結局夫婦間のごたごたまで起る。一番社会悪の底流をなしているのは家族計画の問題ではないかと思うのです。

加藤　沢崎さんのお話のことですが、労働基準局が手不足のためあまり仕事をしてもらえないということで、私たちは労働省の仕事を理解するということにも興味を持っているわけです。そうでなければ私たちの生活がよくならない。労働省は働く人の生活をよくするためのお役所ですから、私たちの困っている点を申し上げて、規則が合わなかったならば変えていただく。それから規則があるのにそれを知らない人たちがあったら教えてあげて、こういうような道もあることを知らせる。このような活動をするために私達の生活とつながりのある婦人少年室と連絡をもとうとしたのですが、グループの若い潔癖な方たちが、官庁とつながりをもつことをいやがってお抜けになった方があるのです。

です。けれども、長い目で見ましたら、それはわかっていただけることと思います。御用団体ではないのですから、政治というものが国民のためのものになればこちらが困っていること、あるいはやってもらってうれしかったことを率直にいった方がいいのではないかと思います。

入江　私の方の地方では方々に政党の婦人部というものが作られています。政党が協同の問題にしろ、婦人会の問題にしろ意識的に出てくる。そのことについてちょっとお話し合いしていただきたいと思うのです。

坂西　昨日の蝋山さんのお話にもあったように政治と政党ですね。これをやはり一応ここで議論して、そして婦人の職業の問題、あるいは家族計画の問題、住宅の問題、こういうものを政治との関係において検討してみたらどうでしょう。やはりこれが今日の本筋ではないかと思いますが。

塚本　この協同活動というものが、ただいまは上部と下部を除いた中間層で行われているというアン・バランスな状態にある。それは根本的には政治問題で解決しなければならないと思います。そこでいま入江さんのおっしゃいました政党意識をもった婦人組織がだんだん作られる傾向にあるということはたいへん望ましいことと思います。

入江　私は特定の政党によって、上からの押しつけでつくられた組織のことをいったのです。こういうことがあったのです。私の方のあるりっぱな政治家がなくなり、その地方で未曾有というような葬式がありました。それに参列するのに三時間も四時間もかかるところからバス二台借り切って青年婦人部の人たちが来たわけです。そしてその告別式に参列して、その翌日その政党の婦人青年会というものを結成したわけです。その費用はみんなその政党が出したのです。そういう婦人、青年層の会、そういうようなものができるということ、それに対して私たちは非常に憤慨してだまっていられないと思ったのですが、すべていろいろな動きを見ていると、それは結局次の選挙に、つながっているわけです。だから私たちはそれをはっきり見きわめなければいけないのではないか。こんなことが私の地方にあるので、皆さんの方は、いかがかと思って伺いたいわけです。

政治と婦人の問題

篠崎　私は政治も政党もよく知らない。富山の婦人会議で政治の話が出たときに、選挙のときは政党を選ぶのがいいのか、人物を選べばいいのかという話がでましたが、そういうことを聞くということ自体が政治を知らないというのです。私は思うのに、革新党は母子福祉でも児童福祉でも優遇してやるという。今の政党はそういうものはどんど

ん削っていく。それではあっちかなと思うけれども、それがストばかりやっているし、どっちがいいかわからないのですよ。（笑声）社会党政府の政治を見たことがないものですから、どういうのが婦人にいいのか、はっきりつかめないのです。

入江　つまりね、物質で――お金で解決をつけようというのが私たちの好ましくない政党であるわけです。

篠崎　お金も大事ですよ。（笑声）

入江　お金が大事でないとはいわないですが、お金で自分の候補者の票を広めようとか、今の勢力範囲を保とうというふうに、物質で解決をつけようとする政党。そういうものに私たちはついていけないわけでしょう。

大浜　これは昨年行われた地方選挙のときに経験したことですが、私のほんとうに尊敬する人がお立ちになったので、私は心からその人を推したいと思っていたのですが、私どもを圧迫した人がその人を推していたのです。その町長は一種の選挙ブローカーですから、私は候補者のところに、なぜこういう人を、お使いにならなければならないのか。あなたは公明選挙で出られる人だと思うということを間接にですがお話したのです。ところがその方のお返事に、今の政治で私が手伝ってやろうといってくれて出た人に対して、それをむげに断わることはできないし、今の選挙はこういう人を利用しなければ出られない段階にあるということだったのですが、これは問題だと思います。

村尾　選挙で半数の票をもっている女の人が、古い義理人情に縛られて、私はここの家の嫁だからこの人に入れるというのが地方の選挙です。それが片付かない限り、お金を出せば出られるという選挙は根絶しません。女の人のその気持を先に除くことが必要だと思います。

小林　地方と都市では違いますが、グループでも婦人団体でも政治色は必要がない。お金で選挙がどうというのは結局は婦人の自覚にまたなければならないことで、はたでいくらいっても仕方がない。自分たちが目覚めることで、婦人団体の中には、政治色が入らない方が純粋だと思います。

塚本　婦人は選挙権を得て十年になっていますが、いまだに義理人情にしばられて自分のほんとうの意思の表示ができない。信念をもって投票できない方がおられるということは情ないことだと思います。

入江　それは女だけではなく、男の方だってあるでしょう。

町田　われわれの一票がほんとうにとうといものだということを婦人の皆さんに自覚させる。それをどんな方法でもっておやりになっていますか。

安藤　婦人会などの会合に出たときは、そういうお話を

「なるほど」と聞いて帰るけれど、家へ帰ればいわゆる義理人情にしばられて今の新しい感覚でない投票の仕方をする。茨城県で十日に地方婦人会がありましたときに二十四才の方が、お母さんたちはずるいというのです。理屈では理解しても、清き一票を行使するときにはやはり家なり地域なり、親類関係、そんな方に投票してしまう。

入江　反対にずるく使っていただけばいいわけですね。

安藤　地方の村からいらしている方の話ですが「どこのおばあちゃんは」、「どこのお嫁さんは」と票を読まれていて「今日は御苦労さんでした」と、運動員にあいさつされる。そのときの目のやり場とか顔の表情で、これは入れたとかこれは入れないとかいってすぐはね返ってくるというのです。

坂西　いろいろの問題が出てきましたが、一つずつしぼっていったらどうでしょうか。まず第一には小林さんが今おっしゃいました「グループとしては政治色をもってはいけない」これにしぼってください。

グループと政治色

入江　私もグループなり会として政治色をはっきり打ち出すのはいけないことだと思うのです。物の見方、考え方というものには革新、保守それぞれありますが、会としてどちらの政党を支持するということを旗印にするのはいけないことだろうと、小林さんの説に賛成しております。

村尾　そのために政治というものにおそれをもって、政治の批判をしないような傾向に婦人会がなりやすいということです。政治の批判は政党をこえて、あくまで批判だけは活発にやらないと婦人が政治から立ちおくれるおそれがあると思うのです。

入江　旗印を掲げないということは批判をしないことではないのです。

村尾　そういうふうに流れやすいというのです。あまり保守の方の批判ばかりしてると、あなたは革新派だという烙印を押される。

坂西　グループとして政治色をもってはいけませんが、今のように二大政党になると、あなたは保守か革新か、どっちかにきめなければならない。両方をいれている婦人会グループというものは、どんな団体であっても最も厳しく政治というものを批判し、検討しなければいけない。そうでなければ実際あなたが保守であろうと革新だろうと比較検討する意味がなくなりましょう。ですからグループとして政治色をもたないということは、もっともっと厳しく批判するということにもなるのです。

大浜　政治への啓蒙運動というふうなものはグループと

してやるべきだと思います。

神戸　その点でリーダーの意思というものが大切ではないかと思うのです。個々は政治色をおびてもいいけれども、リーダーというものははっきり政治色をおびないという限界をもっていなければならないのではないかと思うのです。私たちの経験から申しまして、運動を通して市の予算をもらうとか県の予算をもらうといいというところまできておりますので、やはり政治というものが遠いところにあるものではないということを下の階層にわからせるような運動をたゆまずすべきではないかと思うのです。政治がどんなものか、どこにあるものかわからないという階層が多いものですから、リーダーは自分の力の限界をはっきりつかんで、そういう人を啓蒙すべきではないか。グループ自体は絶対に政党色をおびてはならないと思います。

沢崎　私たちの場合職業婦人ですから、団体としては政治色をもっておりませんが、職場の隅々にあるどの問題も政治を離れて検討することができないのです。たとえば道コースの波というのですか、一番初め講演法で、職後男女平等で同一賃金だったが、最近は初めから差がつけてあるところもある。県庁では一万円になったら女はストップです。主事の試験は女には受けさせない。給仕はやめさせて各課に女は一人ずつ、そうして幾つになっても給仕の役割をさせられる。ことに最近は繊維の不況で既婚婦人は首になる状態が多いのです。そうするとどうしても今の政策を批判するようになるので、あそこはあの色だとまわりが色をつけてしまう。そうして批判する方をつぶそうとするのです。そういう傾向が一番こわいと思います。これは私たちの生活に結びついた、ほんとうに真剣な問題なのです。

川井　それは職場の方はタビにつながることですからこわいと思いますが、家庭の婦人のグループである私たちの場合はそういう心配がないのですから大いに政治のことは論じております。一人々々が自覚をもつように啓蒙運動することが大切だと思いますし、それは使命だと思ってやっております。押えられてもこわがらないで、だんだん横との連繋を固くし、たたかれてもたたかれても立ち上っていく、だんだん強まっていくのではないかと思います。

坂西　そこに問題がある。たたかれてもたたかれても盛り上げていくその精神というものは、私は非常に勇敢でいいと思うのですが、沢崎さんのおっしゃってますのは、たたかれてつぶれてしまう場合があるというのです。食べられなくなるのですよ。そこを私は現実的に考えてあげなければいけないと思うのです。昔のように思想弾圧の厳しい時代に終始一貫して節を曲げなかった人もありますし、そういう人は偉いと思うのですが、そのために惜しい人がたくさん死んでいましょう。そういう事態が起らないようにするのが私たちの務めです。問題はそこまで掘り下げて考えていかなければならない。アカだとか、あるいは一つの政治色をもって、自分たちにとっては望ましくない社会的な批判をされたときに、その地域の婦人団体というものが出てきてほんとうに弁護してくれるか。正しいものに味方してくれるかどうか。そこまでいったらみんなが正しいことのために立ち上って勇敢になるのですが、そうなれない大きな社会的事情があるのです。

沢崎　いま各県に政党の婦人部が作られて、有名人の奥さんとか、もとの婦人会長が入っているわけです。前会長とか、未亡人会長とか、みんな有名な人が婦人部長になっています。

その人たちと政策について話し合えるならばいいのですが、私は主人から言われましたとか、私はあの人とつながりがありますからいやでも引き受けなければなりませんからというのです。そういうのをほかの県ではどういうふうにしていらっしゃるでしょうか。

坂西　ここら辺で一つ、いま全国的に非常に女性が迷っている問題を考えたいのです。まず、婦人会の会長、あるいは婦人団体の会長が政党の責任ある地位につくということ、これを民主的に運営されている婦人会で行っていると

いうことですが、どうでしょう。

大浜　私はそれはやっぱりリーダーとして立たれる人がそういう地位におつきになることは絶対反対です。私は私、公は公というふうにはっきり区別することは人間の心理としてむずかしい問題ではないかと思います。

石井　もしもリーダーがそういう地位につく場合にはメンバーに影響がありますから反対です。

沢崎　反対です。ところがやはり不思議なことに、大体婦人会というのは社会教育課が指導していますが、講演会をやるときに、会員みんなの意見によって進歩的な人などに来てもらいましようということになると文句をいわれるのです。

川井　上から押えつけられるというのは、いま権力を握っているものに問題があるのではないかと思うのです。今度の選挙によって、今度はだれが政権を握るがということを変えていけば根本的によくなっていくのではないかと思います。

入江　世論の力というものを決して無視してはいけないと思うのです。私の方の県の社会教育課で講師団というのを作ろうという話があった、それに対してあちらからもこちらからも批判があって、結局そのことはやめたわけですが、そういうふうに世論をつくるということに私たちはも

っと関心をもち、また努力しなければいけないのではないかと思うのです。

村尾　それは正しい世論ですが、往々に既成政党のお金の力と政策が、私たちの低い階層へ入りこんで、私たちはこういう政党ではあるけれども、こちらにはこの通り関心をもっていますというふうに、現実に小さい運動にお金を使って、直接の利益と結びつくような運動をやって、そういう方から世論を起そうとする運動があるように感じられるのですが、どうでしょうか。その方が恐しいと思います。私はどの政党のだれというはっきりした肩書をもった方が頭に立つよりも、そういう偽装的な動きを女の人はもっと警戒しなければならないと思うのです。

篠崎　私のまわりでは選挙のときなどうちの父ちゃんはこうこういうけどそのときは「うん、うん」と返事をしておいて実際にはそのとおりにしないといっている人もある。ただわからないのですね。選挙などということが、そういうことをもっと知らせるようにしてあげることですよ。私自身もわからないのですよ。わかりたいけれどもわからないのです。

大浜　それは候補者自身がどういう考えをもっているかどういうお人柄であるかわからないというのですか。

篠崎　候補者自身は紙が来るでしょう。あれを読めばわかりますが、政党となるとわからない。政策になるとわからないのですよ。

入江　私たちはほんとうに政治とかいうものは知らされていない部分がずいぶんあると思うのです。それはこわいことではないかと思うのですが。

川井　知らされるからわかる。知らされないからわからないということにおさまっていないで、自分から知ろうという意識が大切だと思います。

篠崎　知りたいとはみんな思っているのです。私の地方はレベルが低いかもしりませんけれど、知りたい意識は婦人に横溢しているのですが、どういう方法で知ればいいのかわからない。そういうことが教養団体に足りないのではないですか。

池田　今の問題からそれるかもしれませんが、PTAでも、学校の施設費が足りませんと、その区内から出ている議員の力によってたくさんの補助金がいただけるということから、その地域から議員を出すことが政治的に目覚めることと考えているお母さんたちがたくさんあるわけです。そういうふうな問題を、日本全体の学校がよくなるように日本の子供全体が仕合せになれるようにという立場で考えましたら、地域の議員がその学校だけに特定に利益をもってくるということはやっぱり正しいことではないということが考えあわされなければならない。そういう働きをPTAの中でしようと思いますと、政治的だという批判をよく受けるわけです。グループが政治力をもっていないということの限界が非常にむずかしいのではないかと私は思っているわけです。

坂西　いろいろ問題がありますが、一つ一つ小さく分けて片づけていきましょうか。まず第一に、最初から一つの目的をもって、それが政治と関係のあるもので、はっきりと保守とか革新とかに分れている団体がありますね。それは別ですが、一般の婦人団体グループでありましたら政党色をもつべきでないということ、これは御意見が一致しましたね。ところが今の場合にはそういうことが大体常識としてわかっていながら、責任ある人が政党の幹部の役を引き受けてしまう。これをどうしたらいいかという問題に直面しているところがございましょう。これはどうなさいますか。

入江　ほんとうに民主的な民主団体というものは選挙を利用しなければいけないと思うのです。誰かを推薦するというようなときですと、お互に顔色を見て、その人個人のほんとうの意思は出てきませんでしょう。何かするごとに選挙ということをもっと利用しなければいけないと考えます。

坂西　そうすると選挙されて会長になった人が今度自分の考えでもって政党の幹部になろうと考えるときには、もう一度総会を開いて諮って、もし総会が引き受けてもよいといったらいいかもしれない。ところが会としてはそういうことは政党色をもっていけないというのだから望ましくないといったら辞職して選挙し直すべきだという意見ですか。

入江　小さいことでも、選挙ということになれるようにそれをもっと有効に使わなければならないと思います。

坂西　政党色というところから、政治という問題に帰ってきますと、今の社会では何一つするのでも、道路をつけるのも街灯一つ付けるのも政治――といったら変ですが、結局政治につながるものでしょう。そうすると今のような二大政党であれば、個人としては政治色というか、どちらの政党を支持するかということをはっきりすれば、これはやっぱり認めてくださるのですか。

入江　もちろんそうですね。右か左かということです。

坂西　ところがもう一歩進んでいって時の政党の地方自治団体でも、中央に関係をもつ人を幹部にすることによっていろいろ役得があるのです。これにだいぶよろめいている婦人団体があるのではありませんか。

大浜　それは婦人団体だけではないと思います。

坂西　もちろん婦人団体だけではありませんけれども。たとえば私の知っている一つの市ですが、市長が保守系なのです。そして奥さんが連絡協議会の会長さん、そしてまた市の婦人会の会長さんです。ですから何か事をしよう、こういうことが望ましい、それでは私が――といってすぐに市長室に幹部をつれて入っていくのです。それでどんどん事が運ぶといって市自体は非常に喜んでいる。御夫人も非常に鼻が高い。こういうことはどうですか。

入江　あんまり足元ばかりみて、近視眼になり過ぎているのではないでしょうか。もちろんごういうふうな社会になって参りますと、その日その日がたいへんなのですから、無理もないと思いますが、もっと将来というものにみんな目を向けなければいけないと思うのです。そういうことによって今のその問題の批判もできてくるのではないかと思うのです。

坂西　そこへもっていっていただいてありがとうございました。そこが大切なところなのです。もし今の権力のある人にすがって事をしようとすれば、たしかにできるのです。しかし今度だれか変って。ほかの政党の人が入ってきたらどうするのですか。しょっちゅう婦人会というものは右へ左へと寝返りを打っていかなければなりませんね。ですからやはり会の組織としては必ず何が正しいかということをいつも頭において、そしてしかもその組織の中にはいろいろの人が混っている、それを一色に染めないで、みんなで話し合いをする、検討をする、そうすれば正しい方向に向っていくということになってくるわけです。

会がこういうことを正しいといったからそれでは保守か革新かというので、政策を調べて、それで今度の運動では革新の方がそういう政策を出しているからみんな革新へ入れましようとときめるのではいけないのです。あなた方は組織として話し合い、また個人としていろいろ政策、政治というものを検討する。ですけれども最後の決断というか、だれに一票を投ずるかということはあなた自身の問題です。これをはっきりさせておかないと混乱を起すことになるのではないか。それからその次の問題にくるのですが、お金がいるということは昨日から今日にかけて、話し合ったようにもう何をしてもお金がいる。そうして一番手っ取り早いのは陳情署名運動をして一つの圧力団体的に出て、助成金をもらって事をすることだが、そういうやり方では協同活動というその根本の精神から相当離れていく。もちろん正当な、みんなが望むことであって、そしてそれをすることによってたくさんの人が幸福になるのだったらそれはしなければならない。そしてある点までは皆さんの税金の一部である助成金、補助金というものもいいでしょう。しかし、それ

ばかりに頼っているということは危険であって、グループ自体の障害にもなってしまうということでしたね。ことに下から盛り上る力というものを育てていくのでなければ協同活動というものはできないという御意見がありました。安藤さんは生活に恵まれた人達の間では協同活動はあまり望まれないというふうに考えていらっしゃるんですか。

社会の連帯意識

安藤　お話しても耳をかしてくださらないのです。教養のある方達ですが皆さんお茶とかお花とか、そういう方面には力を入れる。

坂西　そうするといわゆる教養ですね。「教養」とカッコをつけましよう。まともな教養ではないからカッコして、「教養」といっていいでしよう。そういう人たちは自分の問題は自分で解決できるから協同活動なんか必要ないといっていわゆる二階に上っちゃったわけですね。

そういう人たちを一階におろすにはどうしたらいいかということを考えなければいけない。

安藤　それがむずかしいと思います。二、三回お声をかけてもあとは行き過ぎになりますでしよう。そういう方たちこそほんとうに入っていただきたいのです。

坂西　そういう余裕のある人たちは世論というものに対して非常に敏感なのです。たとえば今あなたがしていらっしゃる肢体不自由児の福祉ということがもう非常に大きな問題になって、国全体がそれに沸き立ってきたらその人たちはずるずると入ってくるのではないでしょうか。流行ですから。（笑声）

入江　私たちのもっている喜び、そういう喜びの考え方が違うのではないでしょうか。ほんとうの人間としての喜びは自分だけのものではないはずだと思う。そういう人間としてのほんとうの喜びというものを知ればその人たちも何か関心をもってくれるのではないかと思うのです。日常生活が仕合せなものですから、私たちがほんとうに大事に価値のあると思うようなものに触れにくいのではないかと考えます。気の毒のような気がするのです。

坂西　安藤さんは御自分が当面した問題から割り出していらっしゃるのですが、これをもう少し広く考えて「市民の良心」と先ほど申し上げましたね。連帯の意識としてもう少し考え直してもらうようにもっていく必要があるのではないか。その一つのきっかけとしてこういうことを申し上げたい。今の新しい教育を受けた過去十年間に育ってきた、子供、青少年、あるいはティーン・エージャーでもいいですが、この人たちは市民としての連帯意識を持っている。あなたがよくならなければ私もよくなれない、一緒に

手をつなぐことによって、私が一人なら一歩のところを、二人で行けば十歩進むことができるという考え方です。いま生活に恵まれているお母さんにも、そういう態度で生活してると自分の子供と遊離してしまうのではないか。新しい世代を理解しない、頑迷な物わかりの悪い人間ができてしまうのではないかというふうなことから誘いかけるのも一つの方法ではないでしょうか。

入江　教育の問題が出ましたが、教育二法の実施後教育がゆがめられていると思うのですが、今までの新しい教育を受けた子供とこれから教育を受けていく子供とは非常に食い違ってくるのではないかという心配があるのですが、どうでしょうか。

川井　私も教育のことについて考えたのですが、その人達は子供さんのことをお考えにならないのでしょうか。

安藤　話題の九分九厘は子供さんのことなのです。ただし自分の子供をいかにして秀才コースに入れるかという、学校の研究や、児童心理の研究とか、どの学校に入るにはどこの幼稚園と、進学の研究は、涙ぐましいものがあります。

坂西　非常に強い個人主義的な考え方から、どういうふうにしてそういう人を社会全体の意識に引っぱっていくかということになってくるわけですね。端的にこの問題について御意見のある方……。

加藤　東京では家庭の孤立化に悩んでいます。去年の秋に九州から東京に転勤され、社宅に住んでいらっしゃる方の体験を伺ったのですが、その方が、東京に来て第一にぶつかった壁はお互がカラに閉じ籠っていることだったそうです。そのためにやっぱりお隣りの人と仲よくしなければならないからというので、ハエの撲滅から実践を始め、これから徐々にそれを進めていこうといわれていました。まだ半年の成果ですから、いくらも実績が上っていないとのことですけれどもいいお話だと思うのです。

石井　私の地域にも頑迷組のお母さんがいらっしゃいまして、一ぺんも会合にも出ていらっしゃらないし、また私たちの提案に賛成なのか不賛成なのか意思表示もなさらないのですが、その方たちの中学校と高校に行っているお子さんがお母さんを教育していらっしゃるようなところが見えるのです。ですからこれはそんなに急にはできないことでも、今の新しい教育を受けたお子さん方をおもちの方でしたら、だんだんとお子さん方に教育されるのではないか。それが一番円満なやり方といいますか、あまり角が立たないのではないかと思います。

坂西　自然なやり方ですね。いま入江さんが、教育がだんだん変ってくる。そして今までの効果的ないい影響というものは薄れてしまって、また古い型に変るのではないか

といわれましたが、法律は出ましたけれども、それを昔の型にもっていくかいかないかは私たちの良識ではないでしょうか。私たちの努力によってチェックすることはできると思うのです。

そういう問題を支持する政治家、政党というものをやはり選挙のときに考えるということが一つになってくるのではないでしょうか。あらゆるものがつながってくるわけですね。

質疑応答

質問　内職でお忙しい中を集まっていらっしゃるということでしたが、どういうようにしてグループをお作りになったかということをおたずねします。

村尾　戦後、排水溝も何もないところへポッと建ったバラックの住宅に十年も住んで、子供を生んで育ててきたお母さん方が、いろんな問題をもっていたわけです。最初に私はそこの住民としてそこへ排水溝をつけましょうという呼びかけから始めました。また、よその婦人会が敬老会をやって招いて下さるのに、この部落は会費も寄付も入れずに年寄に肩身の狭い思いをさせてはいけないから、形式だけでも婦人会を作って、そこへ会費を入れるようにしましょうと、いうようにある程度の働きかけはしましたが、共通の問題でありませんから一緒に集まるということはほとんどないのです。ですからふだん顔があったら、その方の話をするように心がけています。

質問　私たちは子供の仕合せのために母親クラブで子供会を作り、そして平等に皆を導くために子供の家や文庫などを作ました。それらの資金の問題は寄付にたよってはいけないということはよくわかっているのですが、何といいましても、お母さん方の力には限界があります。いろいろ商売もいたしましたが、収入をあげてもわずかのものです。寄付を仰いだらヒモつきになるというので、その打開策として後援会を作る話も出ております。けれども後援会を作ったらまたそこにヒモがつきはしないかという懸念ももちます。私たちこのまま引っ込んでしまったら、せっかく子供の福祉のために立ち上ったお母さんのグループ活動が阻害されますので、今後資金の問題についてどんな方向へいったらよいかおきかせ頂きたいと思います。

石井　私どもの方では、子供の遊び場の維持費を得るために資金を作ることになり、日用品の協同購入を始めました。市中では二割から三割ぐらいの利益をあげて売っているようですが現金販売という建前にして利益を一割にとどめました。それで大体維持費をつくり出すことができました。それからまた子供会の経営のために、毎月一回各家庭

から廃品を集めて売り、それでまかなっております。

塚本　私の住んでいる町のある社宅の例を申し上げます。婦人会だけでなく働いている男の人の自治会、それから青年団の協議会、これらが協同で子供の会を作っています。子供はみんなの力で育てるのがよいという考えから資金は青年団などからも援助して環境衛生の点でも非常にいい状態になっています。

石井　自分達で資金をつくるのと同時に市、町村などに有益なお仕事には助成金が出るようになっておりますからやっぱりそういうことを少し研究なさったらいかがでしょうか。資金がこれだけありますから、幾らか出していただきたいというお話をなされば必ずそういうところから援助もあるはずだと思います。私の方はいうようふうにして助成金もいただいております。

質問　市会議員の人に協力していただけるけれども、それをどこまでお受けしていいかということが問題だと思います。

坂西　それがほんとうに必要なことであって地域社会の人たちがそれを認んでいるならば市の方から援助されても結局それは正しいことであって、それを理由にしてあなた方の将来の行動が拘束されるようなことはないという確信をもっていいのではないでしょうか。

質問　私は学校のＰＴＡの機関紙の編集をやっておりまして、昨年十月に学校創立三十五周年特集号を発行しました。特集号ですのでトップ記事に教育庁の方の原稿を載せ次がＰＴＡの会長、副会長という順序にしたのです。ところが副会長が区会議長なので、当然最初に載せるのではないかという望みをもたれたらしくて、間接的に私の編集に圧力をかけてきました。私は機関誌というものはそういう政治的なにおいがあったのではいけないのではないかと申しましたら、それは理屈で、人間は温情が大切だというのです。これから一学期号、二学期号と出すごとに温情という言葉を用いられて、これからの政策をこうしょうという原稿を載せられたら困ると思いますが、どうしたらよいでしょうか。

大浜　私どもにもそういうふうに圧迫がありましたがお互に反目し合っているのでは会の発展というものはないと思いまして、ひざを交えた話し合った結果、現在ではそれが正当であれば向うから受けるというふうなお話になっています。

入江　温情ということは自分から言うべき言葉ではなくて、他人が言うべきことだと思います。自分が温情々々というのは決してそれは温情でないということではないかと思います。

質問　各種団体の方々が政党の責任ある役についてはいけないという点は賛成ですが、労働組合の婦人部の人も政党の役についていけないかどうか坂西先生のお考えを伺いたいのです。

坂西　これは組合によっていろいろ立場が違うのではありませんか。はっきりと組合自体が革新政党を支持してる場合があります。それでしたならばそこから選ばれる人ははっきりした政党色をもっているでしょうね。ですから私の言っているのは一般の婦人団体の場合であって、最初からもう組織の上において政党色をもっているところは各自の自由。それからもう一つ私が付け加えたいことは、一般に民主的な方法によって選ばれた会長は政党の幹部になったり、あるいは役を引き受けてはならないということ、これは皆さんが同意なさいましたね。しかしながら或る団体で会員には保守の人も革新の人も入っているが、その会の人たちが民主的な手続きをとって、会長でありながらなお政党の役員も引き受けてもいいという意思表示を正直に公平になさった場合は、私たちは何も批判することも攻撃することもできないのです。これはグループの決議によることがほんとうの民主主義のやり方だと思います。

（閉　会）

第四部会　農村の社会生活をたかめるために

出席者

北海道　山口栄子（生活改良普及員）
福島　猪俣よし（学校用務員）
茨城　沢辺喜美子（農業）
栃木　宮田利枝（市教育委員）
新潟　高橋キミ（教師）
山梨　土屋里子（町教育長）
長野　桑沢隆子（主婦）
鳥取　小倉きよの（主婦）
香川　櫛田コニキ（主婦）
愛媛　徳永たつ子（村教育委員長）
福岡　浜田賢香（主婦）
宮崎　飛弥生（生活改良普及員）
秋田　桜庭善悦（農業）
島根　小川個次（農業）
リーダー　東京農工大学教授　大谷省三

農村の生活のあり方をかえていくために協同活動で何ができるか

大谷　皆さんのお書きになりましたものを拝見したのですが、それこそ片隅の、人の目につかないところで、たいへん意義のある仕事をおやりになっている点、敬服しました。そういった御経験をもとにして、協同活動で農村の社会生活をどのようにして高めてゆくことができるか、というような問題について、お話合いをしてみたいと思います。事柄がたいへん広範にわたりましてむずかしい問題を含んでいると思うのですが、農村の問題は、日本の社会の向上の問題の一つの焦点をなしているのではないかと思うのです。この部会で取上げる問題は、いわば新しい村づくりをするには、どういうふうにすべきか、特にそれを協同活動として進めてゆくには、どういう問題があり、どういうふうにしたらよいかという問題になるのではないかと思うのです。いずれにしてもすべての問題が関連しておりますから、切り離すことはできないかと思いますが、お話合いを進めてゆく便宜上、やはり一応問題を分類してかかったほうがよろしいと思います。そういう意味で、一応分類してみたのでありますが、大体二点に、しぼることができるのではないかと思います。一つは農村の生活のありかたを変えてゆくという問題。もちろん、これと切り離すことは、できませんが、もう一つの面は、農家の経済をゆたかにするためには、どうすればよろしいかという問題。そういった問題を解決してゆくために、協同活動はいかなる役割をはたすべきか、また、いかなる意義をもたされているか、というようなことについて、お話合をしてみたいと思うのであります。私はリーダーということになっておりますが、できれば皆さんがたの御経験を相互に交換する形で御発言を活発にしていただきたい。ただお願いしたいことは、自分達がやった活動の結果だけではなくて、むしろその結果を達成するに至った過程と申しますか、それに重点をおいて話をしていただきたい。そして、その活動の中で自分達が身をもって感じとったところの問題点というものを明らかにしていただきたい。

すべての問題は、みな関連がありますから、あまり細かく区切りますと、かえってお話にくいかと思いますので、最初に村の生活のありかたをめぐる問題を取上げることにしまして、その中で、特に村の因習と申しますか、古いものとたたかいながら、それを解決してきたという問題をまず最初に、取り上げてみたいと思うのです。最初のかただけは、私が指名させていただきますが、あとはお互いに、活発に御発言願いたいと思います。最初に問題を出す意味

で、浜田さん、お願いします。

交際の近代化

浜田　私たちが行っております協同活動のテーマは、交際の近代化を図ろうということです。この動機となりましたのは、私達の町は六割が炭坑で働いているかたですが、その中から純農村地区――封建性の強い、昔から家柄を重んずるとか、地位を尊ぶとか、そういうこだわりの強い純農家だけの部落を三地区選びまして、そこで私達の生活に無駄はないだろうかという問題から取り組んでみました。皆さんに聞いて出していただきましたら、いちばんたくさん出ましたのが、時間励行の問題で、次に交際費のことでしたので、時間励行はちょっとおあずけにしまして、交際費の問題にとり組みました。農村の交際の基盤は、義理とか、人情に流れた交際が多いこと、昔からのしきたりのままの交際が家庭の経済に占める地位の大きいことを皆さんと話合ったのですが、新しい人間関係におけるお互いの付合いを確立するために、どんなことをしたらよかろうということから始まり、現在までの歩みと、昨年の七月に、五月と、六月の家庭の交際費を調べて出していただきました。三部落、百五十世帯その中、八十四世帯分出していただくことができました。その結果、一世帯の一ヵ月の平均が千四百四十円ということになりました。これは農家の収入からみますと、可成の比率に上るのではないかということになり、それでもう一ぺん座談会を開き、こんどは男性の方も加わっていただいて、いろいろ話合いましたところ、問題点として出ましたのが、農村特有の品物によりますお付合です。つまり、米とか、御飯とか、それが金額に現れていないということ、それから四月、八月、十二月という一番支出費目の多い時期を考え、平常月の支出は、もっと引締める必要があるということ、お互いに困る困るといいながら、なんの話合いも行われない。この問題は部落毎に話合って、協同の力で、それを是正してゆくよりほかに方法がないということになりました。それから実際活動として、調査をした三部落の婦人会で、具体的な問題をとり上げて話を続けたのですが「栄重」という重箱の五倍も、六倍もあるような、大きなものですが、それをお祝いとか、仏事とかありますと、親戚や、お付合の家に、お餅をついて、もってゆくわけです。その「栄重」をやめようということ、次に、お祝いやら、仏事に対するいっさいの返礼を廃止しようということ、三番目には、お茶のみといわれている郷会風にいえば、結婚式の披露宴です。お嫁さんの来た家では、隣り近所や、ごく親しい家の主婦を招待して、お嫁さんの顔見知りの意味でお茶のみを行います。この趣旨はいいのですが、実際に呼ばれて参りますのは、その家のお姑さん格の年輩のかたが多くて、ややもするとお嫁さんの品定めという傾向が多いのです。そこで顔見知りの意味だったら、あとから挨拶廻りすることによって、目的は達成することができますので、これも廃止しようということになりました。四番目には、小学校、中学校の修学旅行にゆく際の餞別の廃止です。子供が旅行にゆきましても、餞別をもらったために、おみやげを買うことに負担をおぼえて、一番それを気にするそうで、とても可愛想だという話を先生からお聞きしましたので、これの廃止ということです。しかしただいまこれを全部、私達が実行しているということではありませんで、おいおい進めつつあるというところです。

小倉　交際の近代化ということについて、私は出発するほんの間際に、若いお嫁さんから、若い人たちのグループで、お祝いなど親戚とのもののやりとりを一挙にやめてしまおうという話合いをしているのだ、ということを聞いたのです。たとえば、その一つの例として、その人の家では今年、綿羊をよく飼って、五ポンドの毛糸ができた。これをみんなで話合って、おじいさん一ポンド、主人に一ポンド、おばあさんに一ポンド、嫁さんに一ポンド、子供に一ポンドというふうに分けた。ところがおばあさんが、私にもう一ポンドくれないかと要求した。なにになさるのですかと尋ねたら、よそにやっている自分の娘にやりたいという。それでいろいろ家内で検討した結果、あれは決して生活に困っていないし、そういうものをやる必要はないだろうということになった。ところがおばあさんの提案は、今年に始まったものではなくて、ここ数年来、その娘にやりたいから、私にもう一ポンドくれという要求が出続けだというのですね。それで交際の簡素化を図ろうということは非常にいいことだけれども、あまりそのこと一本だけを見つめて、ほかのこととの連携といいますか、それによっておこってくるいろいろなかかわりを一つも考慮に入れずに、そのことだけに邁進することは、一寸危険ではないだろうか。帰ったらもう一寸話合いをしましょう、といって出かけてきたのですけれど、交際の近代化ということは、いいことではありますけれど、非常に慎重な考慮をしないと、いろいろな面に差障りが出てくるのではないか。そのために家庭内の摩擦を呼ぶような場合もかなりありうるということを心配したわけです。

浜田　私共も、絶対に強制的に進めようとは思っていません。あくまでも皆さん達の話合いで、少しずつ進めていく、一年とか、二年で、これを達成しようとは考えておりません。いま各支部に呼びかけているのですけれど、ある

支部長さんが、支部の会でそのことを話したら、お姑さん格くらいの年輩の人が、そんなことをいっても、いままでお茶のみに呼ばれているから、こんど自分の家のときに呼ばないわけにいかないといった。そして若い支部長さんがみんなで話合って決めて、罰金でもとるようにしたらいいというように、短兵急に出たら、年輩の人が「そげなことせならんことなら、婦人会はやめる」といったというのです。若い支部長さんはそれでペシャンコになってしまって、私のところに来てその話をしたのですが、私はそう無理に進めないでもいいといったのです。その話を切り出しただけで、その気持のある人が、何人かで話合って、お茶のみに呼ばれてゆくことをやめるというようにすれば、自然あらたまるのではないかといったのですが……。

士屋　交際の近代化ということは、男の方の協力がないとできないということを、私は自分の隣組のグループ活動で、つくづく思ったのです。私共の隣組では、第一番にとりあげたのが病人の床上げのお祝いです。病気でたくさんお金を使ったあげくに、また床上げのお祝いだというと、病気がなおるまで病人は心配のしどおしです。この床上げのお祝をやめるについては男のかたが非常に協力してくださり、結局全部廃止し、ずっと実行されております。しかしただ廃止だけではいけない。やはり感謝の気持を現さなければいけないというので、お餅をつくというようなことではなく、葉書五枚、タオル一枚程度のものをもって、お心配をおかけしましたといって、お顔出しだけはする、ということで、ずっと十年くらい続けております。やはり短兵急にはできないことですけれど、女の人の申合せ事項に、男の方の協力を得ますと、案外スムースにゆくし、またそれを大きな範囲でとり上げるよりも、一つの隣り組くらいですと、話合いがうまくゆきますので、私共のところでは、それに成功しております。

浜田　私のところも、話合いに男性の方も加わっていただいてはおりますが、こういうこともあります。女のほうが、まあこのくらいでいいだろうと、封筒の中にお金を入れてやる、そうすると男の人があけてみて、これは百円しか入ってないから、もう百円入れてゆこうとまた、入れ添えてゆく、これは男の見栄でしょうが、やはり男の協力は大事なので、これからは男の方への呼びかけもしたいと考えております。

吉田　私共の場合、新生活運動を展開しますのに、男性の無理解ということが一番難儀になっております。皆様はいかがでしょうか。

猪俣　男性の方の理解がうすいということは、どこでもあるのではないでしょうか。私の部落でも、迷信から、井

戸がなく、その他農作物なども作れないのが何種類かあったのです。それが農作物のほうは、必要に応じて、いつの間にか誰かが村で作っておりました。それですから別に迷信といっても自分の力で、いつか解決していたというわけです。ところが井戸というのは、私のほうでは地下水がずっと低いせいですか、ずいぶんお金をかけても出なかったのです。そういうようなところから迷信と結びついたのではないでしょうか、私のほうでは、水田の灌漑用水と、飲料水と一緒に使っておりましたので、集団赤痢などが出まして非常に困りました。

井戸を掘るにしても、単作地帯で、一町一反くらいの平均反別ですから、生活は楽でないので、一銭のお金だって男の人は出したくない、そこを女どうしの話合いで月に二百円ずつ出そうということに決めたのです。これが決まるまでには、何度か話合いをもちましたが、集らなくて苦労したり、かげ口をきかれたりして、会がこわれ、こんな私のようにガムシャラのが泣いたりしたこともありました。男の人たちは女で何ができるかと傍観的な態度でしたが、それでも二百円ずつ積立てを十八ヵ月ばかりやって井戸を掘ったのです。その井戸を掘って水が出たときには、はじめて男の人も、これは男のほうでもなんとかしなければならないということになり、それから心よく二百円ずつお金を出してくれるようになったのです。

大谷　何戸でやったのですか。

猪俣　部落は三十戸ですが、積立てに入りましたのは、十九戸、月二百円ずつしますと、三千八百円になります。十八ヵ月ばかりかかりまして、月賦で井戸を掘ったのです。掘るのは井戸屋さんにお願いしまして、十一軒掘りました。

大谷　たいへんいいお話ですが、先程から男の人の理解と協力がなければ、なにをやってもだめだというお話だったのですけれど、結局、男の人の協力を得るということ、それには理窟をこねてみてもだめで、その大きな壁をどうして突き破るかということではないかと思います。しかしいまの猪俣さんなどは、その壁を突き破って来られた一つの例だと思うのですが、幸いに男性のかたが、お二人出ていらっしゃるので、そういう点について桜庭さん一つ。

桜庭　いままでの話を聞いていますと、だいぶ男性が無理解のように聞えましたが、私の部落は、男性も女性も仲がよいのです。いつも男性と女性の、幹部の人達が、いろいろ相談して、具体的な事柄を決めて、協同活動の推進にのり出しております。効果があった一例をお話しますと、私の部落ではたるいれといって、結婚式の前日に五百円から千円ずつを包んでもってゆく習慣がありました。それが

貧しい家もあることだし、たいへんな負担になるといってこれを廃止したらどうかという声もあったのですが、廃止すると、農村の生活にうるおいがなくなるからという意見が出て、大体みんなの家庭経済に無理のない線を出そうではないかと、二百円ずつということにしたわけです。

小倉　男性の協力を得るという点について、非常におもしろい実例をもっております。それは私の村で、台所改善の際に、女がみんな寄り集まって、どういう方法で台所改善をしたらよかろうかという話合いをしたのですが、そのときに、実際に資力がなくて台所改善ができないという家は、ほんの僅かで、そこに心を向ければできるのだけれども、なかなか主人が、心を向けてくれないという状態が一番多かった。そこで私達は男性の方に、台所改善が実に必要なことだということを知っていただくために、一人ずつの男性を分担で受けもったわけです。つまり自分の主人を動かそうという運動を始めたのです。みんなが家に帰って自分の主人を動かしさえすれば、どこかでまた、その主人達がきっと話合って、なんとか力を借してくれるだろうということに目をつけたわけです。みんなが自分の家に帰って、それぞれ何日かかかって、主人に台所改善をすることを納得してもらった。けれどもいろいろ事情があって、気勢が揃わなかったのですが、そのうちに村の収穫祭の日に婦人会でなにか余興をやってくれないかという村からの注文がありましたので、二十代、三十代、四十代と三つのグループに分かれて、いろいろ余興をやったときに三十代のお嫁さんが、なにをしたらいいかわからなくなって、普及員の方から習った台所改善の歌を歌ったわけです。それにいいかげんな節をつけて、収穫祭の壇上で、みんながおどりました。「昔ながらの台所、さぞや嫁さんつらかろう」という歌でおどったのです。そうしたら主人達が、すっかりそれに感激してしまって、これほどほしがっているものならなんとかやろうということになり、それから三日目の村の常会で、毎年ダキ木を作るためにわけ山をしているのですが、この頃では割合、木を使う人が少くて、ほかの燃料を使っているようだから、あの木を炭やく人にでも売って、そのお金で台所改善の資材を買ってくばってやろうという話が、だれの口からともなく出て、満場一致で可決したのです。そのために、今年はダキ木はいりませんといっていたのが四十二戸ほどあったのですが、その四十二戸に改善の資材がガラスとか、レンガとか現物で渡されましたので、一ぺんに四十何戸の台所があかるくなって、そのことを二年続けていただいて、完全とはいえませんけれど、暗い台所をなくしてしまった。非常にこれは有効であったと私達は喜びました。

巽　ある開拓地で学校給食を実施しておりますが、なにぶんにも開拓農家で、現金を出すということが苦しい生活なので、毎月の給食費をなんとか苦しまないで出す方法はないだろうかということで、何回か話合いがもたれた結果、給食畑というのを、一人当り三畝ずつもつことになったのだそうです。そこに、サツマイモを植えまして、秋の収穫時期になりますと、婦人会長さんの家に全部集めて、農協に連絡をとっておいて現金にかえ、給食費として年間貯金しておくというわけです。男の人がそれをみて、女がえらいことをした、男もまけられない、というわけでこんどは主人側は、税金畑というのを作ってとれたさつまいもを組合長さんの家に集めて、農協に渡して、税金をちゃんと納めているということです。

桑沢　私のはいい例ではないのですけれど、男でも、女でも、年とった方の中に、頭がこわくなってしまったというのですか、絶対どんなことをしても受けつけないという層があるのではないかと思うのです。私の村では、ほとんどの家が台所改善を進めてきていますが、それをじっとみていますと、年よりが亡くなったから、さあ若い人達だけでやろうという家がとても多いのです。私のところでも、年よりがおりまして、若いものがやりたいことに理解がないのです。年よりに話合いが足りないのだということを、しょっ中、いわれているのですけれど、いくら話しても話してもどうにもならないのです。全エネルギーを傾けて話しても、まだ理解しない。そんなことにエネルギーを消耗してもいいものだろうかということを考えたりしましたが、年寄りがだんだんよわって来て家の中の発言力がなくなってしまったものですから、いまでは台所改善というものもできたわけです。またお隣りでも、同じで「あんたのところは、年よりが弱ったからいいですね、早く家でも弱ったらいい」とお嫁さんが真実の声をいっているのです。

大谷　沢辺さん、あなたのところでは大人と青年の相互理解はうまくいっていますか。

沢辺　やはり桑沢さんがおっしゃるように、男の大人の人達の無理解から、私達の会自体がこわれる一歩手前の状態になっています。それは、私達が部落からカやハエをなくそうとしたことからはじまりました。それというのは、私達の部落は、養豚の盛んな部落でハエが多く夏の子供のひるねなんか可愛想で見ていられないのです。なんとかしましようというので、女四人、男八人で組織している農事研究会で話合ったのですが、こういう仕事はとても私達だけではできるものではないというので、部落の婦人会、青年会に呼びかけたのです。そして近くの保健所から専門の方をお招きして、害虫の被害とか、発生場所とかについ

て説明会を開いたのです。そしたらぜひやろうではないかという賛同を得て始めることになったのですけれど、実施してみたところ、実際容易ではなかったのです。青年会と婦人会と私達の会の中から実行委員というものを組織して五月から十月まで、毎月三回ずつ十八回行い、とても効果が上りました。しかし一年ではだめだから、これからもぜひ続けようと、反省会で決めたのです。それにはなかなか費用もかかりますので、経費の一部を町の予算に計上してもらおうではないかということで、五万円の予算を獲得したわけです。それから私達ばかりではどうにもならないから、部落の問題にしようということが、婦人会と青年団と話合ったときに出ましたので、部落の常会以前に、常会長さんを通じて、前もって納得を得たわけです。ところが部落の常会で、どうしたことか、火の見櫓の建設と、部落の小使さんの家を建増すために、予算が要るから、これはやらないでくれということになったのだそうです。部落から出ている町会議員さんや、婦人会長さんや、私達が夜も昼も、そのことばかりで奔走して歩いたのですが、どうしてもいまのところだめなのです。

土屋　男性の協力を求める問題にしろ、年寄りとの話合いが、うまくゆくか、ゆかないか、また中年の人と青年との話合いがうまくゆくかどうかということでも、結局私は協同活動をするのに一番大切なことは、本当に心のつながりをもてるようなグループを作るということが先決問題だと思うのです。私達の隣組では、その心のつながりをもつために独自のグループを作ったわけです。それこそ一年に一度も本なんか読まないというおじいさん、おばあさんも混ぜて隣組の人達が二十軒入った読書グループを作って、県立の図書館の分館から、毎月本を二十冊ずつかり出してきます。昭和二十七年から続いているのですが、毎月五日の無尽会に本の入った行李をもちこんで、そこで本の交換をするわけです。そういうように無尽会なり、読書グループなりをもって、毎月の集会で、仲間作りをしておけば、先程の交際の問題にしても、生活改善ということでもスムースにいきます。私達の組では、簡易水道や台所の改善もなんのわだかまりもなくできたわけです。読書グループというのは、本を読むことそのものも大事なことですけれどそれを通して組の人が親しくなるということが、協同活動する上の一番大事なポイントという気がしまして、その読書グループを一生懸命しております。はじめはおばあさん達が本を交換するのに図書館に行くことすらいやがったのですが、交代でいってみましようということで、はじめは私が一人一人お連れしました。その後毎月の当番制にしましたら、みんな責任を感じて、どんな忙しいときにも、二時

間や、三時間の余裕をみつけて、本の回収、交換をやるようになりました。そうすると人々によって趣味が違いますから、いろいろな本をえらんで借りていらっしゃる。それが五年間続いたわけですが、いまはそういう読書グループが、村全体に十一もできました。協同活動の一番の根本は性急にその目的だけに走らずに、仲間作りの方法を考えるということが、問題解決のいい方法ではないかと思います。

高橋　私のところでは、やはり読書会ですが、いままで一銭も経費を会からもらわない。てんでに買った本をまわすわけです。私のグループには「文芸春秋」なんか二十年以上も続けて読んでいらっしゃる方もあれば、そんなものみてる間もないという方もあるわけです。そういう方のところも、やはりまわるのです。そうするとその方は手の上にのせて、重さだけみてお次に「はい」とまわしてやる。また赤線ひいたところだけ目を通して、まわす方もあるし、忙しいときは、今日来た本は百八十円だと、定価だけみてまわす方もある。ところが私のところでは、十五日会といって月の十五日に集まるのですけれど、そのときに「百八十円の本はなんだったろうな」ということになる。そうすると詳しく読んだ方が「あの中には子供の躾の、こういうことが書いてあって、あれはお宅の坊やの、こういうところに利用したらいい本だった」というふうに語合う場ができる。奥さん方の話を聞くと、読みたくて読みたくてしようがないけれど、いそがしいものだから、公民館に行って、自分で選択することができないので、そういうふうにグループ重さをみるような程度でまわしてもらうことも、たいへん効果があるそうです。

山口　北海道は、皆さんのおっしゃるような因習のようなものは、比較的少いというよりはいろいろな出身県の因習がいまのところごっちゃまぜになってきておりますから別に大きな問題ではありませんが、私、自分の仕事上（生活改良普及員）考えますことは、農村の場合、非常に土台のできておらない農業生活とか、農業経営というものが、いままであったのではないかと思うのです。農村の各地をまわっておりまして、私なりに考え出したことは農村の人々がもっと科学的になるといいますか、一プラス一は二になるというようなことを自覚して、その中から積み上げた生活のたてなおしということを考えなければいけないのではないかと思うのです。私のいるところは都市に近いために、農家のかた達が、町にあこがれようとする。また北海道では、半年働いて、あとの半年は遊んで暮すような生活なものですから、非常に刹那的な気持が強いのです。そういうことが作用して、生活がぐらつきやすい、その上三年か、四年毎に凶作があり、おてあげしてはなんとかしてく

れないかと泣きつくような状態だったのです。生活をもっと科学的にしようということになり、私のところでやり出したことは、体重を計るということです。一家の人がみんな毎月二度、十五日と三十日を体重測定の日にして、大きなダンプ用紙を役所のほうから買ってもらって、それを渡して働く人の体重を書かせたのです。そうしたところが、夏忙しいときに一番体重が減るのがお母さんです。お父さんとか、若い農子達は、比較的減り方が少い。非常に女が過労だということがわかったのです。体重測定ということは、それ以上大きな発展をのぞまないでやってみたのですけれど、その結果が意外にも、お母さんが非常に過労だということは、経営のほうにいろいろ無理があるのではないかということになりまして、部落の常会のときに、どうして女がこんなに過労なのだ。うちではお母さん、そんなに働かせていないのだが、ということで、経営の合理化ということを一緒に勉強しました。また、保健所のほうにお願いして、健康診断をしてもらうというふうなこと、若い人は若い人でこれはやはり自分達が、ただお父さんの言う通りにやっていればよかったのではない。もっと農業の新しい知識を得ることが必要ではないか、そのためには共同の力によるということ、例えば北海道の場合、非常に機械力が入っているのですが、なかなか買えない人も多い、そういうものをみんなで買って利用するという段階に進んできているわけです。また一方では食物の不足ということから人参や、ほうれん草を作ることをはじめました。あちらのほうは土地がわるいので、ほうれん草のできるところは比較的少いのですが、石灰を入れるということをやり、水田地帯にも青々とした、ほうれん草ができるようになりました。体重を測定してそれを書くということが、このようなところにまで拡がっていったというのが現在の状態です。

柳田　私のほうは、農家の婦人会のかたが、季節保育所を作ろうということを相談しました。私の地区は、市内ではありますが二割が非農家、あとの八割が農家でつまり約五百軒の農家があります。農繁期には、農家は朝晴いうちから、夜遅くまで、農作業に没頭している関係上、子供の躾や養育などは、ほとんど放任といっていいくらいです。子供が川や堀に落込んで不幸をみることさえ度々ありますので、私共非農家のものが、公民館の主任さんに季節保育所を開くことを提案したのです。そこで保母の希望者をつのったのですが、希望者はたった一人しかありませんでしたので、公務員の奥さんとか、鉄道員の奥さんとか、そういう出やすいかたをいもいち訪問して協力をお願いし参加していただくことになりました。私は、保育所をやった経験はありませんので、近くの保育所に二、三回見学にゆきそれを参考にしてやってみましたが、無事に第一回を終えまた秋にもいたしました。はじめは四才、五才の子をあずかることにしておりましたが、最近になって本当にお母さんにとって、厄介なのは乳呑子だということが、反省会のとき出ましたのでこの頃は乳呑子もあずかっております。お乳はお母さんがのませに来たり、遠方のところは、われわれが子供を背中に負うて、お母さんのところにいって、お乳をのませて、また帰えるというようないろいろな苦心をしております。施設の方面にも、非常に不便をしておりますが、市のほうからオモチャとか、エホンとか、ブランコの綱など借りたりしてやっています。とにかく私達保母は、一日どのように子供がたのしく過ごせるかということに非常に苦労しております。大体子供は、多いときは四十九名、少いときは二十四名、平均しますと三十五、六名になりますが、収穫のとき一週間、田植のとき一週間を分けて二週間開設しています。

大谷　貴重な御経験を聞かせていただいているわけですが、時間がありませんので、先に進みたいと思います。最初、交際費から問題が出たわけですけれど、それに関連して、なんといっても農村で一番の問題は一般的にいろいろ農村の経済状態がよくなるにつれてどうも最近、結婚のための出費が、いろいろな形でふえているような傾向があるのではないかと思います。これはいわば生産力をあげると申しますか、経営を強化して、そして収入をあげて、農家の経済をゆたかにするという点からいうと、死んだ金になるわけですが、こういった形でたくさんのお金が使われているということには、非常に大きな問題がある、先程からのお話で、部分的にはおふれになったけれど、たとえば祭重の問題とか「たるいれ」の問題とか、娘さんの嫁入支度の問題、そういう問題もひっくるめてもう少しとり上げてゆきたいと思います。

結婚の問題

巽　高千穂のある部落ではいま結婚簡素化という問題にとり組んでおります。焼酎の名産地なので、それこそガブガブのむ習慣があって、式が済んで夜があけるまで、男のかたがのんでいる。それを公民館活動にもっていって、酒という問題をとり上げ、ある一定の時間だけのんだら、お酒が残っていようが、いまいが、ごはんを出すようにするという決議文を婦人会のほうで作りまして、青年、婦人男の方、みんな一堂に集まっていただいて一日、公民館研修会をし、そこで決議文を読まれたわけです。まだ実行に入って間がないので、本当の結果というものは出ていませんけれど、夜も十時以後はお酒をのまないということがは

っきりいわれておりますし、実行されつつあるそうです。それから、お嫁さんのお正月の挨拶まわりですが、結婚式のとき、すでにしてあるのにまたお正月に、部落中をまわるのでお嫁さんがつかれて、ヘトヘトになるので、これもこの際一緒に改善しようということになって、両方の親の家と、仲人さんだけまわったら、それでいいということにしました。それから祭壇のように、あんなに大きくないのですけれどやはりそのような習慣があり、ツマブクロというのが昔からあるそうですが、そういうものも一緒に廃止する。そして部落中でのみくいする費用を減らして少しでも若夫婦のために、台所改善とか、隣りの町までもいいから、新婚旅行に出してあげるという話合いが出て、三、四組実行されています。

小川　島根県は、因習の強いところですが、いろいろ青年と婦人の会というものはもたれています。ある町に青年と婦人の懇話会というものがありまして、なんとか結婚式を簡素化しよう、それにはまず自分がやろうというので、青年団長がやりました。二十円の菓子の包みで、ただお茶をのむだけ、知合いが二百人くらい、学校の講堂をかりて校長先生が中心になってやられました。しかしこれも、三人くらい続けてやらなくては、とにかくはじめの人は笑われる、忍耐強く三人くらい続くと、これはいいなということが、みんなにわかって来る。ですからなんらかの形で、一つでも小さなことから実行してみる。その中から協同の力というものが、たしかに必要だということがわかると思います。

山口　札幌郊外でのことですが、今年の春、お嫁さんを出すし、息子さんにお嫁さんをもらうという家があったのです。出すし、もらうから、お父さんは土地を売らなければいけない。なにしろ北海道はおとしからずっと凶作で、非常に借金があるので、土地を売らなければ経営が出ないということをもらしたのです。それを聞いた息子さんは、自分のお嫁さんをもらうために、親父は土地を売ろうとしている、自分は本当にいいお嫁さんが来ても借金を負わせることになるから、なんとかしてくれないかということを、お隣りの家にいいにいったのです。それから娘さんは、私がお嫁にゆくので、いろいろなものをうちで買ってくれるというけれど、私はお金でもってゆきたいのだということを、婦人会と青年の討論会のときに、堂々とみんなのいる前でいってしまった。そうしたら、それを聞いた人達が本当に気の毒なことだから、私達がなんとかしなければいけないということになり、そこの家の近所の十四戸のかた達で、申合せ事項というものを作ることになったのです。そのときに私にいろいろ相談されたのですけれど、そ

れまで私自身は、そういうような申合せ事項というものを決めるよりも、もっと日常の躾しをゆたかにする方向にみんなの気持を向けてくれさえすれば、そういうものの費用というものは考えないだろうと、撰を向いていたのですけれど、今回は相談にのりまして、お酒は二合まで、宴会時間は二時間、その他いろいろな事項を決めてやりました。そして三月に結婚式があったのですけれど、お父さんが涙を流さんばかりに、自分の家はどん底に落ちこもうとしたところが、おかげで助けていただいてありがたかったと、部落の人々に感謝の気持を現わしておりました。結局これは若い人が本当に、自分達の将来のことを思った場合、自分も幸せになりたいなら、やはり両親に苦労をかけたくないという結果が、こうなったと思うのです。そのほかにいま町のほうでは、会費制の結婚式というのがずいぶんありますけれど、農村でも、だいぶやるようになってきています。大体三百五十円程度で、一切まかなって最後に花嫁さん、花婿さんのために、お祝いものをあげるというところまで進んでおります。ですから若い人の力を、もう少し盛り上げるようにすれば、案外、結婚の簡素化ということはできるのではないかと思います。

高橋　山の中にいる先生の話を聞いたのですけれど、その学校の校長先生が、公民館長で、いまのような話を、村でとり上げてやろうとお考えになって失敗した例です。先程、長野の桑沢さんから、熱がある、動かそうと思っても動かない人があるという話で気がついたのですが、そこの部落で結婚式の改善をはかろうと校長先生が、村の人に呼びかけたところが、大反対を受けた。どういう風の人が反対したかというと、当然それを喜んで受けてくれなければならないかた達が、こぞって反対した。そしていうことには、村には婚礼でもなければ、二日も三日ものんでさわぐ機会がないというので、校長先生がとまどったというのです。ところが、とまどったのはまだいいのですが、なにしろそういう人の数が多いから、校長先生の排斥のような形になったというのです。いままでは何百年か知りませんが、二日も三日もかかってのみくいしていたものを、一、二年の間にいっぺんに、ガラリと近代的なやりかたに変えようとするところに無理があったのかもしれませんけれどそんな話を聞いて、当然支持しなければならないかた達をいかにして協同活動で因習を打破するような方向にもっていけるだろうかということを感じたのです。

吉田　私も結婚改善では、ここ十年間、いばらの道をあゆんだ一人ですが、このほどやっと実が結びかける段階に参りました。まず衣裳の問題では、衣裳そのものが、すでに精神的なものを決定づけているというような考え方から

私は十年間、カッラを伴う振袖衣裳から脱却しましょうという運動を続けて参りました一人ですが、なんとしても牢固としたかたくななものがあり、なかなかむずかしく、しょうと思って勇気を出したかたも、そのかただけに終って二人目が続かないのです。皆さんにもお伺いしたいのですが、よく婦人団体がはこらかにおっしゃることは、私の村では共同衣裳をもっております。ということだけにとどまっているということです。共同衣裳をもっているということは、カッラをかぶらなければならないという前提で、これでは本当の衣裳改善にはならないと思うのです。自分の個性にあったいでたちで、お母さんにゆってもらったそのままの髪型で人生を門出しましょうということをいっても隣りの村から借りる、そして皆さんが、この村だけに貸衣裳がないから、非常に不経済だということを云うので、私は非常に苦しみましたが、その結果、この三月の九日に、みんなに申し上げたりPRしたりする前に、考えていただきましょうと思って、ウェディングドレスと、スーツにベールの衣裳と、それから白いちりめんの花嫁姿、それからどうしても振袖を借りたいという人のために、カッラだけはかぶらないということで一歩前進させた振袖姿を用意して、これらのショーをしたのです。髪型も婦人団体で研究に研究を重ね、それぞれの衣装に合うように生れながらの髪をいかした髪型を作りました。このショーを見ていただいて、考えてくださいということを有線放送で予告しまして、村初めての大きな催しをやりました。これは演出一〇〇%の効果をあげ、村はじまって以来の人出でした。それから、よくもあんなカッラにたいへんなお金を出して、重くて、おじぎ一つできないような姿で門出したものだということにやっと気がついたのです。そして、スーツにベールという簡単なものにまでは飛躍しませんけれど、その前段階的な、一つの飛躍ができたと思っております。挙式は、生活館の管約結婚の形式を、私共の地域社会に合うように編成して、すでに数年前からやっております。それから披露宴も、全部で一時間でできる方式をすでにやっております。調度品もスライドでのぞましい簡明な調度の形を皆さんに啓蒙して、おもちゃのように安っぽいものを一通りとのえることが能でないという意識の改善を図りつつあるわけです。

森　私共も婦人会で結婚改善ということを、三、四年前から、鳴りもの入りで宣伝し、モデル結婚式までやったのです。うまいことゆくだろうと思ったのですけれど、失敗したのです。それというのは、やはり下から盛り上らないうちに、形式を押しつけたからで、これではいくらやってもだめだということを深く体験したわけです。こんどまた、

公民館活動として、再びいまとり上げております。協同活動というのは、小さなグループで実績をあげてゆくというのがいいと思いますけれど、この結婚改善だけは、小さなグループでは実現しない。霞城と香川の綜組もありますから、広い範囲で、とり上げなければならないのではないかと思っております。公民館活動としてやっておりますので女あり、男あり、若い人あり、年寄りありで、結婚改善推進委員というものを作り、挙式とか披露なども、ひと通りとのっております、結婚前のいろいろな贈答なども、規約を作っております。しかし、これだけの規約を作ってやってみても、前よりはましだろうと思います。それから心を切り換えればできるという実例をあげてみます。私のいる小さい町でせんだっても結婚式があったのですが、非常に割切ったかたで、お茶とお菓子で、お酒抜きの結婚式をやっておりますし、また公民館で式を挙げさせてくれといって、立派にしているかたもあるのです。だから要は、形式ではなくて、心の切り換えだと思います。人づくりということで根本なので、どうしたら人づくりができるか、正しい協同活動の場で、どういうふうにやってゆけば人づくりができるかということを、皆さんと一緒に考えさせていただきたいというふうに思って参りました。

大谷　たいへん大きな問題になってきたわけですけれど結局、グループではやりきれる問題ではない、といって、これは放棄しておいていい問題ではないと思います。先程高橋さんから、実例を通じて大きな問題が出されました。つまり喜ぶべき人達がかえって反対するという問題です。なぜそうであるかということ、これがやはり協同活動を発展させてゆく上で、突込んで考えてみなければならない問題ではないか。問題はたまたま結婚改善という問題から出てきたのですけれど、協同活動をはばむ一番大きな壁というものが、非常に具体的に現れているのではないかと思います。私をしていわしむれば全国ほうぼう歩きまして、先程からお話のように、とにかくあちらこちらで改善の芽は出ているけれど、全国的にみますと、大体農家らしい農家は、一人の娘さんをお嫁にやる場合に、依然として、二十万、三十万使っているという現状です。それに披露宴などを加えますと、一つの結婚式に数十万の金を使っているという現状です。農家は貧しいといい、生産設備にまわす金がないといっておりながら、なおこういうことをやっているわけです。北海道の方が例を挙げられたように結婚させるために土地を売らなければならない。日本の農家にとっては、土地というものが基本的なものであって、これを手放さなければならないというところに追い込められるということは、一体どういうことなのか、それが一人一人はわ

かっておりながらやめられないのは、一体なぜかという問題。農家の人たちはみんなで協同して農家の向上をはばんでおられるとしか考えられない。なぜそうなるのかということを、ここで突込んで考えていただきたいと思うのです。

猪俣　私、これは先生にお話し願いたいと思うのですけれど、農村の因習というのは、自分自身で、これが因習だと思っていましても、自分で破れないというところに問題があるのではないか、また気がつかないでいて、こういう生活が、いいとか、わるいとかを意識しないで生活してきているところにいろいろ問題があるのではないかと思います。それで因習とはどういうものか、またわれわれの生活にどういうふうに関係しているかということを、大谷先生からお話し願いたいのですが。

大谷　私のお話は、またあとでいたしますから……。

土屋　戦前は小作とか、地主の関係で本当に一部分のかたが、振袖の豪華な結婚式をする、それをうらやましいような気持で眺めていた小作の人達が、戦後は農地解放でむしろ地主階級のほうが、本当に生活はえらくなってしまったわけです。ですから先程、高橋さんがおっしゃいましたように本当に喜んでくれる人が喜ばないというのは、私、まだ本当の農村に触れてないのではないかと思うのです。長い間、振袖姿の花嫁衣装にあこがれていたお母さんは、こんどはなんとかすれば、そういう仕度が自分の子供にもできるのではないかということが、気持の中に動いているのだと思います。ですから結婚の改善ということを叫んでもなかなか実行されない。母親の気持にもそれがあるし、娘の気持にもそれがあるわけですね。ですから田舎では、大学にでもいったような子供は結婚の改善などといわないでも、ものを欲しがりません。高校くらい出たばかりのお子さんは、ものすごくものをほしがるのです。その様子をみましたときにまだまだ本当に教養を高める活動が、徹底していないから、こういう結果になるのではないかと思います。結婚式というものは、やはり一生一代のことですからみんなで立派に祝ってあげたいのですが、一般のお母さん達には、どういうふうにすれば、精神的に、本当にお祝いをしてあげられるかという方法がわからないので、お醤の立派さより以上にできないわけです。公民館活動などで、結婚式というものに対する認識を改めるように、もっともっと啓蒙を続けなければ、五年や、七年の啓蒙では、まだまだ足りないという感じですね。それを諦めずに、もっともっと積み重ねてゆくことが大切で、現に私共の町では、公民館を作るときに、たたみの二間続きの部屋や、応接間を作りまして、その横に立派な鴨居を作ったのです。田

舎では、披露に朝から晩まで、二日も三日もかかることもありますが、公民館を使いまして、一時から二時まで式であと披露ということになりますと、一日で済んでしまいます。青年団長さんや、指導者のような人達の中から、そういうところを利用してやっていただいて、いわず語らずの間に、ああいう結婚式はいいなというふうに思われてきております。無理矢理にひっぱろうと、せっかちにすると失敗します。

浜田　農村のかたは、先ず自分をみつめる前に、世間体とか、人のことを気になさるかたが多いのではないかと思います。それを先に改善してゆかなければ、とても困難ではないかと思います。

大谷　最近、農村の娘さん達が、農家にお嫁に行きたがらないということをききました。近代化が進んで、かなり労働が楽になったということから考えれば、決して労働の過重が問題ではなくて、むしろ姑さんとの間の問題が問題だというお話があったのでありますが、しかしそういう傾向はあると思いますけれど、なおかつ農家のお嫁さんの労働が過重だということは事実だと思います。先程の山口さんのお話の農繁期に体重が減るということにも現れているように依然として今日でもそうだと思います。したがって労働の過重という問題と、それから古い家族制度の重みがお嫁さんのところにかかってきている。こういったことでやはり農家に生れながら、農家にお嫁に行きたくないという娘さんが多いのではないかと思います。私が調べたところでは、大体、若干の地方を除いては、七割から八割の娘さん達は、農家に生れながら、農家に嫁に行きたくないということをいっているわけです。そしてこれは娘さんだけではなく、両親も、できればうちの娘は農家にやりたくない。長野県で調べたところでは、八割まで農家に嫁にやりたくないという返事であったわけです。ところが長男の嫁は農家の娘でなければいかんという、これはまったく手前勝手なことだと思うのですが、そういうふうに娘さん達が農家に嫁に行きたくないといっているのに、結婚式だけには、ばかにお金をかける。私の聞いた実例では、ある家の場合は、相当経営規模が大きかったのですが、旧地主であったという関係もありましょうか。家の格ということを考えれば、やたらなことができないということで、結局、娘を三人嫁にやったために、没落してしまったという例があります。ところがこれは自分としては、こんなにまですれば、家がまいってしまうということを考えながらも、世間が許してくれないということで、とうとうそこに追い込まれたということを述懐しているのです。その村で助役さんの話を聞きましたところが、自分も娘をもっている、その

話を聞いてこわくなって、この地方で結婚さしたら、二の舞になると考えて東京の友人の家に娘をあずけて、どんなところでもいいから、とにかく君のところで嫁にやってくれと頼んだ、幸いに東京に縁づいたから、ほとんど金がいらないで済んだので、自分の経営は維持できたということをいっている。皆さんがたが、先程から御発言なすっている以上に現在の農村の結婚の問題というのは、重大な意味をもっていると思います。その重大さがなぜ気づかれないか、さっき申しましたように、みんなで足のひっぱり合いをして、経営の向上を阻んでいる運動をやっているということがなぜわからないか。それがやはり先程浜田さんが出されたように、自分逸の生活より、世間の目というものを、なぜそれほどまでに気にしなければならないかという問題、これが、せんじつめてみると、協同活動を阻む大きな壁につながっている根本的な問題ではないかと思います。そういう壁をどうやったら破れるかという点にしぼって、少し御意見を伺ってみたいと思います。

小倉　私は産当って結婚させなければならない娘を三人もっているのですが、どうして世間の親達は、結婚当事者の気持というものを本当によくきかないで、自分勝手な情熱をもやすのだろうかということを思うわけです。土屋さんからお話がありましたように、教養のある人が、すっきりと、お金のかからない、そして将来のためになるいい結婚をしているという事実は、青年に教養をもたせさえすれば、この問題は解決つくということの一つの暗示ではないかと思います。幸い私の子は大学を出ておりますので、この子供達の教養に信頼して、本当にこの子供達の興底からの声を聞いて、その心持にそうような結婚の形式をとってやれば、親が苦心する必要はないだろうということに、この頃、落着いたわけで。そういう意味から、私は青年の教養というものに力を入れて、この壁を突破っていただきたいと思います。

森　先程、先生がおっしゃった通り、愛媛県でも、娘三人嫁にやれば家がつぶれると申しております。それほどこの結婚の問題はガンになっておりますが、やはりその元は見栄をかざる生活ということから出ていると思います。ただ結婚改善だけではなく、生活全般にわたって、農村に非常に深くはびこっている問題ではないか。家の構造にしても、普段の食生活、衣生活にしても、見栄ということが第一です。それをどう切り換えるかということは、先程、土屋さんがおっしゃったように、非常に長い目でやらなければいけないということです。どうしても根本は人づくりというところにおかなければいけないと思います。人づくりができるということは、やはり人づくりができるような機構を作って、本当に人づくりのできるような姿で、お互いに協同してゆかないと、いつまでたってもできないのではないかと思います。ただ形式一点張りで、台所改善、というだけでは、それが一応でき上ると、さっぱり活動が止まってしまうという人づくりではいけない。生活改善もしなければいけませんけれど、どんな逆境の中からでも、自分で考え出し、一人の力で解決できないことは、みんなの力で解決してゆこうという態度の人を作り上げるということが根本問題ではないかと思います。結婚改善を例にとりましても、いろいろ方法があると思うのです。たとえば公民館活動の中で、委員を選び出してやるのも、一つの方法でしょうし、いろいろな形式を考えて、それをやらすのも一つの方法でしょうけれど、私共も婦人会活動で、読書グループもありますし、ペンを握る生活綴方グループ、そういう動きを通して、本当に結婚改善がどんなに大切なものであるかということを、お互いに考え合い、話合ってみる。そしてそういう機会を一度くらいもって、それでできなかったからといって、投げ出すようなことであっては到底成功しないと思います。また婦人学級では、視聴覚教育をとり込んでおります。スライドとか、文化映画とか、そういうものをみることによって、お互いに討論を続けてゆく、あらゆる組織を通じて、何度も何度も根気よく考えられていって、本当にものの考え方から変えてゆかなければ、これは実現できないのではないかと思うのです。

桑沢　どうしてそういう因習を打破ることができないかということですけれども、それはやはり要求するものが農村にあると思うのです。たとえば婚礼の問題にしても、二百円御祝儀をもっていって、三百円分も、四百円分もお酒を御馳走になって来ようとか、ただのみというか、もうけというか、そういうものを要求するものが、まだまだあると思うのです。だから改善したくてもできない。それは結局、森さんがおっしゃったように、人間づくりという問題にもなると思いますし、貧しさというか、経済的にもっと恵まれてくれれば、そういうような気持は、だんだんなくなるのではないかと思いますけれど。

大谷　経済的に恵まれてくればとおっしゃるけれど、戦後の動きをみておりますと、米価が高くなるに従って、結婚の仕度というものが、だんだん派手になってゆく傾向があるということ、つまり経済的に向上する可能性が出るのを、みんなで食いつぶすような習慣を作り出してゆくということ、だから、もっと豊かになればということでは、私は解決つかないのではないかと思います。戦前の農地改革以前には、農家は非常にみじめな生活をしておった。やっと農地改革後になって、とにかくいままでの圧力がはねの

けられて、一応戦前に比べれば、ましな生活ができるようになった。だからできる以上は、ここで反動的に、やりたいことをやってみたいという気持があるのではないかというみかたももちろんあると思います。しかし、米価が上がれば上るほど、そういったものに使ってしまうということになれば、いつまでたってもあがる可能性をくいつぶしてしまうと思います。だから豊かになれば、そういうことはなくなるだろうということでは、私は解決がつかないのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

吉田　先生が御質問なさいます点は、私もわかるのですが、しかしそれは、もっと深く掘り下げますと、結局、農村の貧困に起因するように思います。文化の低い未開の地の人ほど、冠婚葬祭には財貨を傾けつくして、ゴテゴテと二日も三日も、お酒をのみます。それは貧困ばかりでないものもありますが、やはり大きな意味での貧困だと思うのです。農村は過重労働で、女性は特にはげしいので生活に内容のゆたかさというものがありません。そのためなにかことがあると、せめてもの人生の寄びにつなぎとめておきたい、それにすがっていたいという意識があって、喜びごとではなく、お葬式にも喜んで馳せ参ずる――そういう傾向があるということは、私はやはり貧困ではないかと思うのです。その証拠には、婦人が学習を始めますと、考える婦人達は、冠婚葬祭をそんなに大げさにいわなくなります。考えない人達ほど、何代かに借金を残しながらもやるのです。ちょっと豊作になれば、その貧しさが反撥して、普段売されないものをなしとげてみようということで、柄にもなく大きな蔵を建てたりいたしますけれど、やはりいろいろな意味での貧困ではないのでしょうか。

大谷　その貧困とたたかう問題は、明日にゆずりたいと思いますが、貧困ということだけで結論を出してしまうともはやなにもいえないことになってしまうので、もっと掘り下げなければならない問題があると思います。具体的な例で、東京の近郊のことですけれど、娘さん達は農家に嫁にゆきたくないと云って、農協の組合長の表現によれば、ストライキをやったというのです。村の長男のところには嫁にゆかないという決議をしたのだそうです。それはやはりお姑さんの問題もあるけれど、過重労働が問題になっている。たまたま私がそこにいったとき、その話を聞き、座談会をやりました。そして結局、これは過重労働の問題ではなく、もう少し農家経済をよくするように努力することが根本ではないかということになったのです。それから四年たって、再び来てくれというので、ゆきました際にその中心になられた御婦人が、こういうお話をなすったのです。あの時を契機に、自分達は協同の研究会や、講習会を

開くようになった。そうして農業経営をどうするかという問題を考えるようになった。自分達はずいぶん苦しんだけれど、農協の援助を得て、多少とも機械化をやるようになった。それによって子供達の援助を得ないで、夫婦二人で十分に農業経営をやれるようになった。そして子供うは大学に出している。ある晩夕食のときに、長男が「もうぼく達のところには、だれだって嫁に来てくれるね」ということをポッと言った。次男も、本当にそうだということをいった。しかし次男が「だけれども妹達は可愛想だな、妹達はゆくところがないじゃないか」と、ここに一つ問題が出てきていると思います。貧困ということだけでは片付けられない問題があるのではないか。つまり貧しいなら貧しいで、それは限度がありますけれど、二十万、三十万使える農家では、借金したにしても、とにかくそのお金が借りられるわけですから。それで農業経営をよくしょうとする努力ができる。するとしないとでは、数年のあとに非常な差が出る。貧困だからということだけでは片付かない問題ではないか。農村がそういうところまで考えてくれれば、娘さん達が農家に嫁にゆきたくないという声を消す可能性も出てくるのではないか。そういうことは金の無駄使いということ、不生産的に金を使っているということになるのではないか。そこに問題があると思います。なぜそう困る困るといいながら、金をそんなに使うのか。高橋さんが出された喜ぶべき人が喜ばないという問題、それから浜田さんの出された見栄の問題、こういった問題を協同活動は乗り越えることができないかどうか。協同活動の限界の問題にもなってくると思いますが、少しふれていただけませんか。

高橋　喜ばれなければならないところで喜ばれないということ、また体裁にこだわって、わるいと知りながらも改善されないということの原因はいろいろあると思いますが、それらの原因を見つめて、そこから立上る協同活動というものを、考える必要があるしやればできると思います。それにはリーダーが必要になってくるかと思いますが、たとえば社会教育の場合にあたるかたとか、地域の小学校の先生のような人達が、上から「さあやるぞ」といってやるのではなくて、一人二人のおばさん、おじさんに話しかけた炉端の話が核を結ぶような下から盛上げるような方向にもってゆくリーダーがほしいと思います。それにはやはり、その人達に近寄って、したしめるような人達がいいと思います。もちろんそのリーダーも、またいろいろな問題があると思いますけれど、やはり要を得たリーダーをもてば、やってゆけるような気がします。

巽　長い習慣を一ぺんに改めるということは、本当にむ

ずかしいことだと思います。私達、4Hクラブのかたとヒザをつき合せて、一緒に勉強しておりますけれど、その青年たちは、自分達のお母さんが、もっともっと自分達と話合えるお母さんであってほしい、なんとかお母さん達の教養を高めてほしいということをいわれるわけです。そこで関係機関みんなで協力しあって、青年と婦人の話合いをしたりしています。教養を高めるということが一番大きな問題ではないかと思います。

私はもう一ぺん繰返しますけれど、人づくりということが根本だと思います。そのためには、いろいろなグループ活動をやることが必要だと思います。

土屋　人づくりの問題ですけれど、やはりグループなり団体の力を使わないとなかなかできないわけで、それにはまた永い年月がいると思います。たとえば公民館活動にいたしましても、そこに集まってくるようなお母さん達は、ある程度、意識ができ上っているのですが、集まらない多数のかたがどうにもならないのであって、その方達に手をさしのべるには、やはり長い年月がかかるということを思うわけです。ですからこういう婦人週間など、度々積ねますとあと十年も、二十年も先には、だいぶよくなるのではないかと思います。その証拠には、先日二つの結婚式がありました。一人のお母さんは婦人会の役員で、もう一人はその妹さんですが、妹さんのほうは婦人会の役員をいつも辞退して受けなかった方です。この二人のお母さんの娘さんに対する結婚衣裳のこしらえかたというものが、ずいぶん差があったわけです。婦人会の役員をしていたかたのほうは、私の娘のダンスはカラモノでやってありますよというのですが、丁度、私達のグループで、ロウケツ染の帯をこしらえました。そのお母さんは二つ作りまして、娘の嫁入りのおみやげにもってゆかせますとおっしゃる。私はそれを聞きましたときに、たしかに団体の力とか、グループの力というものは、このお母さんに、こういうふうに響いているかと思ってうれしく思ったわけです。それからもう一つ、ある部落で婦人会がお祭のことを研究した。そうしたら、その部落では昔はお祭というと本当にたのしみにしていたのに、この頃婦人会とか、PTAとかで、お母さんが着物を着換えて出かける回数が多くなったら、お祭の魅力がなくなったというそうです。ですから、こういう機会にこそ、お酒をのみたいというのは、それだけ農村にまだ娯楽というか、本当の意味のレクリエーションがとり入れられていないということだと思うのです。ですから健全なレクリエーションというものを農村にもっととり入れなければならないというふうに思うのです。

教養とは

大谷　先程からいろいろお話がありまして、結局人間をつくらなければならないという結論になったと思います。そのためには長い間かかってでも教養を高めなければならない。そうすれば変って来るというお話なんですが、それでは一体、その人づくりというのは、――その作られる人間というのは、どういう人間であるのか、あるいは一口に教養を高めるというけれど、その教養というものの内容は一体どういうものでなければならないのか。協同活動を通じなければ、それはできないと思いますけれど、一体どういう内容の教養を高めるかということがわかっていなければ、本当の協同活動にはならないし、あるいは協同活動で社会的な向上、あるいは人間的な向上を図ることにならないのではないか。一体どういう教養が必要なのでしょうか。

森　私共はとにかく戦後、地域の婦人会というものを作ったわけです。そしていろいろ活動しているうちに、なにか一つ勉強したい、もう少しお互いにえらくなりたいと思ったわけです。そうして、とり上げたのが婦人学級です。これをやり始めたのは、四年ほど前になります。はじめ婦人学級でどういうことをやったかというと、手当り次第にあらゆることに全部とびついたのです。そしてその時の勉強のしぶりは、ペンを持って、講師の講演を筆記したら、それでこと足りるというやりかたでしたが、だんだん勉強してゆきますうちに、これでは駄目だということに気がついたわけです。なにも課題を持ち合わないで、あれもいいこれもいい、こんどは料理の先生だ、次は時局解説だ、次は子供の躾だというふうに手当り次第にやるのではなく、本当に私達が自分達の生活を高めるためには、自分達の生活から課題を見付けてゆこうということで、課題を見付けて問題をせまく奥行きを深くするような方法にかえてゆきました。そしてその課題というのは、流行でない自分の生活の中から、にじみ出たものでなければならないというので、私達の勉強の目標をたてました。一つはとにかく世の中を美しく平和にしようということ、もう一つは豊かな生活をしたい、これは経済活動です。もう一つは、明るい人間関係を打立てよう。もう一つは、社会福祉につくそうという、この四本の柱を建ててこれを解決するために取組んでいるわけです。そういうふうにして私共はやってきたのですが、またそれで問題が出たわけです。こうやってきているけれど、これではまだもの足りない。つまり農村では先程先生がおっしゃったように過重労働で、貧しくて忙しいので、昼一回と夜間一回しかもてないわけです。これで

は勉強がもの足りないというので、グループ活動に入っていった。これが昨年です。どういうグループ活動を、私共がいまもっているかというと、読書グループ、ペンを握る生活綴方グループ、それから満月会、これは満月の日に集まって、主として農業経営とか、農業技術の方面をやるものです。もう一つは生活改善グループ、これは地域の婦人会とは別に、三十人ほどのメンバーが、やがて農村の婦人のグループ活動のリーダーになろうと、自発的に考えて、死ぬまで手を握って進みましょうというグループです。貧しい生活の中から、月百円、年間千二百円の金獲を納めています。貧しいけれども、とにかく苦面すれば、月に百円くらいの会費は出せるというところに進んで来たということを、私は皆さんの前に報告させていただきたいと思います。

高橋　私もただ単に、ものしりに終るということは、おそろしいことだと思います。総合的な判断力をもった人間を作るために、考える力というものを作ることが大事だと思います。私共の町では学校区内を二十三区に分けて、子供と先生と家のかたと三者一体の集会をやっています。そこで子供から「勉強していたのに、お母さんが手伝いをしてくれという、終ってからでも間に合うことなのに、いますぐやれという、こういうことはお母さん気をつけてください」という発言があると、お母さんのほうで「そんなことあったかね、わるかった」と、大勢の前であやまる、そういった会を五年くらい続けてやってきている。私がやっている十五日会では、お母さん達は、子供によくなってくれ、よくなってくれという。ところが親に問題があることがたくさんある。子供をよくする前に、親が賢くならなければいけないという話が出て来ました。そのために一つ映画会でもしようということで会員が当番制でライブラリーからフィルムを借りて来て、映写会をやっております。そしてみたあと話合をしています。

それからいま計画中のは、新聞で勉強しようということです。その新聞も先ず漫画の切抜きから始めようということで、きょうからいつの日までの間に、自分の気がついた面白い漫画、隣りの奥さんにも見せたいという漫画があったら、当番のところに持ちよって、当番が集めて回覧板式にグループに回わそう。それも沢山来ますと、多過ぎるといい抵抗を感じるので、少しずつにしようということでやってみたわけです。そうして十五日会に集って来ますと、漫画の話や映画の話が出て来ます。そういうように楽しく無理でないような会にしようということで、会場はいつも公民館を使い、そして一時間で打上げるようにして、結論が出ないときは、この次の会までということにしています。

す。

それからいろいろ事情があって出て来られない方には出席した人が責任をもって伝えよう。無理をすると長続きしないということで、ささやかながら進めて来ているわけです。

浜田　私はお互いの身の回りのことから話合っていってそうして協同活動によって解決していく方法がいいのではないかと考えます。

猪俣　これは人をつくるということになりますかどうか……。私は農村からいま都会の方に移って住んでいますけれども、そこに参りましてから、お母さんたちの若竹会というものに入れてもらったのです。それがただいま重大な段階に来ております。はじめは小学校一年生の子どもをお持ちのお母さんたちが、最初先生を中心に五人ぐらいお話合をするグループをお作りになった。それが評判になり、ただいま三十人ぐらい会員がいるわけです。月のうちの第二土曜と第四土曜に集って都合を見て先生にも来ていただいたりして、子どもの学習状況やしつけのことをお伺いするようなお話合だったのです。これがずっと発展して来て学習の問題や映画のことも話しあうようになりました。ところが去年「東北女教師と母親の会」というものがあるからそこに出席してみたらどうかとPTAの方から言われ十人ぐらいのお母さんが出席しましたところが、会員の中に私どもの会からそんな会に行く必要があるかどうかという批判が出た。また選挙間近に「選挙の話をしようではないか」ということで、いろいろお話を聞いたり意見を出したりすると会員の中の人からあの人達は「アカだ」と言う批判が出て来た。そのためにPTA会長が「あの会はアカだそうだから、入っている人は気をつけたらいいだろう」と言われたということです。

会はいまこわれかかっております。私はお母さんたちがもっともっと成長してもらいたいと思うのですけれども、いまそういう段階に来たわけです。

山口　人づくりとか教養ということは、どんなことかということですが、私はやはり農村地区でありましたら、農業経営ということをバックにした教養というところからいくのがいいのではないかと思います。

私達のところでは「生活改善をやりましょう」ということで始めて、先ず食改善から入りましたが、動物性蛋白質をとるためには、ニワトリを飼わなければいけないというので飼い方をいろいろ研究するようになった。それまでは男の人の仕事だと考えていた主婦達が、タマゴを沢山生むのにはどうしたらいいかということを、研究し出した。そういうことによって、こんどは子どもたちもそれにつれて

婆母さんたちのお手伝いということから、ニワトリの飼い方に一生懸命になった。

それから野菜の作り方も比較的女の方はお父さんの言うなりにタネをまくし、草が生えてくれば草をとっていたのが、お母さんみずから野菜作りに愛着を感じて来るようになった。いい野菜を作るには肥料のこと、土地のことも勉強するし、町に売る場合には、どういうものがいいだろうか、町で売られているものはどんなものだろう、どのくらいの値段だろうということまでも、みんなで手分けして調べて来るようにする。それを朝市に持って行くには、どこがいいかというところにまで発展しているところがあります。

やはりそういうふうに生産と結びついた教養が必要だと思います。また一方教養ということは、ただ毎日働いているだけではできない。やはりある期間学校で勉強しなければいけないのだということを言いまして、冬になって温泉に行くような人たちには、それだけのお金があったら、子どもを高校にやれるのではないか、と口をすっぱくして言いましたら、今年百人の中学卒業生のうち、約八十人ぐらいの人たちが高校とか職業補導所、大工さんの学校とか、そういうところに行ったという話を聞いたのです。お母さん方に「教養、教養」と言っても、なかなかピンと来ないから、そういう生産と結びついた考え方というものを勉強するように言って来たことが、いろいろなところに発展していくという、一つの例がありましたので、申上げてみました。

大谷　たいへんいい発言をいただいたのですが、私が先ほどから「教養を高める」と言うけれども、教養というものは一体何か」という問題を出したのは、そういう意味なのです。農村の場合には、何といっても生産と結びつくということが一番大事だと思います。先ほど森さんのおっしゃった、世の中を美しく、平和に豊かに明るい人間関係を打立て、社会福祉に尽すということ――いずれも私は立派だと思います。こういった目標を掲げて教養を高めていくことは大事だと思いますけれど、豊かなということは、結局農村の場合には、農家経済が豊かになるということであって、その基礎はやはり生産ということにあると思います。

先ほどから農村の社会における因習とか不合理なものとの斗いについての話が出たわけですけれど、結局そういう因習、あるいは不合理なものというのは、一体何かというと、やはり農業の生産力を高めるということを阻んでいる関係、そして人間関係の民主的な成長というものを阻む関係というもの――そういう社会的な関係が私は因習と言われるものではないかと思います。またそのための斗いというものが、生産というものと遊離して考えられてはならないのではないか。これは結びつけて考えられなければいけないと思います。

あしたはおそらくそういった点で、農家経済を豊かにするための協同活動について、いろいろご経験談が出て来ると思うのですが、そういった形でのいろいろな共同販売とか共同購入ということがプラスであったにしても、先ほど言ったように、村の中で折角プラスになったものを村の中で食いつぶしてしまうような体制を自分たちが作っているならば、そういう運動というのは、一体どういう意味を持つのかというところにはね返って来ると思います。だから結婚改善の問題に重点をおいてお話合になった傾きがあったと思いますけれども、一番集中的にそういう点が現われているが故に、取上げていただいたのでありまして、一方において農家経済を豊かにするためにあらゆる努力をしても、他方において底抜けになっておれば何にもならないのではないか。結婚改善というのは、一般には生活改善ということを考えられているけれども、私はただ単に生活改善と考えられているところに問題があるのではないか。これは農業経営の改善の問題であり、自分たちの物質的な生活の全面的な改善の基礎になる問題だ。少くともいまの日本の農村においては、そういう性質を持っている問題だ、ということを見つめることが一番大切だと考えます。

もちろんそう言っても、これは先ほどからみなさんがお話になりましたように、たいへんむずかしい問題でありまして、グループの範囲内でできる問題ではない。救人の人が頭を切り替えたからと言っても変る問題ではない。広範な農村の運動にならなければ、解決できる問題ではないと思うのです。

明日お話が出ると思いますが、どなたでしたか、家計簿をつける協同運動をなすっており、さらにこれを農業経営簿記まで発展させたいということをおっしゃっているのですけれども、それをおつけになれば、浜田さんの出された交際費の問題、それにつながる結婚費用の問題がいかに破壊的な作用を果しているかということは、一目瞭然だと思います。それが結びつけられないところに問題がある。きょうのお話は、もう少しこういった問題と結びつけられた形で展開されることを期待したのに、到頭結びつけられないで、形式の問題だけが問題にされるに止ったということを、非常に残念に思いました。しかし、いま、最後に、山口さんが突破口をつくってくださったと思います。明日のお話合はそういう意味で農業経営に根をもった問題になって来なければならないわけですが、そこで再びこの問題に帰って来て、総合的に考えてみたいと思います。

傍聴の方からのご質問題はないようですから、あと予定の時間まで少しありますので、先ほどの続きをやってみましょう。先ほど私が言ったことは、決して娘さんが嫁ぐのにお金を使うこと自体に反対しているわけではない。戦後は相続法が改正され、均分相続になったから娘さんたちにそれだけのものを持って行かせるのは当り前だということがよく言われる。しかし、それで割切ってしまっていいものかどうか。これは逃げ言葉ではないかと思います。つまり合理化ができないので、そういう口実を村の有識者がつくっているのではないかというふうに感ずるのです。次男、三男が東京に出まして、家を構えるときに二十万、三十万のものをやっているかというと、絶対にやっていない。娘にだけ均分相続するというのはおかしい。私は二十万、三十万を娘さんのために使うということは、決して反対しない。ただお金の使い方の問題です。たとえば、「耕耘機を買いたいけど、お金がない」ということをよくおっしゃる。自動耕耘機を結婚のときに沢山の衣裳を持って行くかわりに持って行くということはできないだろうか。そうすれば娘さんがお嫁に行って、過重労働から解放される可能性がかなり多くなるということですね。あるいは湿田であれば、結婚記念事業として、嫁さんとおむこさん両方で金を出し合って、土地を改良して乾田にすれば、農業労働がかなり軽減されることは明らかです。そういったことがなぜ農村で問題にならないかということを言いたいわけです。

先ほどからのお話を聞いていると、農業労働の問題などのような、生産上の問題と、生活改善とか、社会的に不合理なものを改善するための斗いというものが、全然結びつけられないで遊離しているということを感ずるのです。結局、協同活動というものは、その点のポイントが合わさらなければ、農村に関する限り意味を持たないのではないかということをいいたいのです。

森　私は先ほど豊かにと申しましたが、そのことがその中に含めてあったわけです。農業経営と農業技術の改善ということを、農協婦人部の活動としてやらなければいけないという目標を立てています。合理化のひとつの方法として先ず第一にわが家の収支の実態を把握するには、記帳生活をしなければならないと呼びかけて来ました。それがどれだけ徹底しているかというと、五百人余りの会員をもつ農協婦人部で今年売れた「明るい農家家計簿」が百十冊でした。二年間もこの呼びかけを続けて、やっとそれだけの成果を上げたわけです。しかし生活実態を掘り、年間これだけの赤字が出るだということがはっきり出ましても、やはり農村には古い封建性というものがはびこっていて、借金してでもとにかく家風を保つためには、これだけの支出をしてやらなければ……というところが、ガンではないかと思うのです。

大谷　家計簿は協同活動としてつけられているわけですか。

森　「家計簿をつけましょう」という呼びかけと講習会をやっただけで、グループ活動の中にそれをもって来てなかったところに失敗があったと思います。だから、今年はそれをやりたいという願いを持っているのです。

大谷　家計簿はつけただけでは何にもならない。お互いに持ちよって、自分たちの生活のあり方というものにどんなにムダがあるか、検討しなければ、農家は伸びないということをみんなで分るような活動にもっていかないと、意味をなさないということです。もう一つは婦人が家計簿だけではなくて、ご主人と農業経営簿をつけるというところまでゆけば、自分たちの経営はどうしなければならないか。自分たちの生活はどうしなければならないかということがはっきり出て来るはずです。そうしてそれを協同の場で、われわれはどうしなければならないかというところまでもっていくのが、協同活動だと思います。また生活改善とおっしゃるけれども、婦人は生活改善というものを消費部門だけに限ってお考えになっているのではないかと思います。これは大変な間違いです。農家の婦人の生活の半分以上は野良のあの重労働にあるということ。この一番苦しい重労働部門を排除して、生活改善と言っても、本当の生活改善ではないと思います。たとえば私の知る限りでも、改良カマドを入れることに反対する方がかなりある。これは改良カマドを入れればよく燃えるからカマドの前に坐っている時間が短くなる。野良にいる時間がそれだけ多くなるから休憩にならないというのです。つまり結婚改善の問題を生産とか経営の問題と切離して考える。こういう形にすればいいと、それだけを追っかけていたのでは、芽がのびていかない。結婚改善をしなければならないという切実な要求が盛上って来ない。家計簿をつけるにしても協同で検討し合って、月々集計してみるというところまでいけば自分たちの生活に破壊的な作用をしている根源が数字の上で分ってくるのではないかと思うのです。

土屋　私達の読書グループでは、みんなが借り出したあとに残る本は、農家経営の本ばかりです。私は小説や講談本などのほかに農業の本でもなるべく絵の多いような本を借りて来るのですが、年寄たちは「昼間精々働いているんだから、せめて夜くらいは講談本を読みたい」と言うのです。青年はどうかというと読む人もいくらかいますけれども、やはりあまり読んでいない。こんな具合で読書グルー

プを通してだけでは、とても悲観してしまうようなことがよくあるのです。上の方で「教養、教養」と言うばかりで、本当に農民の気持にピッタリしたものを出していないのでしょうね。

大谷　最近の農林省の統計によりますと、農家の兼業化傾向が非常に進みまして、六五%までは兼業農家です。戦前は六割が専業農家で、四割が兼業農家だったのです。これと関連しまして、農作業に従事する者を、年令別に見ると青年や壮年が少なくなって、老人と婦人が非常に多くなった。五二%が婦人です。それから別の数字を見ますと、農業経営の指図だけを男がするということが非常に多くなっている。つまり世帯主は農業の指図をするだけで、村の頭役の仕事をするとか、あるいは農協の仕事をする、あるいはほかの仕事に就いている。そうして農業労働はお嬢さんを中心とする女子が多くなって来ている。そういう傾向を考えてみると、農村婦人として考えなければならない問題は、いわゆる消費生活だけの問題ではないということになりますね。経営をどうやって高めていくかということは婦人自身が自覚しなければならないところに来ているのではないかと思います。そこで初めて農業経営の本も読まなければならないというような意識が出てくるのではなかろうか。初めから「農業経営の本を読め」と言っても、読むはずがないと思うのですよ。だから、先ほどから教養を高めるということをおっしゃるけれども、一体何にピントを合わしていらっしゃるのかということを、しきりに問題にしたのはそういう点なのです。

（第一日閉会）

農家の経済をゆたかにするために
協同活動で何ができるか

大谷　昨日は、村の生活のありかたにつき皆さんの御経験を通じて、いろいろお話合いいただいたわけですが、特に結婚の問題が大きな意味をもっているので、それに集中して、いろいろお話合いいただき、問題点を出していただきました。そして結局、教養を高めなければならないと、いうこと、それによって人間づくりをしなければならないというところに落着いたのでありますが、それでは、そういったつくられるべき人間というものは、一体どういうものなのだろうか、したがって教養を高めるという場合の教養というのは、一体なんだろうかというところまで考えて結局それは生産を高める、経営を向上させるということと離しては考えられない問題であるというところまできたわけです。

そこで今日は、農家の経済をゆたかにするための問題を中心にお話合いしてみたいと思います。最初に口火を切る意味で、今日は小倉さんにお願いしたいと思います。

生産活動

小倉　私の村は戸数が百戸に足りない非常に貧しい農村でございます。昔から村の気風の中に、米や麦は売ってもはずかしくはないが、野菜を売ることははずかしいことだという、一つの因習のようなものがありました。それで少し裕福な家庭にいってみますと、一昨年の大豆が蔵の中でくさっていても、それを外に出すことははずかしい。お野菜が畑で腐ってしまっても、それを売ることははずかしいというような状態だったのです。そのくせお小遣いには非常に不自由をしていて、婦人会で何かお金の相談をもちかけますと、五円のことでも、一応相談してということで、即決ということにならなかったのです。そういう状態が実に長い間続いておりましたので、私は、これをなんとか切り開きたいと考え、十数年前のことですが、二回ほど野菜を売って女のお小遣いをこしらえたらどうでしょうという呼びかけをしてみました。第一回のときは「やりましょう」ということになったものの、集ったのは、ゴボウの束一束と、ネギが二百匁か、三百匁ほどでした。どうもこれでは仕事にならないというので、その仕事をやめたのですが、今思うと、本当にばかだったと思うのです。そのときに、たったそれだけのことからでも手をつけてゆけば、私達の経済生活というものはその頃から開き始めていただろうと思って、反省しているのですが、私も若かったし、そういうところまでは考えが及ばず、そのときは、中止してしまいました。それから第二回目は、戦時中、町の消費者のかたに、村の野菜を買ってもらう運動をはじめたのです。婦人会の支部長さんなどのお世話になって、農家の方と連絡をとって農産物を町へ持ち出しました。そのときには非常にたくさんの品物を買っていただきました。その時村の人は、本当によかったと喜んでくれたのですけれど、その仕事に自分のほうから乗り出してやってみようという気持は全然ありませんでした。あなたが世話をしてくれるなら、品物を出すということでした。しかし私も全然協力してくれる人がないと、とてもそういう大きな仕事は、自分一人ではやりきれませんので、すっかり疲れを出して、その時にも中止してしまいました。考えてみますと、第一回の時は、農家の方に売ろうという意欲がなかったのだと思います。それから第二回の時は人に依存しすぎて、自分達で、仕事をやろうという気構えがなかったように思います。またその時は、もうけようという気構えでかかったので、値段を高くして良心的な品物を出そうという気持が少

なかった。これではとてもこの仕事は先行きがないというこうを考えまして、疲れたりしたものですから、その一年でやめました。そしてそれからは生産意欲を高めることと、社会性をねるというようなことに協力の目標をおいて、村の人達を婦人会運動を通じてことあるたびに教育していったわけです。

そういうような経過を経まして、第三回の仕事にとりかかったのですが、改良普及員のかたの御協力をいただいて栽培の方面も、うんと力を入れたので、いろいろ新しいものを作ったり、又ありふれた野菜でも、いままで作っていたものよりも、うんといい品物ができるようになったのですが、なかなか道が開けないで、ホウレン草にトウが立ったりして、早くどうにかしてくれないと、次の播付けができないということになり、去年の五月から思い切ってこの頃流行している朝市という販売形式をとって、町に出すことに決めました。その方法も、よその朝市を研究してみますと、いろいろあり、大体は売りたいものを自分でもって出て、競争して売ってお金だけを農協に預けて帰るという方法が多いようですけれど、私のところは、如もたくさんなく、そう大規模なものではありませんので各自にもって出たのではとても続かない日があるだろうということで、全部とりまとめて、輪番制にして売りに出ることにしました。一回に出るのは、たいてい五、六人くらいの人数で、去年の五月十八日に始めその後一、六、三、八の日に売りにでて、もう百二十回になりますが、いままで今日は野菜がと切れたからやすみという日は一日もありません。いざ野菜が売れるということになりますと、ものすごい生産意欲が出まして、みんなが本気で作り始めたものですから、去年の夏は、一日にリヤカーで六台分も出すという日もあり、これだったら量の点については心配がないだろうという見通しがつきました。むしろ心配ないどころではない、多少生産過剰ぎみでして、ほかの町にも売りに出したらどうだろうという気運が出てきております。

私達のねらいは、そういうふうにして、女の人にも多少のお金をもたせて、自主性をのばしてゆきたいということこれが朝市を始めた目的だったのです。現在のところ、その全体の売上げが、三十万ほどになっております。三十万などというと、本当によその村では、一軒でそれくらいの収入のある家がいくらもありますが、私の村は非常に貧しい村で研究心もなくいままでやってきましたので、村の産物というのがほとんどありません。復員された方達が、外国の様子を見てきてどうしてもこれではいけないから、なんとかやろうという申合せをして、産業振興に乗り出してから、まだ十年とはたちませんので、ようやくタバコという

ま手をつけたばかりの果樹園があるくらいで、ほかに産物がありません。わずか三十万の金額ではありますけれど村の人達が非常に喜んでくれて、これをぜひ育ててくれるようにということを、要望されているわけです。

このようにして一応、朝市が成立して、かなりの成績をあげていますが、この仕事を通して村の婦人たちがなんのはずかしげもなしに、これは婦人会の野菜ですから買ってくださいといって、堂々と出かけてゆけるようになった。そのことだけでも、非常に大きな収穫だったと思います。

またこの仕事を通して、自分達は現金収入の道が開けたのだという自覚と、それから村の産業振興に多少でも役立ったのだという自覚、そしてこういういいことがあるのだから、決してやめますまいという覚悟をかためることになったわけです。又さらに広くは町の人の健康増進に役立とうという一つのねらいをもつことができるようになりました。これらのことで、この朝市という仕事は、いまのところ成功の道を辿っているのですが、これについて、いろいろな副産物ができたことを、ぜひお話しておきたいと思います。まず時間励行がよくできるようになったこと、またいいものを作りたいという気持から書物によって研究をする。つまり読書をするクセが多少できたこと、それから婦人が経済力をもったために、家の中に自分の思う通りの心づかいができて、お年寄りにも、子供にも、自分の愛情を示すことができ、家の中が明るくなりつつあること、それから生活態度が、非常に積極的になってたこと、またこれにつながって、いままでとんとかえりみられなかった衣服の研究、お料理の研究などの気運が出てきたこと、これがソロバンに合うか、合わないかということを検討するためには、ぜひ記帳をはじめなければならないというので、家計簿や、労働日誌をつけ始めたこと。また朝市の信用を落さないという一つのねらいで、いろいろな社会性が陶冶されつつあること、それからこの朝市がほかの村と共同して大都市への出荷でも始めようという大きな共同に進展しつつあること、こういういろいろなことが派生してきて、順調に育ちつつあることを御報告いたしたいと思います。

吉田　私たちはいま全国に新生活運動が起っていますけれども、経済の裏付けのない新生活運動をどんなに声を大にして叫びましても、それは現実のものにならないという観点から、先ずまずしい農家を少しでも豊かにしましようという考え方で、シイタケ栽培に乗り出したわけです。主婦が生産面に挑るということから、労働過重を自分たちが倍加するような結果になってはならないという点を考え、大きな労働力は全然必要なく、肥料の心配もいらないことなどを勘案して、シイタケということにきめたわけです。

科学的な栽培をやってみたいということ、それから家庭生活の邪魔にならないような形にもっていきたいということ、女の手には負えなくなるようなことのないよう、いつも楽な形で婦人のシイタケ栽培が健全に伸びていくような形でいきたいということ、このような考え方で態勢を整えながら進めていったわけです。この仕事の収穫としては、主婦たちの間に自分たちが経済の一面を担当しているのだという意識が非常に高まって参りましたことと、それからもう一つは男子の方がただ畑だけに依存して、非常にエネルギーを使っていることに、反省をうながす結果になったことです。エネルギーの点では、畑の上の促成栽培とは比較にならない安易さがございますので、農林省がいま言っております適地適産の最高度の考え方というものを主婦たちがやっているわけです。目下毎月出荷しているのですが婦人の手だけで、機動力もないので「オート三輪を婦人たちに提供してもらいたい」という要望を起しており、だんだん多く生産された場合の備えにも、いま一生懸命になっているわけです。

森　愛媛県のある村の例をお話します。ここは新農村建設のモデル地区になっております。寒冷地帯で、初めは非常に貧しかったそうですが、公民館活動をよくやっており、その中で特に取上げたこととして、その寒冷地帯で「みのわせ大根」を作りました。それを大根のままではなく、タクワンにして販売しているのですが、日本でも優秀な指折りの商品価値を認められて、いま反当り収入が十万円を上るということです。それからまた婦人会は婦人会でキャベツの共同育苗をやって、農協の普及員の指導の下に立派なものを作って大量に売出しております。それはみんな公民館活動でやっているわけで、とにかく村づくりの一番基本は、生活を豊かに――つまり経済の裏付けがなかったらどうにもならないということから出発しているので、モデル地区に選ばれなかった前と、現在とでは、粗収入が一反当り倍になったということです。私どももこれを参考にしてそういう姿で進まなければいけないと思っております。

土屋　私どものところは、耕地の狭いところなので、農業だけで生計を立てるという家は、隣組が二十四、五軒ある中で、三軒ぐらいしかなく、ほかは、全部兼業です。生活改善ということも、貧しいのでできない。

それで何とか現金収入の途を講じなければならないということになり、ニワトリに目をつけました。これまでも各戸で十羽ぐらいは雑鶏をしていたのですけれども、十羽の家は三十羽、二十羽の家は五十羽にするという具合に、ほとんどの農家がニワトリをふやしたわけです。飼料は共同で購入しますから、割合に安く買え、又鶏舎の研究やらずいぶんいろいろ工夫しました。出荷の方は、鶏卵組合にわたりをつけて、日をきめてとりにきてもらうことになりましたので、共同出荷のための苦労というものはあまりありませんでした。そういうことで、現金収入がだんだん増えて、簡易水道を引くというときにも、何とか話がまとまったのです。

共同出荷で思ったのですけれども、うんとタマゴをきれいにして出さないと、商品価値が下るということがあるので、共同でする場合には、よほど社会性ということが培われないと、全体の商品価値が下るということをつくづくみんなが体験したわけです。

巽　私の方でもある非常に進んだ部落でジャージを入れて、乳をうまく利用しているところがあります。またここでは、春になると、遠方から何百羽というヒナをトラックで運んできて飼っています。こうやって食生活の改善をはかっているわけです。

それからここでは早期水稲が入っておりますが、これこそ共同でないと、一軒だけ作っても、スズメが食べてダメになるので、共同で早期水稲を入れております。それで台風が来るまでにお米を穫って、そのあと白菜を作って、それを出荷する。だから、よそが台風でペシャンコになっているときに、その部落ではまた反収が四、五万あるのです。そういうふうに生産と結びつけて、婦人のグループ活動をうまくやっているところがあります。

大谷　たいへんいい事例をいろいろお話いただいたのですが、ダメをおしますと、そこまでいくのには婦人だけでなくて、おそらく家ぐるみという式の協同にならなければできないことだろうと思います。そこまでいくことが理想であって、決して婦人の協同活動だけをとり出してやる必要はないと思います。しかし、そうなると、農事研究会みたいになりますから、問題をもとへ戻しまして、婦人として生産活動の面で要求されてしかるべき問題があるのではないか。それに従っての協同活動というものがあっていいのではないかと思います。農家の娘さんたちが、農家にお嫁に行きたくないということは、お姑さんの問題もありますが、依然として過重労働という問題があるのではないか――。先ほど吉田さんはそうならないように細心の注意をしているということをおっしゃったけれども、その問題はやはり大きな問題ではないかと思うのです。むしろ協同活動で労働が過重になるということを心配するより現在の農業のやり方の下において、婦人――特にお嫁さんの労働過重を排除しようという要求が出て来ないかどうか。過重な労働の軽減のために、必要な条件を獲得するための協同活動というものはないでしょうか。

労働の軽減のために

小倉　私のところでは、一昨年若いお嫁さんの中から、その要求が出たわけです。それはせめて一月に一日はゆっくり休む日がほしい。昔の人のように、ただ働くだけでは私たちはもの足りない。自分の個性を伸ばすためには、そういうものと取組んで研究する日がほしいということで、公休日の要求が始まったわけです。ところが、村の人たちにそのことをお願いしてみましても「いまでも忙しくて仕方がないのに、これで一月に一べんずつ、お嫁さんに休まれたら、仕事がうまくいかない」ということで、なかなかお許しが出なかったわけです。そこで、公休日を持っているよその村の様子を聞かせてもらったりして、決して公休日を一日持ったからといって、生産が落ちるものではないということの啓蒙をやり、一昨年はその獲得のためにかかり切ったのですが、とうとう昨年の初め村の寄合で「一月に一日公休日を設けたらよかろう」というお許しが出たわけです。ところが、お嫁さんの方では、私たちが休んでも決して休んだ気がしない。だから、この公休日は婦人だけの公休日ではなくて、村中の人の公休日にしてほしい、という要求が出まして、さらに運動を進めて、とうとう村中が一日休むという日を設けたわけです。これも労働軽減の一つになっていると思います。

吉田　実は私どもも数年前に、婦人の休養日もきめたのですけれども、いまの農業形態をよくしませんと、休養日を作っても長続きしないということに気がつき、手取り早いところから軽減に乗出そうということで、まずお祭りの問題と取り組みました。このお祭りは七部落の人が三日おきぐらいにつまらないお料理をやりとりして、主婦の労働が普段よりも、ずっと激しくなりますので、せめてお祭りを同じ日にやるようにと、はたらきかけたのですが男性の虎然たる反対に合いました。お酒を飲む機会を婦人たちが奪うというのです。一朝一夕にはできないと思い、いまもってその運動は続けております。なぜ、男の中年以上の人がお祭りにしがみついていなければならないかというと、農村のまずしさ――つまり農村生活に豊かなものがないからということで、それには遠回りに豊かになるような手立てを私たちが講じつつ、加重労働からの解放に向って行った方がいいのではないかということで、シイタケ栽培をはじめたわけです。そうしましたら、やはり一家を担う男子ですので、お祭り改善に反対した旦那さま方も、一緒になってやるようになりました。非常に生産量が多くなっておりますが、しかしそれが最後の目的ではないということです。

森　愛媛県のある村では公休日が月に一日と十五日と二日ありまして、それが実行されております。いま郷全体の公休日として、それを広めたいという運動になっております。なぜそれが成功したかと考えてみますと、この村の場合、公民館活動が充実しているということが考えられると思います。私は自分がいま教育委員長として、社会教育面を非常に考えておりますので、何らかの形で協同活動を正しく進めていって、それを形にして現わそうと思うのです。協同活動は婦人が自主性を持ち、公民館活動の場でほかの団体と協力しあうことによらなければ、実を結びにくいのではないかと思います。そこでは公休日を利用して婦人学級やら、いろいろな研究活動やら村中が総ぐるみで学習を続けております。非常に公休日は大きな働きを持ったというふうに考えております。

小倉　私のところでは、公休日にいろいろなものを盛り沢山持って来られたのでは、決して休めない。ほかの行事はやらないということを条件にして要求したわけです。

大谷　私は農家の中から自発的に公休日、その他いろいろな要求が出て来ないということが問題だと思う。たとえば耕地の交換分合です。……これはたいへんむずかしいことですが、生産力を高め、特に労働を節減するためには、耕地の交換分合ほどどうしても必要です。これに一番困っているのは、婦人たちだということから、成功したところがかなりあるわけです。そういう問題がみなさん方のところで問題になっていないか……。また、たとえば農道の改修――たんぼに行くのに、堆厩肥を運んで行くということは婦人にとっては大変なことです。リヤカーが通るような農道を作れば、労働が軽減できるはずです。これが軽減だけではなくって、沢山の堆厩肥をやれることになるから、反収も増えて来るわけです。そういった問題が、公民館で取上げる前に婦人自体の内心の要求として、盛上ってしかるべきものなのに、そうされて来ないのはなぜか……。そういう種類の問題がもし多少でも出ておったら、この機会にお話願いたいと思います。

山口　農業の経営の形によっては、ある程度婦人の労働を軽減することができるのではないかと思います。水田単作地帯というのは、なかなかできないと思います。それはいまのお米を出す制度というものが先ずガンになっているのではないか。早場米を出せば、奨励金が出るという制度があるために、水田農耕では共同化をきらい、どこの家でも無理をして一年に一度きり使わない脱穀機を買うといった状態です。これが畑作地帯とか酪農地帯になりますと、そういうことがないので比較的うまくいくのではないかと思うのです。私のところでは種馬鈴薯を本州から九州の果

まで輸出しておりますので、その選別ということをします。そしてこれが主婦の大きな仕事の一つになっています。これは従来は一軒一軒でやっていたものですが、中にわるいイモが入っていて、北海道の糯いもに汚名を着せられたことがあって、そのことと、夜昼なく選別をしなければならないということで、婦人が非常に労働加重になるということから、これを何とか解決しようということになり、部落が一斉に一つの場所で選別したら、いい種馬飼育もできるし、婦人たちの労働もずっと軽くなるのではないかということで、婦人の力で部落を動かしてやっているところがあります。これはあきらかに婦人の力でもって、自分たちの労働を軽くすると同時に、いい品物を生み出すという結果になった一つの例だと思います。

巽　耕地の交換分合ということと農道の開拓ということが出ましたが、それを青年団が取上げて成功したところがあります。青年団の人たちはまず婦人の方に呼びかけなければいけないというので、部落の婦人をお寺に集めて座談会をしました。どんなおばあさんでもわかるような大きな部落の地図を描いて、こういうことでどれだけ労力の損をしているか、お母さんたちがどれだけよけいな苦労をしているかという話をやさしい言葉で詳しく説明して、お母さんお父さんたちの協力をよびかけました。浪花節の交換分合のレコードをきかせたり、幻燈をみせたりもしました。こうしていろいろとやっていって、とうとうそこでは農道をこしらえて、いまオート三輪がジャンジャン通っています。村のおじさんたちも、非常によかったと、いま喜んでいます。

また、そこでは女の人が家の中を整理するために一日だけ農業をしない日がほしいということで、農休日もできています。そういうふうに次々とみなさんのお話合いがうまく進んで、人間関係が明るくなったような感じがするのです。

小倉　私は、婦人会の運動の中にほんとうに一人づつの声を取上げたいという希望を持ったので、二、三年前に班寄合いというものを奨励して――婦人会に出てきてもなかなかみんなが話さないので、心安い隣組四、五軒の人が寄合って、なンでもかンでも思うことを話合う会を始めたのです。そしてそこに出てきた問題を役員の人が役員会に持っていって、それを検討して、婦人会でやっていくという方法を取上げました。そうしたところ思いもしなかった問題がとてもたくさん出てきたわけです。

公休日の問題も、その一つですが、まず実行したのは林道をつくることでした。お正月に主人と揃って出席して話しあったところ、この村でいちばん苦しいことは夏の草刈

りだという問題が持上ったのです。お嫁さんたちが高い山にあがって草を刈って担って帰るのですが、よい道路がないために大変苦労をしていましたので、村から補助をもらって林道をつくりました。自動車の入っていくような道をずっと山奥までつけて、採草地をこしらえるという運動によりまして、いい草ができるようになったら、みんな自動車に乗ってそこへいって草を刈り、自動車に積込んで、自分も一緒に乗って帰ってこられる。それが四、五年のうちにできるだろうという非常にたのしい期待を持っています。

公休日の問題では青年と話合い、またお年寄りと話合ってみますと、お年寄りのほうは、休まれては困るという点で反対をするのですけれども、若い人は、おかあさんはきょうは疲れたから休むよと云ったらそれでいいではないか。公休日などをつくるような特別のことをしないでも、一日の時間を規律正しく自分で考えて、自分の身体に合ったように、疲れない程度に働いてくれることがいちばん望ましい、というのです。

私は、公休日のことをやかましくいって、公休日をこしらえてもらったけれども、行く行くは公休日がなくても婦人が自由に休めるときを持ちたい、という期待を持っております。

それから、お祭りには十時、十一時まで飲まれるのではやりきれないから、七時どろサッと切上げてもらうことを考えよう、ということで、農協に頼んで、その夜は映画をしてもらうことにし四、五年続けています。七時から映画が始まると、大っぴらで女がみんな出ていく。そのあと、飲みたい人は自分で勝手に飲んで、女の負担がなくなるような方法をとっております。

大谷　いろいろいいお話を伺いましたが、きょうは時間もあまりないので、次の問題に移りたいと思います。

私がお話を伺っていて感ずることは、日本の農業あるいは農村社会の持っているいろいろな不合理なものが、婦人に嫌よせされているということです。それは婦人の社会的あるいは家庭内における地位が低いためであると考えていいのではないか。婦人の方々は、自分たちの生活の中に寄せられている嫌が何であるかということをはっきり自覚して、それをはねのける力を持つことが、農業経営の改善であると同時に、また生産力を高めることになるし、それが結果としては、更に農村社会の改善、向上ということになっていくのだろうと思うのです。それには自分たちがいちばん困っている問題を見つけることが先決問題だと思います。

この部会で出るだろうと思ったのですが、計画出産の問

題をどなたもお出しにならなかった。これも農村にとってはだいじな問題だと思います。この計画出産ということさえも、ところによっては、農業経営が非常に不合理であるために、できないことがあるわけです。

私が直接きいた実例を御紹介しますと、笑い話のような悲劇ですが、東北のある地帯で非常に子供が多いので二、三男問題にも困っている。どうして計画出産をやらないのか、ときいたところ、いまの状態で計画出産をやれば、自分たちの休まる時間がなくなる、というのです。どういうことかというと労働力を絶えなくて一日中働きづめなので自分たちがせめて身体を休めることができるのは、子供に添寝をするときとか、田のくらで乳を飲ませるときしかない。だから、ほんとうに薬をしようと思うならば、できるだけ授乳期間を引延して、而も授乳期間が切れたら、次にオギャーと生まれるようにすることだという、笑い話のようだけれども、実際にあった話です。

つまり、どんなに社会的な古いものをなくそうとしてもそういうところに根本的な原因があるということをやはり見究める必要があるのではないか。私が、きのうから、生産の問題、農村に関する限りは農業経営の問題——そこから問題を掘起して協同活動をやらなければならないのではないか、ということを強調してきたのは、そういう理由なのです。

最後に農産物の価格の問題、これは要するに政治の問題と申しますか、みなさま方が協同活動をして生産をあげても生産過剰になって値段が下がった場合にはどうするか。これは一部落の問題ではなく、全国的な生産過剰というものが問題になってくると思うのです。そういう広い意味での政治の問題。これがみなさんの協同活動の中でどういう問題になっているか、ということですね。

政治の問題

森　婦人の仕事として養鶏をやっておりますが、赤字が出ている状況です。みんなが養鶏をやれば、卵が安く、反対に飼料が高くなり経営が困難になります。そうなったら婦人の手にはおえなくなると思うのです。

出荷にあたりよく市場を研究してはいますが、いつもいちばん儲かるところに持っていくというようなことは、婦人の力ではできないことではないか。たとえそれができたにしても、いまの百姓はどうするかというと、仕方がないと諦めてしまうのです。

なぜこんなことを申上げるかというと、いまの資本主義経済の機構を見破るまでに私どもが長い間かかって勉強していかなければいけないのではないか、ということを真底

から考えるからです。そういう勉強をしようと呼びかけるとアカだといわれる。それが今日の農村の状態ではないかと思うのです。

そして婦人会の協同活動というものは、何といっても一つのほころびを縫うぐらいの役にしか立たないのではないか。そのほころびも縫わないよりは縫ったほうがいいのですが、そのくらいが限界線で、やはり私たちの力の及ばないところがあると考えています。それをどうしたらいいか。長い目で政治や経済を研究していきましようということしか方法がないと思います。

山口　私、中間搾取というのがいちばん大きな問題ではないかと思うのです。北海道の辺鄙なほうにいきますと、土地をよくするために牛を飼っていますが、牛乳などは中間搾取がひどく、買いたたかれるので捨てたほうが安いという現状になっています。

また北海道の豆類は本州の商人にみんな持っていかれてしまって、東京の値段と北海道で私たちが買う値段とが同じなのです。それはやはり中間搾取が大きいからだと思います。

いまお話がありましたように、政治ということになるのでしようけれども、女の人たちが声を大きくしていってもやはり限界があると思うのです。

猪俣　私も婦人会の活動は自分達の住んでいる社会の政治に目をむけることが大切ではないかと思うのです。農村の生産物は、私たちが勝手に値をつけるわけにいかない。誰かが勝手につけてくれるわけですね。それは生産費を割ろうと赤字になろうとおかまいなしに政府の都合のいいような予算によって買値をきめる。大資本に対決するところの農民の力があまりにも弱いということをまず考えます。それを強め私達の暮しを幸福にするのには、いろいろ問題がありましても、やはり私たち働く者がもっともっとよい生活のできるような政治を求めなければならないのではないか、と常に考えているわけです。それをいうとアカだといわれますけれども、それ以外に解決の道はないと考えております。

巽　政治には選挙というものがつき物ですから、正しい選挙をするということを、婦人活動の中に大いに盛っていくべきだと思います。

宮崎県ではいま総選挙を控えて、県下の婦人がみんなできめているスローガンがあります。それはえらぶ人の条件として、家庭生活の正しい人、汚職事件に関係のない人、お金を使わない人、言行一致している人ということをいっています。これをポスターにして全県下の町々に貼っております。

吉田　私も婦人の協同活動のいちばん大きな課題は、政治をよくすることだと毎日の生活で感じている一人です。たとえば私どもの市では婦人団体の活動に対して市からの予算的な援助は非常に少いのですが、そういうことを考えていくと、私どもがどうしても市の予算面に大きくタッチしなければ、いくら私たちが末端で狂奔していても、ダメだというようなことを強く感じているわけです。

土屋　いまの吉田さんのお話には同感です。現在、教育長をしておりますが、学校予算、社会教育予算などを町当局に要望するのに大変苦労しました。やはり婦人会など社会教育の活動を理解して頂くためには、たとえば婦人会の総会などに町会議長さんや町長さんにきて頂き、婦人会がどんな姿で活動しているかということをはっきりと見て頂くことがだいじだろうと思うのです。

そのいい例は、今年の婦人会の総会の席に町会議長さんがいらっしゃいまして、婦人会長、副会長、会計等の重要な地位の人の選挙の姿を見て、婦人会の人たちはたしかにキレイな選挙をするものだと感心され、それでは今年の町の助成金をもう一万ふやして四万にしましようと、自発的に提案され議会も通ったわけです。金額は一万ですけれども、その一万円は尊い一万だと思います。そして婦人会の助成金とか、母親学級の助成金というものは、はっきりと婦人会長さんの手に渡して、教育委員会では全然振っておりません。

そういうふうに明朗にしておりますので、青少年対策費とか新生活運動費というものも、私が教育長の席におります関係ではっきりと主張できるのだろうと思いますが、是非私は女の方にも町会議員ぐらいになって頂きたいと思います。議員の中に女の方がいらっしゃって、文教委員にでもなって頂いたら、手をつないでやっていくのにとてもいいのではないかと思います。やはり女の地位の向上ということは、その裏付けの問題にまで発展していかないと徹底しないような気がします。

森　いま婦人が政治に関心を持つというところに話がきて、予算ということが出てきたのですが、予算というものは数字の羅列ではなくて、ほんとうにその予算の中に施政者のいろいろな施政方針が盛られているのですから、目をあけて予算を見るということがだいじだと思います。その意味から、婦人会として政治に関心を持つという一つの現われとして、私どもはどんどん村の議会に出かけていって傍聴しております。村内の婦人会が連合してそこにジッと坐っているだけでも大いに効果があると思います。その結果なのか私どもは、社会教育費の中でとくに婦人学級などに使っている予算は一位を占めております。

猪俣　議会を傍聴したりしますと、男性議員ははなはだ緊張して、とても堅くなって品行方正らしく議案を審議するのです。私も何度か村の方をお誘いして傍聴し、勉強の足しにしましたけれども、委員会などはどこで決議するのだろうと思いましたら、協議会というものに切換えて傍聴を禁止してしまう。やはりそういうところからも婦人議員が出るということがだいじなのです。

それから、先生方の勤務評定ということが非常に問題になっているけれども、村会議員にも勤務評定をやりたいと思っています。婦人のほうで大きな要望として取上げて、出席状態や言行不一致の議員などを評定し、それを総選挙の場合の参考にしたらどんなものかとここで申上げておきます。

小倉　その評定を婦人会がするようにしたらどうですか。

猪俣　そうなんですよ。そうでないと、総選挙の場合、まだ名前のめんどうくさくない人に投票したりする現状ですからね……。

大谷　よくきくことなのですが、選村では投票する場合に圧力があるといわれる。たとえば、誰々に投票すれば必ず見破られて圧力がかかってくるということをきくのです。そういうものに対して婦人が共同で何かなさったということはありませんか。選挙の立会人が坐っていれば誰は誰に入れたということがわかる。名人になるとほとんど読んでしまうというのですね。

森　立会ったことがあるけれども、それはわかりません。ただ、村の人には、棄票するときに、部落で投票したものがそのまま出るのではないかという心配があるのではないかと思うのです。

猪俣　私の部落では買収されて投票するということがあるのです。監視する人がいて、その人と一緒に投票場に入って、机で書いて立って、それから入れる間に、監視の役目の人のほうにちょっと見せるようにするのです。それによって「私はたしかに書きました」ということを証明するのです。それで、ある部落では、百二、三十人が一緒に選挙遊説に聞われたということもあったわけです。

森　選挙の問題くらい恐ろしい問題はないと思います。選挙が公明になれば世の中が明るくなる、ということがわかっている婦人会の人たちは「選挙はいやだ」と申します。国会議員選挙でも、あの人に頼んであの道を直してもらう。あの橋をかけてもらう、というようなことがエサになって、超党派的に地域を挙げて、あの人を……というようなことになるおそれはあります。それが、地方選挙になるともっとひどくなります。

桜庭　私たちの部落では、おやじさんが子供やお嫁さんなどに「この人を書け」と強制します。投票の結果を見ると、必ずそういう結果になって現われているのです。

沢辺　私たちの青年団では、政治に関心を寄せることはいいけれども、活動に参加することはいけないという規約があります。町会議員の選挙があったときに、私たちは、立つ人がどういう考えでいるか、ということを知りたいために、立会演説会を要求したところが、反対され実現しませんでした。その後、青年団の役員選挙があり、立会演説会を要求した人たちが新役員になりました。ところがそれが村の方にわかったものですから、その年の青年団に対する予算が減らされたのです。とっても恐ろしいことだということを感じます。

大谷　みなさんどうも政治に対する恐怖症にかかっているようですけれども、何とかならないものですか。

吉田　先生にお伺いしてみたいのですが、たいていの婦人団体は、政治的に中立であるということをうたいます。しかし、婦人が協同活動によって政治を楽しい立派なものにするという行動を起すことは、そういう場合にどんなものでしょうか。いま婦人団体の政治活動というものが、有識者の間でいろいろに解釈され、新聞にも書かれていますけれども、先生はどういうふうにお考えになりますか。

大谷　これは婦人団体だけではなくて、青年団でも問題になっているし、農協青年部でも問題になっているむずかしい問題だと思いますが、私はこういうふうに考えます。集団的な選挙運動は、問題があると思います。しかし、正しい政治的な判断をする力を常日ごろから養っておくということ、それが十分になされておれば、一人一人の投票の結果が必ず一定の効果を得るというわけです。ふだん活動をやらないで、選挙運動のときにとびはねるから、政治の中立性を破ったということになるわけです。選挙運動をしなければならないときには、むしろ団体としては活動しないで――しかし常日ごろから、いったいわれわれはどういう人をえらぶべきかということを組織メンバーに十分わかるようにすることが、いちばんたいせつなことだと思います。その場合に、政党の問題が出てきますが、それは正しい政治教育をすることによって判断させる。ということ以外にはないと思います。そのためには自分たちの生活というものをよく見つめて研究し合うということがたいせつだと思うのです。

私はよく農村にまいりますが農村の方たちは若い人も年寄の人もとにかく政治に対する不満をよく述べられます。私はそれに対していうのです。政治があなたがたのところへ影響を与えてくるということは、すべてあなたがの一票

一票の責任ではないか。ふだんから、自分たちは何にいちばん困っているかということをお互いに研究し合って、そして、どういう政治を望むかということ――。そうして自分たちの要求を入れてくれるような政治を仕立てるために投票するということがいちばんたいせつなことではないかというふうに考えております。

吉田　ところが、先生、現実は、私たちがいくら努力してもより以上の大きな不浄なものがありましてはどうにもならないのではないかと思います。やはり老若男女ひっくるめて公明選挙運動を展開しない限り、婦人たちだけがやってもだめではないか。純粋な青年婦人たちだけで公明選挙を立派にしようなんていうことをいい合ってみましてもだめではないか、と考えています。

浜田　選挙は、町会議員、町長、知事ぐらいまでは、人柄がわかるのですが、困るのは国会議員の場合です。これは党派がありますので、自分の支持する党を守るために、より先にその党の中から誰か一人を入れなければならない結果になって参ります。

大谷　その政党と人物の問題、これは皆さん、どういうふうにお考えになりますか。

桜庭　衆議院の場合は政党、参議院の場合は人物。

森　政党か人かということで、何回も討議しましたが、ただいままでのところでは、結局、政党を選ぶのがいいのではないかというところにきています。

吉田　私共は、いろいろ勉強しました結果、市町村段階は政党を超越した人物でゆく、そして県会議員あたりから政党に左右されますので、政党ということです……。

巽　農家の生活をよくするためにということで立って、みんなでお選びしてもその人がすぐ向こうにひきずられて公約だけで終るという結果になりますね。

大谷　まあ大いに監視してください。必らずしも結論を出す必要がない問題ですから、ただこういうところに問題があるということを、お互いに話合うだけでよろしいのではないかと思いますので、一応この問題、これで打切りまして傍聴の方の御質問を受けることにしましょう。

質疑応答

質問　農村の現実の生活は政治につながるものであるが明日からでも婦人の力でできることをやらなければならないことはなにか、即ち根本的な全地域に通ずる婦人の自覚と行動の面についてどうお考えでしょうか。

森　婦人会で、なんのために私共は暮しているのかという目的をはっきりたてることが、一番ではないかと思います。私共は大きくいえば、本当に自分も幸せに、人も幸せ

に、みんな幸せに生きる社会、こういうことを大きく打出して、それについて協同活動をやってきたつもりでございます。

質問　限られた階級の婦人ばかりでなく、どなたにもできる、もっと切実な、先ず家庭の中からの問題があると思いますが。

土屋　私は婦人会活動にもグループ活動にも経験をもっておりますが、やはり婦人会のような大きな団体でやれる問題と、グループでなければできない問題とがあると思います。いまの御質問の明日からでも、ということは、地元から、足元からという問題に通ずると思います。足元からというのは結局、家庭から、その隣りから向こう三軒両隣りのおばさんからということで、一番下部組織といいますか、自分を含めた隣り組のグループに主体をおいて、明日の晩にも話合いをもって、問題を提供し合う、そして十日たったら、そこでまた問題を提供し合うという積み重ねが私は一番効果的だと思います。

桑沢　私は、全国的に通ずるといいましても、中央のほうで流行しているから、それでは私達もそれをもってきて話合いましようとか、流行で野茶の出荷グループができているから、私共もやってみましようということでなく、土地の人がなにを一番要求しているか、それを見つめることが大事だと思います。それは村々で違いますから、どんな形かということは決めることはできないと思いますが、蹴鞠グループでも、なんでも、なにをみんなが望んでいるかそこからもってゆくことが一番大事だと思うのです。

森　お答えになるかどうかわかりませんが、日常の平凡な生活の中から、小さな真実を見出して、それを積み重ねてゆくという仕事が大事なことではないか。それをやるために、いま全国的に流行のようになっていますが、ペンを握る生活様方グループですね、この活動が非常におもしろくて、役に立つと思います。こういうことは明日からでもできるのではないかと思いますので……。

沢辺　こんなこともいえると思います。私共の生活の中で感じられる不合理を婦人は婦人、青年は青年の組織の中で話合っていけば、社会のしくみの中につながる問題が出て来ると思うのです。そういうものの積み上げによって自分達の意識とか、政治的関心なども、自然高まって来るのではないかと思います。

小川　身近かなことでできることということですが、まず私達が帰って隣りの人達と仲よくしてゆきたい。というのは、特に島根の出雲地方は古いところで「隣りに蔵が立てば腹が立つ」ということばがあって隣り同士のねたみが現在も残っております。ある子供が中学を卒業して、就職

することになった。その子供は身体もいいし、頭もいい、優秀な成績だったのですが、会社の人が、思想調査とか、家庭調査に来られるのに、その家にゆかないで、近所にゆく。そうすると近所の人達が、なんでもないことをいいふらしたために、その子供さんは就職できなかったという例があるわけです。そういう点からも今日帰って明日からでも、隣りの奥さんと更に仲よくしてゆくということが、大切な問題ではないかと思います。

山口　話合うということが先ず第一だと思います。その話合う場合にも、内気な方は、話合えないということがありますので、調査用紙を渡すなどして一つのテーマというものを見つけていったら、共通した問題をつかめるのではないかと思います。

高橋　協同活動で、すぐ明日からでもやれることというのですが、なんでもいいような気がするのです。その地域にあって、みんながやりたいと思うこと、たとえばペンを握るのでもいいし、隣りと話合うのでもいいし、本を読むのも結構ですし、本当に小さなことでもいいから、しかも誰でもできるやさしいことから、やりさえすればやれるのだという気分になって、早速帰ったら、とっつきやすいものからやってみましようと思いました。

質問　茨城の沢辺さんに質問します。私達はこれからの将来を若い人達にかけておりますが、村の職会で予算をけずったりする圧力に、どう対抗していらっしゃるのですか。

沢辺　予算をけずられたということは、私達、青年団活動の上で、致命的といっていいくらいです。町の青年団は本当にお金がない、役員になる人は、自分の生産活動を犠牲にすると共に、経済面でも、とても苦しいわけです。そういう思いをしてやっている青年団が、町から認められないということと、それから予算がないということは運営にさしつかえるという面で、団員自身の関心も薄れてくるわけです。そういうことでみんなとても心配して、町の予算委員会などを傍聴したいと申し出たのですが、事前にそういうことがあったものですから許されなかった。そういうことを何回か繰返しましたが、結局「アカ」だといわれて未だに許されないのです。それからもう一つは蚊と蠅の防除の問題ですが、せっかく町の予算会議で五万円もらうことができたのに、部落で反対されたために予算が宙に浮いてしまっているわけです。そういう点で、大人達の圧迫がとても強いのです。去年は婦人会の人達と協力してやったので、お母さん達とは、とても仲よくなれたのですが、私達の青年団は、おやじさん達との対立がはげしいのです。結論ではなくても、解決の糸口くらい見つけて帰りたいと思います。

藤田　私のほうの青年団では、会費は少しですが、いろいろな事業をして収入をはかっています。例えば映画をして券を売るとか、年に一回青年団自身が芝居をするとか、いろいろ工夫をしています。

沢辺　私の町は、都市に近いので、映画などやっても駄目だということもあるのですけれど、一年に一ぺんくらいは、いままでやったのです。婦人会や、未亡人会がやるのとかち合うことがあって、そういうときには券を買ったばかりなのに、またかとお義理で買ってもらうということになるのでやめました。地域によっては部落の青年会でお金を得るために、畑や、たんぼをもっているところも多いのですが、そのお金を旅行などに使ってしまいます。いまの青年団は、娯楽のための組織なのです。

大谷　いろいろあると思いますけれど、沢辺さんのところや、桑沢さんのところは、たいへんつらい、しかしいままで皆さんがやって来られたあとを振返ってみると、協同活動というものは、壁があるにもかかわらず、やれるということになるでしょうか。

小倉　私は熱意さえあればやれると思います。お金の面で坐折しやすい状態になることがありますけれど、そういう障害に当った時には、お金がなくてもやれること、たとえば一週間に一ぺんずつやっていた溝の掃除を二へんにする。そうすれば薬を使わないでも、ある程度蚊の駆除に効果があがるのではないかというように。それから町のお金に依存するのではなく、私達の政治をよくするためには自分達で、その資金くらいは生み出そうという意気込みもほしいと思います。

大谷　高橋さんと小倉さんから、一応結論を出していただきました。そこから引き出される一つの問題として、協同活動を中心にお話合いしたのですけれど、なんでもかんでも協同でやればできるというふうに考えて、場合によるともたれかかるという問題が出て来るのではないかと思います。そうなってくると折角の活動もくずれてゆくと思います。協同活動を通じて協同そのものにもたれかかるのではなくて、協同の底にあるものを個人個人が自覚してゆくということが大事なことではないか。むしろ私は、こんどの会議で協同活動ということがとり上げられたということだけにとどまらず、協同活動を通じて自己を高めるということをいいたい。だから沢辺さんの場合、町から手紙をくれるというのでもらう気になった。ところが妙なことになったというのがつまづきになっているとすれば、もう一度、もらわないでも、もとのもくあみだから、はじめからやりなおすという気持でやってゆく以外に手はないのではないか。たいへん苦しいことだと思いますけれど、一度やりはじめたものは、途中で坐折すると、どこの例をみても、再び立ちなおるまでには、たいへん長い年月を要するので、結局、雲集霧散してしまうことが多いと思います。

土屋　協同活動する場合にリーダーは家庭の中の協同活動でもグループ活動でも、個人の尊厳をまもるということをはっきり頭におかないと失敗すると思います。ですから役員は決して固定せずに、もちまわりにするとか、会場ももちまわりにするとか、仕事は分担するということが協同活動を進めてゆく上には、重要な問題だと思います。そしてその人の個性、趣味ということをお互いに把握し、お互いの家庭生活を尊重し合うような気持、そういうものが大事だと思います。

大谷　第四部会を、これで終りたいと思いますが、繰返し申しますように、この会は結論を出すための会ではなく皆さんで話合っていただいて、お互いに高め合うことができればよいのです。おそらくこの機会にいろいろ学びとられたところがあったと思います。その意味で、また明日から、帰られてからの活動に役立つことであろうと思います。

（閉会）

全体会議

協同活動の問題点

司会　西　清子

リーダー　伊藤　界

渡辺智多雄

坂西志保

大谷省三

◇印　会議員

事務局　只今から全体会議を開催いたします。

昨日から四部会に分れて、協同活動で生活を高めるためにどんなことができるかということについて具体的なお話合いをなさったわけですが、この全体会議では各部会に共通な協同活動の壁と申しましょうか、協同活動の問題点について、話し合っていただきたいと思います。協同活動の母体としての組織の問題、大きな団体から小さなグループも含めて組織というものが民主的に運営されるにはどうしたらよいかという問題などを中心として、いろいろ協同活動の問題点についてもっと深く掘下げていきたいと思います。

この全体会議のリーダーを西潤子先生にお願いいたします。

西　この全体会議はバズセッションによっていたします。バズセッションというのは、みんなでわあわあやかましくさわいで話合うということと、ここにならんでいらっしゃるみなさんが全員参加するということが特徴です。誰か一人が立ち上って発言するのではなく、自分達の意思を一人残らず発表できるということが非常に大きな要素です。それからいま一つは、各部会ではリーダーの先生方に討議の中心になっていただいていましたが、この全体会議では皆さんが主体になって、問題の解決点を話合いによって見出だしていただくことになります。能率的にやるために一応農村の問題に関心のある方と、都会の問題に関心のある方と別れてかたまっていただきたいと思います。

（席をかえてグループ別にわかれる）

六人ずつ十のグループができていますが、その中でメンバーの意見を進行させ、整理してゆく役割のリーダーを選びたいと思いますが、各グループの手前の列の一ばん左の方がなって下さい。では今から六分間差し上げますから協同活動の問題点となることを早速話しあって下さい。

（話合い）

問題の提起

西　それでは最初のお話合いの六分が経過しましたので、リーダーの方に順々に、どういうことを皆さん方メンバーでお話合いになったか、まとめて発表していただくことにいたします。あと一分さし上げますからリーダーを助けて整理をして下さい。発表されたものは事務局で黒板に書いてもらいます。

一　リーダーの問題、資金の問題、役員の問題。

二　小人数から出発する。目的意識のはっきりした集団を作る。個人の人格の尊重。

三　小さなグループにとじこもらないで広い視野を持つ。落伍者を出さない。

四　グループ員が自主意識を持つこと。リーダーによい人を得ること。

五　リーダーとグループ員の思想の高低を調整すること、その中でも個人の自覚、集団の一人一人の自覚が問題。

六　無関心、未組織の人を加えなければならない。間違った組織なら作らない方がいい。

七　グループの誕生は、仲間意識をもった集りからだんだん大きくすること。

八　家庭内の封建性が問題。他団体との調整会に出られない人をどうするか。政治との関係。

西　政治との関係というのは大変大きな問題ですが、どういうふうに具体的に考えたのですか。

◇　私達の力には限度がある。それを解決するには政治にまつよりないということを壁にしたのです。いくらやっても婦人のグループ活動には限界があるということです。

九　下からの盛上りでなければならない。

十　グループの会員自身の自覚の不足。リーダー間の摩擦。男性の無理解。

西　非常にたくさんの問題が上っておりますが、リーダーが発言した以外に、こういう問題を話合ったということの補足があったら出して下さい。

◇　（第七グループ）　私のグループでは仲間意識を持ったグループを理想とするということをいったのですから、二のグループの目的意識のはっきりした集団でありたいということに入ると思います。

◇　（第十グループ）　グループ外の問題で男性の無理解というのは、男性だけでなく他の全部の、グループに属さない方全部の無理解ということで話しあわれました。

西　これで一通りグループの話合いの意見がまとまったわけです。それからグループとグループの間の意思の交流もできたわけですから、今度は問題をしぼってみましょう。ここにたくさん問題が出ておりますけれども、それが大切だと思う方は、片っ端から読んでゆきますから手を上げて下さい。

（　）内は手をあげたもの

リーダーの問題。（2/3）

資金の問題。（1/4）

役員、リーダーの問題。（少い）

それから小人数から出発するということ。（1/4）

目的意識のはっきりした集団を考えなければならない。（大多数）

個人の人格の尊重。（全員）

小さなグループに閉じこもらないで広い視野を持つ。（なし）

落伍者を出さない。末端の人まで徹底しなければならない。（1/3）

グループ員が自主意識を持つこと。（殆と全員）

リーダーとグループ員の思想の高低をなくすこと。個人の自覚。（少い）

それから間違った組織はない方がいいということ。これはどういう意味ですか。

◇　はっきりした政党色を持ったようなグループなら作らない方がいい。政党が動いて作ってゆこうとしているグループが今、現れかかっていますが、それは作らない方がましだということです。

西　それはどうですか。（少い）

家庭の中の封建性が問題であるということについて同感の方（1/5）

他団体との調整問題。（2/3）

政治との関係というのは、婦人会がいくら頑張っても最後は政治の問題にぶつかる、限界があるということでしたね。これについて賛成の方。（多い）

そうしますとだいたいグループで話合われたことを、今全員の参加でもう一度問題をしぼってみたところが、一ぱん多いのがリーダーの問題、その他、他団体との調整の問題、政治との関係、目的意識のはっきりした集団ということと、個人の人格の尊重、グループ員が自主意識をもつこと小人数から出発することなどが、協同活動を進めてゆく母体になる組織の問題として、考えられなければならない。そこにいろいろ問題が起っているのではないかということになりました。

ではリーダーの先生方に伺いたいのですが、こういうふうな問題の提起の仕方は妥当であるか、あるいはこれ以外に考えなければならない問題があるのかどうかということについてどうぞ。

坂西　問題点として出されていることが多いのではないですか。

渡辺　そこに意見として出されていることは、ひっくり返して考えれば、そうありたいが現在はそうではないところの問題というふうにみていいと思う。

伊藤　今そこに問題点として出されたのは、坂西さんのおっしゃったようにむしろ意見ということかもしれませんが、二日間にわたって話合ってみて、まだまだ納得がいかないという問題が、そこにずらっと並んだような気がします。

大谷　私の部会でも多かれ少かれ全部出ていた問題だと思うのですが、全体会議に持ちこすような問題が出ていると思います。

西　先生方の御意見はお聞きのようでございます。それではいま出された問題全部についてもう一度皆さんの御意見を伺いますから手をあげて下さい。

リーダーの問題。（2/3）

集団の目的意識の問題。（1/3）

集団と個人の問題。（討議の必要なし）

グループ員の自主性の問題。（1/4）

他団体との調整の問題。（殆と全員）

政治との関係。（殆と全員）

そうするともう一度先生方に伺ってみたいと思います。たくさんある中でリーダーの問題、集団の目的意識の問題、他団体との調整、政治との関係についてもう一ぺん考えてみようという意見が多いようですが、これについて組織の問題を考える場合にこういうことが必要であるとか、あるいは落した中にもう一ぺん考えてみる問題があるのではないかなど、先生方の御意見を伺いたいと思いますが。

坂西　下から盛り上るというところが非常に大きな問題ではないかと思いますが、どうでしょうか。

渡辺　根本の問題は、目的をはっきりさせた団体であるかどうか、そこに皆さんが非常に疑問を持っておられ、問題を持っておられる。この中では目的意識の問題というのが非常に問題ではないかと思います。

坂西　たしかに目的の問題は大切ですが、目的意識を問題にしたところで、人によってはそれを理解できないような、経済的な立場に置かれている人がたくさんいる、そういう人をどうするかということが大切ではないのですか。生活そのものに打ちひしがれて、それ以外のものは自分のためになっても取り上げられない。その人達を協同活動をとおして手をつないで入れて一緒に向上してゆく。これが非常に重大な問題だと思います。

大谷　私は先程からの手の上り方を見ておりますと、全くどちらにも反応のない方がかなりある。その賛成数というものは必ずしも皆さんのまとまった御意見ではないように考えられます。つまり表題だけではまだお互いに通じないものがあるのではないかと思います。

伊藤　今、大谷さんがいわれたので、私もそう思ったことが一つあったのですが、皆さんの手の上げ方ははなはだ自主的でなかった。初めの時と二回目は非常に調子が違っていた。従って坂西さんのおっしゃった、この問題の方が大切だというところにくい違いができたような気がしますが、私の個人的なこととしては前の五つの問題はいいとしても、政治との関係については皆さんがいかに理解しておったか、どういうふうに考えておられるか疑問である。団体活動をやってよそから圧力を受けた場合の問題を政治と

の関係と考えられるのか、あるいは大きな運動をやってゆくにはどうしても政治というものを理解するだけの努力が必要であると考えておられるのか、その点がちょっとわからないので私はしぼるという意味では、それを他の団体との調整といった問題に含めてもいいのではないかと考えます。

西　それでは今、先生方の御助言にもありましたようにやはりこの六十人の方といえども、必ずしも自主的な即座の態度の決定がなかなかむづかしい。まして、一般の社会の中には云いたいことも言えない人がたくさんあるのだということは、非常に大事なことだと考えられますので、下からの盛り上りがなければならない、末端の人を含めて組織の問題を考えることを第一にしたいと思いますが、いかがですか。（拍手）

今度はリーダーをお隣りの方と交替しましょう。

（話合い）

下からもりあがる組織にするには

西　では、リーダーも含めて誰でも結構ですから、組織をうまく作るためには下からの盛り上りが大切だが、それにはどうしたらよいか。どんな問題があるか。何が大切かということを発表していただきましょう。

◇　下からの盛り上りの力にするには生活に直結した問題を取り上げなければならないと思います。

たとえば家庭生活の中にある経済的な悩み、貧乏なんかも無視できないと思います。読書とか文化的なことだけを話題にしているのでは、下からの盛り上る力は弱いと思います。

◇　組織を作る時に一ばん壁になりますのは無関心な人、未組織の人ですが、無関心の中に三通りあると思う。一つは生活に打ちひしがれ組織を作る元気のないもの。もう一つは自分の生活が経済的にめぐまれているのでそういう組織はいらないという人、それから組織があるのも知らないという活動に関心のない人です。この人達がこういう活動をやってゆく上において一ばん突き当る壁ではないかと思います。そういう人を含めてゆくにはどうしたらよいかが問題になると思います。

西　あなた方のグループはそれをどうしたらよいとお考えになりましたか。

◇　それは結局、政治的に解決するより仕方がないと思います。グループ活動では力が及ばないので、政治の力によってそういう人の生活にある程度ゆとりをつくることができるのではないかと思う。

西　ゆとりができなければそのグループにも入ってゆけないというのですか。

◇　ある程度ゆとりのある人が活動を盛んにして、そういう人を救うような運動をしなければならないということを云っているのです。

西　その隣りの方。

◇　政治にのみ頼ることは、大変飛躍しすぎると思います。その前に私達でできるものがあるのではないかと思われます。共通のものを見出だしてそういう人達に呼び掛けて、そういう人達を同じ道に勝うという努力をしなければいけないのではないかと思います。

こういう集りにでない人を引っ張ってゆくことには、リーダーの熱意が大変必要だと思います。身近な問題を取り上げて、会合に出られない方々には、ノートを廻して何か問題があったら書いてもらったり、こちらからお知らせしたいことはプリントして廻すとか、また井戸端会議を大いに活用して身近な問題を見つけて、それを協同活動で解決するような方向にもっていったら、だんだんにその協同活動に入っていただけると思います。

西　その他どうですか。

◇　グループでは結論が出ませんでしたので、私の考えを申し上げます。教養的な問題よりまず具体的な経済問題を解決しなければいけないという御意見でございましたが、私はむしろ主婦の教養を高めることにグループ活動の中心をおかなければならない。主婦が正しいものの考え方、ものの見方を身につけて、そこから出発して、いろいろ他の外面的な問題を処理しなければいけないと思います。

西　その教養を身につけるためにどういう方法があると思いますか。

◇　グループの中で行う主婦の勉強会などが一つの例です。

◇　私はそこまでいけない人達の問題を考えますと、生活につながった身近な問題、つまり子供の問題とか、毎日の衣食住の問題から取りあげることが第一だと思います。そうして二ばん目がリーダーの熱意が必要であるということ、これが私達のグループの意見です。

西　その他ございませんか。そちらのグループ。

◇　下から盛り上る組織にするためには、どうしても話合いから始めたいと思います。その話合いの場はなるべく小さくして、隣組とか班とか、向う三軒両隣りといった、最も気安く話せる範囲で、希望によって計画を立てることが必要だと思います。もし具体的な希望が出ない場合はリーダーが啓蒙してゆくことが必要ではないかと思う。

西　もう二、三人お聞きしましょう。

◇　末端の人の意見が盛り上らないということは意欲が

ないから盛り上らないのですから、自主性を持った人間作りから始めなければなりません。その目的を果すためには活動の場を小さくして、まず家庭とか、十四、五人くらいの集り、手芸のグループなどから始めて、だんだんチーム・ワークを大きくしていったらどうだろうかと話合いました。

◇ 困っていらっしゃる方を入れるには、その人達が困っていらっしゃる問題から取り上げて、具体的な方法、たとえば経済的に困っていらっしゃる方ならば、共同購入などを協同活動で取り上げて末端の人達を加える方法と、子供さんでもいらっしゃって、協同活動に参加できない方には、是非連れていらっしゃいというようにすれば、私もやりましょうということになるのではないかと思います。

西　それではリーダーの先生方にアドバイズして頂きましょう。下からの盛り上りをつくるためにはどうしても共通の問題、身近かな問題を取り上げてゆくことが第一ではないだろうかという意見が非常に多いのです。中には一人一人の自主精神が大事だということがありましたが、これについてどうでございましょうか。

大谷　私はやはり身近な問題から取り上げることが大事ではないかと思います。それは生活に直結した問題になります。そうすれば範囲も自ら限定されてくる。初めから大きな集団でやろうとしてもできないのではないか。だから手近なところで、意思の疎通ができそうな人から少しずつ少しずつ積み重ねてやってゆく、そうしてその実績を通じてだんだんたくさんの人が入ってゆくように拡大するということが大切だと考えます。

坂西　私も大谷さんのおっしゃる通りだと思うのですが、その上にやはり問題を、リーダー格と申しますか、これを主張する人がほんとうに何か希望の持てるような明るいものとして、提供する一つの技術を考えなければならない。それからこれはもう少し具体的な問題になりますが、貧しい余裕のない人達がグループに属するのを非常に遠慮することは、時間を一時間とられると一時間の内職の時間を割かれるから、生活をおびやかすことになる。ですから会合は端的に簡単に要領よくという問題まで考えて頂かなければたくさんの人がついてゆけないと思う。

渡辺　今の地域の婦人会のようなところでは下からの問題が非常に大事になると思いますが、私共の部会ではグループ全体が自分等の要求があって、その要求を果すために目的をもって集まったグループなので、そこには下からとか上からという問題がなかった。しかし階層ということを問題にしました。その場合でも、職業の違った階層ははっきり問題になる。たとえば料理講習をやるのでも、大きな婦人会で商家の人が中心になってやったら商家向きのごち

そうが出来まして、農村の人には役に立たない。

また姑さんと嫁さんではそれぞれ要求目的が違う。そういう階層に分れているということもはっきり皆さん認識されております。

そこで私は、もう一つ階層がある。農村には大百姓と小百姓があるのではないかという問題提起をしたが、このことに対しては案外御意見がなかったのです。農村では都会よりももっと地域の婦人会が大きな力を持っている。そういうことを考えれば、下から盛り上るということが非常に大事になってくると思う。その婦人会の会員である何人かの同志が集まって自分達に共通な要求をかなえるために共同作業をするようなグループがたくさん婦人会の会員によって作られれば、いわゆる下からの盛り上りというものが自ら出来てくるのではないか。そんなことも考えたのですが、しかし要求があってもその要求がなかなか意識されないところに問題があるのでしょう。

私は、婦人会あたりにしょっ中会合があるが、それに集まる人がたとえば中農以上の人というように決っていることもよく知っている。そういう階層とは別な階層、婦人会などで勉強することを必要とする階層、そういう人が自覚していない。しかし要求を自覚させるためにはどうしたらいいか、これはなかなか問題と思う。大百姓は小百姓の気持になってみなければいけないと思う。もう少し自分の周囲にそういうたくさんの階層があるということを考えて頂きたい。そこからこの問題は道を開き得るのではないかと考えております。

伊藤　今の話でも気がついたのですが、皆さんの御意見、衍グループの御意見を聞いていると、止むを得ないことでしょうが、地域の婦人会を頭に入れて話している人と小さなグループを頭に入れて話している人がある。第一部会ではほとんど小さなグループで仕事をしていられる方が多かったのですが、敬服を高め、個人の意識を高める仕事をしておられる人は、積極的にグループに加わろうとしない人は相手にしないということをいっていました。私も婦人会、婦人のグループ活動は何でもかんでも人を集めさえすればよいということではないと思う。

しかしながら社会を見渡してみると、商店街、特に中小の商店の集りはどうやって仲間を作れるか、また、日雇いの人々が生活の問題を中心とするグループに出てこられるためにはどうしなければならないかという問題がある。その場合にはリーダー自らが時間を割いてそういう家庭に足を繁く運んで手をつないでゆくということが、私の部会でも話合われました。

西　先生方の御意見に対して、違った見解をもつ方があ

ったらどうぞ。

◇　坂西先生のおっしゃることはわかるのですが、一ばんの根底に、日本人の誰か一人でも不幸な人があっては幸せでないという気持がなければならない。それがあって始めて協同活動がうまくゆく。その点をもう少し考えてゆかなければいけないと思う。

坂西　その点を私は言ったのです。第三部会の渡辺さんに私は発言していただきたいのです。と申しますのは、職場のグループの意識を盛り上げさせようと一生けんめいになっていらっしゃるのですが、グループとして話合う時は団結して強いが、個人の問題としてたとえば生理休暇を要求するという場合弱くなってしまうということがあるのです。渡辺さんは、あなたのグループでどういうふうに解決しているか、解決しようとしているかを話して下さい。

◇（渡辺）　私がやっているグループは、皆さんがやっていらっしゃるグループとまではいかないのですが、何かしょうかなという過程です。私達の集りで決めたことが、個人の責任に戻ってきますと反対の意見になるのです。それがいけない個人の弱さだと思うのですが、生理休暇でも、みんなが集って決めた時、みんなとりましょうと誰一人反対がないのですが、一ヵ月くらいたって結果を調べますと生休をとった人が一割にもみたないのです。そこで自分達できめたことがほとんど実行されなかったということがわかりました。それは私の努力が足りなかったということがこの会議に出て始めてわかったわけです。私はみんなで一緒にゆっくり話合ってみたいと思っております。

西　皆さんの意見を徹底してみたいということですね。今の方は職場の方ですが、他のグループとか婦人会などでそういう問題をお持ちになっていらっしゃる方で、御意見のある方はいらっしゃいませんか。

◇　グループの中では意見をはっきり言っていても、やはり家庭に持ち帰った場合に、家庭の空気というものが、グループの話合いを受け入れる体制になっていない場合に問題があります。その人ははっきりと賛成もし、これから協力もしょうといって帰ったわけですが、家に帰った場合に問題が逆転する。このように家庭の内部が封建的であったり、拭いきれない問題があるとグループ活動に支障が起きてくるということが多いようです。

西　それをどうしたらよいと思いますか。

◇　実行できないという点に問題があると思います。お勧めを持っている方はやはり、あまりきついことをいうと誠に関係するからいえないし実行できないという問題があると思います。婦人団体の場合はそういう心配がないのでどんどんぶつかっておりますが、一人ではなかなかできな

いことでも、集団になりますと勇気も湧いてまいります。職場の場合にはやはり為政者につながっている問題だと思うので、その根本的な問題から解決してゆかないとむづかしいと思います。

西　職場の場合には相手があるから大変むづかしいということです。次の方。

◇　女同士の足のひっぱりあいとか、同僚の無理解、本人の無自覚等が原因していると思います。決ったことが実行できないということは、自分だけがいい子になりたいと思って、いいことだと知っていてもできない。いいことをやれないという無自覚さがあると思います。そういうことを直していかなければならない。

◇　商店の場合では、私の体験から申しますとこれこれという正しい目標ができた時には皆が一致しているけれども、それが対外関係となった場合にくずれる。それは社会活動に慣れていない女の弱さかもしれませんが、その時に決断と勇気を与えるものはリーダーにあると思います。そうした場合は、強力に引きずってゆく中心になる人によって解決してゆくのではないかと思います。

西　坂西先生、お聞きになっていらっしゃって、足りないところ、もう少しここを考えたらということを御指摘願えませんか。

坂西　非常にむずかしい問題で、長期計画でゆくほか道がないのです。これははっきりしているのですが、もう一つは個人の弱さというか、あるいは組織の弱さによってくずれる。その崩れる前に集団として、グループとしてどういうふうな手を打ってゆくかということの話合いがなされたかどうか。現在では崩れて自然の消滅を待つような傾向が強いようです。それでリーダーシップというものが必要になってきます。第三部会の中にはかなりリーダーを選ぶという考え方があったのですが、リーダーというものは今までの経験からいうとボス的な存在で、牛耳る人と考えられている。

私が指導者とかリーダーという言葉を使う時は、むしろ精神的な支柱となる人、信念を持っている人、協同活動によって何ができるかという夢を持った人で、みんなを引っ張ってゆく人、こういう人がグループの中にいるということは、グループの生命を伸ばすだけでなく、もっともっと発展してゆく可能性があると思います。

西　伊藤先生、リーダーのことについて何かございませんか。

伊藤　その前にさっきグループに入らない人をどんどんとばしていっていいといったことは多少誤解を招いていると思うが、これはたとえばお母さん達のグループに娘さん

を無理に入れることはできないように、立場立場や会の目的によって、グループに入らない人がある。そういう意味ですからお断りしておきます。

次にリーダーのことですが、小さなグループを作っておられてぶつかるのはこの問題だと思う。第一部会では、或る人が私の方のグループは民主的で規則もありませんし、会長もおりませんということだったが、別の人は十六人のグループで会則があり、会長、副会長があり、会長は一年交替の選挙制で、会の目的から活動内容までできていて厳しく守っているというやり方を発表され、これが対立していろいろ話合いが行われたのです。

小さなグループの場合は、形の上の役員は置いていないが、当番制をひいているという形が一ばん多かったように思います。そういう場合に誰か責任を持って、次の会は何をやろうと、具体的にどうするかということをきめる会のリーダー、即ち広い意味のリーダーは必要ではないか。小さなグループでも、坂西さんがいわれたようにその会を愛してやっぱり親身になってその会を、理解しているリーダーは必要だという結論になったかと思います。

西　それでは下から盛り上る組織にするためにどうすればいいかという問題、まだあると思いますが一応打ち切りまして、次に、皆さんたくさん賛成された「他団体との調整についてどうしたらいいか、五、六分お話合いして下さい。

（話合い）

他団体との調整について

西　それでは皆さん、どういう問題が出ましたか、たくさんあると思うのですが、都市の方、農村の方という立場をはっきりさせて御発言下さい。

◇（農村）　だいたい町村単位の地域を考えてみました。最初に団体間の共通の問題を取り上げてその解決をはかるように連絡をするということ。

二番目に同一の目的を持ったグループとか団体が連絡をとり、その事業の成果をよりよくするために、協同発表会とか協同計画会を開いてその事業を進めてゆきたい。

三番目に団体、グループにおいてチームワークがとれない点を反省してゆきたい。

四番目にリーダー同士が仲良くしてやってゆく。これは私は男でありますので、ちょっとわからない点もありますが、非常に競争意識が強いようです。

五番目には、目的が違ったものとの関係も、お互いに伸びてゆくために助けあってゆこうというこの五つです。

西　共通の目的を持つリーダー同士が仲好くしなければなどいろいろあったのですが、そのほかございませんでしょうか。

◇（農村）　農村の場合はその活動がたいへん成功して効果をあげるようになりますとグループの人達が、自分達だけのグループであるというような閉鎖的な気持になる。グループ員はいつもいつも開放的な気持を持って、自分達のグループの活動に対して賛成の方はお入り下さいという気持を持てば、他団体との調整が巧くゆくと考えます。そうして他の団体のリーダーとそのグループのリーダー格の話し合いが大切で、お互に尊重し合う気持で、お互に育て合うという気持でやる。ことに農村で地域婦人会、農協婦人部、生活改善グループが、そういうものを考えておりますが、その間の話し合いで問題は解決がつくと思います。

西　そのほか都市の方はありませんか。

◇（都市）　お互の会にはそれぞれの特色があるのですから、独善的に走らないで、お互に寛容性を持つということ。各々の会のリーダーになる方が話し合って、いいと思ったことは、お互の団体が横の連絡をもって緊密となること、私共は常に反省の機会を持たなければいけないということ。

西　それは希望ですけれども、あなた方のグループではそういうことについて現在その中のどれかに悩んでいらっしゃるのですか。それともそういうことは全部巧く解決しているというのがメンバーの意見ですか。

◇　解決しております。また、他の団体と接触した場合に、自分達のグループがしっかりしていないと、かえってばらばらになってしまうというおそれがあると思います。

西　しっかりしていないということはどういうことでしょうか。

◇　地域婦人会は婦人会としての目的があり、農協婦人部は婦人部としての目的がございますので、それをしっかり会員が掴んでいないと、どっちについていいかわからなくなって、いっそどれにも入らないという問題が出てくると思います。

西　目的意識をはっきりすることですね。

◇（都市）　自分自身のグループを正しく守るように努力して、お互に害にならなければ交流するという意見とそれは自己満足だという意見に分れました。結局は自己満足が交流をさまたげる一番の癌だということになりました。

西　私達はこれでいいんだというところで止っていてはいけないというのですね。

それでは、他のグループの方。

◇　私達はみにくい人間の名誉心というものを持っております。それを捨てて、お互に譲り合って、お互の美点を探し、それを尊重し合い、理解し合って、そうして仲好く

することは、みんなの仕合せであると同じように私達自身の仕合せであるということをよく考えて、仲好くしてゆきたいと思います。

私共のところで話し合ったのは、それぞれのグループはそのグループの目的があり個性があり、内容も違うからあまり干渉しないということ。それからその相手の方に対してグループの内容をよく理解してあげるというようなことをやった方がいい。

西　皆さんたいへん優等生ばかりですが、ほんとうに私達のところではこういうことで他団体との調整の必要があるということでもいいのですよ。

◇　大きい協議会を持ちました場合に、直接その会としては取り組みにくい問題まで背負わされて、小さいグループは重荷で困り、引き受けきれないという場合があります。

西　大きなグループと小さなグループの調整の問題ですね。その他ございませんか。

◇　大きい団体間の摩擦があると思いますが、その摩擦の原因となるのはリーダーとか幹部級の方の勢力争いといったものがほとんどだろうと思う。それは下の方にはわからない。

◇（都市）　グループの中で別に今問題がなければ他の団体とあえて変流しなくてもいいのではないかと思うのです。変流したために、せっかく幸福に満足してみんながやっていたグループ活動が爆発してしまうことが偶々ある。消極的なようですけれども、グループ自体が、みんなの要求としてほかと変流して理解しあってゆこうということになって、始めて変流したらいいのではないかと思います。

西　自分の団体を大事にすることがまず第一だというような御意見ですね。

◇（農村）　たとえば新生活運動を徹底させなければならないという時には大体どんな形でやったらいいか。各団体でまちまちにやったら効果があがらない。それには婦人会は婦人会のやり方があるでしょうし、青年団は青年団としてのやり方もあるので、協議会をよく運営し調整をとりながらやれば、それぞれ同じ目的をよくやれると思います。そして、それを小さなグループにだんだん徹底してゆけばいい。

◇　たとえば生活改善グループと婦人団体との調整が巧くゆかない例があります。

こういうふうな問題の起りは、生活改善グループは農林省の指導のもとにある、労働省が婦人会議をなさる、婦人団体は文部省が管轄していらっしゃるというように、官庁も一つの婦人を相手に各方面から組織が分れている。末端の

婦人団体でも、それが原因で摩擦が起ることがしばしばある。一つ、官庁の方でも調整して頂けないか。

西　それではこの辺でリーダーの先生にお返ししまして渡辺先生からアドバイズして頂きたいと思います。

渡辺　団体と団体との軋轢はまず第一に助成金、補助金に関係がある。こういうものがあるので、これに早くたくさんありつきたいという競争が始まると、ここに団体同士の対立が大きく出てくる。それから村や町の中で同じ婦人達の集まりだったら自分の方が主導権を握ろうという主導権争いがある。これは団体全体がそういう形でおやりになるのでなくて、幹部の人達の間の問題かもしれませんが、やはりその責任はその集団の会員皆さんにあると思うのです。餌に飛び付くことから団体同士のいざこざが起っている。この餌を、もう一度みなさんで反省してみれば案外つまらない餌なのです。争いの種にはよく自分等を利用しようとする餌が引っかかっているということを、争いが起きかかった時に見ることも、団体同士の摩擦をなくする一つの方法ではないかと思っているわけです。

西　同じ農村関係で、大谷先生いかがですか。

大谷　お話を伺っておりまして、都市と農村の場合かなり性質が違うと思う。どうも農村の方は遠慮して、実際お困りになっていらっしゃることを出していらっしゃらないと考える。昨日から私共の部会で、いろいろお話し合いをしたのですが、結局婦人が社会的な協同活動をやってゆくためには、どうしても生産の問題に根をおろさなければいけない。農業経営の問題を考えなければいけない。そういった経済問題をやるということになると、どうしてもこれは、経済団体としての農協を利用するというか、農協とつながる必要がある。ところが最近になりまして農協の組織とつながる形で農協婦人部というものが出来ているが、これと地域婦人会との間で、各所で問題が起きているように聞きます。

先ほどからいろいろ御意見が出ていますように、各集団は各集団の特性を持っている。目的が違う、したがってそれぞれの目的を達成するのに最もいい組織にするということが大切なことであって、その場合に必要とあれば二重加入をすると思いますが、そういう在り方があってもよろしいのではないか。農協婦人部というものが実質的には地域婦人会というものの経済部と申しますか、その一環としての働らきをするように、その地域全体を合理的に再編成をするという気持にならないものかと考えさせられる。ただ問題は農協婦人部としても、地域婦人会というものがそっくりそのまま移行しているところが少なくない。これはかなり問題がある。それは御承知の通り農業協同組合という

ものは経済団体でもあるために、加入するについて一定の資格を必要とする。つまり農家でなければ入れない。農家でない人達も準組合員としては認めておりますが、正組合員ではない。ところが農協婦人部のそれぞれの組織を代表して出られる役員の方々が全然農家と関係のない地域婦人会の会長の方々がそのまま出られることがある。これは明らかに便宜主義で、双方に混乱を起すもとになる。それぞれの目的と性格を考えて合理的に処理するということをやってゆけば摩擦というものは少なくなってくるのではないか。そうしてそういうふうに調整された上で相互に協力すべきことは協力する。そういったことが必要ではないか。要するに筋を通して考える。筋を通さないで感情的にお互にもたれ合っているところに問題があると思う。

西　いま渡辺先生並びに大谷先生からのお話がございましたが、これにつきまして農村関係の方々はもう一度お二人の先生方の御意見に対して、私はこう思うということがありましたらおっしゃって頂きたい。

◇　渡辺先生のお話に同感です。大谷先生のおっしゃった重複加入、これは実際私のところでそういうように行っておりますが、この場合はむしろ問題となってくるのは、一般会員よりも役員の間に問題があるようであります。またこれは必らずしも女性だけの問題ではなくて、男性の側にも問題がある。というのは協同組合の場合、婦人部の仕事の中に協同組合運営の責任が充分含まれているということを、むしろ協合組合員である男性が考えるべきで、男がやらなければならない問題を婦人部に付加する傾向があると思います。

◇　この席で強調したいのは、農協婦人部も地域婦人会も、なんらかのかたちで婦人の地位の向上のためにつながりがあるのではないか。ところが、私共が見ている範囲内におきましては、農協婦人部は婦人の地位向上のためにどんなことをしているかということを反省しなければならない現状なのではないかと思う。

第一に婦人自身が自分達のやらされている仕事に対して強く反省しなければならないと思う。実際は農協の購買部の成績をあげるために利用されているのが現在の大部分だと思う。こういったことを、この会議を通じて婦人の立場で強調してもらいたいと思います。

西　この婦人会議でそういうことを強制はできないと思いますが、御意見として承っておきたいと思います。

それでは今までのお話し合いでちょっと助言して頂きたいと思います。

渡辺　団体にはそれぞれ違った目的がある。その目的を充分果せるように団体の仕事をやってゆく。これが団体を

育てる大切なことだということは申した通りです。

いま農協の問題が具体的なこととして取り上げられてきたのですが、農協婦人部はお金がある。これは大事な問題ですが、大事な問題だけに悪用される場合もあることを考えてもらいたい。

地域婦人会はそういうお金がない。せいぜい月十円ぐらいの会費で、よくこれで一町一村の大きな団体が賄っているものだと私はびっくりする。一人十円ぐらいの会費でやってゆくというので、やれないことが出てくるからもっとお金をほしいというので、役場を突っつくと出してくれる。このお金には紐が付いているということを自覚しなければならない。

大谷　農協婦人部の非常に具体的な問題になりましたが、一つの団体の或る地方の実情だけをみて全体がこうだと決めつけることは問題がある。

非常に小さな具体的なものをもって一般を規定するということが一番いけないのではないか。お互に謙虚になって尊重し合うというのはそういうことではないかと思う。

いま渡辺さんから農協婦人部について出ましたが、本質的にそういう問題を含んでおります。私も農協婦人部を見て参りましたが、かなり立派な活動をしているということがあります。これは認めなければならない。お互にアラ探しをするのが大事ではなくて、協力して農村婦人の地位を向上すべきだということを考えなければならないと思う。

渡辺　もう一言皆さんに希望がある。

農協婦人部をほんとうに動かしているのは誰か。もちろん婦人自身の場合もあるだろうが、概して農協婦人部はほんとうに婦人の手で動かされてはいなくて、男子会員の手で動かされているという事実があるようです。婦人の仕事に非常に関係の深い購買のような仕事を男がやってゆくということ、なぜこういうところに婦人が入って行かないかと思う。もっと積極的に活動するべきでしょう。

西　それでは時間もなくなりましたから、都市の方の問題について御意見を伺ってみましょう。

◇　私共の区域には今までの地域婦人会がありますが、それに対して、自主的に出来かかってきた小さな婦人団体が、いろいろな圧迫を受けて悩むことがございました。その場合に、幹部間では摩擦があっても、下の方の者は案外そういうふうな面に無関心ですので、身近な点から手を結び合って、共通の目的のために一緒にやりましょうと働らきかけてゆきますと、だんだん摩擦がなくなってゆくように私は体験しております。

◇　目的が同じ団体でも摩擦乖離があると思います。

具体的に申しますと、ＰＴＡの活動でも、子供の生活、

いわゆる新教育の問題、いろいろ取り上げてやっておりますが、PTAには出ないお母さん達の小グループで同じことを取り上げている。そしてPTAに出て行くお母さんと地元の協同活動の中で子供を一生懸命見ているお母さんとの軋轢が大分ある。

もう一つは教養を高めるための協同活動、たとえば社会学級、母親学級、婦人学級というものが大きな組織で、いろいろな教養を高める活動をしているのですが、そこには全然出て行かないで、やはり小さく固まってやっている。そういうところにも軋轢がある。私共男性からみると何とかこの軋轢をなくす方法はなかろうかと思う。たとえば、縄張り争いや婦人のジュラシーをなくし、もっとお互に理解しあい連絡をとるようにすれば解決すると思うが。

西　同じ目的を持っていながらも二つ、三つのグループに分れてしまう。そうしてお互の間に問題を持っている場合があるという御発言でした。

◇　私は、いま問題になりましたPTA、婦人会、コーラスグループ、それら三つが一緒に巧く事業を行った経験から申し上げますと、三つの会に重複して入っている方が多かった。最初は非常に縄張り争い等がありましたけれども、その三つの会から委員を出しまして、協議会をつくり何のためにこの事業をするかという目的をはっきり徹底したことによって、この地域の子供の仕合せのためであるならば、というので、三つの会が共鳴して、仲好く手をつないで事業を成し遂げました。みんなが仕合せになることなら、手をつないでゆけるのではないかということを考えております。私共がやっているのは、親と子供と教師の会です。地域による小さいグループでお父さん方も出てきますし、お母さんも出てきますし、家庭における人間関係をよくすることを目標にしているわけですが、これが社会の人間関係についても非常によい効果をあげているようです。

西　学校の先生がそういう場合に役割をなすっているというわけですね。

◇(都市)　私は未亡人ですが、未亡人会がどんどん小さくなってゆく傾向にあるので困っている。なぜかというと貧乏なためなのです。婦人会に入っていて、また未亡人会にも入っていると、両方に会費を納めなければならない。貧しいのに二十円なり三十円なり納めなければならない。然し、未亡人会は有益にならないからといって脱会する人がふえています。私の町では婦人会と青年団には助成金がいくらかあるが、未亡人会にはないので申請したら、社会活動をしていないから予算がないとか言って下さらないから、なおさら社会活動もできないし、できないからなおさら脱退する婦人があるというわけです。

もう一つ、私達は小さな弱い者同士の未亡人会ですが、とてもいい会長に恵まれて、いくらか発展する希望があったのですが、その人が医療保護を受けたら所管のお役所から医療保護を受けている人は指導者になってはいけないと云ってきた。そういう不合理な法律があるのでしょうか。

弱い者同士だからなおさら強めて、高めてゆきたいが、どうしても大きい団体に吸い込まれる。大きい団体は育児や教育の面など生活の広い範囲にふれているが未亡人会は助成金もないため、事業もできず未亡人自体が生活担当者ですし、動きがとれないために崩れがちになりますが、こういう問題があります。

西　では都市の方。

◇(都市)　婦人の活動目標は、大体において婦人の教養、子供の育成、生活技術といったものにしぼられてゆくと思いますが、単独で活動しようと思いますと経費の面の問題や他の団体との摩擦がありますので、私の方では経費を出しあって料理講習とか子供の指導といった事業を共催でやっています。

◇　私、先ほど来伺っていまして、一つの団体の内部の調整ができないのに他の団体との調整ということはなおあり得ないと感じています。婦人会の中に派閥があって巧くゆかない。結局会員の自覚の問題だと思いますが、えらくなるというか、あるいは女の足を阻むという傾向が往々にして見える。だから他の団体との調整はもちろん必要だが内部の派閥をなくしてゆかなければならないということを痛切に感じます。比較的大きな団体の時にそういうことがあります。

私は二、三年前に、常識的に利害相反すると思われる団体――主婦連、農協婦人部、生活協同組合、この三者の方々が協力して大きな大会を催されたところに参加した記憶を持っております。そのような場合に、実に立派な提携の仕方で、堂々と大きな大会を打ち出していらっしゃいました。あの態度こそ必要で、私達は他の団体を尊重いたします前提に、また他の団体を震します前提には、その団体をよく知らなければなりません。批判がある場合に、ほんとうの意味を知らないで批判していることがあるのではないでしょうか。私共はそういうことの前に、自分達の質をもっと高めたり成長させることに専念しなければならないと思います。

西　先生方に御意見伺いたいと思います。

伊藤　PTAの話が出ましたのでちょっとふれておきたいが、学校のPTAには出ないで地域で何か子供を守るといったようなことで熱心にやっているようなグループがあるというようなお話があったと思いますが、それは今のP

TAの在り方に問題があるからだと云えるのではないか。それからもう少し突き詰めていきますと、今日本で行われようとしている教育に対するお母さん方の考え方が二つあるいは三つに分れている場合がある。それは先生の中でも分れている。そうしますと、教養を高めるとか研究するという場合にはあえて総まとめのPTAということでなく、グループ活動で という考え方は充分にあり得ると思います。しかしそれは学校のPTAとグループが対立していいということでないことは申すまでもありません。

それから先ほど皆さんの中から、御発言のあったように生活改善というと農林省、農協というと農林省、地域婦人会というと文部省、婦人会議――婦人会議というものは固定的に人を持っているかどうか別としまして――というと労働省、未亡人遺の問題になりますとこれは厚生省というように所管官庁が別になります。第一部会でも、やはり子供の仕合せと子供を守るという考えで、託児所の問題が熱心に話し合われたが、託児所を作ってくれという場合には、地方では民生関係の方がお相手になると思います。これが幼稚園になりますと教育委員会になります。私はただこういうことがこっけいだということを申し上げているのではなく、こういった国の政治あるいは行政の仕組にまで皆さんの目が伸びないと、みなさんの協同活動が大切なところで抜けてしまうのではないか。そうであってはならない。そういうことを、皆さんのお話を聞きながら感じました。

西　それでは同じ都市の部会をリードして下さいました坂西先生。

坂西　他の団体との協調の問題ですが、あまりはっきりは出てきませんけれども、争いとかいざこざがあるとすれば大体幹部の方、上の方であって、下の方では足並を揃えてやっているという印象を受けたわけなのです。これはほっきり言ってみれば、団体の幹部に選ばれるということは名誉であるという考えが、どこか頭にこびり付いているのが原因だと思う。幹部になるということは名誉でも何でもない非常に苦労する。社会的良心を持った人は自分が選ばれたら最善を尽さなければならないというので、任期のある間一生懸命やる。そして任期が来ましたら他の人に譲るというふうに、順番制をとる。そうしてその問題に応じて一番いい人を選ぶというようにすれば、いろいろな争いが解消できると思う。他の団体とも、一つの団体の内部での争いも解消できる。この名誉心というものを忘れてしまわなければならない。

もう一つは、一つの団体だけでなく二つ三つの団体に属している方がある。第三部会の加藤さんのところでは、小さいグループを作って、いろいろの会に属している人がそ

こに出て得た考えを自分の団体に持ちかえって、これはいいことですから取り上げてやりましょうというふうにしていらっしゃる。私は、ことに部会におきましてはあまりに組織が大きいために活動ができない場合がある。そこで満足できない方は、自分の気の合った、またお話のよくできる同志を集めて、いろいろ細かい研究をして、計画を立てである者は自分達の属している大きなグループに持って行って、そこで今度はやって、立派な実績をあげるということも可能ではないか。

一つのサゼッション として申し上げたいと思います。

西　伊藤先生、坂西先生の御助言に対して意見がある方はどうぞおっしゃって下さい。

◇　伊藤先生から、大切なところで抜けているのではないかという言葉があったと思いますが、そのことをもう少し具体的にお話しになって頂けませんでしょうか。

伊藤　端的に申しますと、生活改善は農林省と言いましたが、皆さんの農村辺りでこの頃やっておられます新生活運動の国の予算は内閣に付いております。皆さんが非常に関心を持っておられます公明選挙に関する国の予算は自治庁についております。そういうふうに、まず国の予算がどういうような仕組で組まれていて、毎年毎年の予算にどういう力が入れられているかということは皆さん自らおわかりになると思います。私の申し上げたかったことは、ただ一つ、政治というものはこわいものでなくして、皆さんが主権在民の有権者としてやはり関心をもって、いろいろの場合に御勉強になることをお願いしたいというような気持で申し上げたのです。

◇　坂西先生に伺います。団体があまりに大き過ぎる場合に、小さなグループを作って実績をあげたらどうかというお話、賛成ですが、偶々そういう場合に自ら分派行動のように見られるおそれはないでしょうか。

西　どうでしょういまの御発言。皆さんの中で御意見ありませんか。

◇　大きい団体の目的と合った目的で、小さく気の合った同士が取り組むということですから、分派ということにはならないと思います。

私のところでは小さなグループの集まりの他に総会を持って、小さなグループで話し合ったことの成果をそこで発表してお互に検討し合っています。

坂西　私もそうだと思います。

◇　私の入っている小さなグループは、それがPTAの会長と会計監査の勢力争いで、つぶれかかっているのでございます。それで伊藤先生の御意見を伺いたいと思いますが、婦人会というものについては市町村の機関が指導者も

育成してゆく方法をとって下さいますが、私共のような小さなグループは、自分達の力がまとまらない中に潰されてしまう。私共は何とか育ててゆきたいと思いますが、そういう点をどうしていったらよろしいでしょうか。

西　小さなグループはとかく潰されそうだ、というのですが、経験のおありの方。

◇　村には村の婦人会があって、その会にすべての村に住む者が入っています。ですから、やはりその村の婦人会の部落活動としてやってゆけば、軋轢はないと思います。

◇　さきに発言した方と同じ立場です。ほんとうに婦人会とかPTAは、自分の会であるということを自覚しているでしょうか。そこに問題があると思います。婦人会でもPTAでも網羅的になっているのではないでしょうか。強制的な会でなく、自主的に目的を持って集まるということが大事ではないかと思います。

坂西　いまの方が立派なことをおっしゃって下さいましたからこれ以上申し上げる必要はないと思います。

西　それでは時間も超過いたしましたのでまだ問題があると思いますが、今日は、協同活動を育てるための母体となる集団と組織の問題をどう考えるかということで、第一に、一つの組織を作るのに、下から盛り上るためにどうしたらいいか。あるいは他団体との交流をどう考えたらいいかということについてお話し合ったわけです。ここで何も決議をするわけでありませんから、出ました意見をお持ち帰り願って、もう一度お考え頂くということにしたいと思います。

最後に先生方に、御感想を一言ずつ頂きたいと思います。

伊藤　問題が問題だけに、自分で苦しんできておられますし、さらにここにお出になるまでにいろいろのお仲間と話し合いをして来られた結果、大体まとまった意見で、したがっていくらか平板で平面的だったという印象も受けないではありませんが、私は、まじめに本気になれば、会議と話し合いというものはこういったものだというように思いました。

渡辺　私は、発言の中に、非常に実生活の実感がにじみ出ておったことをたくさん伺えたことを感謝申し上げたい。ほんとうに生活の裏付があってなされたお話くらい尊いものがないということをつくづく感わりました。それというのも私共の部会に集まられた方々は、ほんとうに日常実践されておったということです。そこから問題を引き出し、どうしたらいいかという解決を見出すために一心になって考えることができた。またお互に手をつなぎ合って、問題の解決をしておられたということからこのような結果

が生まれたと思いました。

もう一つは、やがては村にある生活ではわれわれの欲望は満されないという欲の架い方になって頂きたい。少し自給自足過ぎるのではないか。そしてゆくゆくは地域だけではなくてもっと広く伸びて頂くことをお願いしたいと思います。

坂西　三時間余に亙る全体会議の空気の中には、非常にきびしい皆さんの反省というものが最初から最後まであったと思う。これは前進する叫びといいますか、これがあって始めて皆さんが新らしいふみ出しをすることができて、非常に健全であったと思いました。

大谷　今まで三人の先生がおっしゃったことと同感でありますが、私が感じましたことは、第四部会は非常に活潑な具体的な、にじみ出るようなお話であったが、ここへ参りましたら第四部会の方々の御発言というものが、あの部会での雰囲気とかなり違ったものになってしまったということを感じた。

これは私の部会のことを言うのではなくて、つまりやはり村々で実際におやりになっている活動と、今日出された問題というものがなかなか結び付かないというところにあるのではないかと思う。私は具体的な活動というものが一番大事だと思いますけれども、しかしその具体的活動の中にやはり貫くものがいつでもなければならないと思う。そういうことをおそらく第四部会の方だけでなくて、全部の方々が、全体会議を通じて学びとられたのではないか。たいへんむずかしい問題がありましたが、自分達の具体的な活動と、今日の全体会議に出た問題とを結び付ける努力をして頂きたい。そうしてそれを自分達のグループの中に持ち帰って頂きたいと考えております。

事務局　どうも長い間ありがとうございました。これで全体会議を終りたいと思います。

総　会

会議報告と話し合い

司　会　西　清子

リーダー　伊藤　昇

渡辺智多雄

坂西志保

大谷省三

◇　印　発言者

西　二日間に亘りまして、六十人の会議員の方々が四つの部会に別れて助言者の先生方を中心に、家庭生活や社会生活をたかめるためにどうしたらいいか、いろいろ御熱心に討議されましたが、それぞれの部会でどんなことが問題になったか、みなさんが御討議をなさったかということをリーダーの先生方に御報告願いたいと思います。第一部会から、どうぞ。

伊藤　第一日目は会議員の方々が自ら休験をした協同活動のやり方についてざっくばらんに出していただいて、お互にわからない点、あるいは反対意見、質問などの交換をしました。大体みなさんのやっておられます協同活動を大きく分けてみますと、第一には主婦の教養をたかめるためのグループ活動、その中には当然懇話会もあります。また新聞の投書欄で結ばれたグループもございまして、中に比較的生活に追われているお母さん方の話し合いのグループもありました。やはり今日の時代に婦人の考え方自身を変えなければならないということで、主としてある程度高い教養に結ばれるグループといったような方々が目立っておりました。その次にはなんといっても家庭の主婦として母として子供の教育ということを中心に固く結ばれた母親グループ、そこで子供会をやるとか、子供の問題を考える、とくに共稼ぎといったような家庭での託児所の問題が非常に強く話し合われたように思います。もう一つもっとも重要なことでありますが、家庭経済を中心にグループを作ること。部会に沢山できております住宅地の中から共同購入の仕事を着実に進めてゆくということなどが中心の問題だったと思います。そうしてそこで出されましたことを進めてゆく上の問題点としてやはり終始話し合われましたのはリーダーの問題だったと思います。その他政治との問題、あるいは仕事をやってゆく上に陳情だけでいいのか、ということで沢山の問題が残されて、第二日目にそのことについて話し合を進め、結論ではございませんけれども、やはり婦人の意識の問題と組織をどうするかということが一番問題になったというふうに私は印象を受けております。

（拍手）

渡辺　第二部会ではみなさんの休験の中で共通な問題をまず探しました。その第一にあがったのは、農家の婦人は非常に労働過重である、ということでした。これは一体なぜかということをいろいろ探したのですが、貧乏であるということ、それから封建的な家長制が残っているという重要な理由もあるのですが、それよりも大事なことは、自分自身がそういう過重労働の原因を作っているのではないかというところまで入ってゆきました。それはどういうことかと申しますと、命令されるままに働いている。自分が自分の仕事の主人公になっていないということで、それではどうしてそういうことになっているかと話し合った結果、男のもっているような農業技術を女の人は身につけていない、何も知っていない。そういう淋しような悩みをもった人達が話し合ってグループを作る。そうして共同学習を始めたのが非常に多かったのであります。そこで技術を身につけるということですが。自分のやる仕事について自分が主人公の立場でいろいろ計画を、つくってやるということは、単に農業技術の問題ばかりでなく、家の暮し方を合理的にする生活技術についてもこのグループはみんな共同学習で学んでおります。それが生活の糧となって家にもちこまれて、家事労働も軽減されましたが、そればかりでなく家庭にもたらしたプラスが、また人間関係をもよくしてゆくことになった、ということもみなさんの話し合でよくわかったのであります。（拍手）

坂西　第三部会では大体において社会的な仕事をなさろうとする方々が、いろいろの障害にぶつかっていらっしゃるのですけれども、それをのり越えてゆくところに問題が集中いたしました。河原を清掃して遊び場を作る、こういうこともなかなか役所ではやってくれない、それを切実な要求として御自分達の協同の力でおし進め、地域の人達が協力してやった。しかもそれがそこで終りではなく、この次には子供達のためにもっと文化的なものを作ってやろうという発展的な傾向をつくり出した方もありました。また母子家族で相当苦しい生活をしていらっしゃる方が、ドロンコの道をきれいにしてゆくということをお考えになって、地方の人達を動かし相当立派な排水路を作って、しかもこれは陳情とか政治的にうったえるやり方ではなく、自主的な生活から始めて、そうしてとうとう政治的にもどうしても当局が動かなければいられないようになったという御報告がありました。また会長にふさわしい或る人が会長に選ばれる、しかしあなたが会長になるなら市も職会も援助しないとつっぱねられたのですが、それをみなさんの協同の力によって乗り越えて有力な婦人会を作った。普通ならばやめて新しい人を出すところを、みなさんにささえられてその方は前よりも立派な婦人会を作り社会的に活動していらっしゃるというお話、こういうふうに一応立派な仕事をして協力がなんであるかということを学ばれた方々の御報告でしたが、また一方には恵まれた社会にいる人達はなかなか協力してくれない。そのためによい仕事であっても発展しない、また自分達のグループだけでなく、もう少し下の人までも一緒に含めようという階層を越えた意識というものがだんだん話し合によってたかまってきている。目的をもって自主的に行動する、そして自分の良識という

か、良心というものをだんだんとたかめてゆく、という議論を出しております。（拍手）

大谷　第四部会におきましてはいろとりどりの、貴重な体験の御報告がありました。第一日には主としまして村の生活のあり方を巡る問題をとりあげてお話し合をしました。

たとえばカとハエの撲滅の問題とか、あるいは安際費が農村の経済の中で非常に大きな割合をしめているので、これをできるだけ少なくするためにというようなことをとりあげて、結婚改善の問題とか、あるいは産婆会の問題、託児所の問題、保育所の問題などがとりあげられたのでありますが、話の中心になりましたのは結婚改善の問題であります。と申しますのは現在農村では、農家の経済の大きさにくらべまして結婚のためにつかうところの費用は大変多い。これをなんとかして簡素化し合理化することができないかという問題でした。いろいろな試みが行われているという御報告がありましたが、まだまだ不充分であるということが確認されました。これをもっと徹底的におしすすめてゆくにはどうすればよいかという問題が熱心に討議されました。そうしてここには意外にも強い壁があるということがわかると同時に、この壁を破るにはどうしたらいいか。これは単に婦人だけの問題でなくて、農村社会全体の問題で、現在の古い農村の社会関係というものが農村が伸びてゆくことをひきずり落そうというような、協同体勢をとっている。これを破るためにはなんといっても人間を作りかえる必要があるのではなかろうか、そのためにはたゆみない教養をたかめるための運動が必要だということになったのであります。それではそういった人づくりという場合の、人間はどういう人間であるべきか、あるいは教養というが、それはどういう教養であるかということが問題になってまいりました。そこから結局農家においては、農家経済を豊かにするための農業経営の改善に入ってゆかなければならない、そのためには自分達の経営をみつめ、生活をみつめ、農家の経営問題をお互に研究し合ってどこに欠陥があるか、ということを討議して、そこから協同活動を進めてゆくということが大切であるということに落着いたと思うのであります。（拍手）

西　以上四人の先生方の御報告ですでにおわかりの通り、四つの部会でこのようなさまざまのことが討議されたわけでございますが、それに続き昨日、全体会議におきまして、協同活動をすすめるための母体である組織の問題点について討議したのですが、私が司会いたしました関係上一寸御報告申し上げたいと思います。

問題になりました点は、二つございまして、本当によい

協同活動をするために組織にとって一番大事なことは、一つは下から盛り上る組織を作ることである。もう一つはできた組織と他の組織の間にどういうふうな調整をしたらいいか、どういう考慮をしたらいいかということが話し合われました。たとえばよいリーダーを得なければならないとか、あるいは入ってくる会員の一人一人の意識をもっとたかめなければならないとか、あるいはまた共通の目的をもつことが大事なのではないだろうか、それから他団体との調整の問題については大きな団体と小さな団体との問題も出ました。地域婦人団体、あるいは農協婦人部、生活協同組合、PTA、いろんな大きな団体がございますが、そういう団体間の調整の問題をどうしたらいいか、また大きな団体と最近沢山できております小さなグループの問題をどうしたらいいかというようなことです。結局は、それぞれの目的があるのだからお互の目的を尊重しあって、提携し合うより仕方がないのではないかというお話し合でした。またそれは結局婦人の地位をたかめるという目標につながっているから、当然その点でみなさんが常に考えを主張してゆくなら、組織の内部の問題も、他の組織との問題も巧くゆくのではなかろうかというお話し合がなされました。

それでは今から約三十分ぐらい、会員ならびに傍聴のみなさん方の中から質問なりあるいは御意見を頂戴したいと思います。御発言の時は何部会の問題についてとおっしゃって下さったら大変結構だと思います。

◇　坂西先生におたずねします。婦人がもう少し政治との関係に目をむけて、グループ活動をした場合にはもっと大きな力を有効につかいうるのではないかと考えますので、その点についてうかがいます。

坂西　政治に目をむけるという点についてはいろいろお話が出たのでありますが、これは主として会議員の方の経験では陳情、請願、あるいは署名運動によって働きかけて助成金をもらう、なかには二十回も知事に陳情して効果がなかったということなどが非常に多かったわけです。またある方は政治的に議会を動かして予算をとって仕事をしても、そのために他の方が削られるというのでは、どちらが重要かということと、バランスということを考えなければならないと発言されました。これは非常に大きな問題ですけれども、私共の部会におきましては、大体において正しい目的のために、またそれが社会の全体の幸福のためであったら、自分達の納めた税金をそういう目的のためにつかう、そのために政治的活動をするのはいい、しかし自分達ばかり独占してしまって誇りにするということのないようにしたいという話合いがされました。

◇　坂西先生にうかがいたいと思います。私は婦人会で

地域の活動をいたしておりますが、民主的に力を盛りあげるような運営はむずかしいので指導して下さるとか、それに対して援助なり協力していただくために区なり郡なりのお力がありましたら、もっと楽に自分達の仕事も充分な発展ができるのではないかと思っています。その点につきまして御意見をおうかがいしたいと思います。

坂西　この問題は私がお答えするよりも実際に仕事をなさった、経験者でいらっしゃる富山県の篠崎さんのお話の方が私の話よりも余程有効だと思います。

篠崎　私の経験でよかったら御参考になるかわからないけれども……。私達は八町で協力して悪い道を排水路一本つけて直したのですけれども、はじめはみんなでやりましょう、やりましょうといっていてもなかなからちがあきませんでした。たまたま土地の人の要求で近所に汽車の止まる駅ができたのに、刺戦されて、交渉すれば国鉄でさえも動くのだからと私達も市に交渉しましたが、資材は自分持ちだというので、私は母子世帯ですが、均等割になって千八百円思い切って出したのです。市の方で人夫を廻していただくことを交渉したりして、いろいろ難関はあったのですが成功しました。市に働きかけるということは行動を起してやっと気がついた、やっとみつかったことですが、行動を起してゆくと勉強にもなりましたし方法も考えつくんですよ。いかがでしょうか。（拍手）

坂西　それにつけ加えまして今のリーダーシップの問題ですが、民主主義ではリーダーがいらないということがよくいわれているのですけれども、私はこれは間違っていると思います。リーダーという意味をみなさんは掛け声をかけるボス的存在で、命令をする人と考えていられるからで政治的に問題をはっきりつかみ、みなさんを激励する人、市民の良心としてこういうことは是非しなければならないというように、いろいろなところに目をくばって、お互の幸福ということをいつも念頭において、いわゆる奉仕の精神をもっている者があるということは、決してボス的存在でもありませんし、みなさんを動かす一つの原動力になると思います。

西　これにつきまして伊藤先生の方でも多少問題があると先程うかがいましたが、一寸補足的に御発言いただけませんか。

伊藤　ただ今の問題は大きな組織と小さな組織との関係ということになるかと思いますが、一部会は、主として非常に小さなグループで活動しておられる方が多かったために、一体数が、どのくらいがいいかということになったら、多くの方が十五人から二十人ぐらいまでがせいぜいではないかということでした。そういう会ではあるいは輪番

制、当番制で運営できるかもしれないが、それより多くなれば指導者、私共の方では幹の指導者、かくれた指導者という言葉が使われましたが、その会の中にいて、メンバーの中からそうした積極的な熱意と、会に対する愛情をもっている人が必要だという結論になったと思います。人に指導されるのではなくて、自分達が実践しているうちに必要を感じ、ある時には政治の仕組みをおぼえて、そういう方面に連絡をとる、託児所、児童遊園地にしても、そういった問題もあるし、ことにいろいろな団体との連絡をとりながら大きくなってゆく、必ずしも一つの団体というものを作ろうということではなく、私の方ではどこまでも小さなグループであって、必要に応じて横の連絡をとってゆくのが、正しい協同活動を進めてゆく道ではないかというふうに話し合われたと思います。

◇　大きい組織にいたしましても、小さいグループにいたしましても、必ず問題になるのは資金のことだと思います。第三部会では役所の方から補助金をいただくとか、負担金をいただくとかいう問題も出ました。私達のグループでは協同活動による事業の利益を資金として運営いたしておりますが、どういうふうな方法によって資金を得て、協同活動をすることがもっとも民主的で、自主的であるのか現実には悩みが多いのですが、そういう点で伊藤先生に御意見をうかがいたいと思います。

伊藤　私共の方ではその問題も当然出たのでありまして小さい都市の場合ですけれどもある場所では、どうしても託児所がなければならないというので、お母さんたちが集って市の当局に陳情したら、一年以内でできてしまったという御報告がありました。自分達で少しも資金を集めずにお金を集めずに、いきなり陳情してもらったが、はたしていいものであろうかということが非常に話し合われたと思います。ただそういう場合は勿論市のあり方、政治のあり方というものに関連して、一がいには言えないけれども、先程坂西さんからお話がありましたように、陳情して補助金をもらったのが、本当の婦人団体の自主性を守るゆえんであるかどうかということについて討論があったわけです。そういう問題で実際にいまやっておられる広島の研谷さんに御報告願いたいと思いますが、集団住宅で協同購入を始めたいが適当な場所がない、そこでそのアパートを建築したときの事務所がそのまま残っているので、使わせてもらいたいと申し出たところ、買い受けるならということだったので自分達でお金を集めて、その準備にかかったところ、地域で評判になって、社会的にも関心事になったため県の方から無料で使わせるという話が進みつつあるというお話があったのですが、大体実践が社会的、人間的にも

認められるところに一番強い基礎があるのではないかという話があったわけです。

研谷　私達が協同購入をやりました動機は、安いものを買うだけではなくて、婦人活動をやるためにはどうしても経済活動をやらなければならないという考え方からで、それで得た収入をいくらかでも活動資金の方にまわしてゆきたいということのもとにやっております。

◇　都市における協同活動の問題点になると思いますが、地域団体について坂西先生のおっしゃるようなリーダーに、現在は比較的時間にも、また身体的にもゆとりのある年輩の方がなる傾向が多いと思いますが、その場合、小学校の小さいお子さんをもつPTAの方達はその会に加入しながらも、会の活動や運営には関心をもって下さいません。あの人達がすることだという見方をしています。またPTAの若い方々がリーダーになると、年輩の方がおいてけぼりをくうような傾向がありますが、どうしたらよいでしょう。

坂西　これは大阪の村尾さんにお願いいたします。非常に苦労しながら、内職している婦人を集めて立派な協同活動をしていらっしゃる、あなた方のグループがどういうふうにして集ってくるか、内職を一時間やめなければならない、それをどうして説得したかということを説明して下さい。

村尾　私達は、前に婦人会とPTAのコーラスグループが一緒になり子供達のために三十六万円のピアノを買いましたが、それは本当に低額なものが集ってできたものでした。そこで今年はみなさん一人一人が五十円の内職をピアノではなくって、自分のために寄付して下さい、それで五十円の働きを一回寄付して、三十六万円の値打ちのあるものを家にもって帰って下さい。そういう値打ちのある話し合をしましようというわけで、一人でも多くの方に出ていただこうと努力しています。自分の内職を自分に寄付するという方法でお願いしております。（拍手）

◇　私は農村と都会の両面を通じての問題と思いますので、渡辺先生に質問いたします。都市でも農村でも婦人が協同活動で何かいたします場合に、たとえば敬老会をしようということになりますと、土地のお金持なり、そういった人達が相当な額の寄付をなさいます。それを私達は気持よく受けておりますと、間もなく選挙が始まりますとそういう人達が旗がしらをたてて立候補の御挨拶ということになるのです。そういう時に私はやはり前にいただいている関係上、その人達のお話もきかなければならないし、いろいろと利用されがちになりますが、こういう寄付はいただいてよろしいものでしょうか。それともそれははねのけて

しまうべきものでしょうか。

渡辺　寄付の問題については特別に話し合いは出ませんでしたが、会費の問題がでました。婦人会にしろ青年団にしろ会費が非常に安い。月十円、一年百二十円ぐらいですね。会費が安いから仕事ができない、それ以上に重大なことは会費を出す人が安い会費のために、十円ぐらいなら出してもいい、ただとられてもいいという妙な意識があって、会員意識を強めない重大なマイナスがあるのではないか。会費をかなり負担と思われる程出すことによって、会員意識がもっと強くなるのではないかと私は思う。安いために何もできないから、助成金や補助金などをもらって、ひもがついていつの間にかお役所の下請の仕事みたいなものをやるということになる。いまの方は寄付金と選挙の問題を出されたわけですが、私は本当に会に力があれば、そういう寄付はおことわりするべきものと考えています。そのくらいの力を会は持ちたいものと私は希望をします。

◇　大谷先生にお願いしたいと思います。農村はやはり結婚の簡素化ということがいつも、婦人会の問題になりますが、私の住んでおりますところは川ひとえで都会でございますので、農村と申しましてもお嫁さんにゆく方は大体都会へ都会へと出てゆく傾向があります。そうしますと村内とかあるいは、近在の結婚はともかく、東京の方にゆく方が、簡素化といっても、うちの方では簡素化できるけれども、都会に行く場合は簡素化できないという問題につきあたりまして、婦人会でも簡素化を叫んでおりますのですが、なかなか巧くゆきません。今度の会議でどういうお話し合いがありましたか、それをお話し願いたいと思います。

大谷　私共の都会では、そういった具体的な都会と農村との関係といった問題までは話が出ませんでしたが、しかし今農村では簡素化ができるけれども、都会に嫁にやる人が多いからできないとおっしゃったのですが、私は農村での簡素化の方がはるかにむずかしいと考えています。ですから実際から申しますと今おっしゃったことは反対ではないかと思います。

然し村と村の間の関係、県と県の間の関係という問題になりますと、自分の村うちだけで話し合がついても、結婚の場合は村うちだけの問題では片ずかないという問題があります。そういう場合は非常に気の長い運動をして非難を受けてもとにかくやり抜こうという人々があちらこちらに出てくるということを期待する以外に私は手がないかと思います。したがって協同活動によってあちらこちらでそういう先駆者的な道を開いてもらいたいという、それが私の都会での結論だったと思います。

西　もっと話し合いたいのですが、時間の関係でこのへんで打ち切らせていただきます。

最後に今度の部会を助言していただいた四人の先生に、三日間の討議を通じての御感想をうかがいたいと思います。

伊藤　家庭生活から一歩足をふみ出して仲間を作って何かをしようという大変積極的な方がみえたために、グループがはなはだ小さくそのグループの中でかなりなことをやっているという自信満々たる人があって、悪くいえば小さなそういうことに満足している、自己満足をしている傾向がみえた。

渡辺　私は新しいものの考え方、新しい生活態度というものは決して単なる教養というものからではなかなか作り出されないと思います。この部会では技術がもっている合理性、科学性をつかうことによって、生活態度が変ってゆくという下部構造をしっかりつかむということが大事な問題だと痛感しました。生活改善グループとか農業改善グループとかいう人達の実績はどんなに技術というものが大事かということをよく教えてくれたと思います。

大谷　私も農業技術、農業経営というものが、農村の問題を考える場合に一番大事な問題だということをかねがね考えておったのですが、今度の部会を通じて、そのことをさらに強く考えさせられました。みなさん方がおやりになっていることは、それぞれ大変立派なことなのですけれども、農村における女性のおかれている地位というものを本当に自覚するということが足りないのではないかと感じました。農村の現在の社会の秩序とかあるいは家庭内の秩序には以前として古いものが残っているが、そのすべてのしわ寄せが婦人にやってきている。いわば婦人の肉体にしわ寄せしてくる。したがって婦人の中に新しい要求が芽ばえてくる可能性があると思いますが、その要求というものが必ずしも協同活動にまで発展してこないと思います。農村における協同活動というものを考える場合には、ギリギリのところまで自分の生活をみきわめてゆくということが大切なのではないか。そこまでゆくと本当に強い協同活動になるのではないかと思います。

坂西　第三部会で反省されたことは、どういうふうにしたならば協同活動からもれている人、ことに生活に追われている人でどうしてもそこに入らなければ救いのないというような人を加えてゆけるかということでした。ことに福井の方、大阪の方はこういう問題を非常に深刻に考えて、もう少し自分も手を伸ばしてそういう人達と闘かうという気持になるように努力していらっしゃるようでした。それからまた恵まれた家庭にあって、無関心な人と、どうして手をつなぐかということも問題になった。私は恵まれた人達はその幸福を、特権として独占して知らぬ顔をしているのではないか、もう少し掘り下げて問題がなかったら探してくるというようなところまで進めていかなければいけないのではないかと思いました。

西　次に農村で協同活動をする目的をつかむ根と申しますか、そういう問題点はどういうところにあるのでございましょうか、渡辺先生いかがですか。

渡辺　要求や願望が多すぎるために何から手をつけてよいかわからない人が多いのではないか。組織の指導者はそういう人達の要求を自覚させてゆくことが必要で、そうすればこの人達は組織の中で活動をするようになると思います。ですから私はリーダーという役目はしよいきれないほど要求をもっている人達の自覚の目を呼びたたせるということだと思います。

伊藤　第一部会では、こんなことで困っているという話がでました。

お互に教養を高めるためグループを作る、教養といっても今までの古い日本の婦人の考え方自体を変えるための勉強ですがいくらさそっても来ない人、また来ていてもものれてゆく人、そういう人にこだわっていないで、自分達がしっかりやってゆくやり方でよいのではないか。しかし中小企業乃至商店街におられて、忙しい商店の主婦達がどういうふうに手をつなげるか、まだ本当に手を差しのべただけで、何らやっておらないがという話についてはみなさんが地域の商店街の忙しいお母さんたち、また昼間は絶対に出てこられない目展いのお母さんたちとなんとかして手をつながなければならないという気持だけは充分持っていた。そういうふうに感じました。

西　なにはともあれ日本の婦人が一人で孤立しないで、二、三人でも、もっと沢山でも仲間をつくって何かをしなければならないということで、何らかの組織に属している人が婦人少年局の調べでは二〇才以上の婦人の六三パーセントになっています。

最後に一寸申し上げたいのですが、いま婦人の力を、外部から何か利用しようとする動きがあったり、また、婦人に何ができるかということをいっている向も相当あるように聞いておりますので、そういうことに屈しないで女の力を本当に生かしてゆきたいと思います。どうもありがとうございました。

正しい協同活動を育てるために
—第6回全国婦人会議記録—

昭和33年11月20日　印刷
昭和33年11月25日　発行

東京都千代田区大手町1ノ17番地
発行者　労働省婦人少年局

東京都中央区入舟町2ノ3番地
印刷者　永井直保